

剣の紋章



和里かりん

序章 消えた時間と予言書の魔法使い

ミサキが初めて、魔法使いという不思議な肩書きを持つ女性に会ったのは、彼の二十二才の誕生日だった。

ダーク・ブランカという名の、その魔法使いは、ペルシャ風の衣装に身を包み、水晶球を乗せたテーブルに頬杖を付いていた。出立ちを見た限りでは、ただの占い師といったところだ。第一印象で、ミサキはそう思った。彼女がもし、見掛け通りの人間なら、彼の捜すものは、永遠に見つけられないことになる。何しろ、“朱里（あかり）”の残した手掛かりは、このダーク・ブランカだけなのだから。

都心のビルとビルの間。

そのわずか数メートルの空間に、ダーク・ブランカの天幕はあった。

目の前を首都高の高架が走っていて、昼間でも薄暗い裏通り。今まではほとんど人通りのなかったはずの場所。彼女はそんな場所にいた。

いつからなんて事は誰も知らない。そこに行けば、ダーク・ブランカという名の魔法使いがいる。それだけで充分。昨今の占いブームも手伝って、人生相談にここを訪れる人が、毎日行列を作るようになっていた。いつの間にか、そうになっていた。

自称“魔法使い”の占い師、ダーク・ブランカは、TVにも顔を出す売れっ子で、年は多く見ても二十代半ば。とりたてて美人という訳ではなかったけれど、笑顔が印象的で、とにかく人気があった。

天幕の入り口に“本日休業”の札が掛かっているのを見て、行列の無かった訳を納得したミサキは、その天幕の中へ足を踏み入れた。

ミサキがダーク・ブランカに会いにきたのは、別に彼女に興味があったからではないし、占いをしてもらいにきた、という訳でもない。ただ、ミサキが前へ進むためには、ダーク・ブランカというポイントを通らなければならない。ただそれだけの事である。多分それは、大袈裟に言えば、“運命”というものだけど、今のミサキにしてみれば、単なる“成り行き”でしかない。

人の入ってきた気配を感じたのか、中に居た女性が顔を上げた。視線を交してミサキは、彼女がダーク・ブランカだろうと思った。“朱里”の残していった予言書の大魔法使い。もし、このダーク・ブランカが、その魔法使いなら・・・

「“朱里”の行方、教えてください」

「・・・随分と唐突な物言いねえ。何事なの？」

ミサキの言葉に、その女性はミサキと視線を合わせたまま、微笑を浮かべた。

「ダーク・ブランカさん、でしょう？」

「そうよ」

「ランドメイアの大魔法使いの」

ランドメイアという言葉聞いて、ダーク・ブランカは驚いた顔をした。

「あなた、ランドメイアを知っているの？」

「RPGの舞台になりそうな、異世界の魔法の国ってところかな」

そう言いながら、ミサキは脇に抱えていた一冊の古びた本を差し出した。

「これ、カリディアの予言書。言ってみれば、ランドメイアっていう異世界にある、カリディア帝国という国の歴史書」

「まさか、この本、読んだの？」

ダーク・ブランカが、身を乗り出して聞いた。

「こんな、ありんこが盆踊りしてる様なカリディア文字、読める訳ないでしょう」

「そうよね。でも、それじゃどうして・・・」

「この本、“朱里”が置いてったんだよ。それで、これが一緒に残ってたメッセージ」

ミサキの差し出した紙切れに、ダーク・ブランカが目を落とした。

「・・・“ダーク・ブランカのもとへ”？」

「俺がここに来た訳、分かって貰えました？」

「偶然じゃないってことはね」

「“朱里”、どこに行ったんでしょう？」

「知らないわよ」

そうするのが癖らしく、再び頬杖を付いて、ダーク・ブランカはあっさりと言った。

「待ってくださいよ。そんな簡単に。だってあなたは・・・」

ミサキは不満気な声をあげて、ダーク・ブランカに詰め寄った。

この問いの答えが出なければ、全てがここで終わってしまう・・・それはつまり、自分が失ったものを、何一つ取り戻せないということだ。そして、彼の心の中に、たった一つだけ残されていた、希望・・・“朱里”を失うことでもある。

・・・失くしたもののことは、この際どうでもいい。でも、朱里のことは、失くしたくない・・・

ミサキの頭をそんな思いが掠めた。なにせミサキは、ダーク・ブランカに会いさえすれば、なんとかなる、そう思っていたのだ。だから、先のことなど、全く考えていなかったのだ。

「困ったな。ダーク・ブランカが答えを知らないなんて、思いもしなかった。こんなところで行き止まりなんて・・・」

ダーク・ブランカは上目遣いに、えらくがっかりした様子のミサキを見て、静かに言った。

「何だか訳ありね。とにかく座って。話してみて。聞いてあげるから。何があったの？」

「ダーク・ブランカ・・・」

「ランドメイアじゃ大魔法使いなんて言われてるけど、ここにいるダーク・ブランカはただの占い師。話してくれなきゃ、何もわかんないのよ」

「え？」

「今のあたしは、魔法が使えないの。・・・この世界ではね」

どこが事の始まりだったのか、実際のところは、ミサキにもよく分からない。

要するに記憶がないのだ。

ただ、事の重大性に気付いたのは、“十八回目の誕生日に二十二才になってしまった”という事実が判明した時だった。

「昨日までは、確かに十七歳だったんだ。で、今日で十八になるはずだったのが・・・」

「目が覚めたら、二十二歳だった？」

「ピンポーン」

「つまり、一晩寝たつもりが、四年もたっていたと」

「更に、浦島太郎より始末が悪いのは、それより前の記憶もなんか、あやふやで・・・」

「要するに、記憶喪失？・・・それでも、朱里さんの事は覚えていたんだ」

ミサキは頷いて、更に続けた。

それにしても、このミサキという子は根っからの楽道家なのだろうか・・・

ダーク・ブランカは話を聞きながら、そんなことを考えた。記憶喪失だと言う割には、深刻なところがなく、むしろ不自然なぐらいに明るい。ミサキには、まるでゲームを楽しんでいるような面持ちさえあった。もし、ランドメイアの話が出ていなければ、ダーク・ブランカは、ミサキの言うことなど信用しなかつただろう。

それにしても、ミサキにランドメイアの存在を教えた“朱里”という少女は何者なのだろうか。ミサキの話をひとしきり聞いて、ダーク・ブランカが最初に思ったのは、そのことだった。

・・・もしかして、この子が、紋章の持ち主なのかしら・・・

ふと、一つの心当たりを思いつく。あの人が、この件に関わっているのだとすれば、この子をここに寄越した理由は、恐らく一つだけだ。

「・・・相変わらず回りくどいことをするんだから」

ダーク・ブランカがふと呟いて、苦笑した。ミサキが怪訝そうな顔をして、彼女を見た。そういうことなら、彼の質問に対する答えは、これしかない。

「行く先は、多分、ランドメイア・・・かな」

「えっ？」

「朱里・・・さんの行く先よ。予言書が読めれば、もう少し上手な謎解きをしてあげられるんだけど・・・」

「自分で書いたんでしょ、これ」

「そう、書いたのは確かにダーク・ブランカだけど。・・・それって、かなり前の話だし、この世界じゃ魔法が使えないし」

「一体どういう・・・」

「魔法で封印してあるのよ。これはね、誰でも読めるって訳じゃないの。ダーク・ブランカの封印を、解くぐらいの魔法使いでないとね。帝国の未来が判ってしまう物だもの。当然でしょ？」

「いるんですか？そんな人」

「ま、何人かはね。さてと、取り敢えず、彼女の行き先は判明したわよ。これで君の用件は、済

んだわね？」

ダーク・ブランカが、遠回しにミサキに退去を促す。ミサキは立ち上がりかけて、少し思案するように俯いて動作を止め、それから顔を上げて徐に言った。

「ダーク・ブランカ、俺をランドメイアへ連れてって欲しい」

ダーク・ブランカは、ミサキの顔を見据えたまま、黙っている。

「どうしても行かなきゃならないんだ。記憶がないとか、四年分の時間が無くなってたとか、そんなことは、この際どうでもいい。だけど“朱里”のことは、このままにしておく訳にはいかないんだ」

「・・・どうしてそう“朱里”にこだわるの？」

そう問うた彼女に、ミサキの声が言った。

「記憶は消えても、大事なことはちゃんと残ってる。頭で覚えたことじゃないからね。心が覚えているんだよ。そう・・・“朱里”の事だけは覚えていたんだ。その“朱里”がいなくなって、残された手掛かりがランドメイアへ繋がるっていうんなら、俺は、ランドメイアへ行かなくちゃならない」

その真っ直ぐな瞳に、ダーク・ブランカはしばし見入っていた。

“朱里”が手掛かりを残していったという事は、きっと、ミサキに追いかけて来てほしいという事なのだろう。記憶がないと言いながら、このミサキには、大事なことがちゃんと分かっているのだ。

「これが、運命ってやつなのかしらね」

「ダーク・ブランカ・・・」

「分かったわ、契約成立。ただ、一つだけ、忠告しておくわ」

ダーク・ブランカが、予言書の最後のページを開いた。

「実は、ここには、帝国は滅亡して、ランドメイアは世界から消える。と書かれているのよ」

「さっきは、これ、読めないっていいませんでした？」

「読んだんじゃないかって、さすがに、そんな大事な事は忘れようがないでしょう？それに、あたしが今ここにいるのは、その予言のせいなんだから。あたしは、そのランドメイアを救える、ある人物を捜していたのよ。あなたが行こうとしているのは、そういう場所なんだってこと、忘れないでね」

「覚えておくよ。ありがとう」

「どういたしまして」

ダーク・ブランカは、ミサキの持ってきた紙切れを裏返すと、ある建物の名前を書き込んで渡した。

「・・・ここに、ランドメイアに通じる、穴があるから・・・」

それを手に、ミサキが出て行くのを見送って、残された予言書を手に取り、感慨深そうにページをめくる。そして、机の引き出しから、携帯を取り出した。

「もしもし？しーちゃん？来たわよ、彼、ここに。今、帰ったところ。契約は成立したから、後

はよろしくね……って、いつも思うんだけど、こんなまどろっこしいことしなくたって、しーちゃんが直接、話を聞いてあげれば、それで済んだ話だったんでしょに」

「……」

電話口に返って来た返事に、ダーク・ブランカは苦笑する。

「はいはい、守秘義務ね。仕事のことは理解してるわよ。でも、三年も一つ屋根の下で暮らしてた子に、随分他人行儀なのね……って、思っただけだから、時雨（しぐれ）姉さん」

お互いの仕事には、口を挟まない主義だが、切り際に、つい嫌味の一つも言いたくなる。この予言書の持ち主が、すでに”飛ばされている”のだということが、分かっていたなら、こっちの仕事の片は、とうに着いていたのだ。

時雨から、メールが着信した。言い忘れたことでもあったのかと思いながら、携帯を見る。

……お世話になりました。布結姫（ふゆき）ちゃんの魔法使いさんにも、よろしくね……

その文面を見て、布結姫は、自分の仕事が終わったことに、初めて気付いた。

「そっか、今日で、魔法使いは、おしまいなあ……」

仕事が終わったのなら、自分は今もうダーク・ブランカではないのだ。被っていたベールを外して、ため息をつく。

「夢の中でいいから、お礼ぐらい言いに来なさいよね、あたしの魔法使いさん……厄介事が、片付いてからで、いいからさ」

呟きながら、布結姫は人差し指で水晶球を弾いた。

その夜、都心の摩天楼は十六夜の月に照らしだされて、神秘的な様相を示していた。そして、その深夜の人影のない街にミサキはいた。

摩天楼の一角を占める、ハンドレットビルの一階のエレベーターホール。

目的地はそこである。

ハンドレットビルというのは、その名の示すとおり、地上百階建てのオフィスビルで、醐醍（ごだい）電子産業というコンピューター会社が、昨年、その本社ビルとして建て、都心の新名所となったところである。もちろん、ミサキはそんなことは知らない。

ビルの裏手にある通用口を抜け、正面玄関の三十階まで続くアトリウムを抜け、目的の場所へと向かうミサキの足は、無意識のうちに軽くなっていた。

静寂の支配する闇の中に、ミサキの足音だけが響き渡っている。普通なら、不法侵入なわけだから、もっと静かに歩くものなのだろうけど、ミサキはそんなことはお構い無しで、彼の足取りは、かなり軽快だった。

辿り着いたエレベーターホールには、十数機のエレベーターが、行く先の階層ごとに数機ずつ並んでいた。迷わずミサキはその一番奥にある一機に向かう。ダーク・ブランカの言っていた各階止まりのエレベーターだ。ここの会長が、特別に造らせたと言う専用機である。用途は社内視察のためということらしいが、実際のところ会長が何に使っているのかは明らかでない。会長しか乗ってはいけないというものだが、仮に使用許可が出ても、忙しい社員達が各階止まりのエレベーターなど使うはずもなかった。

ミサキがエレベーターの呼び出しボタンを押すと、五秒ほどの間を置いて、ゆっくりと扉が開き、中の光がホールの闇を切り裂いた。ミサキはダーク・ブランカに言われた通りに、中にはいり、扉が閉まらないように、“開”のボタンを押した。そのボタンの下に、百のボタンが連なっているのを見て、さすがに一瞬あきれてそれを見入ってしまったが、すぐに気を取り直して作業に取りかかった。

魔法使いに教わったように、注意深く特定のボタンを点滅させていく。光の点が次第に星の形を成し始めた。

「あと一個」

ミサキがそう言って、仕上げの点を押そうとした時、突然の怒鳴り声がミサキの集中していた精神を一瞬かき乱した。

「そこで何やってる！」

「あ。しまった・・・」

一瞬、ほんの一瞬だったが、“開”のボタンを押していた指の力が抜けた。閉まる扉の隙間から、不法侵入者を見つけたガードマンが駆け寄って来るのが見えた。

「やり直しは利かないか」

鈍い音を立ててしまった扉に、ミサキの声がぶつかった。エレベーターはゆっくりと上昇を始め、点滅していたボタンの光が一つずつ消えていった。やがて、最後のボタンの光が消えた時、ミサキは最初で最後の停止階に降り立った。

目の前に、薄暗いトンネルが続いていた。これがダーク・ブランカの言っていた、“穴”なのだろう。そう思って、ミサキは歩き始めた。背後でエレベーターの扉の閉まる音がしたが、ミサキは振り向かない。やがて、一つの扉に突き当たった。ためらうことなく、その扉を開ける。と、まぶしい光が、ミサキの全身を包んだ。

「これが、ランドメイア・・・」

扉の向こうに広がる風景は、ミサキにとっては初めて見るはずのものなのに、どこか懐かしい気がした。この空の下に朱里がいる。そう考えると、居ても立ってもいられなくなって足を踏み出していた。ところが、前に進もうとしたミサキはたちまち扉に押し戻される羽目になった。扉の入り口に見えない壁があったのだ。

「ああ、そっか。ダーク・ブランカの封印を解かなくちゃ。ええと、呪文は確か・・・」

頭の中でダーク・ブランカに教わった奇妙な呪文をゆっくり繰り返す。それから大きく深呼吸して、ミサキは呪文を唱えた。

「・・・・・・・・」

果たして次の瞬間、扉は跡形もなく消え去り、ミサキはランドメイアの大地に立っていた。

始めに耳についたのは、潮騒の音だった。

「海が・・・」

丘を駆け登り、目の前に、大海原が広がっているのを見て、ミサキは自分の穴抜けに五十点を付けた。

「やっぱ、ボタン一個押さなかったからかなあ」

予定では、ランドメイアのカリディア帝国の都、カディアの宮殿に出るはずだったのだが・・・

「あーあ。街はどっちだ？」

ミサキには、当てなんかなかったが、とりあえず歩き始めることにした。立ち止まっていたは何も始まらないことだけはわかっていたから・・・

さて、舞台をランドメイアへ移し・・・

海洋暦四四七年。

ランドメイアの南端。カーシアという港街。

ここから、一つの冒険が幕を開けることになる。

第1章 モラトリアム少年とニート志望の魔道師

カーシアは、ランドメシアを支配するカリディア帝国に、唯一その自治権を認められている街である。街の広さも、そこに住む人々の数も、都市国家と呼ぶには程遠い規模の街である。それにもかかわらず、大国であるカリディアが、カーシアというちっぽけな街に自治を与えているのには、それなりの訳があった。

一つには、古の時代に、この地を治める海竜族と、海を越えてランドメシアへ流れ着き、後にカリディア帝国を建てた光族が会ってから、幾度もの戦いを経てお互いがお互いを同等と認めた結果、カーシア自治区が成立したという歴史的背景がある。それに加えて、カーシアが現在の帝国の経済を支えている商業都市であるという事実が、この街の地位を確固たるものにしてきた。

帝国の数十分の一にすぎない街が、すでに帝国以上の力を保有している。実は、カーシアを疎ましく思いながらも、それを潰すだけの力が、現在の帝国にはないのである。

シリウスト・アレクシス・リヴィウスは、十八才の誕生日を翌日に控えて、実に不本意な一日を過ごしていた。海竜族であるこの少年は、明日の十八才の誕生日に成人の儀式を終えると、商船に見習いとして乗船することになっている。

海竜族の男は、その八割近くが他国との取引に従事しており、成人して商船の一員として働くのはそう特別なことではない。海竜族の拠点であるカーシアは商業都市であって、そこに住む人々は生まれた時から商人であり、また商人となるべく教育を受けていた。

港の東側に広がるバザール（市場）の雑踏を歩きながら、海竜族の少年は、明日の今頃には船上の人となっている自分の姿を思い浮かべて、深い溜め息をついた。別に船に乗るのが嫌な訳ではない。十八年の間に得た知識を総動員して出て来る答えは確かに“このままで良い”である。しかし何かが違う気がするのだ。でも、心の中にある未来像が不鮮明なために、どうすべきなのか決められないでいる。明日はもう出発の日だというのに、自身に納得のいく答えが得られないまま、時間ばかりが空しく過ぎていく。彼の憂鬱の原因はそこにあった。

「シリウス様」

後ろを歩いていた従者のカシムが、前方の人だかりを指して、シリウストを呼び止めた。

「喧嘩でございましょうか・・・」

「らしいな」

昨日付で解任になったとはいえ、カーシアの警備隊の隊長であったシリウスにしてみれば、このまま見過ごすこともできない。全く、この街は活発すぎて、人に落ち込む暇も与えない。そう思いながら、シリウスは肩をすくめて人だかりに分け入った。

「往来の真ん中で、何事か！」

シリウスの一喝で、当事者達も、野次馬もたちまち静まり返った。

「これは、リヴィウス家の若様」

人だかりの中から、一人の男が出て来て、うやうやしく頭を下げた。

「この騒ぎはどう言うことか」

「はっ。バザールに盗人が入り込みまして、たった今、取り押さえたところでございます」

男はそう言って、自慢気に地面に倒れている若者を示した。

一見、海竜族のように見えるが見慣れない服を着ていて、しかもそれがかなり汚れている。髪はぼさぼさで、体のあちこちにあざや傷がある。まるでこれでは、行き倒れではないか。何を盗んだのかは知らないが、皆でよってたかって袋叩きにしたのは明らかだった。

ここでは盗みは重罪だから、仕方のない事とはいえ、その時の場面を思うとあまり気分の良いものではない。ただ、怒りに任せて、というのならばまだいい。だが、彼らは海竜族、商人である。あらゆる損得勘定の結果、行動する。

“罪人を捕えたものには報償が出る”

という法律がこの街にある以上、若者を捕えた訳は明白であった。

「後で警備隊の方へ被害届けを提出する様に。カシム、この男を担いでこい。どうやら気を失っているようだ」

従者のカシムに若者を任せて、シリウスはその場から一刻も早く抜け出そうとした。が、その時、シリウスの耳に思いがけない言葉が届き、彼は、思わず足を止めた。

『大丈夫だ。離せ、一人で歩けるから』

振り向いたシリウスは、例の若者がカシムの手を払い退けて、ゆっくり立ち上がるのをまじまじと見た。

『おい、お前。その言葉は・・・』

シリウスに声を掛けられて、今度は若者の方が、驚いた顔をした。

『・・・言葉が通じるのか？こんなところで日本語話せる奴が居るなんて・・・嘘みたいだ』

若者は驚いたというよりも、ほっとした表情を見せた。その無警戒で人なつこい顔を、シリウスは何となく好ましく思った。

海竜族と同じ黒髪を持ちながら、その瞳は海竜族のそれとは違っていた。一方が、冷ややかなアイスブルーであるのに対し、シリウスの姿を映す今一つの瞳は、落ち着いたブラウンであった。

『お前、名は？一体どこから来た？どこで皇帝語を覚えたんだ？』

『俺はミサキ。皇帝語って・・・ここじゃ、日本語の事を、そう言うのか？』

ミサキと名乗った若者は、不思議そうな顔をして、そう言った。

リヴィウス家の屋敷はバザールを抜け、北へ向かうなだらかな傾斜の大路を登り切ったところにある。カーシアの一等地で、眼下に港を一望できる場所である。

潮風が頬を掠めていくのを心地良く思いながら、バルコニーに身をもたせかけ、シリウスは夕暮れに次第に増えていく港の灯を眺めて、ぼんやりしていた。

考えていたのは、ミサキという名の若者のことである。姿形は、ブラウンの瞳はあまり見掛けないにしても、それを除けば、とりたてて特徴もなく、何処にでも居る若者である。しかし、彼のかもしだす雰囲気はどこか現実離れしていて、目が離せない。そんな感じがするのだ。このランドメイアのことを、ほとんど知らないというのも気に掛かる。彼は皇帝語を話しているのだ。

皇帝語というのは、カリディア帝国の宮廷語で、帝国の貴族達が教養の一つとして身に付けるものである。カーシアのリヴィウス家は、この地方の豪族であって、貴族ではなかったが、シリウスの母親が都の貴族階級の出であったから、この家の礼儀作法はすべて都風であった。シリウスが皇帝語を話すのもそのためである。

だが、幾ら貴族でも皇帝語を使うのは宮廷内においてだけであり、日常は帝国の公用語であるカリディア語を使うのが普通である。皇帝語を操る異邦人がいてもおかしくはないが、皇帝語しか解さないととなるとまた話は別である。

「まさか、皇族でもあるまいしな・・・」

シリウスがあれこれ思考を巡らせていると、従者のカシムが姿を見せた。

「どうだ？様子は」

「はい。だいぶ衰弱しているようですが、大事はないかと。二、三日休養をとれば回復するでしょう。今は眠っています」

「・・・そうか」

安心する気持ちと同時に、がっかりしている自分に気付いて、シリウスはふと微笑を浮かべた。いつの間にか、あのミサキという若者を、航海と一緒に連れていけないだろうかと考えていたのである。

ランドメイアは大洋に浮かぶ島である。太古の昔に、大陸がまるでいらぬ部分を切り放して出来たのではないかと思えるほど、この島は資源というものに、あまりにも恵まれていなかった。ランドメイアの住人である海竜族が航海術に長けていたのは、そういった事情があったからなのかもしれない。

大陸から、一族の存亡を掛けて戦い、敗れた光族の難民が漂着し、大陸文化をこの島にもたらしてから、海竜族の外への憧れは一層強くなった。“大陸にはすべてのものがある”という言葉は合言葉に、海竜族は海の民として成長していった。

ただ、海竜族が賢明だったのは、大陸での領土拡大を巡る争いに対して、常に傍観者であったということである。大陸で繰り広げられる、幾つもの大国の興亡を横目に見ながら、各地に商業基地を建設し、その勢力圏を拡大していったのである。

欲しいものを手に入れる事が出来るのなら、それぞれの地で異邦人であることなど、海竜族

にとって何でもないことだった。何も持っていないということが、彼等の強みであったのである。海竜族がその拠点としていたランドメリア島でさえも、いつしか多くの商業基地の一つに過ぎなくなっていた。彼等にとっては船こそが“家”であり、大袈裟に言えば“国”であった。

海竜族は、春になると一斉に航海に出る。数十隻の商船が船団を組み、それに護衛の軍船が数隻ついて航海に出るのだが、それらの出港する様はまさに壮観であった。

秋から冬の間、大陸から吹いていた風が、春の訪れと共に逆に吹く。その風に乗って大陸のアラシアへ、更に大陸沿いに東へ向かい、航海は、メルブランカ、シャディア、そして大陸の果ての大帝国ファーズへと続く。

各地の特産物を集めながら、別の帰港地でそれを売る。“何も持たない海竜族”は、仲買の商人として大陸を飛び回るのである。途中に設けられた商業基地に立ち寄りながら、大陸航路を往復して、再びカーシアに戻るはその年の晩秋、ランドメリアに冬の訪れを告げる大陸からの風が吹く頃であった。

これが海竜族の一般的な航海であったが、中にはカーシアまで戻らずに、大陸で冬を越すものもあった。

出港前の慌ただしい甲板に立って、シリウスはこれから約半年の別れとなるカーシアの街をしみじみと眺めていた。

別に感傷的になっていた訳ではない。ただ気掛かりなことがあったのだ。ありていに言えば、ミサキのことが“心残り”だったのである。

今朝、シリウスが家を出てくる時、ミサキはまだ眠ったままだった。要するに、シリウスにとって、ミサキは未だ謎の人物のままで、おそらく半年して、彼が航海から戻るまでその謎は解けないのである。好奇心旺盛な少年にとって、おあずけを食った形のこの状態は、かなり辛いものであるのは間違いない。

「あーあ、このままで半年か・・・」

「半年なんてすぐですよ。初めての航海で、きっと退屈している暇なんてありませんから」

シリウスがもらした言葉の本意を察したのか、従者のカシムが慰めるように言う。

「・・・」

「シリウス様？」

考え込むように黙り込んでしまったシリウスの様子を心配して、カシムがそっとその表情を伺った。

丁度その時、船団をまとめる提督の乗る旗艦の、出港の汽笛が港に響き渡った。数十隻の船が次々にそれに呼応して汽笛を鳴らす。その汽笛の中で、シリウスは身じろぎもせずに港の一点を見詰めていた。何事だろうか、カシムもそちらに視線を移す。

「・・・あいつ。何してんだ、あんなところで」

シリウスのつぶやきに、カシムが視線を戻した時には、彼の主人の姿は、すでに甲板から消えていた。

「シッ、シリウスさまっ！」

シリウスが海に飛び込んだのに気付いて、カシムが慌てて甲板から身を乗り出すと、遙か下の海面で、シリウスが頭だけ出して浮いていた。

「シリウスさまぁー！」

「・・・ごめんって・・・親父に・・・謝っといってくれ・・・」

汽笛の合間に途切れ途切れにそう言うと、シリウスは、陸に向かって泳ぎ始めた。

「お待ちください！シリウスさまっ！」

カシムもシリウスの後を追って、海に飛び込もうとしたが、船縁を乗り越えようとしたところで背後から肩に手を掛けられて、制止された。

「だっ、旦那様」

「出港の手伝いもしないで、何をしているかと思えば。どう言うことだ、カシム」

「はあ、あの・ ・ ・ただ申し訳ないと、そうおっしゃって・ ・ ・」

「あの放蕩息子が。海竜族が陸に戻って、何をしようと言うのだ」

海にいればこそその海竜族である。海竜族が富や名声を得られるのも海に出てこそ、である。

ランドメイアは事実上、光族のカリディア帝国が支配している。光族の天敵とも言うべき海竜族の帝国での地位は無に等しい。事実、帝国貴族以上の実力を持ちながらも、都ではリヴィウス家は、地方の一豪族としてしか扱われていない。

「旦那様。私が次の寄港地から引き返します。次の商船に乗るように、きっと説得いたします。ですから・ ・ ・」

「構わぬ。放っておけ。あれももう成人したのだから、やっていることの始末は自分でつけよう。それよりカシム」

「はい」

「口伝鳥の用意をしろ。恐らく、シリウスの行き先はカディスだろうからな。通行証を用意させておいてやる」

「・ ・ ・旦那様」

「私からののはなむけだ。留守ばかりしていて、父親らしいことを何もしてやれなかったからな。それに、リヴィウス家の者が城門破りでは示しがつかん。あいつなら、やりかねんぞ」

やがて、主人の伝令を帯びた口伝鳥が、水平線の上に消えかかっている、カーシアの街に向かって飛び立った。カシムはシリウスの旅の無事を祈って、一人それを見送った。

シリウスが海に飛び込んだのは、ミサキを港の雑踏の中に見つけたからだった。先のことなど何も考えていなかった。ただ、このままミサキが、彼の前から消えてしまうことが我慢できなかったのだ。

まだ何も、何も聞いていなかったし、何も言っていなかった。

それに・ ・ ・

「あいつ、あぶなっかしいしな」

シリウスは、自分に言い聞かせるように言った。

「放っとけないじゃないか。ここのこと何も分かってないみたいだし」

自分の行動に、あれこれと理由をつけていたシリウスだったが、ふいに、船を勝手に下りてしまったことに、少し後ろめたさを感じていることに気付いて軽く頭を振った。

「俺が、そう、決めたんだからな・ ・ ・」

何があっても、後悔だけはすまいと思う。とにかく、ミサキを見つけ出すことが先決だ。全ては、それからのことだ。

シリウスが岸壁に辿り着いた時、ミサキはすでに姿を消していた。しかしそんなに時間が経っているとは思わないから、それほど遠くへは行ってはいないはずだ。シリウスはそう思いながら、

ミサキが消えた通りへ足を踏み入れた。そこは、帝国の都カディスへ向かう街道へと続く、カーシアの中央通りであった。

港のバザールと反対側の岬には、都の貴族達の別荘が立ち並んでいる。カーシアは温暖な気候であったから、冬の間、避寒にここを訪れる都人は少なくなかった。しかし春も半ばを過ぎるこの時期になれば、ほとんどの貴族達は都へ帰っているから、この辺りでは、人影もない。

その一画の、とある屋敷の入り口に、一台の馬車が止まっていた。今朝方、都からこの地を訪ねていたのは、宰相ラーラ・マルクスの第一書記官インディラ・アディラであった。彼女は、まだ十六だったが、現在の帝国で宰相に次ぐ肩書きを持っていた。宰相の代理としての用事を済ませて出てきたインディラに気付いた護衛の若い女騎士が、一礼して馬車の扉を開いた。

「インディラ様。お話は分かりますが・・・」

インディラの後ろから歩いてきた若者が、書記官に問い質すように言った。

「“待て”とおっしゃったのよ。ダーク・ブランカ様はね」

「だけど、もう半年だ。いくら魔道を使ってもこれ以上の延命は・・・」

「しっ、声が高いわ。魔道師ランディス。宰相閣下も手を尽くされているわ。とにかく、帝国を継ぐものが 見付からなければ、この国はこのまま滅びるしかないのだから」

「まいったなあもう・・・ダーク・ブランカ様、どこまで行っちゃったんだろう・・・」

ランディスは頭を抱えて呟いた。

「インディラ様、急ぎませんと」

ランディスを横目で見ながら、インディラを待っていた女騎士が、急かすように言った。

「そうね。明日の日暮れまでには都に着きたいし。とにかく、ダーク・ブランカ様には、一度戻っていただかなくては」

「連絡取れるんですか？」

「私はそのための、代理です」

きっぱりとそう言って、馬車に乗り込んだインディラに、ランディスはそれ以上何も言えなかった。

自分より四才も年下の少女が、時折、妙に大人びて見える。半年前、インディラが宮廷に上がるまで、何処で何をしていたのか、誰もその素性を知らなかった。だが、彼女を書記官に推挙したのが、他でもないダーク・ブランカだったし、彼女の実力もまわりを納得させるに足るものだったから、そんなことは大して問題にならなかったのである。大魔法使いダーク・ブランカとは、この国では、それほどの影響力を持つ存在なのである。

「気のせいかな・・・前にどこかで会ったような気がするんだよな・・・」

「ランディス、あなたも早く乗って。インディラ様がお待ちよ」

傍らに立っていた女騎士が彼を急かした。

「ああ、すまない。サラ、都に戻ったら、四騎士を集めてくれ。やってもらいたいことがある」

「はい、司令官殿」

にっこり笑ってそう答えたサラに、ランティスは、顔をしかめて、すかさず訂正した。

「俺は魔道師だ」

「でも、今は私達、太陽の四騎士の司令官なのでしょう？」

「人手不足だからね。ダーク・ブランカ様が戻ったら、さっさと解任してもらおうよ。皇帝騎士団の精鋭、太陽の四騎士の司令官なんて、俺には荷が重い。魔道師長ってだけでも、憂鬱なのに・・・」

そう言って肩をすくめて、ランティスは馬車に乗った。

カーシアの市街を抜けて都へ向かう街道へ入り、更に小さな丘陵地を越え、広い平野へと抜ける辺りまで来ると、目の前に突然視界を遮る城壁が現われる。この辺りには、かつての光族と海竜族の幾度にもわたる戦いの折に、海竜族がカーシアの防衛のために築いた城壁が未だに残っていた。

この城壁の城門をくぐると、帝国領である。今では皇帝の門と呼ばれているこの城門は、帝国の南側の入り口になっており、外国の使節をはじめ、多くの商人や旅人達がここで通行証を手にして帝国領へ入る。むろん通行証のないものは帝国へ入ることは出来ない。城門監察官の審査を受け、身元の不確かなものは即追い返された。

外国の商人や旅人達も、母国の発行する身元保証書がなければ、入国が許されなかった。だから外国商人のほとんどは、カーシアで商いをするだけで帰国する。もっとも、カーシアまで来れば、ランドメイアのものは大抵揃ったから、外国の商人達があえて都まで行く必要はなかったのである。都へ行く商人といえば、カーシアで海外の商品を買い取り、都へ売りに行く海竜族の商人達が主であった。その商いも、カーシアの三商家と称される、大商家がそのほとんどを独占していた。

シリウスがその足を止めたのは、その城門の前だった。ミサキを追ってここまで来てしまったのだが、どこかで追い越してしまったのか、まだミサキを見付けられずにいた。

「あいつはここから先へは、行かれないしな」

開かれた門の向こうは帝国領である。幅にしてわずか数ミニオン（1ミニオン＝約3.3メートル）の城壁だったが、それが隔てているものは計り知れない。

「あまりこの辺をうろうろしていて、あの人に見付かっても面倒だしな・・・」

そうつぶやきながら、シリウスは踵を返した。

「街に戻って、もう一度捜してみるか。それから・・・」

・・・それから・・・どうしようか・・・

仮に、ミサキが見付かったとして、その後は、どうしよう。ここに来て初めて、シリウスは自分が何も考えていなかったことに気が付いた。

何かに引き寄せられる様に、後ろを振り返る。

灰色の城門の向こうに見える四角い風景。

幼い頃から何度となくここに来ては眺めた、見慣れた風景である。

その風景の彼方に消えていく旅人達を見送りながら、思いを馳せていたのは・・・

「帝都カディス。カディスの皇帝騎士団」

シリウスは幼い頃、父親に連れられて、一度だけカディスへ行ったことがあった。現皇帝ラディウスII世の戴冠式の時である。日頃は帝国各地に散らばっている、皇帝騎士団の騎士達が、その日、即位したばかりの皇帝に、忠誠を誓うために一同に会していた。

皇帝軍の精鋭を集めて結成されるという皇帝騎士団の、華麗で颯爽とした雄姿は、載冠式に集まった人々を圧倒した。そしてそれは、憧れという色を添えて、まだ子供だったシリウスの心に、深く深く刻みこまれたのである。

大きくなったら、皇帝騎士団に入る。

そう心に決めて、眠れない夜を過ごしたのは、幾つの時だっただろうか。

そして、その夢を忘れてしまったのは、幾つのことだったか・・・

「・・・皇帝騎士団か」

シリウスは、その言葉の持つ響きを確かめながら、ゆっくりとつぶやいた。

「もうずっと、長いこと忘れていたな・・・」

大人になったら、船に乗り、いずれは商人として、兄達のように親の片腕となり働く。それが、シリウスの考えていた将来だった。

誰に言われた訳でもなく、カーシアに生まれ育った少年なら、ごく普通にそう考える。だが、今現実には、彼が居る所は、海上ではなく陸上なのだ。

「とにかく、あいつを見つけてからだ。後のことはそれから考えるさ・・・」

そう独り言を言って、シリウスは城門に背を向けて歩き出した。しかし、数歩も行かないうちに、彼の歩みは止まってしまった。

彼の視線は、前方からやって来る一台の馬車の脇に馬で伴走している女騎士、恐らく馬車の護衛なのだろうが、その女騎士の上で止まっていた。彼女の風になびく長い髪は、燃えるような緋色で、強い意思を秘めているような瞳は海のように青い。人目を引く端正な容姿であるのには違いないが、少年が見とれるほどの、とびきりの美人だと言うわけではない。

シリウスが彼女に目を止めたのは、まだ少女の顔を持ちながら、すでに騎士の風格を備えた彼女に興味を持ったからである。カーシアでは、右に出るものはいないという剣の腕を持つシリウスであったが、その彼が見ても、彼女は相当の剣の使い手であるという気がしたのだ。

丁度、彼女がシリウスの前を通り過ぎた時に、その腰の剣が彼の目に入った。

「・・・火鳥の紋」

剣の柄の部分に彫られた紋章は、翔飛する火の鳥を模した火鳥の紋章であった。

ランドメリアでは、剣にその家の紋章を彫り込む習わしがある。その剣の紋章を見れば、相手がどこの誰か分かるのである。また、剣の紋章とは、その出自と同時に騎士の位を示すものでもあった。

火鳥の紋と言えは、リンクス家のものじゃないか。シリウスは心の中でそう思った。同じカーシアの三商家に挙げられている、リヴィウス家のシリウスにとっては馴染みの深いものである。

とすると、彼女は・・・

「そうか、サラマンデル・リンクス・・・」

本人に会うのは初めてだが、その名前だけは知っている。女だてらに皇帝騎士団に入り、あまつさえ、騎士団最高位である太陽の騎士の称号を持つと言う、女丈夫だ。

そんなことを考えながら、シリウスが馬上の人を見送って、再び城門の方を振り返った時、シ

リウスの視界の端に人影が映った。

反射的に、焦点をそちらに合わせた彼の目に飛び込んできたのは・・・

「ミサキ！」

シリウスがミサキに気付いたとき、彼は女騎士の制止を振り切って、馬車に駆け寄ったところだった。シリウスはそれを見て、あわててミサキの元へ走った。

『朱里っ！朱里っ！』

馬車の窓に手を掛けて、ミサキがそう叫んでいるのが聞こえた。

「何やってんだ、やめろ、ミサキ！」

「この馬車を、インディラ・アディラ様のものと知っての狼籍か？」

シリウスが叫んだのとほぼ同時に、別の声が、それに重なった。女騎士サラが、一瞬の間に抜き放った剣をミサキに突き付けていた。

「・・・」

「なんの目的があつてのことか。答えろ」

剣先を見据えて黙ったままのミサキに、サラが再度、問い掛けた。だが恐らく、彼女の言っていることはミサキには分かっていないのだ。シリウスはそう確信した。

何しろミサキは皇帝語しか解さないのだから。しかし、サラはどう見ても本気である。放っておけば、ミサキは殺されかねない。

『おいっ、ミサキ。なんでもいいから、早く謝れ。相手が悪い』

シリウスが皇帝語でそっと耳打ちする。

『やっぱり、怒られてたのか。言葉は分からないけどそんな気がした』

ミサキは平然とした顔で、そう答えた。

『皇帝語なら、分かるって訳？さあ、言いなさい、あなた何者？何故、インディラ様の馬車を止めたの？』

サラは皇帝語が使えるらしく、そうミサキに問い質した。

『俺は、ミサキ。それ、退けてくれないか。剣を向けられるのは、好きじゃない』

『よせ、ミサキ・・・』

どう見ても、サラに対して挑発している様にしか見えないミサキを、シリウスが止めようとしたその時、馬車の中から少女の声がした。

「剣を収めなさい、サラ。ここはまだカーシア自治区。協定違反になります」

気が付くと、馬車の窓から少女が顔を覗かせていた。

「は、申し訳ございません」

サラは素早く剣を納め、その身を引いた。

ミサキはゆっくりと馬車に近付いて、少女に顔を寄せた。

『朱里。やっと見つけた。俺だよ、ミサキ。迎えに来たんだ。一緒に帰ろう』

ミサキの言葉に、少女は戸惑った顔をした。

『・・・どなたかと勘違いなさってるのかしら。私の名前はインディラ・アディラ・・・あなたは誰？』

・・・あなたは、誰？・・・

少女の問いに、今度はミサキの方が、戸惑いを見せる。

『朱里・・まさか俺が分からないのか？』

そう言ったミサキの顔を、不思議そうに眺めていたインディラは、やがてゆっくりと首を横に振った。

『ごめんなさい』

インディラはそう言って、馬車の中に引っ込んでしまった。それを確認して、サラが御者に合図を送った。馬車がゆっくりと走り出す。

『朱里！待ってくれ。まだ・・』

その馬車を追い、ミサキも一緒に走り出した。

『朱里！朱里！あ、か、リーっ！！』

ミサキの必死の叫び声にも、馬車はもう止まる事はなかった。そんなミサキに、馬上のサラが、冷めた目を向け、嘲笑しながら言う。

『インディラ様と話したくば、都まで追って来るがいいよ、ミサキとやら。ただし、都で会った時には容赦しないからね』

『ちょっと待てよ、おいっ、ミサキってば』

馬車を追って走り続けるミサキを、わずかに遅れてシリウスが追う。シリウスが後ろから声を掛けても、ミサキの足は止まらない。

『おいっ、このまま城門を越えて行くつもりじゃないだろうな。冗談じゃないぞ・・と一まーれ、ミサキっ！』

城門の門番が、門に向かって走ってくるミサキ達に気付いて、手にしている槍を構え直すのが見えた。

「そこの二人、止まりなさい」

門番が叫ぶ声が聞こえた。

『止まれ、ミサキっ』

シリウスがそう言って、ミサキの肩に手を掛けるのと、門番がミサキを取り押さえたのと、ほぼ同時だった。

『離せよ。朱里を見失ってしまう・・』

門の向こうへ顔を向けたまま、ミサキはもがいたが、馬車はすでに城門の向こうに消えていた。

『おやめなさい。彼女は過去を持たぬ者。今は追っても無駄だ』

不意に、背後から言葉が投げかけられて、少年達は振り向いた。

何時の間に現われたのか、黒いマントに身を包んだ若い男が二人の後ろに立っていた。

『どういうことだ』

ミサキが男のほうへ向き直りながら、問い掛けた。

『全ては、予言書の導くがまま・・君の捜すお姫様に再会するために、君にはやらなくてはならないことがある、という事です。ああ、自己紹介が遅れたね。私の名は、ランディス・フラーム』

『ミサキ、惑わされるな。奴は魔道師だ』

シリウスが、ミサキに注意を促した。

『おやおや、海竜族の魔道師嫌いは、相変わらずなんですねえ。そんなことじゃ、都でやっていくのは大変ですよ。カディスは魔道師の都という異名を持つくらいなのに・・・』

笑いながらそう言ったランディスに、シリウスは心の中を見透かされている様な気がして、口をつぐんだ。

『俺にどうしろと？』

ミサキが真剣な顔をして、ランディスに聞いた。

『昔から、お姫様を救い出すのは、騎士だと相場が決まってるもんです』

『で？』

『騎士の“資格”を得る事が先決です。それには、騎士の証である剣を手に入れる必要があるんですよ。インディラ様はね、ある大事な役目を果たすために、そして、それに伴う危険から身を守るために、自分の過去を消してしまわれた。そうして、現在、この帝国を支える柱として、働いていらっしゃる。そのインディラ様をお守りするとなれば、君は、最強の剣を手に入れなければなりません』

『最強の剣？』

『それ即ち、剣の紋章の剣。帝国最高位の騎士に与えられるという魔法の剣。この剣を持つ者は、帝国最強の騎士になれるという代物』

『どこに行けば、そいつを手に入れられるんだ？』

『おい、よせ。ミサキっ。剣の紋章の剣だ？ふざけるなよ。魔道師のおっさん。あれはとんでもない魔剣だって言うぞ。ミサキが何も知らないのをいいことに、こいつに危ない橋を渡らせるつもりか』

シリウスの言葉に、ランディスは少し傷ついた様な顔をする。

『・・・おっさん、と言われるほど、年はとってないよ。リヴィウス家の放蕩息子』

『なっ・・・』

自分の出自をずばり言い当てられて、シリウスは絶句した。ランディスが更に畳み掛ける。

『口を挟むのは止めてもらおうか。私はミサキと話をしているんだ。これは、彼が決めることだよ。危険？そりゃそうだろう。帝国最高位の騎士になろうっていうんだ。簡単にはいかないだろうさ』

『いいよ。それで、朱里が取り戻せるなら・・・』

『朱里、ね。後から、聞いてない、なんて言われると困るから、確認しておくけど、インディラ様の封印された過去に、君がいるという保証はないぞ。仮に、彼女の記憶が戻ったとしても、それが君の言う、朱里って子だとは限らない』

『朱里だよ。俺が間違えるはずない』

きっぱりと言い切ったミサキに、ランディスは頷いた。

『いいでしょう。剣は帝国の北にある氷の神殿・・・闇と夜の女神、フィリスの神殿だよ』

『分かった。フィリスの神殿だな』

「お話し合いはお済みですか？」

気がつけば城門の監察官が腕組をしてそこに立っていた。門番の一人が呼んで来た様である。

「ええ。すみませんね、お仕事のお邪魔をいたしまして。サフィアス・リヴィウス卿」
ランディスがうやうやしく頭を下げて、後ろに下がった。

監察官がシリウスの正面に立って言った。

「父上のご心配がまさか本当になるとはな。シリウス。どういうことなのだ？これは」

「兄上・・・これはその」

「その若者は、お前の知り合いなのか？」

「ミサキっていうんだ。ちょっと事情があって・・・その・・・」

「ほう。事情がな・・・父上から口伝鳥が来ていなければ、縛り上げてでも商船に送り返す所だが・・・」

そう言いながら、サフィアスは懐から小さな金属のプレートと財布を取り出すと、シリウスの手に握らせた。

「・・・兄上？」

「通行証と、都までの路銀。父上からの言付きりものだ。都で士官するなら、ギース伯爵を頼りにしろと」

ギース伯爵家は都の大貴族で、シリウスの母の実家であった。突然に城門の向こうの世界に、シリウスの進む道が出来たのである。

「・・・それから、これを」

サフィアスが一振りの剣を、シリウスの眼前に差し出して、言った。

「ただし、いったん帝国へ足を踏み入れたなら、再びこの城門をくぐって、このカーシアへ戻ってくることはならぬ。それが父上のお言葉だ。その覚悟があるのなら、この剣を受け取れ」

「・・・」

それは事実上の勘当であった。呆然としているシリウスに、サフィアスがその肩に手を置いて続けた。

「・・・今ならば、まだ引き返せるぞ、シリウス。一週間後に出る、第二陣の商船隊に乗れば・・・」

カーシア。この美しい街と、永遠に別れを告げなければならない。父にも母にも兄弟達にも、もう会えない。そう考えると、シリウスの心は動揺した。

「・・・行く。都に行く」

シリウスは決心が鈍らないように、はっきりした口調で言って、兄から奪い取る様にして剣を掴んだ。

「シリウス・・・お前」

「父上に、お伝え下さい。シリウスは都にあっても、リヴィウス家の名を誇りにし、その名に恥じぬよう生きたいと」

「わかった。私には何もしてやれないが、お前の栄達を祈っている。がんばれよ」

「はい」

シリウスが深く頭を下げて挨拶したのを見て、ミサキが話しかける。

『どうなったんだ？』

『都に行く。街道から北へ回って、氷の神殿経由だけだな』

『一緒に来てくれるのか？』

『当然だろ。お前、危なっかしいし・・・それに、ミサキは身元が分からないから、通行証が貰えない。だから、俺の従者ってことにする』

『従者？』

『そう。だから俺の言うことは聞かなきゃいけないんだぞ』

『ふうん。ま、何でもいいや。神殿に行かれれば』

軽いノリのミサキに、シリウスは呆れ顔で言う。

『お前って、筋金入りの楽道家なんだな』

『目的重視主義なだけだよ。的が決まっているなら、最短距離で行くのが良いに決まってる。いろいろ考えすぎると、余計な回り道したり、道に迷ったりするだろ？』

『・・・そうだな』

こいつ、見掛けほど馬鹿じゃないな。ミサキの理屈に頷きながら、シリウスはそう思った。一体、ミサキという若者は何者なのか？シリウスは無邪気そうに笑うミサキに圧倒されながら、並んで歩き始めた。

城門を潜り、憧れの地へ足を踏み入れる。それだけで、シリウスの胸は一杯になった。

目の前には、新しい世界が広がっている。

少年は、ただ薔薇色の未来だけをその心に描いて、歩いていった。

インディラは馬車の窓から、横を走るサラの顔を眺めていた。夕暮れに緋色の髪が、オレンジ色に染まっている。その長い髪をなびかせている当人は、全く無表情で駒を進めている。

「怒っているの？サラ・・・」

「いいえ」

しかし、前方を見詰めたまま、そう答えたサラの声は不機嫌なものであった。

「ランディスが気儘なのは今に始まったことじゃないでしょう。そう、怒らずとも」

「怒っているんじゃないわ。ただ、少し呆れてますけど。人に仕事を言い付けておいて、仕事の中味を言っていないんですから」

「私達が都に着く頃には、お戻りでしょう」

「・・・だとよいのですけどね」

サラはそう言って、風になびく髪をうっとうしげにかきあげた。

インディラは暗い馬車の中で、うとうとしながら、昼間会った若者のことを考えていた。

「ミサキ・・・」

彼は自分を何と呼んだのか。

「アカリって・・・それが私の名前なの？」

彼は自分の何を知っているのだろう。

「考えちゃいけないわ」

もしも記憶の封印が解けてしまったら、ダーク・ブランカに過去の記憶と引き換えに与えられた、魔法の力が消えてしまうのだ。

「私はインディラ・アディラ。宰相様の書記官。ダーク・ブランカ様が戻られるまでは、インディラだわ」

心の中のミサキの影を消すように、インディラはそう呟いた。

第2章 嘘つきな魔法使いの手のひらで踊るのは善人

その男の風貌と、通行証を代わる代わるに見て、ウィンザーテラスの通行管理官は、しばし言うべき言葉を失った。

その男の姿はどう見ても、軍の下士官か傭兵といったところであり、この役人が、通行証に記された男の身分と、その容姿とをすぐに結び付けることができなかつた為である。

「おいっ、通っていいのか？」

男が不機嫌そうな声で言って、役人を睨みつけた。

「あ、はい。そりゃあ・・もう。ご自由に。騎士様の行く手を遮るなど、滅相もございません」

役人がおどおどした調子で言いながら、男の通行証を差し出した。男はそれを奪い取るようにして受け取ると、ふんと鼻を鳴らして、大股で歩き去った。

「皇帝騎士団の騎士様・・にも、変わった御方がいるもんだ。あれが、雪の騎士様かあ」

その役人は、街の雑踏に消えていく男の後ろ姿をしばし見送って、良いものを見たという様に満足げな顔をし、再び自分の仕事に戻っていった。

さて、その男。ラシャストロフ・ディールは、正確には、元、雪の騎士であった。

彼は、先年、皇帝騎士団を自主退団し、旅に出ていた。ただ、細かいことを言えば、彼の出した退団届けは、正式には受理されていなかったから、彼はまだ雪の騎士であった。

しかし、カディスからの召還を、すでに三度に渡って無視しており、彼が、騎士としての義務を放棄したとき、彼の中で雪の騎士という称号は消滅していた。それでも、彼が騎士の身分の通行証を捨てずに所持しているのは、ただ単に、それが便利だからにすぎない。

この帝国では、国内に身分の不確かな者が入り込む事と同じぐらい、人民が自分の村や街を離れる事にはうるさかった。農民や技師、職人という身分の者は、生まれた土地から外に出ることを、ごく特別な場合を除いて、ほとんど認められておらず、帝国国内を歩くのに必要な通行証を手にするのは、商人、騎士、貴族といった一部の人々に限られていた。

そして、帝国の特権階級である貴族を別にすれば、ほとんど無条件で国内を行き来出来るのは、皇帝騎士団の騎士だけであった。それというのも、皇帝騎士団という組織が、帝国内の情報収集、即ち、諜報活動をその主な仕事として持っていたからである。

ラシャが足を止めたのは、ウィンザーテラスのバザールの片隅にある、薄汚れたテントの前であった。入り口には、薄い布の仕切りが掛かっており、その中は薄暗く人の気配もない。だが、ラシャはそこに彼の訪ねる人物がいると確信して、その中に足を踏み入れた。

「・・いらっしやい」

中に居た女占い師が顔を上げた。

若いな、というのが、彼の第一印象だった。見たところは二十前後という感じである。もしそうなら、彼とそう変わらない。占い師といえば、老婆を連想していたラシャである。彼女が、自

分の想像よりもはるかに若かったことに彼は内心驚いたが、表情には見せず、黙ったまま占い師の勧めた椅子に腰を下ろした。

「お聞きになりたいことは？」

手元の水晶球に軽く手を滑らせて、その占い師が尋ねた。

「カヤの居場所と、この馬鹿げた世界から抜け出す方法」

ラシャの横柄な口調に、占い師は肩をすくめた。

「・・・なんだか、最近是人捜しが流行ってんのね。居るべき人が、居るべき場所にいないというのは、良くないことだわ。世界が混乱している証拠だもの。それに、あなたは外の世界から召喚されたって訳ね。剣の騎士・・・即ち、皇帝騎士団の騎士になるために」

「やけに事情通だな」

ラシャが訝しげな顔をした。

「占い師ですもの」

女が意味ありげな微笑を浮かべる。

「それにその腰の剣・・・」

占い師が、ラシャの剣に付いている紋章を指し示す。

「それは“雪華の紋”でしょう？だから、あなたは、雪の騎士」

にっこり笑ってそう言った占い師の表情に、ラシャは急に何かを思い出したように、勢いよく椅子から立ち上がった。

「・・・あんた、誰だ？前にどっかで・・・会ってる。占い師だなんて、何故そんな・・・」

目の前の女が占い師だと、何故自分はそう思い込んでいたのか。ラシャは彼を見上げる女の顔をまじまじと見ながら、狐につままれたような顔をした。

「・・・あなたは、ここに凄腕の占い師がいて、そう信じて、こんな帝国の外れまでやって来た。そう、確かに間違っていないわ。おおまかな所はね。そんな所に突っ立ってないで、お座りなさいな、ラシャストロフ・ディール」

半ば放心状態のまま、ラシャは、すくと椅子に腰を下ろした。

「私が、あなたをここに呼んだのよ。用があったのは、あなたじゃなくて、私の方」

「なんでまた・・・」

「そりゃ、あなたに会いたかったからよ。都からの召還を、ことごとく無視してくれたから、“私”がわざわざ出向く羽目になったんじゃないの」

「あなた、もしかして、ダーク・・・」

「しっ！名を呼んではだめ。大魔法使いはまだ、ランドメイアには戻っていないことになっているんだから」

彼女が声を立てずに笑った。

ランドメイアの大魔法使い、ダーク・ブランカ。目の前にいるこの女が、まさかそうだというのか。

ラシャは目の前にいる人物を、緊張した面持ちで見詰めた。

「雪の騎士、ラシャストロフ・ディール。あなたに任務を与えます」

「ちょっと待ってください。俺は・・・」

「あなたは、まだ雪の騎士。それはあなたが一番良く分かっているはずね。その剣が、誰でもない、あなたのものである限り・・・」

「俺には、このランドメイアの未来に対して、責任を負わされる義務はない。剣に選ばれた騎士だ？ふざけるな。そうやって、異世界のよそ者の手を借りなきゃ守れないようなものなら、いっそ滅んでしまえばいいんだ」

ラシャが吐き出すように言い放つと、とたんにダーク・ブランカの表情が曇った。そして彼女はそのまま俯いて、押し黙ってしまった。

その場に、言いようのない気まずい空気が流れる・・・

「・・・いや、その・・・ごめん。ちょっと言いすぎた・・・かも・・・」

大魔法使いという名に、ふさわしからぬ反応を示したダーク・ブランカに、ラシャは驚いて、慌ててそう言った。

皇帝さえもその意志の下に置くと言われる、大魔法使い。

この世界では、神にも等しい存在。

それが“ダーク・ブランカ”である筈なのだ。

少なくとも、ラシャがランドメイアに来てから得た、彼女に関する知識を総合するとそういう事になる。それなのに、今、彼の目の前にいるのは・・・

ダーク・ブランカが深いため息を付いて、顔を上げた。その瞳が微かに潤んでいるのに気づいて、今度はラシャの方が、気まずさから下を向いた。

「・・・いいのよ。あなたの言い分は、正しいわ。この世界がどうなろうと、例え滅んだとしても、あなたには関係のない話よね。・・・でも、ここで生まれ育った者にとっては、ここは大切な故郷。それが今滅びようとしている。そして、あなたには、それを救う力がある。・・・でも、救いを求める者に、手を差し伸べないからといって、あなたを責める様なことはしないから・・・気にしなくていいわ」

そういう言われ方をされると、ものすご〜く、気になるじゃないか、と思う。

「・・・俺で、役に立つ事なんか、あるのかよ？」

腕にはそこそこの自信はある。だが、魔法というものが幅を利かせているこの世界では、そんなものは、大した利点にはならないのだ。それは、三年前の反乱騒ぎの時に、身にしみて感じたことだ。自分の無力さを突きつけられて、ここは自分のいるべき世界ではないのだと、思い知った。だから、全てを放り出して、逃げ出したのだ。

「やっていただけるのですね？」

ダーク・ブランカが、嬉々とした顔で、身を乗り出した。

「いや、そういう事じゃなくて・・・」

渋るラシャの言葉を遮って、ダーク・ブランカが畳み掛ける。

「任務の報酬は、あなたの望むものを・・・例えば、カヤと、あなたの世界への帰還。それで、やっつては貰えないかしら」

今度は、ラシャの方が身を乗り出す。

「あんた、カヤの居場所知ってんのか？」

「任務を受けて下さいます？」

ダーク・ブランカが、にっこり笑う。

・・・交換条件って、ことか・・・

何となく、乗せられた気がしないでもない。だが、これで帰れるんなら悪い話ではない、と思う。

・・・しかし、この女の言う事は、信じられるのか・・・？話が・・・上手すぎる気もするよな。いやいやでも・・・仮にもダーク・ブランカだぜ。このランドメシアで、一番偉い奴だ。カヤに会える可能性が少しでもあるなら・・・

ラシャは心の中で思案するように間を置いてから、口を開いた。

「・・・いいだろう。で、任務の内容は？」

「ありがとうございます。感謝します、ラシャ。任務はある人物の護衛。この先の、宿屋に泊まる二人連れ。その一人で、名はミサキ。彼をフィリスの神殿へ、無事に送り届けること。カヤはその神殿にいるわ。そして、そのミサキが、あなた達を元の世界に戻してくれるはずよ」

「フィリスの神殿って・・・あそこは、氷の騎士の領域じゃないか。どうして、この任務、俺に？太陽の四騎士でもなく、月の三騎士でもない俺を選んだのは、何故だ？」

「あなたは、騎士でありながら、異邦人のまま・・・それが一番の理由。それに太陽や月の称号を持つ騎士では、光の力が強すぎる・・・強い光は、強い影を生むものだから」

「・・・え？」

「・・・あ」

突然、ダーク・ブランカが両腕で、自分の体を抱え込む様にして、座ったまま、うずくまる。

「おいっ、大丈夫か？」

ラシャが声を掛ける目の前で、眩い光と共に、唐突にその姿が変化した。

「お前・・・」

自分を見据えるラシャの驚いた顔を見て、ダーク・ブランカは一瞬、決まりの悪そうな表情を

した。

「わたし・・・何か、変わりました？」

「ああ・・・何か、顔が・・・今のは、魔法？」

「え・・・ええ。そうなんですけど・・・」

ダーク・ブランカが、何かを探すように、辺りを見回す。目的の物・・・どうやら鏡を見つけて、慌てた様子でそれを覗き込む。

・・・時間の問題か・・・魔法が切れるのは・・・

「あの～、もしもし？」

「え？・・・ああ、私は、ファレンシア・クララバート」

「ファレンシア？まさか、今のが、変身魔法って奴か・・・すげー初めて見たぜ・・・」

「え・・・ええそう・・・そうなの、変身魔法。で、たった今から、そういうことだから。私の正体は、誰にも言わないこと。いいわね？」

ダーク・ブランカほどの有名人になると、素顔のままに気楽にその辺を歩く・・・という訳にはいかないのだろう。と、ラシャは、単純にそう思った。彼が、魔法使いの言動というものは、そのまま信じるものではない、という事に気付くのは、もっとずっと後のことである。

ウィンザーテラスは、帝国十五神殿の一つ、風の神殿のある場所として知られる街である。ウィンザーテラスはその西側に、家畜の放牧が行なわれている広大な草原地帯を有しており、酪農の街としても知られている。

この街のバザールで、あちらこちらのテントから、牛乳やチーズといった乳製品を売り込む商人達の声が、絶え間なく聞こえるのも、ここでは珍しい光景ではない。それでも、初めてここを訪れる者が、ついつい足を止めてその店先を覗き込んでしまうのは、無理のない事であった。

「・・・ミーサーキー」

シリウスは彼の連れが、売り込みの商人達に呼び止められる度に、足を止めてその話に聞き入ってしまうのに半ば呆れていた。陽は西の地平線近くまで傾いて、東の空から夕闇が迫っている。シリウスとしては早く宿を決めて、ゆっくりしたい所であった。

『日が暮れちゃうぞ』

『ああ、ごめん』

『どうせ、話、聞いたって、意味なんて分かんないんだろ？カリディア語の、しかも西部訛り。俺だって、ほとんど分かんないんだから』

『うん。言葉は、分かんないな。確かに。でも、言ってることは、分かるような気がする。俺って、順応力高いのかも』

ミサキが冗談めかして笑った。

ミサキを半ば強引に引っ張って、バザールから連れ出したシリウスが、宿屋に辿り着いて、ようやくほっとした頃には、すでに空には降るような星が輝き出していた。

『あれを見ると、遠くに来たんだなって・・・そう感じるな』

天空に月が二つ並んで浮かぶ様を見て、ミサキが独り言のように言った。

『昼間は忘れてるのに・・・青い空と輝く太陽は同じなのに、日が暮れると、やっぱり違うんだって、思い知らされる。星の輝きは一緒でも、知ってる星座が一つもない』

ベットに片足を突っ込みかけていたシリウスは、顔を上げて、窓枠に腰掛けているミサキを見た。月の光を浴びて星空を仰ぐその姿に、シリウスは、ミサキが異邦人であるということを認めない訳にはいかなかった。

どこか変わっている奴だけど、それはミサキの個性なのだろうと、シリウスはそう思っていた。・・・思っ、というより願って、と言ったほうがいいのかも知れない。シリウスにとって、初めての対等に語りあえる友達。ミサキの存在は少年にとって、いつしかそういうものになっていた。

もし、彼が、このランドメイアの人間でないのであれば、いつかはこの島から去っていくに違いないのだ。いつか、別れなくてはならない時が来る。そう考えると、シリウスの心は重くなった。ミサキが朱里を見つけた時、それが彼らの別離の時になるのだろうか。

『・・・ミサキ。お前、どこから来たんだ？大陸から？アランシア？・・・それとも、ファーズあたりか？あっちの人間は、お前みたいな瞳の色が多いし・・・』

『東京だよ』

『トウ・・キョウ・・？聞いたことないな』

シリウスは、屋敷にあった大陸航路の地図を頭に思い描いて、首を傾げた。

『人を捜すには広くて、でも、人と人が偶然出会うには狭い。不思議なところだった。あんまり覚えてないけどな。それでも多分、俺がとても好きだった街だ』

『多分？』

『・・俺、記憶喪失なんだ。頭の中にあるのは、ジグソーパズルのピースを床にぶちまけたみたいな、断片的で、どこがどう繋がるのか分からないような記憶ばかりで・・その中から辛うじて、朱里のこと。それだけ拾い上げた』

ミサキの話を聞きながら、シリウスは、朱里という少女は恐らく、ミサキの記憶を取り戻す手掛かりだったのだろうと思った。それなのに、その朱里・・本人は否定しているが、ミサキがそう信じ込んでいる少女インディラ・・彼女もまた、記憶がないという。

シリウスはミサキの顔を見ながら、あの魔道師の言った事を思い返していた。あの魔道師、ランディス・フラームと言ったか。彼は何かを知っている。だけど、シリウス達はその答えを知る為には、北の果ての神殿へ行かなければならないのだ。

「気に入らないな」

自分が、魔道師の手の平で踊らされている様な気さえするのに、行く先を変えることが出来ない。ゲームの駒のように人に操られるなど、この自尊心の強い少年、シリウスにとっては我慢できない事である。にもかかわらず、好奇心という名の見えない手によって背を押されるように、シリウスは前に進まずにはいられないのだ。

『何か言ったか？』

窓枠から、ふわりと音もなく飛び降りたミサキが尋ねた。

『いや。何でもなし。さあ、寝るぞ。明日は日の出と共に出発だ』

『・・ああ』

ミサキのベットから、間も無く穏やかな寝息が聞こえてきた。それを聞きながら、シリウスは相棒の寝付きの良さに感心したが、そんな彼もいつしか、眠りの中に落ちていた。

どのぐらいの時間が経ったのか、誰かが自分を呼んだような気がして、シリウスは目を覚ました。目をやった窓の外はまだ漆黒の闇に包まれている。まだ、夜明けには程遠い様子である。窓を叩く風の音がやけに大きく聞こえる。耳障りなその音を消そうと、シリウスはブランケットを被って寝返りをうった。

「・・・や・・・めろ・・・」

その時ふいに、彼の耳にミサキの声が飛び込んできた。

「ミサキ？」

シリウスは驚いて起き上がった。

「やめろっ！マリディア・・・このランドメイアは・・・」

「カリディア語・・・」

ミサキが苦しそうに、何かから逃れるように、両腕で顔を覆い、激しく寝返りをうった。

『ミサキっ！どうした？』

慌ててベットから飛び降りたシリウスが、眠っているミサキの肩を掴んでゆすると、ミサキがようやく目を開けた。

『・・・シリウス・・・』

ほっとした様にミサキは呟いて、溜め息をついた。そして手を額にやり、汗を拭うと、疲れたように枕にもたれ掛かった。

『悪い夢でも見たのか？』

『夢？ああ、夢だったのか・・・』

それを思い返すかの様に、天井を見詰め、ミサキは黙り込んでしまった。

『お前、さっき、うなされてた時、カリディア語、使ってた』

『カリディア語？俺が？まさか』

『覚えてないのか？』

ミサキが頷いた。

『・・・その夢って、どんな・・・？』

『・・・ええと・・・俺は広い神殿か、宮殿みたいな所にて。女が・・・あれは、もしかしたら、魔法使いだったかもな。美人なんだけど、禍々しい感じのする女で・・・彼女が俺に魔法を掛けようとして・・・で、そこでお前に起こされた』

『魔法？』

『・・・だったんじゃないかと思う。何か呪文みたいの、唱えてたから。ああそうだ。面白いのは、俺、夢の中じゃ金髪なんだ』

ミサキが、自分の前髪を確認するように摘んでみせた。

『金髪・・・って。目は？瞳の色は・・・緑か？』

『よく分かったな。あれはライトグリーンっていう色だったか。一瞬、自分で自分が分からなかったんだ。笑っちゃうだろ？』

『ミサキ・・・もしかしたら、お前の見たのはただの夢なんかじゃなくて、お前の過去なのかもしれない。金髪緑眼って、ランドメイアじゃ、生粋の光族にしかないんだ。お前は・・・』

『だって、俺の名前は、ミサキで・・・そりゃ、記憶は曖昧だけど、確かに東京にいて・・・それで、ダーク・ブランカに頼んで、このランドメイアへ送ってもらったんだ。この世界に来たのは初めてなんだぞ。前に、ここに居たなんて、そんなことは・・・』

そんなことはない。今のミサキには、そう言い切る事が出来なかった。

記憶の底になにか大事なものが、まるで、触れられるのを恐れているかの様に息を潜めて隠れている。ここに来てから、ミサキはずっとそんな気がしていたのだ。記憶が戻ることを望みながらも、それだけは、思い出したくないという記憶。それは、先刻の夢と関係があるのだろうか・・・

夜が明けた。夜半過ぎから吹き始めていた風が、雨雲を運んできたようで、朝だというのにあたりは薄暗い。

『嵐になるかもな・・・』

シリウスが低く垂れ込めた灰色の雲のじゅうたんを、憂うつそうに眺めて、そう言った。身に纏ったマントが湿気の多い風に煽られるのを、ミサキが四苦八苦しなながら、手で押さえいる。

『ほら、マントの結び目が甘いんだよ』

シリウスが、ミサキの襟元の止め具をきつく閉め直した。

『それから、襟だけじゃなくて、ここと、ここ。これも、こう、ちゃんと止める』

シリウスが、手際良くマントの止め具をはめた。

『ああ、成程な』

ミサキが感心したように笑った。

『風の神殿の側に、北へ向かう街道が伸びてる。それに入って、山を越え、谷を越え、帝国の北の果て・・・氷の神殿はそこにある。ま、道は一本だから、迷うことはないだろう』

『随分、遠そうだな』

『十日はかからないよ。途中で何もなければな。じゃ、行くぞ』

ミサキは黙ったまま頷いた。他愛のない会話のやりとり。その中でも、シリウスにはミサキの言葉数が減っているのが分かる。恐らく、昨晚の夢のせいだろう。

でも、そんなミサキに対して、慰めるでもなく励ますでもなく、シリウスは昨日の事を”無かった事”にしてしまった。だが、口にはしなくても、シリウスの中では、それは厳然たる事実として、どうしても消すことができなかった。ミサキが光族かも知れないという、憶測。それが、実はシリウスの心の中に小さな黒雲を発生させたのだ。そして、ミサキに対して、今までより少し、距離を置いている自分がいる。シリウスは、軽く溜め息をついた。

海竜族の、光族に対する劣等感。

それは少年が、その成長してきた環境の中で、いつの間にかその心に根付かせていたものだった。

光族はこの島に漂着して以来、魔法という力に守られながら、大陸で失ったものを次々に復

興し、ついには帝国を建て、ランドメイアの大半をその支配下に納めた。そして、海竜族が決して手に入れることの出来なかったもの・・強大な権力に守られた、豊かな国家を形成したのである。

ランドメイアの事実上の支配者となった光族の支配階級による、他民族排除の矛先は、主にこのランドメイアのかつての支配者であった、海竜族に対して向けられたのだった。

カーシアという、小さな街に押し込められた海竜族が、その後、再び島の中央へ戻ることはなかった。時が流れ、カリディア帝国が衰退の時期を迎えている現在においても、過去に植え付けられた劣等感と、民族の負った屈辱の思いは未だ消えることなく、海竜族の心の奥に残っていたのである。

そして更に、シリウスが光族と海竜族とのハーフであるということが、その劣等感を大きなものにしていった。幼い頃訪れた都で、光族の従兄弟たちから受けた蔑みが、彼の心の中で、トラウマとして残っていたせいである。

「ミサキは・・光族なんかじゃない・・」

そう呟いたシリウスの声は、誰の耳に届くこともなく、すぐに風の音に掻き消された。

さて、そんな二人の後方を、彼らと適当な間隔を保ちながら、件の騎士ラシャは馬を引き、風の中を歩いていた。ラシャは頬に、冷たいものが当たったのを感じて、鬱陶しげに曇天を見上げた。

「ちえっ。降ってきやがった」

言いながらラシャは、自分の引いている馬に乗っている人物の反応を伺った。すっぽりと大きなフードを被り、顔を隠すようにうつむき加減でいながら、それでもその澄んだ瞳は、前方を行く二人の後ろ姿をしっかりと捕えている。

何故、彼女が、彼らにそれ程の興味を抱くのか、ラシャは不思議に思った。彼女、ダーク・ブランカにとって、ミサキとはどういう意味を持つ人間なのか・

「あなたが来るのなら、そもそも俺なんか居なくたって良かったでしょうに」

やや皮肉っぽく、ラシャがダーク・ブランカに呼び掛けた。

「私は、都の貴族の家庭教師。休暇を貰って、神殿巡りをしているところ。昨日の話、忘れたの？」

「覚えてますよ、レイディ・ファレン。そして、俺はあなたのボディガード、でしたね。俺の言いたいのは、大魔法使いのあなたが・」

「大魔法使いは、今のランドメシアにはいないのよ」

右手でわずかにフードを上げて、彼女が顔を覗かせた。その顔は、少しいたずらっぽい笑みを浮かべていた。

ファレンシア・クララバード。

都の貴族、エステラ公爵家のお抱え家庭教師。

旅の目的は、神殿巡礼。

通行証の記載事項による、彼女のプロフィールはそうになっている。

・・・それにしても・・・

ラシャの頭の中では、幾つ目かの疑問が沸き起こっていた。変身の魔法によって、髪の色から、瞳の色まで、ファレンシアという女に成り切っている、ダーク・ブランカのこの念の入れ様は、一体何なのか。大魔法使いの彼女が、そうまでして、身を隠さなければならない理由とは・

「ラシャ」

ファレンが馬上から、彼を呼んだ。丁度、街を抜け、人家が途絶えたあたりだった。

「ほら、お客様がいらしたわ」

十数人もの男達が、前にいた二人を取り巻くようにして、その行く手を遮っていた。

「何です？あれは・」

「山賊、追剥、そんなところでしょう。彼らとお近付きになれるチャンスだわ。行って加勢してらっしゃいな。シリウスが剣の達人だと言っても、少し数が多すぎるわ」

ラシャは言われるままに、すでに切り合いの始まった、その騒ぎの方へ走っていった。

ラシャは、その場所に着いても、すぐには加勢せず、シリウスの剣技を少しの間、観察して

いた。

「成程、海竜族の剣使いは見事なものだな。あの炎の騎士のサラが、自慢するだけのことはある」

剣をまるで自分の体の一部であるように使う。その見事な技を目で追ううちに、ラシャはシリウスの剣の紋章に目を止めた。

「三日月に明星・・・あれは、天空の騎士の紋じゃないか。なぜ、あの少年が・・・」
考えかけて、手っ取り早くその訳を知る方法を思い付いて、ラシャは剣を抜き、騒ぎの中に分け入った。

さてこの騒ぎ、ミサキにとっては、全くの災難と言っていい。剣を持つのも、そして、剣を向けられるのも、彼にとっては生まれて初めての事である。・・・少なくとも、記憶にある限りにおいては。シリウスが、護身用にとあつらえてくれた剣は、細身で女子供が使う様な華奢なものだったが、それでもミサキには、それを振り回す程度の事しかできない。シリウスの後ろに庇われながら、ミサキは、自分がちょっぴり情けないものに思われた。

彼らを襲った男達は、シリウスの剣の前に次々と倒されていったが、如何せん、多勢に無勢である。次第に、シリウスの動きが冴えなくなってきた。彼が幾人目かの男を切り伏せた後で、大きく肩で息をした時、まるで隙を伺っていたかの様に、別のほうから剣先が飛んできた。シリウスは、それを受け損なって、手にしていた剣を叩き落とされた。剣は彼方の地面に深々と刺さった。

『ミサキ、剣貸せ』

ミサキが言われるままに剣を差し出すと、シリウスはそれを受け取りしな、地面に転がって、相手の足を払った。バランスを崩した男が転びかけたところを、シリウスの剣が捕えた。

『すげえ』

ミサキはその一瞬の出来事を、感心して見入っていた。自分が全く無防備であると、ミサキが気付いたのは、その頬を剣先が掠めた時である。

短剣を手にした別の男が、彼に襲い掛かってきていた。その男の剣先を避けようとして、ミサキは足元の石につまづき、あろうことか背中から地面に引っ繰り返ってしまった。すると男はミサキに馬乗りになるように覆い被さってきた。ミサキは無我夢中で男の剣を避けようとして、両手で相手の手首を捕まえた。剣先はミサキの眼前から僅かな距離で止まった。だが、男の力は強く、それを辛うじて押し留めているミサキの腕は、頼りないものだった。その銀色の光に対する恐怖心だけが、ミサキに力を与えていたのだが、やがて頭に血が上って、集中力がなくなり始め、その腕に感覚がなくなり始めた。

『・・・だめ・・・だ。も・・・限・・・界・・・』

シリウスは、何故助けに来てくれないのだろう。ミサキがそう思って、目を閉じた瞬間、彼の体を大きな重圧感が襲った。

『え・・・』

体に全ての感覚が残っている・・・要するに自分はまだ、死んでいない。ミサキが驚いて目を開けると、体の上に気を失った男の体が乗っかっていた。そして、彼の顔を愛想の良さそうな顔をした若い男・・・ラシャが覗き込んでいた。

「よしよし、まだ生きてるな。ほらっ」

ラシャの差し出した手を、ミサキは何も考えずに反射的に取った。ラシャに引っ張ってもらって、起き上がったミサキは、シリウスが剣を鞘に仕舞いながら、こちらに歩いてくるのを見て、どうやら自分達は危機を脱した様だと理解した。

ラシャの剣の紋章を見るなり、シリウスは途端に眉をひそめた。突然現われた助っ人が、何者であるか分かったからであるが、それによって彼が何故、自分たちを助けたのかが、より大きな疑問となってシリウスの心に浮かび上がったせいである。

「皇帝騎士団の雪の騎士・・・が、何故こんなところに？」

シリウスの第一声を聞いて、自分の正体がいとも簡単に看破された事に、ラシャは肩をすくめた。ダーク・ブランカは身分を隠せと言ったが、ばれた時の方策は教えてくれていなかったのだ。まあいい。彼女の正体がばれたという訳ではないのだから・・・ラシャは言い逃れの口実を考えながら、心の中でそう呟いた。

「任務中だ。君の質問には答えられない。ただ、通り掛かって、助っ人に入った。皇帝騎士団は正義の味方、だからね。君達を見殺しにするのは、騎士団の精神に反する。とまあ、そういうことだ」

「了解・・・それなら、そういうことにしておきましょう」

シリウスが、疑わしげにラシャを見据えて、そう言った。ラシャはシリウスの視線に、軽い溜め息をついて、渋々というふうに・・・もちろんそれは、彼の演技にすぎないのだが・・・言った。

「仕方ない。ここだけの話だぞ。ほら、馬でこっちにやって来るレイディがいるだろう？彼女は、レイディ・ファレン。ある事件の重要参考人というところだ。彼女を都に、無事連れ帰るのが、俺の任務」

「ある事件？」

「これ以上は勘弁してくれよ。とにかく、彼女には、俺の正体は秘密だから、そういうことで、よろしく頼むぞ」

馬をゆっくりと歩かせて、こちらにやってくる女性を、シリウスは興味深そうに見据えた。その少年の疑惑を、取り敢えずかわせたのを確認して、ラシャは空に向かって軽く息を吐き出した。

。

「怪我がなくて、何よりでしたわ」

レイディ・ファレンがにこやかにいった。聡明そうな瞳の色は光族のグリーン。日に焼けて色があせたような薄い色の長い金髪は緩やかに編まれて彼女の背中に下がっていた。家庭教師という職業の女性らしく、地味な雰囲気を持つ彼女を、シリウスは何と無く好ましく思った。

光族の女というのは、一般的にもっと華やかなものだ。シリウスの頭の中にはそういう認識がある。気位が高く遊び好きで、パーティや舞踏会に明け暮れる。彼の母親や、彼が小さい頃、都で見た貴族の女達は皆そうだったから、彼がそう思ってしまったのも無理はない。

輝くような黄金の髪と、宝石のような緑の瞳。光族という名前そのままの女達。シリウスは半分だけ、その光族の血を引いている。にもかかわらず、シリウスはそんな光族が、どうしても好きにはなれなかった。残りの半分に海竜族の血を引くシリウスを、純血を尊いものとする光族は、決して同族とは認めなかったからだ。選民意識の強い光族の中では、彼は他民族の異邦人に過ぎなかったのだ。

「そちらの方は、ちっともおしゃべりになりませんか」

ファレンが、ミサキの反応を伺うように言った。ミサキがファレンの様子を見て、シリウスに説明を求めるように視線を向けた。シリウスがそれに気付いて、ファレンに説明をした。

「ああ、ミサキは、カリディア語はちょっと・・皇帝語なら分かるんだけど」

「あら、皇帝語？私も、少しは覚えましたけど・・うまく話せるかしら」

ファレンがミサキの方を向いて、語りかけた。

『私は、ファレンシア・クララバートと申します。都で、家庭教師をしていますの。あなたは、カーシアからいらしたの？ああ、でも、海竜族でブラウンの瞳って珍しいわ・・もしかして、大陸の方かしら？』

『ええ・・と』

ファレンが綺麗なソプラノの声で、矢継ぎ早に話すのに圧倒されて、ミサキは言葉に詰まった。

『・・私、文法を間違えてしまったかしら』

ファレンが心配そうにシリウスの顔を見た。

『いいえ、ご心配なく。間違っってなんかいませんよ。な、ミサキ』

シリウスが、早く答えろという様に肘でミサキをつついた。

『・・文法も発音も正確ですよ。宮廷に出られても、恥ずかしくない言葉遣いです』

『まあ、宮廷だなんて恐れ多いですわ』

ファレンが大袈裟に驚いて言った。

そんな彼らのやり取りを見ていて、ラシャはファレンシア・クララバートという人間が、本当に実在するような錯覚を覚えた。今、彼の前で、喋っている人間は、ダーク・ブランカのはずだった。しかし、ファレンの身のこなし、それに話し方まで・・全てが、ダーク・ブランカのものと違う。それは確かに、ファレンのもので、それ以外の何ものでもなかった。

・・・これが、魔法の力なんだろうか・・・

そう考えて、ラシャは背筋が寒くなった。

家庭教師、ファレンシア。でも本当は、ランドメイアの大魔法使い。

その護衛の騎士、ラシャ。極秘任務を帯びた雪の騎士。

カーシアの三商家、リヴィウス家のシリウス。商人の通行証を持つ、家出少年。

そして、ミサキ。とりあえずシリウスの従者。だけど身元不明の記憶喪失青年。

それぞれ、偽りの名や、偽りの身分という衣を纏って、半分だけ偶然に出会った一行は、氷の神殿、フィリスの神殿を指して、街道を北上していった。

それぞれの胸に、それぞれの思いを抱えながら・・・

第3章 召喚された皇帝と行方不明の巫女姫

帝都カディアスの、その年の春は、ひっそりとしたものだった。

都を訪れるカーシアの商人や、遠く異郷の地からやって来る旅人達の数もまばらで、いつもなら、この時期に繰り広げられているはずである春の祭りは、その気配すらない。それもこれも皆、皇帝ラディウスⅡ世の帝都不在が原因であった。ラディウスⅡ世は、ここ数年来煩っている病の療養のため、昨夏の終わりから、カーシアに滞在していた。

閑散とした街並を眺めながら、インディラは溜め息をついた。皇帝が回復する見込みはなかった。それに近頃、目に見えて衰弱してきている。ランディアスの言った通り、インディラにも、もはやどんな魔法を使っても、皇帝がこれ以上持ちこたえるのは、難しい様に思われた。

「後継者が、まだ見付からないというのに・・・」

ラディウスⅡ世は若い皇帝で、年は二十代の半ばに差し掛かったところである。まだ結婚はしていなかったから、現皇帝には世継ぎがいなかった。

現在、その後継者とされているのは、従兄弟に当たるリート・ララング卿である。ダーク・ブランカによれば、カリディアスの予言書に、このリートが次期皇帝になると記されているのだという。だが、問題のリート卿は、現在、行方不明だった。

ダーク・ブランカが封印の地へ向かったのは、彼を捜す為だと、インディラはそう聞いていた。そして彼女は、ダーク・ブランカの声に導かれ、その魔法の力を少しだけ身に付け、このカディアスにやってきたのである。滅びの淵にある、この国を救うために・・・

記憶を封じてしまったから、自分が何故そんな大事に巻き込まれてしまったのか、今は分からない。ただ、この国を守りたいという強い思いが、自分の中に確かに存在する。その思いがどこから生まれて来るものなのか・・・それもやはり、良く分からない。それでも、この国へ来て、ダーク・ブランカという人物の偉大さを感じる度に、自分がその代理を任されたという事には、何か意味があるのだろうと、そう思っていた。

だが、次第に深刻化していく事態の中で、インディラは自分の非力さを感じ始めていた。何故自分が選ばれたのか。たいした魔力も持たない自分に、出来る事などあるのか。不安は募る一方だった。

・・・一緒に、帰ろう・・・

そんな時、ミサキに掛けられた言葉は、インディラの心に、小さな波紋を起こした。何もかも投げ出して、逃げ出したい。気付けば、そんな事を考えている自分がいる。

馬車が少しの衝撃を伴って止まった。サラが馬車の扉を開いたので、馬車の中が急に明るくなった。インディラは思考の淵に沈んでいた意識を、慌てて現実世界に戻した。

「天陽宮に到着致しました」

サラの声が馬車の外で聞こえた。インディラは物憂げに身を起こすと、狭い扉をくぐり、馬車

のトラップに足を掛けて、サラが差し出した手を取り、馬車を降りた。

「お帰りなさいませ、インディラ様」

そこに迎えに来ていた少年が、インディラの姿を確認すると、元気な声で言った。風の騎士、レオンハルト・ハスヴェルだった。サラと同じく、太陽の称号を持つ騎士である。

「・・・あれ？ランディスは一緒じゃなかったのか？サラ」

サラが、さっさと馬車の扉を閉めてしまったのを見て、レオンが言った。

「またいつもの、よ。我等が司令官様は」

サラが肩をすくめて答える。

「ああ、じゃあ、フィリスの神殿へ、直接行っちゃったんだ。ちえっ、それなら俺もクリス達と一緒に行けば良かった」

「フィリスの神殿・・・って、クリスの氷の神殿よね？一緒になって、まさか、ラスとクリスは・・・」

「出掛けたよ。昨日、ランディスから口伝鳥が来てね」

「口伝鳥？何かの間違いじゃないの？だってランディスは、太陽の四騎士を都に集めておけて、そう言ったのよ」

「間違いだなんて、とんでもない。その口伝鳥が、皇帝崩御の知らせを持ってきたんだぞ。それで昨日から、宮殿中が大騒ぎ。宰相なんか大慌てでさ・・・」

「皇帝崩御ですって？」

インディラが、素っ頓狂な声を上げた。

「嘘よ、まだ・・・生きているのに・・・」

インディラがそう言い掛けて、言葉を切った。

「・・・やだ、何？・・・これ・・・何なの？」

インディラが、急に苦しそうに顔を歪めて、両手で自分の肩を抱くようにして体を丸めた。

「インディラ様、どうなさったのですか？お加減でも・・・」

サラが心配して、その顔を覗き込むように屈んだ。

「・・・違う。何か、大きな・・・魔法の・・・波動が伝わってくるの。これは・・・禁じられた魔法・・・サラ、お願い。私を、魔法の塔へ連れて行って」

サラは頷くと、インディラに肩を貸した。

「ほら、レオン。あんたも手伝って」

サラに促されて、レオンは慌ててインディラの反対の肩を支えた。

カイ・ステファンは、その薄暗い空間の中、彼の目の前で行なわれている魔法を固唾を飲んで見守っていた。

床に描かれた魔法陣の前で、組み合わせた両手を高く掲げ、長い呪文を唱えていた彼の師匠が、突然、その手を勢い良く振り下ろす。するとその刹那、魔法陣の中に小さな空気の渦が発生し、それは稲妻のような青白い光を伴いながら、次第に大きくなっていった。

「・・・来る」

その魔法の波動を体を感じながら、カイには、そこに彼らの待っていた人物が呼び寄せられた事が分かった。彼の魔法の師であり、現在は帝国宰相となっているラーラ・マルクスの背中を眺めながら、カイは、心と背筋に冷たいものを感じて、小さく身震いをした。

「これが、禁忌の魔法か」

それは、異世界からの召喚魔法。かつての魔道師長、ルト・フォレルが、皇帝騎士団の騎士達を召喚した時に使ったのも、この魔法だったという。その魔法をきっかけに、このランドメリアには異変が始まったのだと、かつて、ラーラは言っていた。

魔道師ルトは、禁を犯した罪により、魔道師長の座を追われ、幽閉された。その半年後、ルトの弟子であった天空の騎士ラスフィールが、一部の騎士を率いて反乱を起こし、カディスは戦禍に晒された。帝国史上初めての魔道師同士の戦い、そして騎士団が二つに分かれて戦うという事態に帝国は混乱した。その鎮圧に力を使い果たしたせいで皇帝ラディウスⅡ世は、以来、病の床に伏せている。

「ダーク・ブランカ様だって、分かってくださるはずだ。このままでは、この帝国は本当に滅んでしまうのだから・・・」

心に後ろめたさを感じながら、カイはそっと呟いた。

天井近くにまで立ち上った渦が大きく膨らんで球体を成し、弾けるように四散して消えた。そして、魔法陣の中央には人が出現していた。どうやら、師の召喚魔法は成功したようだ。そう思った瞬間、その人物を姿形を見て、カイは眉をひそめることになった。

「これは・・・ラリサ様の封印が、掛かったままなのか」

師ラーラの失望したような声が耳に入る。その言葉に重なるように、こちらにやってくる足音が聞こえ、少女の悲鳴のような声がそれに続いた。

「ラーラ・マルクス！」

振り向くと、彼らを非難する様に見据える、インディラの姿があった。

「あなたは一体、自分が何をしたか分かっているの？ダーク・ブランカ様は、この様なこと、絶対にお許しにはならないわ」

「皇帝陛下が崩御された今、その後を継ぐ者がいなければ、この帝国は滅んでしまうのですよ」

ラーラの言葉に、インディラは激しく頭をふった。

「ダーク・ブランカ様が召喚魔法を使わずに、自ら封印の地に赴かれたのは、何の為だと思いの？」

「そのダーク・ブランカ様は、未だ戻られない。我々には、もう時間がないのです。幸い、こうして殿下にお戻りいただけました」

「あなたは、何も分かっていない・・・この者は・・・」

インディラの瞳が魔法陣の上に立つ人物を捕えて、彼女は言葉を失った。

そこにいたのは、少年だった。

黒い髪、黒い瞳、そして、黒い服に身を包んだ少年。

頭のとっぺんから、足の爪先まで黒一色に包まれている。

ランドメイアでは、黒は魔道師の色なのだ。金色のボタンだけがその黒色の中で光っていた。我々の世界でいえば、この服は単なる学生服なのだが、彼らの目には異様な出で立ちとして映った様である。インディラの視線は、幾度か上下にその少年を辿った後、最後に彼の顔に止まった。

「・・・ミサキ」

インディラが息を飲んで絶句した。

そこにいたのは、紛れもなく彼女がカーシアで会ったミサキという少年だった。インディラは、頭から血が引いたように感じて、よろめいた。慌てて彼女の身を支えたレオンの声が、遠くで聞こえたのを最後に、彼女は気を失った。

学生カバンを脇に抱えたまま、少年はその場所に立ち尽くしていた。

一体自分の身に何が起こったのか・・・

薄暗い部屋の中にいる人々の顔を、一つ一つ丁寧に見ていきながら、少年は、彼らが自分の敵なのか、それとも味方なのかを決めかねていた。

『ご無事で何よりでした、リート殿下』

その中の、一番年を取っている男が彼に近付き、跪いてそう言った。

『殿下？』

『はい。リート・ラカラダ様。あなた様は、このランドメイアの皇帝となられる御方なのです』

『皇帝・・・ねえ』

少年は男の言葉を繰り返しながら、どうやら状況は自分にとって、それ程悪いものではないという結論を下した。

皇室図書館の本棚の壁に掛けた梯子に腰掛けて、彼は膝の上に重たい歴史書を広げていた。図書館の中は静まり返っていた。天窓から、春の穏やかな日差しが彼の膝の書物に斜めに差し掛かっている。時折、鳥のさえずりが聞こえる以外は、音が世界から消えてしまったかのように、何も聞こえなかった。

「ダーク・ブランカ・・ラリサ・フラーム・・マリディア・ティリア・・ルト・フォレル・・」

宮廷録の魔法使い達を辿って行くうちに、彼は昨日から幾度も聞かされた名前を、その中に見つけた。

「リート・ラランダ・ラ・マリウス・ディ・カディス。うげー・・なっがい名前だな」

それが、彼がこの世界で与えられた名前だった。

「・・皇族なのに、魔法も使うのか・・三年前に、皇立学問所内で・・行方不明？どうしたんだろ、こいつ」

他人事のように、少年は呟いた。

「調べ物ですか？殿下」

梯子の下から声がした。そこに少女が立っていた。

「・・ああ、何だ。そういうことか・・」

その顔を見て、何か納得したように呟くと、彼は本を閉じて、棚に押しこんだ。

「君の名前、当ててみようか。天王寺朱里さん、だろ？」

「アカリ・・？」

「昨日、俺が魔法でここに呼ばれた時に、俺を見て、ミサキって呼んだろ？・・だから、あれって思って・・やっぱ、間違いないや、あの時会った、天王寺さんだ。良かった、また会えて。実はもう一度、会いたって思ってたんだ。入学式で会えるかなって、思ってたのに、姿が見えなかったから、別の高校にいったのかって、かなりがっかりしてたんだよな。それが、こんなところで会えるなんて、うん。良かった」

少年が梯子の上からそう言って、インディラに笑いかけた。インディラはその笑顔に、急に鼓動が早まって、息が止まるような気がした。

「・・あの、あたし・・記憶が、ないの」

少年の顔をまともに見ていられなくて、目を反らしながら、インディラは呼吸を落ち着けるようにゆっくりと言った。

「記憶喪失？」

「あなたは、カーシアのミサキではないの？」

「カーシアのミサキ？」

「あなたと同じ黒髪で、黒い瞳で・・あたしをアカリって呼んだわ」

「カーシアのミサキ・・もう一人のミサキか。じゃ、多分そっちが本物だ。リートって奴。俺じゃないことだけは、確かだもんな」

「あなたは・・誰？」

梯子の下から、インディラが少年を見上げて言った。

「君が、天王寺さんじゃないのなら、初対面でことになるのかな」

少年が梯子から、身軽にひらりと飛び降りた。皇族の衣装を纏った彼の、羽織っていたマントが大きく翻った。一瞬その中に、少年の体が消えたように見えた。そして次の瞬間には、彼はインディラの目の前に立っていた。

「俺は、美崎和也。桜花学院高校、三年A組。一応、生徒会の会長さんなんかをやってる」

「あたしは・・・インディラ。ここではそう呼ばれてるわ。ねえ、朱里さんて、どんな人？あたしに似てるの？」

「まあね。似てるっていうより、俺には、まんま同じにしか、見えないんだけども。君が違うって言うんなら、違うのかな・・・」

言って、和也はインディラの顔を覗き込む。

「あたしは・・・」

和也の黒い瞳から逃れる様に、インディラは瞳を伏せた。

「ま、記憶がないんじゃ、君が彼女だっていう可能性が、ぜんぜんない訳じゃないっていう事だよな・・・俺としては、その方が嬉しいけど」

和也がそう言って、また笑顔を見せた。

「初めて会った時にね、ピッと感じたんだ」

「え？」

「この子は、俺の運命を握る子だって」

・・・何か、これって・・・

告白をされているような気分だ。そう思うと、インディラは、顔が熱くなるのを感じた。

・・・私じゃなくて、それは、朱里さんの話じゃないの・・・

そう考えると、インディラは急に胸が締め付けられる様な気がした。

「朱里ちゃんって、呼んでもいいかな」

和也の言葉に、インディラの鼓動は、速まっていく。

「でも・・・あたしは」

「大丈夫。きっと、君は朱里ちゃんだよ」

和也の言葉が呪文の様に、インディラの心に入り込んでくる。どうしてだろう・・・彼を見ていると、胸が痛くなるのは。

・・・あなたは、誰？・・・

インディラはこの時、記憶を消してしまった事を、初めて後悔した。

宰相ラーラ・マルクスは、部屋の中を行き来しながら、考え事をしていた。先刻、太陽の神殿の地図球には異状がないと、神官が知らせてきたばかりであった。

この帝国の守護者である皇帝の力が存在しなくなった時、神殿の地図球に異変が現れる。

そしてそれが、このランドメイアの、崩壊の始まりの時である。

そう予言書にある。

崩壊・・・即ち、全ての魔法がこの世から消えるのだという。魔法という特別な力によって守られているからこそ、現在、この帝国は成り立っているといっても過言ではない。果たして魔法が消えた後、この帝国は存続できるのか。それは恐らく、難しいだろうとラーラは思っている。だからこそ、禁忌を犯してまで、召喚魔法を使ったのだ。

地図球は無事。つまり、このランドメイアには、まだこの国を守る力・・・皇帝の力が存在するという事だ。つまり、彼が封印の地から呼んだ、あの少年、リートには新たな皇帝となる資格があるということ。だからこそ、地図球には何事も無く、ランドメイアは崩壊の危機を脱した。そういう事なのだ。

自分にそう言い聞かせながら、しかし、ラーラは何か腑に落ちないものを感じていた。全てが上手くいっているのに、心の中の不安感が消えないのは、何故なのだろう。大きな手で目隠しをされている様に、ものの輪郭がことごとくぼやけている。そんな感じを拭い去れない。

実は、魔道師長の位をランディスに譲って、宰相になってから、彼の魔法の力は少しずつ弱くなっていた。加えて時折、記憶が途切れることがある。その理由も分からない。

・・・ダーク・ブランカ様が、居てくださったら・・・

“・・・あれは、もう、戻って来ない。戻れるものか。滅びを呼び寄せし魔女が・・・”

嘲笑するような声が、彼の頭の中に響く。

・・・お前は、一体・・・

ドアにノックの音がして、ラーラは我に返った。

「失礼いたします、宰相閣下」

ドアを開けて入ってきたのは、カイだった。ラーラは、ぼんやりとしたまま、カイを見ている。

「閣下？・・・もしもし？お師匠様？」

「あ、ああ。お前か」

「大丈夫ですか。お疲れみたいですけど」

「いや、大事ない。・・・それで、ランディスと連絡はついたのか？」

「いえ、それが一向に捕まりません。氷の神殿からは、魔道師長様は行かれていないとの返信がありました。魔道球で捜しても見当たりませんし・・・魔道師長様ぐらいの方になると、魔法で気配を消すなんて、朝飯前ですからね。こちらから連絡を取るのには、至難の技ですよ」

「ラリサ様の施した封印は、ダーク・ブランカ様か、あの方の孫であるランディスにしか解けない。殿下に早く元の姿になっていただかないと、載冠式もできぬ」

イライラとした口調で、ラーラは吐き捨てる様に言った。

師の苛立ちの理由は、カイにも察しがつく。あの少年は、確かにリート・ラカランダなのだろうと思う。その姿形は、三年という月日の分だけ、大人になってはいたが、かつての面影は、はっきりと残っていた。

リートを保護するという理由で掛けられた、ラリサ・フラムの魔法は、しかし、その当時の深刻さを思わせるように、余人が思うよりも遥かに、強固に掛けられていた。それが、今、新たな問題を生み出しているのだ。

そもそもあの少年には、リートとしての記憶がない。恐らく、魔法で封じられているのだろう。そして、何より問題なのは、皇位を継ぐ者の証である紋章を、あの少年は持っていないということだった。皇位を継ぐ者には、その体のどこかに、剣を象った刻印が現れるのだという。それは、ランドメイアの魔法の力を守る者の証なのだ。

”剣の紋章”・・・その刻印の形から、その紋章は、そう呼ばれている。

カイの記憶に間違いがなければ、リートには、胸の辺りにその紋章があったはずだ。それが、あの少年にはなかったのだ。ラリサの施した封印のせいなのかどうかは分からない。だが、その紋章が無ければ、例え皇帝になったとしても、このランドメイアの守護者にはなれない。紋章は力を持つ者の証であり、紋章が消えているということは、その力を失ったのだという事に他ならないのだから。

とりあえず、魔法でリートが知っているべき知識と、このランドメイアの言葉は与えた。だが、彼の黒髪と黒い瞳は、ラーラの魔法では消すことは出来なかったのだ。紋章のことは、とりあえずどうにか取り繕うにせよ、あの姿では、あの少年は皇帝にはなれない。彼が、闇の魔法と引き換えに失った、金色の髪と緑の瞳・・・光族である証だけは、何としてでも取り戻す必要があるのだ。

「一刻も早く、捜し出すのだ！」

そう叫んだラーラは、突然激しい頭痛を感じて、椅子に座りこんだ。

「大丈夫ですか？閣下」

「大丈夫だ。何時ものことだ」

「何時ものって・・・どこかお悪いのでは・・・」

気遣うカイを振り払う様に、ラーラは彼を押し除ける。

「・・・いいから、早く行け・・・」

ラーラは手でカイに退室を促した。言われるままにカイは部屋の外に出、後ろ手でドアを閉め、思案する様に、そこに寄り掛かった。

「何か、変なんだよな。この宮殿の中」

何か、良くない事が起こり始めている。カイには、そんな気がしてならない。以前とは、何か違う。カイはそんな違和感を、この所ずっと感じている。

ランディスは、もしも、自分が居なくなっても捜すなど、そう言っていた。だが、事態はどう

やら自分の手には余る。カイはそう結論を出した。

・・・どうにかして、戻っていただかないと・・・

カイは、糸の切れた罫を捜す算段を思案しながら、魔法の塔へ足を向けた。

古より、ランドメシアに伝わる神話では、この島は、太陽神ラーラと月神フィアミスの二人の娘、光と昼の女神ファリスと、闇と夜の女神フィリスによって創られた島であるとされている。

だが、現在、帝国の守護女神とされているのは、光と昼の女神ファリスだけで、光族の帝国では、闇と夜を司る女神フィリスは、ファリスに敵対するものであり、邪神として扱われていた。それはつまり、光族が闇というものをことさらに恐れているからだ。

かつて、大陸を追われ流浪した時期の過酷な記憶が、光族という種族の中に癒しようのない傷として、未だに残っている。闇の魔法を操る黒き国。かつて光族の国を滅ぼした国。大陸には、もうその国は存在しないのだが、彼らは今もその影に怯えている。

悪しきもの、忌むべきもの・・・それらを全て、“闇”と呼んで恐れる。

飢饉も戦乱も、この国に降りかかる全ての災厄を、“闇”のせいと考える。

実は、魔道師の使う魔法の力は、かつて光族の国を滅ぼしたものと同じ力であり、故に、この国の魔道師と、光族との関係は、実は微妙なバランスの上に成り立っているといえる。

初代皇帝サイアニアス・クリューガーと、魔法使いダーク・ブランカが交わした契約によって、カリディアの魔道師は帝国を守る存在となり、皇帝は魔法の力を守る存在となった。

その契約の証が、“剣の紋章”でもある。

光族にとって魔法とは、諸刃の剣に等しい存在だった。身を守る為に手放すことは出来ないが、その力の根源は、恐ろしい闇の力なのである。だから、それに対して、恐怖心を抱かずにはいられないのだ――その力はいつか、自分たちを滅ぼすものとなるのではないかと。

そんな光族の思いを察して、ダーク・ブランカは彼らの皇帝に、力を与えた。魔法を守るという皇帝の力は、裏を返せば、魔法を消し去る力であり、魔道師がいかに強い力を持つとも、皇帝はその力を無に帰することが出来る。そういう力である。ゆえに、この帝国の光の象徴である皇帝は、闇を払う力を持つ――つまりこの国で魔道師が光族と共存していく為には、そこまでの譲歩が、必要だったのである。

サラが腕に口伝鳥を乗せて、城の尖塔の階段を上っていく。レオンが辺りの気配に気を使って、時々後ろを振り返りながら、その後ろに続いていた。

「なあ、本当に、いいのか？ラーラに無断で」

「あたしはね、送り人不明の口伝鳥よりも、この耳で聞いた彼の言葉を信じるわ。ランディスは、四騎士をここに集めておけて、そう言ったんだから。だから、クリスとラスを呼び戻すのよ。だっておかしいじゃないの。皇帝崩御の知らせは、今朝も来たのよ」

「今度は、早馬だったよな」

「そんな大事な知らせが、二度も三度も日を違えて来ると思う？」

「そうだよな・・・インディラ様も、ダーク・ブランカ様を呼び戻すんだって言って、魔法の塔に籠もったままだし、大丈夫なのかなあ・・・」

「大丈夫って、何？」

「この国がさ。ほら、前に、魔道師ルトの騒動があった時に似てるって感じ、しないか？”闇”は気付かないうちに、俺達の心に入り込むんだぜ」

「縁起でもないこと言わないで」

「だってさあ、魔道師長だったルトが、闇に取り込まれていたのだって、あの事件が起こるまでは、誰も気づかなかったんだろ？」

「魔道師とか、神官なんかが狙われやすいつて、いつかランディスが言ってたわね。心が純粹な分、闇が入り込みやすいつて」

「あの時は、少なくとも、このカディスにはラディウスⅡ世がいたけど、今はいないんだもんな」

レオンが何気なく言った言葉に、サラはどきりとした。

皇帝がいない。ラディウスⅡ世が崩御した今、このランドメイアには、もう皇帝はいないのだ。この国を守るべき存在が・・・

ラーラが禁忌の魔法で召喚したあの少年が、黒髪と黒い瞳のあの少年が、新たな皇帝なのだとは、サラにはどうしても思えなかった。

「レオン、あんたはリート様に会ったことあるのよね？あのミサキって子、本当にリート様なの？」

「会ったことあるっていっても、三年も前の話だし、俺が会ったのは、まだ金髪だった頃の話で、それも顔を見たことがあるって程度だからなあ・・・面影があるかと言われれば、あるかなって感じ？」

「頼りないわねえ・・・」

「元魔道師長のラーラ様が召喚したんだぜ、人違いってことは、ないんじゃないの？本人と剣を交えた事があるラスが戻れば、はっきりするよ」

「そりゃ、そうだけど・・・」

呟きながら、サラは考える。

・・・ミサキカズヤ・・・

あの少年が名乗った名前を呟く。

「ミサキ・・・」

サラの脳裏に、カーシアでの出来事が浮かぶ。

「あいつも、ミサキって、言ったのよね・・・」

サラが大きく腕を振ると、口伝鳥が翼を広げて、空高く舞い上がった。暗灰色の雲が垂れ込めた空に吸い込まれる様に、その姿は、みるみる小さくなっていく。

「嫌な雲行きね」

そう言ったサラの隣で、レオンは徐に剣を抜いた。そして、その剣を高く掲げる。

「良き風に加護を・・・」

そう言って、空を十字に切った。そのレオンの仕草に、思い詰めていたサラの心が少し和む。

「・・・海竜族のおまじないね。どこで？」

異世界から召喚されて来たレオンが、サラの故郷の習慣を知っていた事に、感慨深げに尋ねる

。

「ああ、これ？ランディスが教えてくれた。風の騎士がやると、ご利益倍増なんだぜ」

サラはレオンの物言いに、苦笑する。この状況下でも、レオンはいつもと変わらない。普段はカンにさわる彼の能天気ぶりも、今日ばかりは、ありがたかった。

「あたしたち、きっとまた、この国を守れるわよね？」

聞かれたレオンは、きょとんとした顔をする。

「当然だろ、その為の皇帝騎士団だぜっ」

サラは笑って頷いた。

インディラは魔法の塔で、ダーク・ブランカから預かっていた水晶球に向かって、対話の呪文を唱えていた。いつもなら、もう、この水晶にダーク・ブランカが姿を現わす頃である。ところがその日に限って、ダーク・ブランカは、いつまでたっても現われなかった。心の中で必死に呼びかけても、その声すら聞こえない。

「まさか・・・魔法の力が、弱くなってる・・・どうして」

自問するように、インディラは呟いた。

インディラは立ち上がって棚の魔法書を取り出し、慌ててページをめくった。しかし、インディラには、そこに書き出された魔法文字を読むことは出来なかった。背筋を冷たいものが走った。

「ああ、ここにいたんだね。カイが魔法の塔に行くのを見掛けたって言ってたから」

喋りながら、和也が部屋に入ってきた。

「・・・あたし・・・」

「どうした？朱里ちゃん。顔が真っ青だぞ。気分が悪いんじゃないのか？」

「違う・・・平気。だけど・・・」

・・・いつからだろう・・・

考えて、目の前の和也の顔を見て、インディラは気づく。

彼がここに来てから・・・彼が自分を、朱里と呼ぶようになってから、ではないだろうか。もしかして、記憶が戻ろうとしているのか。

自分が本当に朱里なのか、インディラにはまだ分からない。だが、魔法の力は、記憶と引き換えに貰ったものだったはずだ。記憶が戻る時、魔法は消える。ダーク・ブランカはそう言ったのではなかったか。インディラは和也に会って、記憶を取り戻したいと思ってしまった。朱里の記憶を。多分、それで・・・

「ごめんなさい・・・部屋に行って休むわ」

インディラは、和也と目を合わせないようにして部屋を出て、塔の階段を駆け降りた。

「朱里ちゃんっ！」

上で和也の呼ぶ声がしたが、インディラは振り返らなかった。取り返しの付かないことをしてしまった。魔法を失って、ダーク・ブランカの声も聞こえない。突然、彼女の心の中に恐怖心が沸き起こった。

「ダーク・ブランカ・・・あたしを助けて」

魔法という盾に守られていたからこそ、今までインディラとして振舞うことが出来たのだ。これから、どうすればいいのだろう。そう思ったとき、魔法と共に与えられた使命も何もかも、彼女の頭から消え去っていた。彼女はもう、インディラではなかった。

あぶり出しに隠された秘密の文字が火に煽られて、鮮明に浮かび上がって来るように、彼女の頭の中に、あの日の出来事が蘇ってきた。

あの日、天王寺朱里が美崎和也に出会った日。

そして、朱里が、ダーク・ブランカと再会した日・・・

夢中で走っていた朱里は、回廊でカイとぶつかってしまった。

「おっと・・・」

「ごっ、ごめんなさいっ」

「どうなさったんです？インディラ様、血相変えて・・・」

「ごめんなさい」

慌てた様子で走り去る彼女の、その後ろ姿を見ながら、カイは眉をひそめた。

「・・・まさか、記憶が戻ったのか。あーあ、もう。また一つ、問題が発生しましたよ。どうするんですか？ランディス様。何時になるか分からない、ダーク・ブランカ様の帰還を、呑気に待ってる時間なんか、ないんじゃないかなあ・・・」

一見、平和に見えるこの状態の中で、この帝国は少しずつ壊れ始めている。そんな感じがする。この違和感・・・これは、気のせいなんかじゃない。

”闇がもう、間近に迫っている”

魔道師ルトの残した言葉の意味を、もっと深く考えるべきだったのか・・・あれは光族特有の言い回しなのだと、そう思っていた。ルトの言った”闇”の意味は、もっと現実的なものだったのではないのか。

そして、ルトの意思を継ぐ、何者かが、現実中存在し、何かをしようとしている。そういうことなのではないか。もっと、早く気づくべきだった。カイは唇をかみ締めた。

カイが、太陽の神殿の神官長からの使いに会ったのは、その翌日の午後だった。インディラ様に至急神殿へお出で頂きたい、というのが、神官長の意向であった。だが、そのインディラの姿が見当たらないといって、使者がカイの元へ、彼女の行方を尋ねに来たのである。

「・・・インディラ様、ね」

「神官長様は、事は急を要すると・・・」

「まさか、地球に何か？」

「はあ・・・ここで、私の口から申し上げる訳には。インディラ様は・・・」

「インディラ様はいないよ。私が代わりに神殿へ行こう」

カイは使者を伴って、太陽の神殿へ出掛けた。

神殿の前に、年若い神官が立っていた。三年前に、帝国中枢部の人事の総入れ替えがあった時に神官長となっていた、エシュラン・ターナーである。カイが、月の騎士の総括を行なう、魔道師長補佐の任に付いたのと同時に、この地位を手にしたエシュランは、彼とは皇立学問所の同期であったが、あまり仲の良いほうではなかった。

一般的に、神官になる者は太陽神ラーラと、女神ファリスを絶対とする、敬虔な聖光教徒であ

ったから、女神フィリスの闇の力を扱う魔道師を、毛嫌いする傾向にあったのである。

「これはこれは、魔道師長補佐のカイ・ステファン殿」

その第一声を聞いて、カイにはエシュランが、彼を歓迎していないことが分かった。

「場所をお間違えですか。月の神殿はこちらではございませんぞ」

「・・・間違えてはいないよ、エシュラン。私は、インディラ様の代理で来たのだから。インディラ様はお加減がすぐれないで、伏せっぺいらっしやる」

エシュランが、片方の眉を僅かに上げた。

「あなたに、インディラ様の代わりが務まるのですか？」

「私以外に、インディラ様の代わりが出来る者がいれば、私ごときが、出しゃばりはしないよ」

「しかし、インディラ様は・・・」

「エシュラン・ターナー、インディラ様はご病気と申し上げた。事態は急を要するのではないのかっ！」

カイが怒鳴ったのに驚いて、エシュランが口をつぐんだ。

「こちらへ・・・」

抑揚のない冷たい声でそう言うと、エシュランはカイを神殿へ招き入れた。エシュランの刺すような鋭い視線が、一瞬自分に注がれたのを感じて、カイは溜め息をついた。

・・・全く、インディラ様、インディラ様と・・・

この国の人間は、偶像崇拜が過ぎるのではないか。ダーク・ブランカ様しかり、皇帝騎士団しかりだ。困った時には、偉大な力を持つ魔法使いやら、騎士やらが現われて、国を救う。そんなことだから、人民は墮落してしまうのだ。ダーク・ブランカ様は、人々を過保護にしすぎる。魔道師の帝国への奉仕は、どうも過剰すぎるきらいがある。

カイは大陸から、魔道を学びに来た留学生であったから、光族ではなかった。彼が光族の帝国に住んで、まだ七年ほどであった。だが、その間に、彼の持っていたカリディアの印象は大きく変わっていた。

外からは強大な国に見えたこの帝国は、光族という少数民族の支配階級が、魔法という神秘の力によって、辛うじて他民族を押しえ付けている、実に頼りない権力の上に成り立っていた。魔法がなければ、この帝国は存在しないといっても過言ではないだろう。光族が闇の力として嫌う魔法が、その帝国を支える柱となっているのだ。実に皮肉な話である。

・・・神官が魔道師を嫌うのも、無理からぬことなんだけどな・・・

カイは、黙ったまま前を歩くエシュランの背中を見ながら考えた。

やがてエシュランは、神殿の奥にある地図球の間で足を止めた。

「これを・・・今朝からこの様な状態です。過去の記録にも、この様な事はございませんでした」
目の前の地図球が、黒く染まっていた。そこに地図球を守るべき巫女の姿の無い事に気づいて、カイは陰しい顔で問うた。

「巫女姫様は、いかがなされたのだ？」

問われたエシュランは、やや狼狽した様に、口ごもる。

「巫女姫様は・・・その・・・お姿が見当たらないのです。行方を捜しておりますが、未だ見付からず、神官の中には、神隠しではないかと言う者もおります」

「神隠しなど・・・馬鹿げたことを・・・それで、何時から・・・」

「・・・かれこれ、十日程に」

「とっ・・・」

カイは絶句した。この大事な時期に、太陽の神殿を守るべき巫女が、姿を消していたというのに、こちらには何の連絡も無く、それを十日も放置している。その神経が分からない。

理由は何となく、察しがつく。内輪の不祥事を、表沙汰にせず、内々に済ませようとしたのだろう。分からなくはないが、事の重大さを、こいつらは理解しているのか。地図球に異変が現れて、事態が手に負えなくなってから、こうして泣きついて来る。

・・・ふ、ざ、け、る、なー！・・・

心の中で悪態をついて、カイは怒鳴り散らしたい衝動を、辛うじて押さえる。そんな彼の感情の波を気にする風も無く、エシュランは続けた。

「それで、このカディスに張られている、結界の一部が弱くなっています。インディラ様には、結界の修復をお願いする積もりだったのですが・・・」

エシュランが、カイの様子を伺うように言葉を切った。

「・・・分かった。結界の方は、私が何とかしよう」

「はい」

「神殿中の神官を集め、女神ファリスに祈祷を行なうが良い。巫女姫様の捜索は、警備隊の方に頼んでおく。一日たって、状況が変わらなければ、また使いを寄越せ。私は、魔法の塔にいる」

「分かりました。その様に・・・」

エシュランが、大袈裟に深々とお辞儀をした。カイはうっとうしげな顔でそれを見たが、そのまま何も言わずに、神殿を出た。

「インディラ様じゃなくて、悪かったよ、全く」

エシュランは、端から彼など信用していないのだ。やれるものなら、やってみろというところなのだろう。

「女神に祈って、他力本願にすぎるしか能のないくせに・・・」

そう言い捨ててから、カイは、魔道を使う前に、神経が高ぶっているのは良くないと気付いて、瞳を閉じて大きく深呼吸をした。一呼吸ついて、ふと見れば、彼方に見知った姿があった。

「何をしているんだ、あの方は」

カイは呆れた様子で呟くと、その人物を目指して、全力疾走で往来を駆け抜けた。

「インディラ様」

声を掛けられて、朱里は立ち止まった。

そこで、初めて自分がどこにいるのか確認するように、辺りを見回した。何時の間に宮殿を出たのか。彼女は人気のない往来に立っていた。

「どちらに行かれるのです？宮殿は反対方向ですよ、インディラ・アディラ様」

「カイ・・・あたしは・・・」

「お戻りください。あなたはダーク・ブランカ様の代理なのです。このカディスを守るのが、あなたの役目でしょう。ダーク・ブランカ様が選んだのは、ランディス様でもなく、私でもない、あなたなんですから」

「でも、あたし・・・もう・・・」

今にも泣き出しそうな少女の様子に、カイは彼女の身に起こったことを察して、ため息を洩らした。

「・・・魔法が使えないのは、記憶が戻ったせいじゃありませんよ」

インディラの不安そうな顔を見ながら、カイは続ける。

「皇帝のご不在の影響が、出始めているのです。それに、あなたが誰であろうと、ダーク・ブランカ様の代理ということに、変わりはありません。あなたがこのランドメシアに来たのは、ご自分のご意思なのでしょう？魔法で無理矢理召喚された騎士とは訳が違う」

「ごめんなさい。あたし、混乱してて・・・カイ、あたし、どうしたらいいの？」

「とにかく、魔法の塔へお戻りを・・・」

朱里は、いつもは陽気なカイの、深刻そうな表情の内に、何か良くないことが始まったのを感じ取った。

とにかく、時間稼ぎをしなければならない。カイは心の中で、繰り返しそう呟いていた。ランディス様がお戻りになるまで・・・

もしも、インディラ様の身に何か起こったなら、その時が、このランドメシアの崩壊の始まり。ランディス様はそう言っていた。インディラ様の異変・・・彼女はもう、インディラ様ではない。彼女はもう、ダーク・ブランカ様の代理など出来ない、ただの女の子だ。

このランドメシアを守る皇帝の力と、大魔法使いの力。今や、その両方が、消えてしまったのだ。

何故、ダーク・ブランカ様が戻らない内に、インディラ様の封印が解けてしまったのか。カイは、ふと、そう思って、何かに気付いた様に顔を上げた。

インディラの封印は、何故、解けたのか。何故、こんなに簡単に解けてしまったのか。大魔法使いダーク・ブランカの、魔法の封印であるにもかかわらず、だ。封印を解くには、封印したよりも強い魔法が必要となる。ランドメシア最高の魔法使いであるダーク・ブランカの、その魔法よりも強い魔法。ダーク・ブランカの封印を解くには、それ程の魔法が必要なのだ。

・・・そんなものが、この世にあるとすれば・・・

それはつまり、ダーク・ブランカの魔法に他ならない。要するに、あの封印は初めから、この

時期に解けるようになっていた。そういう事ではないだろうか。封印の鍵は、恐らくあの少年だ。ラーラの召喚した、美崎和也という少年。彼がここに来て、彼女と出会ったときに、封印が解けるようになっていたのだとしたら・・・

彼女がインディラでなくても、ここにいる意味があるということだ。もしかしたら、初めからインディラという存在は、本当の彼女を隠すカモフラージュだったのかもしれない。彼女を何かから守るための・・・

「カイ！」

朱里の叫んだ声に、カイは我に返った。

「あれは何？」

二人の頭上に、赤い線の魔法陣が描かれていた。魔法の文字がその納まるべき場所へ一つ一つ埋まっていく。カイがその文字を読んで、顔色を変えた。

「フィリスの召喚魔法だ。逃げるぞ」

カイが朱里の腕を掴んで、片手で空中に魔法文字を描いた。間違いない、朱里が狙われている。

「・・・魔法の塔へ」

カイの言葉と共に、一瞬体が中に浮いた感覚があった。そして、次の瞬間に、朱里は見慣れた、塔の中の部屋にいた。

「カイ、召喚魔法って、まさか、宰相閣下が・・・」

朱里の言いかけた言葉に、カイが苦渋に満ちた顔をした。

「恐らく彼は、闇に操られている」

その事実は、カイ自身が、心のどこかで気づいていた事だった。ただ、カイは、それを認めたくはなかったのだ。だが、もはや、その事実を受け入れない訳にはいかなくなった。カイは意を決した様に、顔を上げた。

「とにかく、ランディス様がお戻りになるまで、この身に代えても、あなたは必ずお守りしますから」

カイは朱里を椅子に座らせると、魔法書を開いて呪文を唱え始めた。

朱里にはただ黙って、その様子を眺めていることしか出来ない。こんな深刻そうな表情のカイを見るのは、初めてだった。自分に魔法が使えれば、少しはカイの役に立てたかも知れないのに。そう思うと、遣り切れなかった。今の朱里は、ただ守られるだけの、無力な存在でしかなかった。

第4章 氷の神殿の巫女とフィリスの契約

一行が氷の神殿のあるフリーゼワルトに着いたのは、カディスに“リート・ラランダ”が現われてから、五日目のことだった。

途中、盗賊に襲われること数度。正体不明の刺客に狙われたのが二度。そして、ミサキが誘拐されかかったのが一度。いずれも、ラシャとシリウスの力によって切り抜けることが出来たが、その代償としてシリウスは腕を負傷していた。

フリーゼワルトは、帝国の北の果てにある寒村である。険しい峰の連なる山々。その山あいの、僅かにゆるやかな斜面の土地に、古びた佇まいの氷の神殿が建っている。そして、それを取り囲むようにして寂れた村があった。だが、その村に人影はなかった。ここでは、春はまだその気配も見せない。長い冬の間降り積もった雪が、溶けもせずに、まだ村をその下に埋めたままだった。

この村人は冬期、山を降りて、その麓の街ラッカムに移り住むのだ。この村に村人が戻ってくるのには、数ヶ月先の短い夏の訪れを待たなくてはならないのである。

重たい毛皮の外套を纏って、雪深い山道を歩くのは、南のカーシア生まれのシリウスにとっては、酷く難儀なことだった。加えて、片腕を吊っているせいでバランスが取りにくく、踏み出す足の一步一步に結構な神経を使わなければならなかった。

—— それにしても。

自分の前方に行くファレンの背中で、緩やかに編まれた薄い金色の髪が左右に揺れるのを目にしながら思う。雪の騎士であるラシャは当然だとしても、ミサキやそれにファレンまでが、結構平気な顔をして歩いているのが信じられない。どう考えても、自分の方が体力が上であるはずなのに、この体たらくは何なのだと、少し惨めな思いを抱く。またそんな気持ちのせいで、休憩を言い出すなど自分的にはありえない事であり、大きな呼吸の度に体内に吸い込まれる冷気の痛さに耐えながら、シリウスは一行から遅れないように、ただひたすら歩き続けるしかなかった。だから、神殿に着いたとき、一番疲れていたのがシリウスだったとしても、それは至極当然のことだったかもしれない。

シリウスは氷の神殿に着く早々、その場に座り込んで動けなくなってしまった。するとそこへ、ファレンが嬉々としながら薬箱を抱えてやってきて、たちまちその場でお医者さんごっこが始まる。

「包帯、きつくありません？」

言いながら、ファレンがシリウスの顔を見上げた。ファレンは薬箱を広げて、彼の包帯を取り替えていた。何となく、その、白くて長くて器用に動く指に見入っていて返事が遅れた。

「シリウスさま？」

再度確認するように名前を呼ばれて、慌てて応えを返す。

「ええ、大丈夫です。ああ・・・もう吊らなくてもいいですから・・・」

傷はそう深くはなかったのだが、ファレンが大袈裟に包帯を巻き付け、その怪我をした右腕を肩から吊ってしまったので、シリウスは現状、利き手で剣を持つことが出来ない状態なのである。

「あらっ、駄目ですわ。殿方はすぐ無理をなさるから。もう二、三日辛抱しててくださいね」

「まあ、あなたがそう言うのなら・・・そのように・・・」

結局はいつもの様にシリウスが押し切られる形で、決着が付いたようだ。

ラシャは少し離れた場所で、二人のそんな遣り取りを半ば呆れながら黙って見ていた。

どう見ても手当を楽しんでいる感のあるファレンと、その過剰な手当を喜んでるようにしか見えないシリウスと――端で見ている方が、気恥ずかしく思われることこの上ない。

・・・何なんだよ全く、この緊張感のなさは・・・

ラシャは軽く溜息を落とす。そして彼にとってさらに頭の痛いことには、そのファレンが今ではすっかりファレンであるということだった。

彼女にはもはやダーク・ブランカの面影など欠片もないし、ラシャの前でさえ、ダーク・ブランカだという素振りも見せない。本当に、彼女はダーク・ブランカなのか・・・ラシャは時々考えてしまう。

記憶の中のダーク・ブランカの姿は、次第にぼやけてあやふやになり始めている。

あの時会ったダーク・ブランカは、幻だったのではないか――

そんな気分さえさせられる。

今では、ミサキが何者かに狙われているという事実だけが、彼女がラシャに言った言葉が幻ではなく、現実のものだったと告げているだけだ。

『静かだな。人気がないし・・・』

ふと、ミサキが珍しく、ラシャに話しかけた。

シリウスとファレンが、お医者さんごっこを始めてしまったせいで、そちらには声を掛けづらかったのだろう。ラシャが皇帝語をあまり知らないせいもあって、ミサキはこれまでラシャとはあまり言葉を交わしていなかった。にもかかわらず自分に声を掛けたのは、多分そんな所なのだろう。ラシャはそんなことを思いながら、どこか冷めた目でその顔を見据える。

自分のせいでシリウスに怪我を負わせてしまった事を気に病んでやや落ち込んでいたが、ミサキは相変わらず・・・シリウス風に言えば、能天気なミサキのままだった。そして、その記憶の戻る気配もなかった。

そもそも記憶がないのでは、話にならないのだ。それはつまり、こいつには自分を元の世界に戻してくれる方法が分からないということに他ならないのだから。

全く、魔法使いの言う事は当てにならないぜ、と心の中で愚痴る。

それでも、それはミサキのせいと言う訳でもなく、愛想よく声を掛けてきた相手をそのまま無

視をするなんて子供じみた真似をするほど機嫌が悪い訳でもなかったので、応えを返した。

『ここは今じゃ・・・フィリスの神殿なんて、厄介な別称が・・・ついた場所だからな。光族でこの・・・神殿に来ようなんて・・・物好きは、彼女ぐらいなもんだよ。このフリーゼウアルトは、翔冀族（しょうきぞく）の村だしな・・・』

ラシャが皇帝語で、つかえつかえしながら、ファレンを目で示して、ミサキに答えた。

『フィリスって？』

『・・・ああ。っと・・・光族に闇の邪神って恐れられている女神・・・らしいな。良くは知らないけど。俺は外から・・・引っ張られた・・・口だから』

『外から？引っ張られる？』

ミサキが良く解らないという顔をした。ラシャは言葉遣いが可笑しかったのかと、自分の言った言葉をもう一度、頭の中で繰り返してみた。

「何て言ったらいいのかな・・・ええと・・・『つまり、魔法で、別の世界から・・・』

『ああ。召喚された？じゃ、君も、東京から？それとも・・・』

『トウキョウ？・・・確かレオンが、そっから飛ばされたって・・・言ってたかな。俺は、ラフィッツの月の西。サンドエンドの東側。カヤと一緒に、引っ張られて・・・俺は皇帝騎士団の雪の騎士になった』

『ラフィッツ？地球じゃないな。多分、それ。聞いたことないし』

そこまで言った時、耳にかすかな衣擦れの音が聞こえた気がして、ミサキは神殿の奥の暗闇を見据えた。ミサキが何かを見つけたように目を凝らしているのに気付いて、ラシャもそちらの方へ顔を向けた。

真っ白い巫女の衣を纏った少女が、さらさらという布の触れ合う音だけを立てて、ゆっくりとその中から姿を見せた。その濃い緑の色の瞳は空ろで、視点が定まっていない様子である。だが、少女の瞳にはミサキの姿が映し出され、彼女は何かに引き寄せられるかのように、真っ直ぐにミサキのもとにやってきた。

「カヤ・・・」

ラシャが、ミサキの前に飛び出して、少女の肩を掴んだ。

「カヤっ！」

ラシャが、彼女の肩を強く揺さ振った。

「私の待っている騎士は誰？・・・剣の騎士は何処にいるの？砂時計の砂はもう残り少ないのに・・・何時になったら現われるの？・・・あなたは、答えを知っている？」

少女カヤは、歌うように言って微笑むと、静かに床に倒れこんだ。慌てて彼女を支えたラシャが、その頬を軽く叩いて、名を呼ぶと、カヤは閉じていた瞳を開いた。

「ラシャ・・・？」

ラシャを映したその瞳は、緑ではなく、淡い空色だった。自分を抱き抱えているのが、誰なのか分かると、カヤは驚いて体を起こした。

「ラシャ・・・ラシャね。ああ、もう・・・ちっとも来てくれないんだもの。私だけ、この世界に置いていかれちゃったのかもって、思い始めていた所よ」

カヤがラシャの首に手を回して、その存在を確かめるように、しっかりと抱き付いた。

「カヤ、やっと見つけた。この三年ずっと、帝国の端から端まで捜してたんだ。無事で良かった。さあ、ラフィッツへ帰ろう」

そう言って、ラシャがカヤを抱き締めると、その腕をカヤがそっと押し退けた。

「まだ、だめよ。私達、やらなくちゃならないことがあるわ」

「え？」

「彼女の為に、捜してあげなきゃ。それが見付かるまでは・・・私、帰れないわ」

「捜すって、何を？彼女って・・・」

「剣の紋章の騎士。フィリスのために、捜してあげなきゃ」

「何ねぼけたこと言ってんだ。フィリスって、闇の・・・邪教の女神だろ」

「でも、私には、彼女の声が聞こえるんだもの。あなたが騎士として選ばれたように、私は巫女として選ばれたの。剣の紋章の剣を守る巫女。それが私の役目。剣を本当の持ち主に渡すまでは、帰れないわ」

「カヤ・・・」

『彼女が、カヤ？』

ミサキが尋ねると、ラシャは無言のまま頷いた。

ミサキが、剣の紋章の剣を手に入れるために、この神殿に来たのだと知ると、カヤは、ミサキの頭から足の先までを、吟味する様に眺め回した。その間、ミサキは居心地悪そうにその場に立

っていた。二人を取り囲むように、ラシャとシリウス、それにファレンが立ち、黙ってそれを見守っていた。

つと、カヤが手を伸ばして、ミサキの顎を持ち上げる。その指がすーっと下りて、ミサキ服の襟元を押し下げた。そこに見えたものに、カヤは眉をひそめる。

・・・これは、剣の紋章・・・なんじゃないの？・・・

改めて、ミサキの顔を見る。黒い髪に黒い瞳。どう見ても、光族には見えない。その彼が、どうして帝国の後継者の証である紋章を持っているのだろう。もし、彼が本当に紋章の持ち主なら、あの剣を渡すべきではないのだけれど――でも。

・・・皇帝陛下は、すでに崩御されている。このタイミングで彼がここに現れたということには、何か大きな意味があるのかも知れない・・・

暫くの沈黙の後、カヤは口を開いた。

『運命は、汝の手で定むべし。剣は、神殿の一番奥の間。女神の立像の前よ』

カヤが、闇の向こうに続く回廊を示した。

カヤに促されて、ミサキは頷くと、躊躇う素振りも見せずに、その闇の中へと足を踏み出していった。

それがこの者の望みなら、それは誰にも止められないのだ。魔法が支配するこの国では、全ては予言のままに導かれるのだから。巫女である自分は、ただそれを見守る事しかできないのだ。

「外は吹雪ね」

沈黙と静寂。その中で、唯一の音として耳につく風鳴りに、カヤが沈黙を破るように口を開いた。

「・・・遅いわね。ミサキ」

誰にともなく、ファレンが呟いた。

「あいつ、見かけによらず無鉄砲なところあるからな。無茶しなきゃいいけど」

暖炉の側にいたシリウスが、そう言いしな、薪を火に放り込んだ。一瞬、火が大きくなって、シリウスの顔をオレンジ色に染めた。

「剣の紋章の剣は魔剣だって、聞いたことがあるけど・・・ミサキ、大丈夫なのかしら」

ファレンがその答えを要求するように、カヤを見た。

「多分、ミサキは剣を手に入れるわ・・・あの剣は、騎士を選ばないのだから」

「選ばない？」

カヤの漏らした言葉に、シリウスが反応した。

「帝国で最高位の騎士の持つ剣なんだろう？あれには、どんな剣も・・・どんな騎士もかなわないっていう、無敗の剣だって。それが、誰でもなれるみたいなそんな言い方・・・」

「誰でもなれるのよ。望めば誰でも、最強の騎士にね」

「そんなばかな」

「それが、恐らく、魔剣と呼ばれる所以なんだろうな」

ラシャがそう言って、話に加わった。

「魔法で創られた剣に、神様が宿るというのは、あながち嘘ではないんだ。剣にはそれ自体に力がある。その力を使うのには、心身共にかなりの負荷がかかる。だから、剣が騎士を選ぶっていうのは、その力を使いこなせる者・・要するに、その負荷に耐えられる者を選ぶってことなんだ」

「じゃあ、剣の紋章の剣は・・選んだ騎士が、もし、その負荷に耐えられなかったら、そうしたら、どうなるんだ？」

シリウスは頭に浮かんだ結論を、ラシャが否定してくれることを望みながら、そう聞いた。

「最悪の場合、その騎士は命を失うことになるだろう」

ラシャの静かな声が部屋に響いた。

ミサキは薄暗い回廊を抜けて、広間に出た。そこには窓はなかったが、天井のどこかに明り取りがあるのか、広間全体が白く、ほんのりと明るかった。その正面の壁の前に、巨大な女神の石像が立っていて、彼を見下ろしていた。

邪神とまで呼ばれるフィリスの石像は、予想に反して穏やかな笑みをたたえた、清楚な印象を受ける顔立ちの像だった。何と無く、朱里に似ている様な気がする。そう思うのは、ミサキが朱里の面影を追い続けているせいだろうか・・・

その像の前の床に置かれた、大きな長方形の石塊に、一振りの剣がその柄まで深々と刺さっていた。

『これを、抜けて事か？』

どこかの国の伝説に、こんなシーンがあったよな。あれは、アーサー王の話だったか・・・ミサキはそんな事を考えながら、その柄に手を掛けた。

『お待ちなさいな。普通、もう少し悩んでから剣を取るものよ』

頭上で声がして、ミサキは剣に手を掛けたまま、上を向いた。ふいに、女神の立像の両脇にある、ランプに緑の灯が点り、ミサキを緑色に染めた。その緑の光の中に、映像が映し出されるように、一人の女の姿が浮かび上がった。

『あんた、誰？』

『そうね、剣の守護者ってどこかしら。強いて言えばね』

『・・・女神フィリス？』

『って、呼ぶ人もいるかしら・・・』

『これ、抜くけど、いい？』

『いいわよ。あなたに、その代償が払えるのならね』

『代償？』

『剣の紋章の剣。それを持つ者には帝国最高位の騎士の力を授ける。それが、私のお仕事。仕事には報酬が必要でしょ。ギブアンドテイク。それが、世の中の正しい在り方だと思うわけ。与えるばかりの神様なんて、人間を墮落させるばかり・・・何かを手に入れたいのなら、それなりの犠牲を覚悟すべき。というのが、私の持論なの。だから、奇跡を待っている光族には嫌われるんだけど・・・』

『理屈は合ってると思うけど』

『光族はね、大陸から爪弾きにされてこのランドメイアに流されてきたの。それは、それは、苦労した民族なのね。築き上げた帝国も、巨万の富も、何もかも無くした。だから、神様には自分達を救ってくれる義務がある。奇跡は、自分達のために起こるもの。そう考えてしまった。そこから、彼らの選民思想と墮落が始まったのね。そして、この魔法の島には、それを叶えてくれる神様がいたという訳』

フィリスが、その射る様な瞳を、ミサキに向けた。

『あなたは、私が、恐くはないの？』

『どうして？』

当たり前のように聞き返されて、フィリスは苦笑した。

全てを失って、何も持たない事が、この若者の強みなのだろうか。だがそれは、逆に言えば、一つの過酷な運命を乗り越える為に、全てを捨てなければならなかったという事だ。

『それで、この剣を手に入れるための、代償って？俺に払えるものならいいけど・・・』

この若者は、果たして選ぶのだろうか。彼が失ったものを取り戻す為には、剣を持って戦わなければならない。そしてそれは、絶望と悲しみとの戦いになる・・・そんな運命を。このまま、何も望まなければ、何も手には入れられないが、もうこれ以上、傷を負うことも無い。

『無理なものじゃないわ。誰でも持ってるものだから。あなたの、命。それが代償』

『いの・・・ち？』

フィリスが、余りにあっさりと言ったので、ミサキは思わず聞き返してしまった。

『そう、命』

フィリスが念を押すように、繰り返して言った。ミサキは剣の柄から手を離して、しばし考え込んだ。

正直な所、もう、何も無くすものはない・・・と思っていた。

自分はもう、何も持っていないと思っていたから・・・

ミサキの口元に、笑みが浮かぶ。

『分かった』

ただ一言、そう言って、ミサキはフィリスの顔を見上げた。ミサキの表情は心持ち緊張したものだったが、その中に悲壮感はなかった。

随分と、真っ直ぐにもものを見る。ミサキの澄んだ瞳を、フィリスは感慨深そうに見詰めた。ミサキのブラウンの瞳が、ランプの光を受けて、緑色に揺らめいている。その瞳は、どんな邪気も入り込めない様に、純粋な輝きで守られていた。

・・・魔法の封印に守られて、ここまで来たか・・・

このまま、ミサキに剣を渡してしまっても、本当にいいのか。フィリスの心に迷いが生じる。

剣の魔力は、恐らく、彼の中に眠る封印を解く。封印が解かれれば、彼の記憶は戻るだろう。それは、己の罪の重さに、絶望の淵に身を沈めてしまった、忌まわしい記憶だ。あの記憶が戻っても、彼はこの輝きを失わずにいられるのだろうか。そして、何よりも、運命の重みに耐えられるのだろうか――この国を滅ぼしてしまうという、宿命を負った自分を認められるのか・・・

ミサキが“あの時”に負った傷は、癒えた訳ではなく、ただ、痛みを忘れていただけだ。まだ、何も終わっていないのだ。魔法の封印は、ただ、時を止めていただけなのだから。時が動き出した時、また三年前と同じ過ちが、繰り返されるのか・・・

『フィリス？』

ミサキがフィリスの表情を伺うように、彼女を見上げていた。フィリスは、迷いを打ち消すように、きっぱりとした口調で言った。

『いいわ。契約成立ね。この剣はあなたのものよ』

フィリスの答えに、ミサキは無言で頷いて、剣に手を掛けた。剣は、拍子抜けするほど、あっさりと抜けた。

『・・・意外と、軽いんだな』

ミサキが剣を振って見せた。

『剣が最大の力を出した時が、約束の時。それを忘れない様にね。・・・本当にいいのね?』

確認するように、ミサキの目を見たフィリスに、ミサキは笑って頷いた。

『噂どおりの冷酷非情な女神、って訳じゃないんだな。後悔はしないよ。ここで剣を手に入れなければ、俺は先へは進めないんだから・・・』

ただ、その時まで、一目朱里に会えればいい。自分の捜す、本当の朱里に・・・今のミサキが望むのは、ただそれだけだった。

ミサキが剣を鞘に納めて広間から出ていくのを、フィリスは静かに見送った。出口でミサキはちらりと後ろを振り返ったが、その時、すでに女神の姿は消えていた。広間は再び静まり返って、薄明かりの中に、女神の石像だけがぼんやりと浮かび上がっていた。

「・・・剣の紋章の騎士リート・ラランダ・・・信じていいわよね、あなたの力を・・・このランドメイアの未来を・・・」

次第に遠ざかるミサキの足音に、眩くような、かすかな声が重なった。そして、その音が途切れると、広間は再び完全な静寂に包まれた。

ミサキが剣を手に戻ると、シリウスが真っ先に心配そうに駆け寄ってきた。

『ほら、これだろ。剣の紋章の剣って』

ミサキがカヤに確認するように、剣を振ってみせた。

『お前、大丈夫なのか？何ともないか？』

『何だよ。別に何処も変わり無いけど』

『なら、いいけど・・・』

シリウスには、フィリスとの契約の事は言わない方が良くかも知れない。ミサキはそう考えて、あまり詳しい話はしなかった。ただ、この神殿の巫女であるカヤが、彼の話に口を挟まず、終始黙っていたのは、多分彼女は、本当のことを知っているからだろうと、ミサキは思った。

「今夜は、ここに泊まったほうが良さそうだな。この天気では、あの山道を通るのは無理だろう」

ラシャが提案して、シリウスが同意した。ミサキはすぐにでも、都へ向かいたい様だったが、荒れ狂う外の様子を目の当りに見て、さすがに断念せざるをえなかった。

久し振りに神殿に来客があったのを喜んだカヤが、料理の腕を振るったこともあって、その日の夕食はかなり豪勢なものになった。

食事の後、調理場で後片付けをしていたカヤとファレンの所に、シリウスが琴を手に顔を出した。

「カヤ、これ弾ける？」

「ええ。五弦の琴は巫女の必修ですもの。時々、女神に奉納する歌を歌う時に、使ってるわ」

「景気付けに、何か弾いて欲しいんだけど。なんか、あっち、盛り下がっちゃってさ」

「あら、どうしたの？」

「ミサキがね、ちょっと・・・元気なくて。ラシャは、元から無口だけど」

シリウスが言ってから、しまったという顔をした。カヤは笑って構わないという風に手を振った。

「いいわよ。あの人、昔からあまり愛想よくないのよね・・・ああ、でも、ここをファレン一人に出来ないし」

「あら、構いませんわ。もう大方終わりですし」

「ここは、俺が手伝いますよ」

シリウスがそう言って、カヤに琴を渡した。シリウスの顔を見て、カヤは彼の意図を察した。

「じゃ、お願いするわ」

カヤはあっさり言って、琴を手にその場から退散した。シリウスはファレンと二人きりになりたかったのだ。カヤは二人の顔を思い浮かべて、微笑んだ。

何曲目かに、ミサキのリクエストで、バラードを弾き終えた時、カヤは暖炉の火が弱くなっているのに気が付いた。地下室から、薪を持ってこなくては・・・そう思ってラシャを見ると、彼は

壁ぎわにもたれ掛かったまま、何時の間にか眠ってしまっていた。全く、当てにならない。気持ちよさそうに眠り込んでいるラシャを憎らしく思いながら、カヤは琴を置いた。

『火が小さくなってきたわ。私、薪を取ってくるから・・・』

『ああ、じゃ、お供するよ。荷物持ち、居た方がいいだろ？』

ミサキがそう言って、立ち上がった。

『落ち着かないのね。じっとしているのが、たまらない？』

『そうだね。今すぐにでも、都に飛んでいきたい所だよ』

『朱里さんの為に・・・？』

『それもあるけど・・・何かが、呼んでいる気がするんだ。早く、カディスに来て。この剣のせいかな』

そう言ったミサキの表情を、カヤは怪訝そうに見ていた。何と言うのか・・・ミサキは嬉しそうなのだ。浮かれている。まるで、ピクニックの前の晩に、子供が興奮して眠れないといった感じだ。

巫女として、この剣を守ってきたカヤは、剣の紋章の騎士の辿る運命が、どんなものかを知っている。その力と引き換えに、失うものの大きさを・・・

考えながら、カヤはミサキの腰に下げられた剣に目をやった。彼はフィリスの待っていた、本物の騎士なのか、それともただの考え無しの楽道家なのか・・・見届けたい。ふと、そんな気持ちになった。

『・・・決めた。私も、都へついて行くわ』

『神殿を空けていいのか？』

『私は、剣を守る巫女よ。あなたが、無茶な使い方をしないように、監督するのも、仕事のうちだわ』

『まあ、旅は賑やかなほうが楽しいから、構わないけどね』

『じゃ、決まりね』

カヤはにっこり笑って、ランプを取った。

二人が部屋を出ていってから間もなく、人の気配がなくなったのを確認するように、ラシャが静かに身を起こし、辺りを見回した。

「カヤの奴、まさか都まで付いていくつもりか・・・冗談じゃないぞ」

ラシャはそっと部屋を出ると、調理場へ向かった。

調理場に顔を出したラシャを、シリウスが迷惑そうな顔で見た。だが、ラシャはそんなことは気にもせず、カヤがシリウスを呼んでいると言って、彼をその場から追い出した。そして――

「ファレン。ウィンザーテラスで言った事だけど、あの約束、忘れていたわけじゃないよな」

「約束・・・って。あの・・・どういうことでしょう・・・」

「とぼけてんのか？あんた、俺とカヤを元の世界に戻してくれるって言ったよな？・・・」

ファレンのきょとんとした顔に、ラシャは不意に嫌な予感を覚える。

「あんたは、ダーク・ブランカなんだよな？頼むから、そうだって、言ってくれよ。俺をウィ

ンザーテラスに呼び寄せて、ミサキの護衛を頼んだろ？」

「ええと・・・おっしゃってる事が、良く分からないのですが・・・ウィンザーテラスで、私が追剥に襲われたところを、助けていただきましたよね？それで、怪我をした従者の代わりに、あなたが護衛を買って出てくださいって・・・」

「ちょっと、待ってくれ」

今度はファレンの話が、ラシャにはさっぱりである。完璧に話が食い違っている。

「あんた、一体誰なんだ？」

「私はファレンシア・クララバートですわ。からかっているんですの？」

ファレンが怒ったように言った。

「シリウスをよこして、何してるかと思えば、まあ。こんなところで、ナンパですの？」

何時の間にか、カヤが戸口に立っていた。

「いや、これにはちょっと・・・その。込み入った訳が・・・」

「その訳とやら、伺いましょうか」

カヤが落ち着き払った声で言った。この声が、彼女が怒る一歩手前のものであるという事を、幸か不幸か、ラシャはよく知っていた。

神殿の書庫は四方を書架に囲まれた、小さな部屋だった。窓はなく、カヤが手のランプから移した火が、部屋の照明具に点ると、ようやく室内が明るくなった。

「内緒話には、もってこいの場所だな」

ファレンが本当にファレンで、ダーク・ブランカでないのなら、多分聞かれてはまずい話だと、ラシャはそう考えた。それで、カヤと二人で、こんな場所にやってきたのだ。

ラシャがダーク・ブランカに会った事と、彼の与えられた任務について話すと、カヤはしばらく考えをまとめるように手を頬に当ててうつむいていた。

「そっか、ダーク・ブランカ・・・伝説の大魔法使い・・・って、そういうことなのかしら」

カヤが部屋の隅の梯子を引っ張ってきて、書架に立てかけた。

「たしか・・・この辺に・・・」

梯子を半ばまで上って、書架に並ぶ本の背を指でなぞりながら目当ての一冊を捜す。

「そういうことって？」

「・・・ああ、ほら、これよ」

古びた表紙の本を手に、カヤは梯子から飛び降りた。

「何？」

「ランドメイアの魔道師語録。言ってみれば、魔道師の伝記ってところね。時々、予言めいた記述もあって、中々面白いんだけど・・・」

言いながら、カヤが本を開いた。

「これ見て。あと、ここね。それから・・・ここも」

カヤの指が、軽やかに弾みながら本の文字を指す。そして、ページを繰りながら、同じことを何度も繰り返した。

「ダーク・ブランカ？・・・こんなに？」

「そう。ダーク・ブランカよ。海洋歴十年が初めて、今年が四四七年でしょ？この間に、一体、何人のダーク・ブランカが出てくると思う？あるときは、金髪の光族で、黒髪の手竜族っていう記述もあるわ。瞳の色も、緑やら青やら琥珀やら。出てくる度に、みんな違うし。私はね、ダーク・ブランカって、大魔法使いの代名詞だと思ってたの。魔道師の頂点に立つ魔法使いが、代々継ぐ名前なんだって」

「ダーク・ブランカは一人じゃないってことか？」

「そう思ったの。でも今は違うわ。ねえ、ラシャ。ダーク・ブランカは、初めから、存在しないんじゃないかしら」

「なんだって？」

「フィリスの魔法に、心盗りというのがあるの。ある人の心を眠らせて、その上に自分の心を被せてしまうっていうものなんだけど。要はその人に憑衣して、その体に乗っ取っちゃう訳」

ダーク・ブランカは、その魔法の憑衣現象によって造り出された、虚像なのではないか。それが、カヤの考えだった。

「ファレンはファレンシア・クララバートって言ったわよね？クララバートって言えば、代々、光の巫女を出している家系よ。彼女が直系でないにしたって・・・巫女だの神官だの魔道師だのっ

てね、乗っ取られやすいつて聞くし・・・」

「それじゃ、誰が乗っ取ってたんだ？俺が約束を果たして貰うには、誰のところに行けばいいんだ？あれが、魔法だったっていうなら、どっかに魔法を使った奴がいるんだろう？」

「分からないわ。でも、フィリスの高等魔法を扱う程の魔道師なら、人数は限られてくる。宰相のラーラ様とか、魔道師長のランディス様とか・・・ともかく、宮殿にいる偉い人？」

「なるほど。都行き、決定ってことか」

ラシャは不本意そうに呟いた。

その朝、一番初めに目を覚ましたのは、カヤだった。カヤは巫女の習慣で、日の出と共に目を覚ますのだ。いつものようにベットを抜け出して巫女服に着替え、神殿の中央に造られている中庭に出た。女神に捧げるための聖水を、その中庭の井戸から汲んでくるのが、彼女の朝一番の日課だったからだ。

吹雪は収まっていた。東の空に広がる雲が薄いピンク色に染まっていたが、太陽の光は雲に閉ざされて、まだ地上には降りてこない。朝霧の白いもやが視界を遮って、歩きなれた中庭がやけに広く感じられた。カヤが抱えていた壺を井戸端に下ろした時、その白いもやの中に、何かが動く気配を感じた。刹那、朝の静けさを破る、甲高い悲鳴が神殿じゅうに響き渡った。その声に、神殿にいた誰もが、例外なく飛び起きた。

そして寸刻の後――

「何があったんだ？」

一番に飛んできたのはラシャだった。

「ご・・めんなさい。だって、驚いちゃって」

カヤが心底申し訳なさそうに言った。カヤの傍らには、若者が二人佇んでいた。そして、そのうちの一人が苦笑しながら言う。

「全く、神殿の騎士が帰って来たっていうのに、ひどいお出迎えだよな」

「こんな時間に来た俺達も悪んだから、お互い様って事にしないか、クリス」

もう一人の若者がにこやかに言った。騎士の出で立ちをした二人は、ラシャの知っている人物だった。

氷の騎士、クリストファー・ラディリウス。そして、光の騎士、ラスフィール・マリオン。

共に、皇帝騎士団の最高位、太陽の騎士の称号を持つ騎士である。

「カヤ、ラッカムの仮神殿に行っていたんじゃないか？それに、この時期に巡礼者がいるとは珍しいな」

ラシャの後方から遅れて姿を見せたシリウスとファレンを見て、クリスがうさんくさそうな顔をした。

「それに、ラシャストロフ・ディール。今更隠れなくてもいいだろう」

そっと体を引いて、シリウスの影に隠れたラシャに、ラスが皮肉を込めて言った。

「君の噂は聞いているよ。水晶の騎士のクレアが、連絡がつかないって、怒っていたぞ。一体、今迄どこで、何をしていたんだ？」

「俺は、もう騎士団を抜けたんだ。関係ない話だ」

ラシャがそっぽを向いて答えた。

「たくっ。どいつもこいつも・・・一体、剣の役目を何だと思ってるんだ。こんな事だから、いつまでたっても混乱がおさまらないんだよ」

クリスが不機嫌そうに言った。

反乱騒動が収まって三年。騎士団の自主退団組は、ラシャー人ではなかったのだ。剣を持ったまま行方不明な者。あるいは、神殿に剣を置いて姿を消してしまった者など。騎士としての役目を放棄して、連絡を寄越さない者が、すでに片手で数え切れないほどに上っていた。

「カヤ、最近、ランディス様はこちらにいらしたか？」

クリスの問いに、カヤが首を横に振った。

「そっか。やっぱり、あの口伝鳥にだまされたってことか・・・」

「手の込んだ事をしてくれるよ、全く。サラの言った通りだな。こうなれば、一刻も早く、都に戻らないと。クリス・・・」

「ああ、分かっている。魔法陣を使えばすぐだ。そのために、ここまで来たんだから」

クリスが頷いてそう言うと、二人は神殿の中へ入っていった。

「カヤ、魔法陣て？」

シリウスが小声で聞いた。

「魔法の抜穴っていうのかしら・・・それを使えるのは、太陽の騎士の特権なの。神殿と神殿を結ぶ穴。一瞬にして、こちらの神殿からあちらの神殿へ行かれるらしいわ」

「じゃ、ここから都の太陽の神殿へ？」

「ええ、多分」

「俺達、便乗できないかな」

「さあ、どうかしら・・・」

クリスとラスの後ろ姿をちらりと見て、カヤは思案するように言葉を切った。

「やってみる価値はありそうだな」

ラシャが自分の剣を示した。

「こっちには、騎士の剣が三本。あっちは二本。数では勝ってる訳だし」

シリウスが首をかしげた。

「三本？雪の騎士の、雪華の剣に、ミサキの、剣の紋章の剣と・・・？」

「お前の、双月星の剣」

ラシャが、シリウスの剣を指した。

「その二つの三日月と明星の紋章は、天空の騎士のものだろうか？」

「双月星の紋はリヴィウス家の紋章だけど・・・天空の騎士が、一族の者だなんて話、聞いたことないぞ」

「お前んとこの事情は知らないよ。皇帝騎士団の騎士をすべて把握しているのは、陛下と魔道師長様だけだからな。俺は、騎士の紋章のことしか知らない」

シリウスは、自分の剣をしみじみと眺めた。

この剣は、兄から、通行証と共に渡されたものだった。光族の家では、紋章入りの剣を持てるのは、家長かその後継者に限られていると聞く。しかし、商家で、海竜族であるリヴィウス家には、そういう風習はない。でも、言われてみれば、シリウスがリヴィウス家の、双月星の紋章の入った剣を見るのは、この剣が初めてだった。もしも、この双月星の剣が、世界でたった一つの剣であるならば、ラシャの言う天空の騎士が持っていた剣と、今彼の手の中にあるものは、同じものだということになる。

「天空の騎士の剣か・・・へえ・・・ちょっと、感動しちゃうな」

「何を言ってるんだ。お前が、天空の騎士なんだろうが」

「え？」

「お前がそれを持っているってことは、お前が剣に選ばれたってことじゃないか」

「ええーっ」

シリウスが心から驚いた様子なのを、ラシャは、しっかりしてくれよな、というふうにシリウスの肩を叩いた。

皇帝騎士団といえば、子供の頃からの憧れだった。シリウスにとっては遠い夢の世界だったのだ。これから、都に行って、皇帝軍に入って、運良く手柄を立てて、そして実力を認められ

たら・・・そうしたら、騎士団に入れるかも知れない。幾つもの試練を潜り抜けた後に、厳粛な入団の儀式か何かをしてもらって、ようやく騎士になれる。そういうものだと思っていた。

「・・・酷い」

拍子抜けもいいところだ。何もしないうちから、ご褒美を貰ったような、もの凄い後ろめたさに苛まれる。拭いようもない分不相応感・・・

「お前が皇帝騎士団って奴を、どう思っていたのかは知らないけどな、騎士団は救国の騎士だの、正義の味方だのって表看板掲げてるけど、実際は寄せ集めの傭兵集団にすぎないんだよ。魔法であちこちから、腕の立つ奴等を集めて、騎士に仕立てて、諜報活動をさせてるんだ」

「でも、実際に帝国を救ったのは、歴史が・・・」

「帝国を幾度も救ってるのは、魔道師の魔法。でも、魔道師に救われたのだというよりも、神の申し子である騎士に救われたんだという方が、光族にとっては受入れやすいんだろう。騎士は、いわば魔法のカモフラージュなんだよ」

夢が音を立てて崩れていくというのは、こういう気分を言うのだろう。シリウスは深く溜め息をついて、思い出の中の騎士達に別れを告げた。シリウスは半ばやけになって、右腕に巻いてあった包帯を乱暴に解いた。傷の痛みはもうなかった。ただ、剣を握る手が、頼りなく感じられた。でも、それもほんの少しの間だけで、すぐにいつもの感覚が戻ってきた。

「太陽の騎士相手に、一暴れするか。こっちには、無敗の剣もあることだし、負けはしないさ」

「あの・・・ミサキの姿が見えませんが・・・」

ファレンが、シリウスに告げた。

「え・・・あれ？」

いつから、いない？そう考えてみて、シリウスは自分がミサキを一度も見えていない事に気が付いた。ミサキはここに、まだ来ていない――

その同じ頃、ミサキは剣を手に、神殿の回廊を歩いていた。先刻の、カヤの悲鳴に彼も目を覚まし、部屋を飛び出してはいたのだ。しかし、その時、突然ひどい頭痛に襲われて、歩く事もままならない状態になってしまった。それでも、壁に寄り掛かりながら、そして壁に手をつきながら、ミサキはみんなの声のする方へ行こうとしていた。

そんな彼の耳に、近付いてくる靴音が聞こえた。苦しい息の中で、回廊を近付いてくるその音に、ミサキは顔を上げる。

『・・・・』

そして相手もミサキに気付いたのか、その音が止んだ。

「リート・・・か？」

二人連れの一、ラスが驚いたようにミサキの顔を見て言った。

「どうした？ラス」

「こいつは、リート・ラカランダだ。闇の魔法に掛かったままの・・・あの、リートだ。まさか生きていたなんて・・・」

ラスがミスakiを見据えたまま、剣を抜き放った。

「何で・・何でお前がっ、こんな所にいる」

ラスのあからさまな憎悪と殺気が、ミスakiに伝わった。

―― 何故。

自分がそんな感情を向けられたことに戸惑いながら、ミスakiの手は剣を抜いていた。

―― 何故。

自分が剣を抜いた。その理由が自分にも分らない。言わば、その主の意思とは別のところで、体が勝手に動いたのだ。

―― これが、剣の紋章の剣か。

そう思った所で、無敗といわれる剣の、銀色の光がきらめいた。

遠いところで、誰かが自分を呼ぶ声がした。

自分の名を“リート”と・・彼のよく知っている声が、そう呼んだ。

「アカリ・・」

縋るように呟いた名前。

しかしそれも、大きな力に飲み込まれていく自分を救う力にはならなかった。

手の中の剣は、彼の意思とは関係なく、まるで別の生き物である様に動き、目の前の騎士の剣と火花を散らし合う。まるで、それを喜んでいるかのような―― そんな高揚感がミスakiの体を満たして行く。

―― これが、剣の紋章の剣。

その底知れない大きな力に魔剣の意味を悟り、ミスakiは初めて恐怖というものを感じた。

第5章 太陽の四騎士と魔法の対価

モニカ・エレクトラは、長い階段の上にそびえ立つ神殿を見上げて、足を止めた。主のいなくなった神殿は、しかし、思ったほど荒れてはいなかった。

―― 天空の神殿。

その神殿の巫女であったマリディア・ティリアは、三年前の反乱で魔道師ルトに加担して命を失った。マリディアと共にこの神殿を守っていた天空の騎士シルフィウスは、あの事件以来、姿を消し、その消息は分からないままだ。

反乱の少し前に、モニカはこの異世界に召喚された。まだ十三だった。何不自由のない暮らしから一転、歴史を数百年遡ってしまったのではないかと思われるようなこの世界で、右も左も分からずに、ただ途方に暮れていたモニカを助けてくれたのが、マリディアだった。騎士の剣を与えられて皇帝騎士団に入ることになった時も、この世界の知識を教え、導いてくれた。親切で、優しい人だった。悪い人ではなかった。―― と思う。

モニカをはじめとする異世界から召喚された騎士達の多くは、天空の騎士シルフィウスに従って都へ赴き、他の騎士達と戦った。自分がどういう状況に置かれているのかなど、考える余裕もなかった。ただ、身を守るために戦った。自分が恩を受けたシルフィウスやマリディアが戦わなければならない敵ならば、自分にとっても敵なのだろう・・・そう思っていたから。

だが、事が終わってみれば、お前たちは罪を犯したのだと言われた。

マリディアは罪人として捕えられ、その後、裁きを待たずに自ら命を絶ったと聞かされた。モニカたちは、異世界に来て間もないこと、彼らに扇動されたのだろうということから罪を減じられ、謹慎処分となった。

―― 何が正しくて、何が間違っているのか。

以来、モニカはずっと自問している。マリディアが悪なのだとしたら、この世界では、一体、何が正義なのか。よく分からない。この世界は皇帝を中心に回っていて、皇帝が正しいと思うものが、全て正しいのか。ここは、そんな単純な世界なのだろうか・・・繰り返し繰り返し、気が付けば同じことを考えている。それでも答えは、まだ出ない。

あの事件以来、モニカはずっと自分の神殿に引き籠もっていた。皇帝騎士団の騎士という、自分の存在意義が分からないまま、そして、元の世界に戻る事も出来ないまま、ただ、悶々としていた。事件から半年ほどして、謹慎は解かれ、カディスからの召喚状が届いたが、都へ行く気にはなれなかった。召喚状は、その後も何度か届いたが、病と称して応じなかった。そうして、気づけは三年の月日が流れていた。

そんなモニカの元に、今度は、天空の神殿からの召喚状が届いたのだ。

この国には、都にある太陽の神殿と月の神殿の他に、十五の神殿があり、それらは天地海十五神殿と呼ばれている。その中で、天空、大地、海王の三つの神殿がリーダー的な役割を持ち、残り十二の神殿は、この何れかに属している。モニカの配属された神殿は、天空の神殿に属す、

雷（いかずち）の神殿だった。

天空の神殿からの召喚——それは即ち、天空の騎士からの召喚ということだ。天空の騎士が、神殿に戻ったのか。その真偽を確かめたくて、モニカは重い腰を上げた。

神殿の階段を上り切ると、柱の影に人の気配を感じて、モニカは足を止めた。反射的に腰の剣に手をやって、気配を伺う。

「そんなに殺気を出しちゃ、相手に気づかれるぞ」

知った声が出て、モニカは詰めていた息を抜いた。

「・・・斬り合いは苦手なんだ」

「相変わらず、甘いんだな、お嬢は。騎士団の人間が、今更、何を言ってんだか」

からかう様に言って、柱の影から姿を見せたのは、雨の騎士、リフィスレント・リセントスだった。

「ま、イザという時には、俺が守ってやっから」

最後に会ってから半年。モニカの中ではこの男の存在は、もういい加減、他人とまではいかないまでも、顔見知りぐらいには格下げになっている。それが、以前と全く変わらない、馴れ馴れしいような鬱陶しいような絡み方をしてくるリフィに、モニカはあからさまに不機嫌な顔になる。十歳の年齢差——多分そのせいで、殊更リフィはモニカを子供扱いする。同じ騎士という立場であるのに、何かと押しつけがましく世話を焼かれる。いわゆる余計なお世話、という奴だ。モニカには、それが実に鬱陶しい。

「結構だ・・・そんなことより、天空の騎士は・・・」

不機嫌な声で問うたモニカに、リフィは少し苦笑しながら首を振った。

「ここにはまだ、戻っていないようだ」

「本当に、シルフィウス様が・・・」

「それは、どうかな。祭壇に剣がなかったから、この世界のどこかに、天空の騎士はいるんだろうが・・・」

反乱に加担し、皇帝に背いたシルフィウスが、天空の騎士でいられるとは思わない。

「では、この召喚状は・・・」

モニカが懐から出した書状には、くっきりと、双月星の紋章が押印されている。

「待っていれば、そのうち、誰か現れるんじゃないか」

曖昧に答えたリフィだったが、天空の騎士以外に、こんなことが出来る人物に心当たりがない訳ではなかった。魔道師長ランディス・フラーム。その人からの呼び出しなのだとしたら・・・つい、本音が口をついて出た。

「・・・厄介ごとは、勘弁して欲しいなあ」

「それが使命だと思って、諦めてくれ」

不意に横で声が出た。リフィは心中で、ため息をついた。

・・・あーあ。やっぱり魔道師様のお出ましたよ・・・

いつの間にか、黒衣の魔道師がそこに立っていた。

「ランディス・フラーム様」

モニカが直立姿勢を取った。

「と、て、も、元気そうだね、二人とも」

ランディスがにこやかに、しかし皮肉混じりに言う。共に病気と偽って都からの召喚を無視していたのだから、仕方がないことではある。今更、病気の振りをする訳にもいかず、二人は決まりの悪そうな顔をする。

「何しろ、人手が足りないんでね。いい加減君たちにも働いてもらわないくちゃ、ならないんだけど？」

ランディスが、何やら含みのある言い方をした。皇帝騎士団の一員として、皇帝に忠節を誓うのかどうか。改めて、その答えを迫られているのだ。今なら、騎士の剣を、ここに置いて、騎士を辞めることも出来る。出来るのだろうか・・・

リフィは、そっとモニカの横顔を盗み見た。

・・・このお嬢さんは、辞めないんだろうなあ・・・

変に生真面目な所がある娘だ。自分とは何ら関係のない世界の事を、自分の事のように考えている。係わってしまったのだから、他人事ではない、という。剣を持つ姿なんか、てんで似合わないくせに。

「・・・分かりました」

真っ直ぐな瞳をして、モニカが答えた。その答えに、ランディスがリフィを見る。そうになると、リフィは仕方なく、頷くしかない。

この娘を、一人になんて出来ないじゃないか。危なっかしくって。煙たがられているのは知っている。それでも、いつか元の世界に戻る時まで、自分だけはそばにいてやろうと思ってしまったのだから仕方がない。信じていたものに裏切られたことに傷ついて、前に進めなくなってしまうこの娘に、世界にはお前を裏切らないものだってあるのだと分かって欲しいなんて、自分はそんなことを考えてしまったのだから。

「では、任務の話を・・・」

言いかけたランディスを、モニカの凜とした声が遮った。

「その前に、一つ、お聞きしたいことがあります」

「何だい？」

「天空の騎士は、今、どちらにいらっしゃるのですか？」

モニカの問いに、ランディスはにっこり笑った。

ここ、笑う所じゃないよなあ・・・と、リフィは内心想う。年は若くても、彼は、帝国の魔道師長なんぞという肩書きを持つ。仮面を被るのがべらぼうに上手い。その心中を見透かすのは、容易ではない。

「・・・そうだな、君たちが任務を果たして、都に戻って来る頃には、お戻りだろう」

どうも、魔道師の言葉は、信用できない。リフィなどは、そう思う。

何とも、あやふやな物言いをするではないか。天空の騎士の名前を、突っ込んでやろうか・・・ふと、リフィはそう思ったが、モニカが心なしか嬉しそうな顔をしたので止めた。

魔道師は、シルフィウスに会える、とは言わなかった。だが、モニカがそうってしまったのなら、しばらく誤解させておいた方がいいのかも知れない。それでモニカが、少しでも元気になるのならば。

モニカに限って言えば、病というのも、あながち嘘ではない。体ではなく、心の病だ。知らない世界に連れて来られて、訳も分からず、お役目を押し付けられて、ただ、仕事に忙殺されていた。剣など握ったこともないお嬢さんが、訓練で毎日剣を振り回すだけでも、大変な事だったはずだ。

適当に手を抜けば良いものを、真面目さがそれを良しとしない。そんな彼女が、唯一、心の拠り所としていたのが、天空の騎士シルフィウスだった。剣の持ち方から、騎士の立居振舞まで、丁寧に教えてくれた。一番心細い時に、その手を取って助け起こしてくれた。その存在が、彼女の心の中で大きな位置を占める様になったのも、不思議なことではない。

だが、その敬愛するシルフィウスの存在が、頭から否定されたのだ。信じ、頼っていたものを失って、モニカは心に傷を負った。以来、その傷を癒すこともせず、自分の殻に閉じこもったまま、三年という月日を送ってきたのだ。

今度の任務は、良い機会かもしれない。この先も、この世界で騎士として生きていくのか。与えられた運命ではなく、自分が選んだ運命として、騎士を選ぶのか。彼女は、きちんと考えるべきなのだから。

与えられた任務は、カーシアの南の孤島にある、二つの神殿から、騎士の剣を回収すること。

この神殿の騎士達は、海竜族だったが、どうも召喚の使者と行き違いに、商船で商いに出ってしまったのだという話だった・・・にしても、魔道師長様なら、そんなことぐらい、魔法で何とか出来ないのか・・・

そんなリフィの心中を、読むかの様に、ランディスが付け加えて言った。

「それから、これはまだ、極秘扱いなんだが・・・」

続けて言われた言葉に、リフィとモニカは顔を見合わせた。

「もう少し、驚いてくれてもいいんだぞ」

―― 皇帝陛下が、崩御された。

ランディスはそう言った。皇帝だって、人間なんだから、死ぬ事だってあるだろう・・・王様の代替わりなんて、よくある話だ。異世界の人間である二人には、その程度の感覚だ。

そんな、二人の様子を、やれやれ、という感じで、ランディスは更に説明を加える。

「このランドメイアの皇帝は、全ての魔法を統べる力を持っているんだ」

「だから・・・？」

「皇帝が居なくなると、魔法の力が弱くなって、使える魔法に限られる」

「そりゃ、魔道師にとっては、大問題だな」

「そう、他人事のように」

ランディスは苦笑した。

この国は、今、滅びの際にいる。そう言ってみても、所詮、この男には、他人事なのだろう。

「まあ、いい。大事な任務だからね、気をつけて行ってきてくれ・・・」

言いながら、その姿が消えていく。魔道師の気配が消えたところで、モニカがぼつりと言った。

「・・・影が、無かった」

リフィは、気づいていなかった。虚像だけを、ここに送ってきたのか。使える魔法が、限られると言っていた。つまり、実体を飛ばす程の魔法は、もう使えない——ということか。

「・・・もし、魔法が使えなくなったら、この国は、どうなると思う？」

ふと思いついた様に、モニカが聞いた。

「・・・魔法なんて無くなったって、大抵、人間は生きていける、と思うがな」

例えば、車がなければ、歩けばいい。魔法は、便利な道具と一緒に。ただ、厄介なのは、この国の人間は、魔法に寄りかかり過ぎているということだ。ここでは、魔法が、皇帝や神様の存在と表裏を成している。つまり、魔法が無くなるということは、皇帝や神の存在をも消してしまう、という事なのかも知れない。

「でも、始めに魔法ありき、で始まった場合は・・・？」

「おとぎ話なんかじゃ、普通、魔法で出した物は、みんな消えて無くなるお約束だけだな・・・」

モニカの深刻そうな表情に気づいて、リフィは慌てて、言葉を継いだ。

「お嬢は、物事を難しく考えすぎなんだよ。騎士の剣を取ってきて、都に届ける。それが、俺たちの使命。そこまで付き合えば、もう充分だろう。終わったら、騎士を辞めて、元の世界に戻してもらおう」

「でも・・・」

「それから先は、あの魔道師の仕事だろう？」

「でも、リフィ・・・」

リフィはモニカの肩に手を置いて、その顔を覗き込む様にして言った。

「・・・このままじゃ、お前、壊れちゃうよ。この世界は、お前のいるべき世界じゃないんだ」

「でも、私は・・・シルフィウス様が・・・」

モニカの瞳から、涙が零れ落ちて、その先は言葉にならなかった。彼女が、その気持ちに決着をつけるまでには、まだ、時間がかかりそうだった。

水晶球に映し出される、リフィとモニカの様子を眺めて、ランディスは椅子にもたれ掛かり、

天井に向けて大きなため息を吐き出した。

ルトの召喚魔法——異世界から騎士を召喚したというあの魔法は、本当は、騎士を召喚する為に行ったのではなかった。召喚されるはずだったのは、実はダーク・ブランカ様だった。それが、どういう行き違いか、異世界の、何のかかわりも無い者達を巻き込んでしまったのだ。

・・・全てが、偶然のことなのか・・・あるいは、必然あつてのことなのか・・・

ランディスは、頭を振って、考えるのを止めた。事態は、もう動き始めているのだ。今となつては、問題を一つずつ片付けていくしかない。

気を取り直しランディスは、再び水晶珠に向きあい、その表面を軽く撫でる。

「・・・おいおい、勘弁してくれよ」

そこに、新たに映しだされたものを見て、ランディスは又、ため息を付いた。

シリウス達が駆けつけた時、そこでは激しい剣の斬り合いが繰り広げられていた。

ミサキと光の騎士ラスが、お互いに肩で息をしながら、それでも繰り出す剣の鋭さは失わずに剣を交えていた。その側で、クリスが取り付く島もないといった様子で、呆然として二人を眺めていた。

「どうしちゃったんだ？ミサキの奴」

昨日まで、剣を振り下ろすのもやっとだったミサキが、皇帝騎士団の太陽の騎士を相手に互角・・・もしかしたら、それ以上・・・に剣を斬り結んでいる。

「これが、魔剣の力なんだろうな・・・」

シリウスに答えるように、ラシャが言った。

「・・・瞳の色が」

カヤの声に、シリウスはミサキの瞳が光族の緑に変化しているのに気付いた。

「ミサキ・・・お前、本当に・・・」

ミサキは光族なのか？その記憶と共にミサキの失ったものは、一体何なのか・・・

「あいつ、剣に引き摺られてやがる」

ラシャが呟いた。

「えっ？」

「何かに、取りつかれてるって風じゃないか、あの目。どう見ても、正気じゃないだろう」

そう言われて、シリウスは再びミサキに目をやった。その時だった。大きな音をたてて、剣が床に落ち、くるくるとコマのように回りながら、彼らの足元に滑ってきたのである。

その剣の、紋章に目を止めたシリウスは、そこに天馬の紋を認めた。それは、光の騎士ラスの剣だった。そしてシリウスは、ミサキの剣が真っ直ぐラスの喉元に向けられたまま止まっているのを見た。二人の苦しそうな息遣いだけが、その場を支配していた。

誰もがどうしていいのかわからずに、立ちすくんでいた。そんな中で初めて行動を起こしたのは、ファレンだった。彼女は手を伸ばして、足元に飛ばされてきた光の騎士の剣を拾い上げたのである。それが合図となって、ラシャとシリウスが行動を起こした。

ラシャは剣を抜いてクリスを威嚇し、その動きを封じた。シリウスは、今にも倒れそうになっていたミサキの腰に左手を回してその体を支えようと、逆の手で腰の剣を抜いてラスの鼻先に突きつけた。

「お前たち、気でも違ったのか？一体何の真似だ？」

クリスが不機嫌な顔でラシャを見た。

「魔法陣で、俺達を都まで運んでもらいたい」

「冗談を言うな・・・」

「冗談なんかじゃないわ」

ミサキの手から取った剣を鞘に収めたカヤが、それをクリスに示しながら言った。ミサキは、シリウスに身をもたれかけたまま、すでに意識を失っていた。

「彼が剣の騎士です。彼を都まで送って。今、この帝国を救えるのは、この剣の紋章の剣を使える彼だけなのよ」

カヤの言葉を聞いて、ラスが不意に笑った。

「こりゃ、いい。剣の紋章の騎士ね。お前、この男が誰だか知って言っているのか？こいつはリート・ララング。この国を滅ぼすという予言の皇子様なんだぞ」

かつて、ラスは魔道師ルトの心盗りにかかり、その手先として操られていた事があった。太陽の四騎士のリーダー的存在であった、光の騎士。その自分が、無意識の内の出来事であったにしても、仲間に剣を向け、傷つけた。そのことは、彼にとっては最大級の屈辱だった。

「嘘だ。リート卿は光族の皇族じゃないか。生粋の光族だ。金髪で、緑の瞳・・・」

シリウスは反論しかけて、過日ミサキの語った夢の話を思い出した。

・・・夢の中のミサキは、光族の姿だったって・・・

「彼は闇の魔法と引き換えに、光族の金髪緑眼を失ったんだ。黒髪に黒い瞳。闇の色に身を染めて、フィリスの闇の魔法を手に入れたんだよ」

ラスが、シリウスの考えに追い討ちをかけるようにそう言い放った。ミサキが光族のリート・ララングであるという事実を突きつけられて、シリウスは言葉を失う。しかし、カヤの方は引き下がらなかった。

「それでも、彼が誰であろうと、この剣が選んだ騎士が彼だという事には変わりはないわ。この剣は、闇の魔法に対抗できる力を持つ唯一の剣。今、その力を使えるのは、このミサキだけなのよ。私達を都へ、ランディス様の元に連れて行きなさい」

カヤの剣幕に、ラスとクリスは顔を見合わせた。

「都に行っても、恐らく、私には会えないよ」

不意に聞こえたそんな声に、一同が驚いてあたりを見回すと、神殿の柱の影からランディスが姿を現わした。

「ラス、太陽の騎士はカディスで待機、との命が下っている。さっさと、都に戻ってくれ。早く戻らないと、サラのご機嫌が悪くなるよ」

「・・・ランディス様」

恨めしそうな顔で自分を見るラスに、ランディスは苦笑する。

「お前たちは、口伝鳥に謀られたんだ。どうも誰かが、私たちの邪魔をしているようだ。以降、この私が直に下した命令以外は信じない様にしてくれ」

「はい」

ラスとクリスは、慫然とした表情で答えた。

「都に戻ったら、とりあえず魔法の塔の警備を頼む。サラ達にもそう言っておいてくれ。それからカイに、太陽の剣の準備をするようにと」

「畏まりました」

「伝令に使って申し訳ないが、手ぶらで帰るよりは、いいだろう？」

ランディスが含んだ言い方をする。

「はあ・・・ご配慮、ありがとうございます」

ラスはため息をつく。

サラのご機嫌を直すには、役に立つ。しかし、こんな所まで来て・・・これでは、子供のお使いではないか。全く、面目がないとは、この事だ。太陽の四騎士のリーダーである、この自分が・二度と失態を繰り返す訳にはいかない。もっと、慎重に行動しなくてはならない。三年前の二の舞は、ご免だ。

ラスは深呼吸をして、心を落ち着けた。そこでふと、ランディアスの言葉の意味に気付く。
―― 私が直に下した命令以外は。

太陽の四騎士に命令出来る者。それは、皇帝と宰相と魔道師長だけだ。

皇帝が崩御した今、ランディアスの他には、宰相しかいない。

・・・まさか、ラーラ・マルクスか・・・

ラスが顔を上げた時には、ランディアスの姿は、もうそこにはなかった。

「さて、シリウス。君達には・・・」

ランディアスの声だけが、神殿に響く。

「こちらに来てもらおうかな」

ランディアスがそう言うと、次の瞬間に、シリウスたちの立つ床に魔法陣が描かれていく。

「な・・・ちょっと、待・・・」

シリウスが皆まで言わない内に、一同は光に包まれて、気が付けば別の場所に飛ばされていた。

同じ神殿の様であるが、中の装飾などが少し違う。そして何より、先刻までの身を切るような空気とは打って変わって、肌に感じる風が温かった。

シリウスが祭壇を見上げると、そこには見覚えのある紋章が刻まれていた。双月星の紋である。ということは、ここは天空の神殿なのか。

「あんた、理由ぐらい、説明するのが、筋ってもんじゃないのか？こんな、命に関わる様な事をやらせておいて・・・」

シリウスが、言いながら目の前にいたランディスに掴みかかった。と、その手は何も掴む事が出来ずに、空を切る。シリウスは、思いがけない成り行きに、バランスを崩して啞然とする。

「実体がないって、どういうことだなんだよっ。これだから、魔道師なんて奴は・・・」

「皇帝陛下が崩御なされたんだよ」

「な・・・」

「だから、魔法の力が、だんだん弱まってきている。あまり、時間がないんだ。そこで今度は、君に頼みがある。天空の騎士シリウス」

—— 天空の騎士シリウス。

ランディスがそう呼んだことで、シリウスの中に燻っていた疑惑が、一挙に凍解した。

「この剣を寄越したのは、やっぱり、あんたか」

「何しろ、人手不足なんでね。少しでも、可能性のありそうなところに送ってみた訳だが。その様子なら、試験には合格したようだね。剣を使っても、最初の頃より体力を持って行かれることもなくなってきた様だし、何よりだ」

—— ってええ・・・この所の疲れやすさの原因はそれかよっ。

・・・剣にはそれ自体に力がある。その力を使うのには、心身共にかなりの負荷がかかる。だから、剣が騎士を選ぶっていうのは、その力を使いこなせる者・・・要するに、その負荷に耐えられる者を選ぶってことなんだ・・・

今更ながら、ラシャの言葉を思い出す。

「・・・つまり、あんたは俺を試したんだな？」

シリウスがあからさまに不快な顔をする。

「君は、皇帝騎士団の騎士に、なりたかったんだろう？」

それは確かにそうだ。だが、こんなじゃなくて・・・

そうか、つまり、こいつが、自分の幼い頃の夢を踏みにじってくれた訳だ。殴ってやらなきゃ、気がすまないところだが、相手が実体でないのだから、それは適わない。

・・・だから、魔道師なんてやつは、嫌いなんだ・・・

「俺が、あんたの頼みなんか、聞くとどう思うか？」

シリウスが剣呑な視線を向けると、ランディスからはどこか余裕を伺わせるような含み笑いを返される。それがまた癢に障る。

「おや・・・言葉の使い方を間違えたかね。「頼み」ではなくて、これは「命令」なんだ。私は、

皇帝騎士団の最高責任者だからね。君が騎士になった以上、君には私の命令を聞く義務があるんだよ。拒否すれば、反逆罪で即幽閉、ということになってしまう訳だが、どうするね？」

「・・・貴様という奴は・・・」

「そもそも、ミサキの為に、君は僕の命令を聞くべきだよ」

「ミサキ？」

「ああ。このままでは、彼は死んでしまうかもしれない」

「・・・」

確かに、ミサキは魔剣を手に入れた。だが、さっきの戦い方一つみても、危うさが付きまとう。ラシャの言った様に、あの剣は、ミサキの生命を脅かす代物に間違いはないのだろう。通常の騎士の剣ですら、体にかかる負荷の大きかったことはシリウス自身が身を持って体験したことである。それが魔剣と呼ばれるほどの代物なら・・・シリウスが、事態の深刻さを悟ってようやく押し黙った。その様子に、ランディスは満足げな顔をする。

「では、話を聞いてもらおうか」

そう言って、ランディスは三年前の事件について語り始めた。

事の発端は、星見の塔が、“ランドメイアが消滅する”という予言を出したことだった。だが当時、魔道師長であったルトは、その事実を隠ぺいし、星見の天球を封印して、星見が出来ないようにしてしまった。そして、真実を知る星見たちを幽閉してしまったのだ。

その理由は、更に二年前の出来事に遡る。

実はその頃から、まだ年齢も若く、衰えなどという言葉とは無縁であるはずのラディウスⅡ世の力に、陰りが見え始める様になったのだ。このランドメイアは、大魔法使いと皇帝の両者の力の均衡によって保たれている世界といっても過言ではない。それが、大魔法使いの長きに渡る不在という現実により、皇帝により多くの負担を強いているのだろうことは想像に難くなかった。そしてルトは、その軋みが大きくなならないうちに、早急に後継者を決める必要があると考えたのだ。

その結果、宮廷内で賛否の分かれていたリート皇位の皇位継承権を、ルトは強硬に認めさせてしまったのである。その反発は決して小さいものではなかった。

リート・ラカランダはその身に剣の紋章を持って生まれながら、生粋の光族ではなかった。そしてその異種の血の存在を殊更に主張するように、彼の輝くような金色の髪には、漆黒の闇色の髪が一筋混ざっていた。

その事実によって、神殿の神官たちは揃って彼に皇位継承権を与えることに異を唱えた。その闇の色は間違いなく、フィリスの刻印と呼ばれる忌まわしき印であり、リートは皇位を継ぐに相応しくないと判断したのだ。フィリスの刻印とは、ダーク・ブランカの後継者となりうる程の、強大な魔力の持ち主に現れるといわれる印のことである。

光族の皇族として生まれながら、魔力を持つ存在。

神聖な光族の血に、どんな呪われた血を混ぜれば、そんな異端が生じることになるのか。当時の宮廷は戦慄と動揺に支配された。そして当然のように人々は考え始める。

――カリディスの予言書にある、帝国を滅ぼすという皇帝。

――もしかしたらそれは、彼のことなのではないか、と。

だが、その後も皇族の中に後継者の証である剣の紋章を持つ者は現れず、帝国の未来をリートに委ねるのか否かという論議が、その後十数年に渡り延々と繰り返されることになる。そしてそれに関して未だ明確な答えは出ていない状況で、又、多くの反対派の存在を承知しながら、ルトは半ば強引にラディウスⅡ世を説き伏せて、リートに皇位継承権を与えさせたのである。

――そして、二年。

今度は、神官ではなく、魔道師の集う星見の塔が滅びの予言を出す。

それも、帝国の滅亡どころか、ランドメアの消滅という、遥かに深刻な予言だった。

「都合の悪い予言をする、星見はいらないと？」

シリウスが呆れ顔をする。ルトという魔道師は、それで事態の收拾が図れると本気で考えていたのか。

「まあ、混乱を避ける為には止むを得なかった、とも言えるがな。そういう訳で、今、ランドメアでは星見ができない」

「で？」

「出来ないと困る」

「だから？」

「君に、何とかして欲しいんだ。その為の天空の騎士なんだから。星見の出来ない理由は、「天空の扉」が、ルトの魔法で閉じられてしまっているからだ。で、その扉を開く鍵が、君のその双月星の剣、という訳なんだが・・・」

何だか、便利に使われている気がしないでもない。だが・・・

「このランドメアが消滅するって、本当なのかよ」

「星見の予言ではね」

その正確さでは、定評のある、ランドメアの星見の予言だ。

「・・・そんな、途方もないことが」

「私たちは、今、何とかその予言を変えようとして奔走している・・・」

「そんなこと、出来るのか」

「それは、分からない。でも、何もしないで後悔するのは、ご免だからね。出来る事は何でもする・・・例え、手段を選ばず、人でなし呼ばわりされたとしても」

ランディスの最後の一言に、シリウスは決まりの悪い顔をする。

「・・・始めっから、訳を話してくれれば、俺だって・・・」

「こんな重大な話を、誰彼と見境無く出来る訳ないだろう。信用に値する者でなくてはね」

「つまり、俺たちは、信用してもらえたってことか？」

「騎士の剣が、君と共にある限り」

ランディスが微笑んだ。

俺は、こんな風に信頼されて、自分の力が必要とされる場所・・・それを探していたのかも知れない。

シリウスは、ふと思った。

——多分、ずっと探していたんだ。

リヴィウス家の息子として、当たり前のように与えられた場所ではなく、俺だからこそ必要とされる、そんな場所を。そんな思いを自覚する。そしてそれは、シリウスが天空の騎士としての役割を果たす事に対する迷いを消し去っていった。

神殿の祭壇の上方に、星図の描かれた壁画があった。星の位置を示す場所には、色とりどりの宝石がはめ込まれている。そして、その中央に、太陽を現わす大きな球体が埋め込まれていた。それは、金色に輝きながら、淡い光を発している。

シリウスはランディスに言われた通りに祭壇によじ上ると、その金色の光に天空の剣を軽く押し当てた。と、手に小さな抵抗感があって、剣が押し返される。再度、今度は少し力を込めてやってみる。すると、やはり同じぐらいの力で、剣は押し戻された。

ランディスからは、剣をこの光の玉に差し入れろと言われていている。作業自体は単純だが、もしかしたらそれは、考えているよりも、もっと難しいことなのかもしれない。シリウスはそう考えて、剣を両手で握り直し、その手に力を込めた。その剣先を球体に触れない様に、ただそこに意識を集中する。と、剣先から光がほとぼしり、光が球体の光と交じり合う様に、少しずつ一体化していく。そして、その光に引き寄せられる様に剣が動き出した。剣がゆっくりと、球体の中に引き込まれていく。今まで感じた事のない感覚に、つい手に力が入って思わず剣を押ししてしまった。すると、剣はその身を半ばまで球体の中に差し入れたまま、そこでぴたりと止まってしまった。

「・・・あれ？」

押しても引いても、剣はびくともしない。そこから発せられる光も、みるみる弱まっていく。シリウスの中に、焦りが生じる。

「大丈夫・・・心を落ち着けて」

不意に耳元で声がした。どきりとした瞬間に、剣を握る自分の手に優しく手が添えられた。

「・・・ファレン？」

その手から、力が注ぎ込まれる感じがした。

「力を込めてはいけません・・・心で、念じるのです」

「・・・ああ」

そういうことか。そう思いながら再度意識を集中すると剣に光が戻り始めた。そして剣は、太陽の中に滑らかに吸い込まれていく。剣が柄の部分まで吸い込まれると、そこに描かれている紋章が光を帯びる。すると、球面にひびが走った。次の瞬間、軽い音と共に、その球体は弾け飛んだ。と同時に、壁面の星々が一斉に瞬く。そこから無数の光の筋が上空に伸び、天井の一点を照らし出す。そこに描かれた双月星の紋章が光を集め、それはそのまま天井を突き抜けて光の柱となり、上空へと真っ直ぐに伸びていく。そして、光の柱は、彼方の空へ上っていった。

「ご苦労さま、天空の騎士」

ランディスの声を聞いて、シリウスは自分が役目をやり遂げた事を知った。安堵感と共に、急に疲労感を感じて、シリウスは壁に手を付いた。

「大丈夫ですか？」

ファレンがシリウスを気遣う様に、その肩にそっと触れた。その場所から、力が注がれて疲労が和らいでいくような気がする。そんな感触に、脳裏に先刻の光景が甦る。

— この力は・・・

「・・・あなたは、一体」

訝しむ様に呟いたシリウスに、ファレンはちょっと寂しそうな表情をして目を伏せた。

「あなたが力を貸してくれるとは、思いませんでしたよ」

そしてランディスがにこやかに言った次の言葉で、ファレンの正体は明かされた。

「太陽の神殿の巫女姫様」

「みっ、巫女姫？・・・なんですか？ファレン・・・シア様」

カヤが心底驚いたという顔をする。

「巫女姫様って？」

事情の呑み込めないラシャが、カヤに尋ねる。

「つまり、神殿の巫女の中で、一番位の上の、光の巫女のことよ。光と昼の女神ファリスの声を聞く事ができる巫女。光族の中じゃ、神様と同じような存在なのよ」

「・・・光の巫女・・・ファレンシア様・・・あなたが・・・」

シリウスが、あっけにとられたという感じで呟く。急に、その存在が遠く感じられた。

「手を貸して下さったということは、あなたの探す真実を、見つけたということなんですかね？」

ファレンがラシャの手を借りて祭壇から降りるのを見ながら、ランディスが尋ねる。

「・・・何が真実なのかは、まだ分かりません。でも、一つずつ、あるべきものをあるべき場所へ戻していくことが、この混乱を収めることになるという、あなたのお考えには、賛同いたします。星見のことも」

「なるほど・・・巫女姫様は、なかなか手強い」

ランディスが苦笑する。

「あのう、ファレンシア様？」

カヤが遠慮がちに声を掛けた。

「・・・ファレンでいいですわ、今まで通りに」

ファレンが微笑んでそう言う。

「じゃ、ファレン。あなたが巫女姫様だっていうなら、ラシャがずっと悩んでいる問題を、解決してもらえないかしら？」

「おいっ」

ラシャの制止にもお構いなしで、カヤは続ける。

「だって、ずっと気にしてたじゃない。元の世界に返してもらおうっていう約束は、守ってもらえるのかって」

「ああ、その事なら、済まないが、もう少し待ってもらえないか」

カヤの質問に答えたのは、ランディスだった。

「やっぱり、あんたか・・・」

ラシャはランディスを睨みつける。

「ちゃんと、説明するから・・・」

「ご迷惑をおかけしたのですから、私が、お話をしますわ」

ファレンが進み出て、ラシャの正面に立った。

「私が魔法の塔に、ランディス様をお尋ねしたことが、そもそもの始まりでした・・・」

ファレンは代々の巫女姫がそうだった様に、巫女姫となってから神殿から外に出ることはなく、太陽の神殿の奥深くに住み、日々、太陽と昼の女神ファリスに祈りを捧げ、その声を聞いていた。そのファリスが、ある時、こう言ったのだ。

―― ランドメイアの新たなる守護者となる者。そは、黒き闇を祓う者。そは、黒き印を持つ者。しかしそは同時に全てを消し去る者。

それは、すでに大魔法使いであるダーク・ブランカが予言していたことだったが、その予言をそもそも光族の神官たちは信じていなかった。要はその予言に従い魔道師ルトがリートを皇位継承者にしたせいで、三年前には反乱騒動まで起こったのだ。だから、信じたくなかったのだ。

リートが封印の地に送られて混乱が収束していく中で、光族の多くはリートの存在を「ないもの」として考える様になっていく。ランドメイアには、光の象徴である皇帝陛下がいらっしゃるのだから、闇が入り込む隙などある筈はないのだと。

だが、ついに、ファリスの神託が下った。

皇帝の崩御が間近に迫っており、しかも、その後を継ぐのは、予言書で示されていた人物と同じ。

―― 即ち、リートであると。

そこで、宮廷は大騒ぎになった。リートを呼び戻すべきか、否か。そもそも、呼び戻す方法はあるのか。皇帝の崩御に間に合うのかと。それはもう、見ていられない様なひどい有様だった。話し合いになる様な状況ではなかった。互いに自分の主張をヒステリックに叫びあい、罵り合う。そもそも、リートが生まれてから幾度となく論議され、解決策を見つけられずに、答えを先延ばしにしてきた問題なのである。一朝一夕に解決できるものではなかったのだ。

そして、仕舞には、巫女姫がファリスの声を聞き違えたのではないかと、という声まで上がりはじめた。

「・・・実は、私も自信がなかったのです。ファリスの声は、確かに聞いたのです。でも、相反する事実を内包するその言葉に、確証が持てなかった」

「それで、巫女姫様は、私の元に来て、こう言われた。「真実はどこにあるのか」と」

ランディスが苦笑しながら言う。

「そんな事が分かるのは、神様だけだろう。神様がそういうのなら、例え矛盾があっても、全てが真実なんだろう。でも、思い詰めている巫女姫様に、そんな事を言ってもね。だから、「ご自分の目で、お確かめになったらいかがですか」と、そうお答えした」

「それで、彼女は、ウインザーテラスくんだりまで、やって来たのか？」

ラシャが、今ひとつ納得いかないという顔をする。

「君達と旅をすることで、何か見えてくるものが、あるだろうと、そう思ってね」

「つまり、あの時、俺に命令したダーク・ブランカ様は・・・」

「ダーク・ブランカと名乗った覚えはないんだが・・・あれは、私だ。魔法でファレンに、私の影を被せて・・・」

「・・・急に顔が変わったのは、変身魔法のせいじゃなくって、そもそも掛けていた魔法が切れたせいなんだな？」

「陛下が崩御されてから、どうも魔法の制御が上手くできなくてね。急に魔法が解けちゃったから、咄嗟にでまかせも出なくてさ。つい、ファレンシア・クララバートと、本名を名乗ってしまったんだが、お前が世情に疎くて助かった。あの時点で、素性がばれても、可笑しくはなかったからね」

ファレンシアが巫女姫の名前だと、光族なら、常識なのだとと言われて、ラシャは慥然とした。もしかしてそれが、任務を与えられたのが、自分だった本当の理由なのかも知れない。

そうこうしているうちに、ミサキが身じろぎをして目を覚ました。

「・・・何だよ、人が気持ちよく寝てるのに・・・頭の上で騒々しい」

その言葉を聞いて、シリウスは眉をひそめた。その言葉は間違えようもなくカリディア語だったからだ。そして、ゆっくりと開かれたミサキの右の瞳は、きれいな緑色に輝いていた。

・・・光族の緑・・・

複雑な顔をしているシリウスの目の前で、ランディスが屈んでミサキの顔を覗き込む。

「おやおや・・・やはり、剣の効き目が現れてきたねえ」

「剣の効き目？・・・ってどういうことだよ。お前、まだ何か隠してるんじゃないだろうな？」

詰め寄るシリウスに、ランディスが慌てて続ける。

「剣の紋章の剣は、そもそも対魔道師用の武器なんだよ。魔法の力を吸収する強力な力がある。だから、持っているだけでも、少しずつ剣に魔力が吸い込まれていく。ミサキには、私の祖父である魔道師ラリサの強力な封印魔法が掛けられているんだよ。この剣は、その封印を解く為に手に入れてもらったんだ。剣を持つことで、ラリサの魔法が吸収されていけば、彼に掛けられた封印はいずれ解かれる」

「じゃあ・・・」

「彼の記憶も、光族としての姿も、追々戻ってくるはずだよ。ただし、ここで問題がひとつ。さっき光の騎士と斬り合いをしたらどう？あのせいで、剣の力が少し発動し始めている」

「力の発動？」

「太陽の称号を持つぐらいの騎士になると、そこそこの魔法も使う。その騎士と剣を交えれば、この剣は、喜んで相手の魔力を吸い取る。そして、魔力を吸い取った分、使う者にその対価を求める」

「対価・・・？」

「この剣を手に入れた時、フィリスに言われたらどう？ミサキ」

ランディスにそう確認されて、ミサキが頷く。

「ああ。対価って・・・つまり、命のことだ」

——いの、ち、だと？

ミサキが、その一言をあまりにあっさりと言ったことに、シリウスが怒りを顕にする。

「それは、この剣を使うってことは、ミサキの命を縮めるってことになるのか？」

「それが、魔剣と呼ばれる所以だ。だから、この剣は、無闇に抜いてはならない」

「そんな・・・それが分かってて、お前、何で、剣を持ってきたんだよ」

シリウスが、咎めるように言う。

「何でかな・・・ただ、このままじゃ、何も変わらないって気がしたから・・・かな。俺には知らなくちゃならない事があって、やらなくちゃいけない事がある。ずっと、そんな風に思ってた。朱里に会いたいと思うのも、朱里が、その答えを知っている気がするからなんだ」

こいつも同じなのか。自分の場所を探しているのか。――命をかけてか。

「ばかっ・・・」

にも程がある。シリウスは思わず、ミサキを抱き寄せた。なんだってこいつは、考えうる最悪の道を進もうとするんだ。もっと・・・もっと楽な方法だって、あったろうに。命を引き換えにしなければ出来ないような方法を、選ぶ馬鹿がいるなんて。こいつは本当に馬鹿でどうしようもない。

「・・・シリウス？」

ミサキが異世界の人間だろうと光族だろうと、そんな事はもう関係ない。ミサキが誰であろうと・・・自分は、ミサキを守る。たった今、そう決めた。馬鹿に馬鹿って自覚させて、馬鹿を思いとどまらせてやるんだ。

「・・・お前。この先、勝手に死ぬような真似をしたら承知しないからな。覚えとけよ、お前は、俺の親友なんだから・・・もし万が一って時は、ちゃんと断って行く義務があるんだってこと、絶対・・・忘れんな・・・よ」

言いながら不意に込み上げた涙を、シリウスはミサキの肩に顔を押しつけて慌てて誤魔化する。それでも、

「・・・分かってるよ」

と、少し照れくさそうに返された言葉のあとで、ありがとうと小さく囁かれたから、涙を誤魔化しきれたかどうかは微妙だ。少しの気恥ずかしさを軽いため息で吹き飛ばしてシリウスが顔を上げると、そこでタイミングを図ったようにランディスが言った。

「我々だって、大事な皇帝陛下になるお方を、そんな危険な目に合わせるのは、本意ではないよ」

その台詞に、シリウスは身を乗り出す。

「ミサキを危険な目に遭わせないで済む方法が、何かあるのか？」

「いや・・・残念ながら、それは私には分からない。ただ、三年前、ラリサの命で、その剣を使い魔道師ルトを封じた騎士がいる。彼なら、何か知っているかも知れないという話なんだが」

「・・・って、生きているのか？」

ランディスが頷いた。剣の紋章の剣を手にして、死ななかつた奴がいる。それは、ミサキが命を落とさずに済む方法があるということになるのか・・・分からないけれど、少しでも可能性があるのなら・・・

「彼の名はキラストネス・フィリア。大地の騎士だ。今は帝国の東の町、ロゼリアにいるはず

だよ」

第6章 絢爛豪華な従兄妹と時の虜囚

「全く、魔道師なんて奴は、ホンっとに、当てにならない、ぜっ」

息を切らせながら言ったシリウスに、ファレンが苦笑した。

「魔法の力が弱まっているのです。魔道師長様が、悪いのではありませんわ」

「ああ、そうだな。奴は悪くない。なら、俺たちは、どうして、こんな目に、あってるんだよ？」

薄暗い神殿の中を、五人は、ただひたすらに走っている。何故、走るのかといえ、後ろから追いかけてくる者があるからだ。

どこをどう走っているのか、果たしてこれは出口へ向かう回廊なのか、皆目分からない。右も左も分からない場所で、いきなり逃げる羽目になる。最悪だ。

・・・本当に、今度会ったら、ただじゃおかないぜ、あの魔道師野郎・・・

一行は、ランディアスの魔法で、帝国の東の街、ロゼリアにある大地の神殿へ飛ばしてもらった。

――はずだった。

ところが、着いたところは、大地の神殿ではなかったのだ。

その神殿の中には、植物の蔓をあしらった装飾がそこそこに施されており、それは、緑の騎士の紋章だと思う、というファレンの話から、どうやら、彼らが飛ばされたのは、緑の神殿だということが判明した。そこは大地の神殿から、そう遠くない場所にある神殿だという。

一同がやれやれとため息を付いたところで、誰何を受けた。そちらに目をやると、神殿の警備兵らしい一団がこちらに近づいてくる。

「俺達は、怪しい者じゃない。皇帝騎士団の騎士だ。魔道師長ランディアス様の命で・・・」

シリウスが皆まで言わぬ内に、

「皇帝騎士団だと？言うに事欠いて、その様な戯言を・・・怪しい奴っ」

と、返された。

彼らの騎士らしからぬ風貌が、完全に裏目に出た格好である。更に、

「魔道師長様の名を、軽々しく用いるとは、不屈き千万。捕えよっ」

という展開になり、捕えられても困るので、逃げる、という道を選んだ訳なのだが・・・

「おいっ、このままじゃ、埒があかないぞ」

ラシャがシリウスを促す様に声を掛けた。

「そうだな」

剣を使ったせいで体力を大幅に消耗し、まだちゃんと回復していなかったミサキに、か弱い巫女が二人。

見ればすでに、この三人は息があがっている。シリウスとラシャの二人で、お荷物三つを抱えての逃走は難しい。おまけに、こちらには地の利もないのだ。

シリウスは足を止めて踝を返し腰の剣を抜いた。それを見て、ラシャも心得たとばかりに剣を抜く。見たところ、向こうには、騎士のいでたちをした者・・恐らく、緑の騎士だと思われる人物が、一人。他は、雑魚だけだ。シリウスは、無闇に逃げ続けるより、相手を切り伏せて突破した方が活路が開けると考えたのだ。

すると彼らに追いついた緑の騎士と思しき人物が、剣を構えているシリウスとラシャを見て呆れた様な声で言った。

「神殿の中で、その神殿の守護騎士を相手にしようなんて、随分と物好きな方たちですこと」

それは、少女の声だった。

「女？」

「子供？」

シリウスとラシャが、顔を見合わせる。と、緑の騎士が、松明を持つ兵士の側に立った。すらりと背の高い、光族の少女の姿が現れた。少女は、実に不愉快そうな面持ちをしていた。

「皇帝騎士団の名を騙る不届き者から、その様な蔑みを受けるなんて・・絶対に、許しませんわ。お兄様に、きつくお仕置きしていただきますからね。覚悟なさい」

少女が剣を抜く。反射的に身構えたシリウスとラシャだが、二人が剣を振るうことは出来なかった。というのも、少女の剣からいきなり蔓の様なものが伸び、あれよという間に二人を縛り上げてしまったからである。

「・・こういうのも、あり、なのか？」

呆気に取られたシリウスに答えたのは、勝ち誇った様な少女の声だった。

「わたくしは、殺生は好みませんの。全てを包み込む緑たちの様に、邪な心さえも包み込んで正しき方（かた）へ導くのですわ。それが、緑の騎士の使命なのですからっ」

そう言い放って、高笑いと共に去っていく少女の後姿を、シリウスはげんなりとした顔で見送った。

・・・輝くような金色の髪。宝石の様な緑の瞳。そして、あのっ、人を見下した様な偉そうな態度っ。生粋の光族だよもう。何だかなあ・・・

少女の容姿に、そしてその言動に、すっかり毒気を抜かれたシリウスは、そのまま他の仲間と共に縛り上げられたまま神殿の外に連れ出され、馬車に放り込まれて、領主の館へと連行されていった。

ロゼリアの領主シャルロット・オージェは、午後の穏やかなお茶の時間を、甘やかな薔薇の花の香るバルコニーで過ごしていた。眼下に広がる薔薇園は、彼が丹精こめて作り上げた自慢の庭である。その薔薇の花の合い間に、愛しい妹の姿を見つけて、シャルロットは口元を綻ばせた。

お茶の時間に遅れた揚句、ドレスも纏わずに騎士の姿で現れるなんて。騎士の仕事より、貴族の姫である事を優先するように、と、いつも言っているのに。

「本当に、仕方のない子だなあ・・叱ってやらなくちゃね・・」

と、呟いた次の間、彼女の後ろから、ぞろぞろと列をなしてやって来る、薄汚れた者たちを見つけて、彼は、その眉間に深い皺を刻み込んだ。

全く、お茶の時間が台無しだ・・

「遅くなりました、シャルルお兄様」

「・・シルヴィ。一体、何事なんだい？せっかくのお茶の時間が、台無しじゃないか」

そう問うたのは、やはり金色の髪に、緑の瞳の光族。シルヴィと呼ばれた少女よりも、更にキラキラと目に眩しい青年だった。その身を飾る数々の宝石が、午後の穏やかな陽に反射して、目に痛いほどキラキラと輝いているのだ。

地方の一領主にしては、この館の大きさといい、その身に纏うものといい、かなり贅沢なものである。

「でも、お兄様。緑の神殿に忍び込んだ、不届き者を捕えたのですわ」

「そのような者達、取りあえず牢にでも放り込んでおけばいいじゃないか。私が、お前との、このお茶の時間を、どんなに大切に思っているか知っているだろうに」

シャルロットがシルヴィをたしなめる様に言って、妹を軽く抱き寄せた。彼が動くたび、その身に纏わり付いている光が鬱陶しいまでにキラキラと輝く。

・・・何で、こいつらは、こう、無駄にキラキラしてやがるんだ・・・

何だか自分の理解できない光族の価値観で交わされる会話に眩暈を覚えて、シリウスは深く息を吐いた。

「ごめんなさい、お兄様。でも、この者達は、皇帝騎士団の名を騙り、騎士のいない神殿に忍び込んで、騎士の剣を盗み出している、“極悪人”かと思われるものですから・・」

そう言ってシルヴィの差し出した三本の剣を見て、シャルロットはその紋章を確認した。

双月星と雪華。成程、いずれも騎士が行方不明になっている神殿のものだ。

そして、もう一つの剣は・・

その剣の紋章を見て、シャルロットの顔は俄かに陰しいものになった。

「・・おい、この剣を神殿から持ち出した命知らずは、一体誰だ？」

そう問われて、シリウスはミサキを庇う様に体を動かして彼を隠そうとしたが、ミサキはそんな事を気にする風もなく、自ら一步前に進み出た。

寸分の間。シャルロットが、ミサキをじっと見据える。そして――

「・・・お前、リート・・・か？」

シャルロットが徐に言った。

ランディスによれば、リートという名はどうやら自分のものらしいのだが、まだ記憶が曖昧なミサキは、どうもまだその確信が持てずにいる。だから、そう問われてもすんなり頷くことは出来ずにいた。だが、どうやらシャルロットの言葉は、問いではなく確認だったようで、ミサキの返答も待つまでもなく、彼がリートだと確信したらしいシャルロットは、そのまま妹に命じる。

「縛めを解け、シルヴィ」

「お兄様？」

「見忘れたか？こいつは、リートじゃないか。ほら、お前と同じ年の従兄弟、リート・ラカランダだ。子供の頃、よく一緒に遊んでいただろうに」

シルヴィは、怪訝そうな顔をしてミサキを一瞥した後、急に動揺した様に慌ててそっぽを向いた。

「・・・覚えていませんわ」

言いながらシルヴィは、側にいた兵士に命じて彼らの縄を解かせた。そして、その作業を見届ける間もなく、

「私、着替えて参ります」

と、怒った様に言って、シルヴィは背を向けて歩き去って行ってしまった。

「おやおや、レディの歩き方じゃないねえ、あれは・・・シルヴィの初恋の君だったからね、お前は。急に大人びて現れたんで、気まずかったんだろうよ」

シャルロットが妹の心中を見透かす様に言って、苦笑した。

リートと従兄弟、ということは・・・シリウスは考える。貴族といっても、皇族の血を引いている筈だから、別格の存在だ。国が滅ぶかもしれないと、大騒ぎをしている宮廷の者たちを尻目にしての、この優雅な暮らしぶりも、それならば納得といったところか・・・

「・・・最後に会ったのは、十二の年。もう六年も前の事だからねえ。身の丈だって、シルヴィより小さくて、かわいかったお前が、こんなに大きくなって・・・」

シャルロットは立ち上がると、ミサキをそっと抱き寄せた。

「そうか・・・戻って来たんだな・・・よく無事で・・・」

ミサキは落ち着かない面持ちで、シャルロットに身を預けている。

記憶を失って、天涯孤独の身の様な気がしていた。両親の話も、血縁の者がいるという話も、どこからも聞こえて来なかった。だから、自分をこんな風に、温かく抱き締めてくれる存在があることなど、想像もしていなかったのだ。

シャルロットの好意で、汚れていた服を着替えた一同は、改めて、“ご領主様のお茶の時間”に招待された。主人であるシャルロットのテーブルには、従兄弟として遇されているミサキと、名前を名乗った時点で、光の巫女だとばれてしまったファレンが同席した。ラシャとカヤ、それ

にシリウスの三人は、シルヴィがホストを務める隣のテーブルに席を用意されていた。

お茶を運んできた初老の侍女が、ポットからお茶を注ぐ間、ミサキは緊張した面持ちで、畏まって座っていた。目の前にいるキラキラと眩しい青年が、従兄弟だと言われても、記憶が曖昧な為に、どうにも実感がないのだ。こんな畏まった席に座るのだって、今の彼にしてみれば、生まれて初めてのことと同じなのである。

ミサキのお茶を注ぎ終えた侍女がテーブルの反対側に回りこんで、今度は、シャルロットのカップにお茶を注ぐ。何気なくその顔を見た時、ミサキの脳裏を何かが過ぎった。

「・・・カタリナ・・・？」

ミサキの掠れる様な声を聞きとめた侍女の手が動揺した様に震え、ポットの口がカップの縁を弾いて音を立てた。

「申し訳ございません」

侍女が慌てて頭を下げた。

「何だ、覚えてるんじゃないか」

シャルロットが我が意を得たり、という顔をした。

「例え記憶が無くなったって、彼女の事を忘れるはずはないって、私の言った通りだろ？シルヴィ」

シャルロットが、となりのテーブルにいる妹に声を掛ける。

「分かりました、掛けはお兄様の勝ちで、結構ですわ」

シルヴィが不機嫌そうに答えた。

「・・・カタリナ・・・」

ミサキは何かを確かめる様に、今度はゆっくりとその名を呟いた。すると、彼を懐かしそうに見詰める侍女を映したその瞳が変化を始めた。茶色だった左の瞳が、右と同様の宝石のような緑色に変わっていく。それを見てシリウスが眉根を寄せた横で、ミサキが勢い良く立ち上がった。

「・・・カタリナ！」

今度ははっきりと名前を呼ばれて、侍女が押さえていたものを解き放つ様にミサキに駆け寄って彼を強く抱き締めた。

「本当に・・・良くご無事で・・・」

カタリナの涙が自分の肩を濡らすのを感じながら、ミサキの中で彼女と過ごした日々の記憶が、鮮やかに甦っていく。気がつけば、ミサキの瞳からも涙が零れ落ちていた。

シリウスはその感動の対面を冷めた表情で見ている。ミサキの記憶が戻り始めた事を嬉しく思う反面、変わってしまった瞳の色の分だけ、ミサキが少し遠くなってしまった様な気がして、ため息を洩らす。何より、このキラキラ兄妹とミサキが従兄弟というだけでも、彼には何だかなあ・・・という感じなのだ。

そんな事を考えながら視線を逸らすと、豪華なドレス姿のシルヴィが目に入った。すると同じようにミサキから視線を逸らせた彼女が、不意にこちらを向いたので、視線がまともにぶつかってしまった。自分の事を最初に思い出して欲しかった・・・彼女の不機嫌そうな顔にはそう書いてあった。

「・・・記憶喪失なんだから、覚えていなくて当然なんだ。そんなに、気にすることは・・・」

つい口をついて出てしまったその慰めの言葉が、失言だったと思い知るのに時間はいらなかった。

「カタリナは特別なんですわっ！リートが生まれた時から、側にいるのですからっ！」

と、物凄い剣幕で言い返された。

「ああ・・・そうなんだ」

シリウスはあっけにとられるしかない。

光族の、しかも女の子。それは、世界中で一番扱いづらい代物なのだと、改めてそう思い知る。

下手に関わりになるのはよそう・・・と、シリウスはそこで心に固く誓った。

カタリナは、そもそもリートの母親に仕えていた侍女だった。リートが三歳の時に母親を亡くして以来、母代わりとなり、育ててくれた。そういう存在なのだという。

「魔道師長様がリートをこの地に寄越したというなら、我々に、彼が記憶を取り戻す手助けをしるという事なのだろう。そういう事なら、協力は惜しまないよ」

シャルルロットが言う。

「いや、俺達は、大地の騎士に会いに来たんだ。大地の騎士が、こいつの剣の事を知っている騎士だって聞いて・・・」

シリウスが言うと、シャルロットは途端に顔を曇らせた。

「・・・済まないが、大地の騎士に合わせる事は出来ない」

「どうしてだよ」

「リートの記憶がないのなら、会わない方がいいと思うからね」

「だから、その理由は？」

にこにこ愛想の良かったシャルロットの顔が、ふと真顔になった。

「・・・もうこれ以上、彼が、傷付くのは見たくないからだよ。リート・・・」

呼ばれて、ミサキがシャルロットを見る。

「その剣を私に預けて、またここで私たちと一緒に暮らさないか？記憶なんて、ここにいれば、そのうちに戻る。ここは、お前が育った場所だ。木々の緑も芳しい花の香りも眩しい陽の光も・・・何もかもに、お前の思い出が残っている場所なのだから」

突然の申し出に、ミサキは、戸惑うように俯いた。

今まで、自分の居場所なんてどこにもなかった。覚えていない罪のせいで、自分に向けられる目は、いつも冷たく厳しいものばかりだった。そんな旅を続けて辿り着いたこの場所は、自分を好意的に受け入れてくれる人ばかりで、まるで天国のような場所だ。確かに、ここは居心地がいい。だが自分には、きっと償うべき罪がある・・・ここにはいけない・・・そんな気がする。

「・・・俺は・・・」

「・・・待てよ」

ミサキの返事を遮る様に、シリウスが立ちあがって口を挟んだ。

・・・ミサキがここに留まると言えば、俺たちの旅は、ここで終わる。それは・・・

「ここは、確かに心地のいい場所かもしれない。でも、ランドメイアが消滅してしまったら、何もかも、無くなってしまおうんだぞ」

そう主張するシリウスを、シャルロットが冷めた目で見据えていた。

「全てのものには、終わりがある。永遠に続くものなんて、この世界にはないんだよ。人の営みなんて、ほんのささやかな時間でしかない。その僅かな時間を、人は幸せに過ごすべきだとは思わないか？何を好き好んで、辛い道を選ぶというのだ」

その言い分に、シリウスは不快感を抱く。座して死を待つなんて、そんなのは恵まれた環境で贅沢な暮らしをしている光族の勝手な言い分にしか聞こえない。

「・・・こんな風に、まいにち呑気にお茶を飲んで、薔薇の花を眺める生活を、幸せって、そう言うのか？」

シリウスの言葉に、シャルロットが立ち上って、両の手で勢いよくテーブルを叩いた。そのはずみで、ティーカップが跳ね上がって転げ、テーブルの下に落ちて砕けた。

「お前は、リートがどんなに重い運命を背負わされているのか、知らないんだろう？知っていたら、そんな軽々しい事など言えるはずがないからな」

「・・・」

シリウスは、その剣幕に言葉を失った。

「剣の紋章だとか、皇位継承だとか、もうたくさんなんだよ。おまけに、こんな魔剣まで押し付けられて、それが運命だから、こいつに世界を救ってみせろというのか？・・私には、そんなことは言えない」

そう言い捨てると、シャルロットは身を翻してそこから離れていく。

「お兄様っ」

シルヴィが、いつもは温和な兄の変わりように戸惑ったような顔をして、慌ててその後を追って行った。

俺は、ただ、ミサキと一緒にいたかった・・・これからも、ずっと。

それがどんなに過酷な旅であろうと構わないと、そう思っていた。でも、本当に大変な思いをするのは、自分ではなくミサキなのだ。いくらそばにいたって、自分はただの傍観者でしかない・・・自分の身勝手な思いを自覚して、シリウスは力なく椅子に座り込んだ。

「・・・その出会いが運命だったと・・・だから、誰のせいでもないのだと・・・ダークブランカ様はおっしゃいました」

床に落ちた陶器の破片を拾い集めながら、カタリナが独り言の様に話し始めた。

「でも私は今でも、時折、後悔の念に苛まれるのです。あの時、どうしてああしてしまったのか・・・と」

「あの時？」

「リート様の母君、リファーリア様が、あの方と出逢った、あの時に・・・」

皇女リファーリアは生まれつき体が弱く、幼い頃より、一人家族と別れ気候の良いカーシアの離宮で暮らしていた。父である皇帝と皇妃は、病弱な末娘のことを常に気に掛けていたが、政務の間を縫ってカーシアを訪れる回数は、リファーリアの成長と共に、だんだんと少なくなっていた。

兄弟達も幼い頃は、妹を心配して頻繁に足を運んでいたが、兄弟の顔を見ると、はしゃぎすぎるリファーリアは、必ずとっていいほど熱を出し寝込んでしまうものだから、兄弟たちも気を遣ってか、次第に少しずつ足が遠のく様になっていった。

離宮の窓辺で時折一人、海を見ながら豎琴を奏でていた姿は、寂しそうで儚げで、カタリナはその音色が聞こえる間は、声を掛ける事ができなかったという。

そしてその運命の訪れは、リファーリアが十六の春を迎えた頃のことだった。当時、長く寝付くことも少なくなっていた皇女は、その頃、薬師のすすめもあって、海辺の散策を日課にしていた。

その日も、リファーリアはいつもと変わらずに、カタリナと護衛の兵数人を従えて、浜辺を歩いていた。空は晴れ渡り波は穏やかで、何も変化の訪れない平和な日常。それを退屈と言ってしまっは、いけないことなのだろうけれど・・・体調もよくて、こうして出歩けるだけでも、幸せなのに。そこに物足りなさを感じてしまう自分は、何と不謹慎なのだろうと思う。それでもリファーリアは、そんな自分を心でいさめながらも、その退屈に漏れ出てくる溜息を止めることは出来なかった。

リファーリアが規則正しく砂に刻んでいた足音が不意に止まった。それが、その退屈に終止符が打たれた瞬間だった。つられて足を止めたカタリナが前方を見ると、波打ち際に誰かが倒れている。カタリナがそう確認するか否かというタイミングで、リファーリアはもうそこに駆け寄り

ており、カタリナが止める間もなく、躊躇いがちにその人物の肩を揺すっていた。その振動に、その人物――年の頃はリファーリアと同じぐらいに見える若者――の指先が微かに痙攣するように動いた。それを見たリファーリアは、喜色を顕にした顔でカタリナを見上げた。そして再度、若者の肩を揺すり声を掛ける。

「大丈夫ですか？」

リファーリアの問いかけに、若者は僅かに目を開けた。

「カ・・ラ」

ただそれだけ、何か意味不明な言葉を吐き出して、若者の意識は再び遠のいていってしまった。

「・・離宮にお運びしましょう。いいわよね？助けてあげたいの」

「しかし、姫様」

何処の誰とも分からない者を、離宮に運び込むなど持っただけの他だ。地元の者にいくばくかのお金を渡し、面倒を見てもらえばいいというカタリナに、珍しくリファーリアが食い下がった。

「私が最初に見つけたのですもの。これは、私にお世話をせよという、神様のお導きなのではなくて？」

リファーリアは、そのほとんどを離宮の中で暮らし、外の世界を知らない。リファーリアに、常識を説くのはカタリナの役目だった。だが・・

この頃のリファーリアは、いつも介抱されるばかりで、常に周りの者から気に掛け守られる存在である自分を少し持て余していた。だから、この若者を介抱することで、自分だって誰かの役に立つことが出来るのだという事を示したい・・そう思ったのだ。

カタリナはそんな皇女の気持ちを察し、つい譲歩してしまったのだ。「兵士の詰め所になら」という条件付きで、カタリナはその若者を兵士に運ばせた。

そうして兵の詰め所に運ばれた若者だったが、リファーリアがその見舞いと称して、カタリナの目を盗んでは、自分の部屋を抜け出し、詰め所に足繁く通うものだから、仕舞いにはカタリナの方が更に折れて、その若者の部屋を離宮の中に設けることにしてしまった。

自分の目の届く所にいてくれた方が、カタリナの気が楽だったからであるが、若者の世話を焼くリファーリアの様子が、あまりに生き生きとして楽しそうだったせいでもある。

そんな訳で、数日後、目を覚ましたその若者は、豪華な部屋のふかふかのベッドに寝かされて、かわいいお姫さまに、自分の顔を覗き込まれているという状況に、度肝を抜かれた、という運命的な出会いを果たしてしまうのである。

「お名前は？」

「・・」

聞かれて、若者は自分が何も覚えていない事に気づく。薬師の見立てで、記憶喪失と判じられて、眉をひそめたカタリナに対し、リファーリアは、何故か嬉しそうだった。

何も知らない。それはつまり、この若者は自分が皇女であることも気に掛けはしないし、病弱だからとあれこれダメ出しをしたりしない存在だ、という事だから。

「何も覚えていないのなら、まず、名前を考えなくてはね」

リファーリアが楽しそうに言う。

「・・・キャ・・・ラ・・・キアラ？」

「何ですか？その呪文の様な言葉は？」

怪訝な表情で問うたカタリナに、リファーリアが答える。

「ほら、この方に最初にお声をお掛けした時に、何か呟いたでしょう？記憶が無いのに、出てきた言葉なら、何か意味があるのではなくて？」

「キャではなく、カだった様な気がいたしますよ。カ・・・リア。カアラ・・・そんな感じでしたかと」

「う～ん」

リファーリアにじっと顔を見詰められて、若者は居心地の悪そうな顔をしている。それに気づいてカタリナは、慌ててたしなめる。

「姫様・・・その様に、殿方のお顔を凝視なさるものでは、ありませんよ」

「あら、ごめんなさい」

リファーリアが、零れるような笑顔で笑いながら謝ると、若者が顔を赤らめて慌てて首を振った。

「そうね、キラ。綺麗な響きだから、それがいいわ。それに、男性の尊称を付けて、キラストネス。それから・・・そう、フィリア」

その漆黒の瞳を見詰めながら、リファーリアが言った。

「フィリスの瞳という意味よ」

「キラストネス・フィリア・・・？」

「そう、今からそれが、あなたの名前」

「キラストネス・フィリア！？」

カタリナがその名前を口にした時、シリウスが声を上げた。

「それって、大地の騎士の名前だよな？」

カタリナが頷く。

「じゃあ、大地の騎士っていうのは、ミサキの父親のことなのか？」

・・・リートの記憶がないのなら、会わない方がいい・・・

シリウスはシャルロットの言葉を思い出す。つまり三年前、リートは父である大地の騎士に、反逆者として討たれたのだ、ということになる。

「・・・だから・・・なのか？」

カタリナは悲しそうな顔をして頷いた。

皇女である自分を前に、畏まったりへりくだったりしない。キラのそんな態度にリファーマは、好感を持っていた。彼と過ごす時間、自分は皇女であるという事を忘れられるのだと、そう言っていた。その出自こそ分からなかったが、キラの立居振舞は決して低くはない身分を感じさせるもので、カタリナもまた、その存在を大目に見るようになっていた。何しろ、今まで孤独で寂しげな様子だった皇女が、毎日笑い声の絶えない生活を送っている。キラがいることで、離宮の空気ががらりとかわってしまったのだ。心地のいい、幸せな気分させてくれる。そんな空気に、カタリナ達もまた酔っていた。

だから、当然その先に起こるべき事態を予測しながら、気づかない振りをしていた。気づきたくはなかったのだ。こんな幸せそうな皇女を、いつまでも見ていたい。離宮にいた誰もが、そう思っていたのだから。

やがて、その幸せな時間は終わりを告げる。

リファーマが倒れ、身籠っている事が判明したのだ。キラの存在は皇帝の知るところとなり、彼は捕えられ都に送られることになった。ところが、都から皇帝の使者としてやってきたのは、大魔法使いダーク・ブランカだった。

意外にもキラは、大魔法使いの尋問を受けた後でリファーマの側にいる事を許されたのだ。離宮には魔女の結界が張られ、キラはそこから出ることを禁じられたものの、二人にはまた元の穏やかな日々が戻った。だが、離宮の空気は、それまでの様に単純に明るく幸せなものとは、どこか少し異なっていた。

リファーマは変わらず優しい笑顔を周囲に見せていたが、その中に、何か影の様なものが纏わる様になっていた。一人になると決まって何事かを考え込む様にして、遠くの水平線を眺める事が多くなっていた。そして、そんなリファーマを、キラは少し距離を置いてただ見守っていた。

その理由をカタリナが知ったのは、ずっと後のことだった。

この時すでに、星見によって、生まれて来る子供の運命が予言されていたのだ、という事を。

時は満ち、子供は生まれ、リートと名付けられた。

生まれた子供は、剣の紋章を持ち、そして更に、フィリスの刻印をも合わせ持つ。故に、この子供は、いずれこの国を滅ぼす存在になる。予言された通りの事実を目の当たりにして、リファーマは自分が子供に負わせてしまった運命について、随分と気に病んでいたという。彼女はその子の行く末を案じ、運命が覆る事を、日々祈り続けた。そしてそれは、彼女の心と体に大きな負担となり、その命を削ることになった。

それから三年の後、リファーマはこの世を去った。

その後間もなく、ダーク・ブランカの名の元に、キラが都へ召喚された。そして、彼はそのまま戻ることはなかった。リートはロゼリアのオージェ家に引き取られることになり、カタリナも

それに同道した。

カタリナがキラの消息を知ったのは、三年前の事件の後だった。仕えていたリートが都から姿を消してしまい、彼女はオージェの屋敷に呼び戻された。そこで、キラが大地の神殿に幽閉されていると聞かされたのだという。

「・・・幽閉？キラ様って、大地の騎士なんだろう？それが何で、神殿に幽閉されてるんだ？どこをどうすると、そういう話になるんだ？」

率直な感想として、ラシャが尋ねた。

「さあ・・・詳しい事情までは・・・」

カタリナが首を振る。シャルルロットに幾度か尋ねてみたが、いつも何となくはぐらかされて、未だに、きちんとした話は聞かされていないのだという。

「・・・彼の者は、滅びの扉を開く者・・・」

今まで黙って聞いていたファレンが、ふと呟いた。

「それって、キラ様のこと？」

カヤが身を乗り出す。

「実は、リファéria様の御懐妊の折に、星見が出した予言は二つありました。一つは、リート様の運命に関するもの。今ひとつは、キラ様が、このランドメシアに現れた理由を示すものでした」

——彼の者は、滅びの扉を開く者。

「つまり彼は、このランドメシアを滅ぼすためにやって来たって事なの？その事を、キラ様は？」

「恐らく、ダーク・ブランカ様から・・・それ故に彼は、自らの意思で、魔法の塔に幽閉されたのだと。そう聞いています」

「幽閉・・・って、まさか、その時から、ずっとなのか？」

ラシャの問いに、ファレンは深刻な面持ちで頷いた。

キラの幽閉の後、ダーク・ブランカはその運命を覆す手掛かりを探して大陸に渡ったのだと言われている。自分が戻るまでは、決してキラを魔法の塔から出してはいけないという言葉を残して。だが、彼女はそれ以来消息を絶ち、そこから実に十五年もの月日が流れることになる。

そして三年前 ——

闇の魔道書を使いその力を暴走させたリートを止める為に、剣の紋章の剣を使わなければならないという非常事態が起こる。その剣を使うことの出来る者として現れたのが、大地の騎士だった。

それが魔法の塔に幽閉されていたキラだと知れたのは事後の事で、その時にはキラはすでに、ラリサの手によって、今度は大地の神殿に幽閉されていた。

全ては、ランディスの祖父ラリサ・フラムが、独断で行ったことだという。そして、ただ一

人その事情を知っていたと思われるラリサは、リートを封印の地に送って後、これもまた消息不明になっている。

「なるほど。で、キラ様とやらは、そのまま、ほっぽっとかかれている、と？」

ラシャが複雑な顔をした。

「ランドメイアを滅ぼすからって？」

カヤも、何か理解できないという顔をする。異世界の二人には、それはとても理不尽な理屈に思えるのだ。言ってしまうえば、たかが予言ごときで、人の運命がこれほどに左右されるというのは。

「・・・まあ、つまり何だ。お前の親父さんが、滅びの種を蒔いたから、お前にその毒花を摘み取れってことだよな」

「それは、言いすぎっ」

カヤがたしなめる様に、ラシャの耳を引っ張る。

「・・・で、どうするんだ？」

シリウスがミサキを見た。

「・・・俺は・・・」

急に色々な話を聞かされて、ミサキが混乱しているのが、傍目にも分かる。だが、シリウスは、畳み掛けるように、再度ミサキに問うた。

「お前は、どうしたい？」

「・・・」

「運命だとか、使命だとか、罪を償うだとか、そんな事はいいよ。お前がどうしたいのか、言えよ」

「俺は・・・」

その全ての始まりがそこにあるなら、ただ会って話を聞きたいと思った。自分は知らなくてはならないのだとも思う。

三年前に何があったのか――そして、自分が何をしたのかを。

だが、その罪と向き合うことに、心に大きな不安が沸き起こる。その不安が、前に進むことを躊躇させる。

「ミサキ・・・？」

「・・・俺は・・・父さんに会いたい・・・でも・・・」

「じゃあ、決まりだ」

言いかけたミサキを制して、シリウスが宣言する様に言う。

「ああ、そうだな」

ラシャが頷く。

「そうこなくちゃね」

カヤが笑って、ファレンを見る。ファレンも黙ったまま、笑顔で頷いた。

「決まりって、何だよ？」

一人訳が分かっていない風のミサキに、シリウスが笑う。

「大地の神殿へ行くんだろ？」

その言葉にミサキは驚いて、自分を見つめる仲間たちの顔を見返した。

シャルルロットには反対されたけど・・・自分は・・・

「俺は・・・父さんに会ってもいいのかな・・・」

「お前が会いたいと思うのなら、会うべきだと、俺は思う」

・・・ただ、前に進めと。それでいいと言ってくれる・・・

それでも、本当は会って真実を知るのが怖くてたまらない。会いたいけど・・・怖い。そんなミサキの心を見透かしたように、シリウスが言った。

「大丈夫、俺たちが付いてるから」

その言葉に、立ち止まりそうになる背中を押された。何だか胸が熱くなった。たった一人、何も持たずにこの世界にやってきた自分が、気が付けばそんな仲間にも囲まれている。一人じゃない。そう思うだけで、こんなにも心強い。

「何があっても、この俺が何とかしてやる」

シリウスが胸を張って言う横で、

「いや～、そこまで言い切ると、流石にウソ臭いよ、お前」

と、ラシャが突っ込みを入れる。そんなやり取りに場が和んだ所で、ミサキがふっ切ったように言った。

「大地の神殿へ行こう」

元より自分は、ここで立ち止まる訳にはいかないのだ。

ミサキの決意を感じ取ったように、それぞれが頷いて動き出す。示された道の先へと向かうために。

しかし、彼らはその願いがどんな結果を招くかなど、考えもしなかった。

そして、気づいていなかった。

―― 禁忌とは、触れてはならないが故に禁忌なのだということを・・・

大地の神殿は、森を抜けた小高い丘の上にあった。緑の神殿は、その森の入り口近くにあったから、ランディアスの魔法の正確さを責めるには、ちょっと気の毒だ、という程の距離である。そしてその神殿の周辺には、警備の兵が規則正しく配されており、そこに入り込むのは、容易ではないようだった。

「ただの神殿にしては、成る程、嚴重だな」

その警備状況を見ながら、ラシャが言う。一同は、少し離れた茂みの中で、神殿内部への侵入方法を考えていた。ファレンが木の枝で、地面に神殿の見取り図を描く。

「神殿の造りは、基本的にどれも同じです。入り口正面に、神を祀る祭壇があります。その祭壇の左右に神殿の奥に続く回廊が伸びていて、手前に兵士の詰め所。奥に巫女の住居。そして、騎士の部屋が大抵この辺り。牢などの設備はありませんから、幽閉されているのだとすれば、恐らく、この騎士の部屋じゃないかしら・・・」

「じゃ、俺とシリウスで、警備の兵士を片っ端からなぎ払って・・・」

「力技に頼ってどうするの？逃げられて助けを呼ばれたりしたら、かえって厄介じゃないの」

ラシャの案をカヤが却下する。

「こういう時、便利な魔道師様がないんだもんなあ」

「あらっ、巫女の力を見くびってもらっては、困るわね」

カヤがラシャの目の前で、パチンと指を鳴らした。ラシャの動きが止まって、その場に立ちすくむ。その目は、どこか遠くを見ている様な感じだ。

「おい、どうした？」

ラシャの目の前で、シリウスが手を振るが、全く反応がない。

「瞬間的に相手の思考を閉ざし、意識を無にする。巫女の技ですわ。本来は怪我をした者を治療する時に、その痛みを軽減する為に使うのですが・・・」

ファレンが説明した。

「一度に、一人ずつにしか使えないのが、難点だけど、どうかしら？」

言いながらカヤが、ラシャの目の前で手を打った。ラシャが目をしばたかせる。

「いいんじゃないか？カヤとファレンに先に行ってもらって・・・」

ミサキの言葉に、ラシャが話が見えないという顔をしている。

「よし。それで、進めるだけ進もう。後は、俺たちが何とかするさ、なあ、ラシャ？」

シリウスが、ラシャの剣を指でトントンと叩く。

「え、ああ、よし任せとけ」

そう答えるしかない、ラシャである。

外の警備は嚴重だったが、意外なことに神殿の中には兵士がいなかった。カヤとファレンが入り口の兵士を黙らせてしまうと、一同は難なく神殿奥の騎士の部屋まで辿り着くことが出来た。

シリウスが騎士の部屋の扉を軽く叩く。が、中から返事はない。それどころか、人のいる気配すらも感じられなかった。

「どういう事だ？」

訝しみながら、シリウスが扉の取っ手に手を掛ける。当然と言えば当然のことながら、扉はそう簡単には開かない。鍵でも掛かっているのかと、シリウスは扉を調べたが、それらしきものは見当たらず、首を傾げるばかりのシリウスである。そこへファレンが進み出て、その扉にそっと掌を当てた。

「・・・恐らく、この部屋には、魔法で結界が張られています」

「結界って、ラリサ・フラムのか？だとしたら、厄介だな。ちなみに結界を解く巫女の技なんてのは・・・？」

ラシャがカヤに聞く。

「無いわよ。便利な魔道師じゃなくて、ごめんなさいね」

「・・・結界も、魔道師の魔法の力なんだよな？」

ミサキが確認する様に言う。

「だったら、この剣で、その魔力を吸い取ってしまえばいいんじゃないかな？」

その意見に、シリウスが血相を変える。

「馬鹿か、お前はっ。そんなことしたら、お前の・・・」

「他に方法はないんだろう？それに、扉を開けるぐらいで、死んだりはしないって・・・多分」

ミサキの言い分に、一同は考え込む。

命に関わるようなことは無いという、そんな保証はどこにもない。だが、他に方法が無いのも事実である。光の騎士とのあの斬りあいで、小一時間の気絶・・・という度合いを考えれば、少しぐらいなら、大丈夫なのではないのか？という気もする。あの魔道師に、無闇に抜くなと、言われてはいるけれど・・・でも、もし・・・

考えがまとまらない内に、外の方から、誰かの怒鳴り声が響いて来た。

「おいっ、誰か来るぞ」

ラシャが言う。それを合図に、ミサキは剣を抜いた。

「おまっ、また、勝手に」

シリウスの咎める様な声に、ミサキは微笑んで言う。

「ごめん。俺が気を失ったら、またお前に重たい思いをさせちゃうんだよな」

「そういうことじゃ、なくて・・・ああ、もうっ。後の事なんか心配しなくていいからっ、行けっ、ほらっ」

シリウスに促されて、ミサキが剣を構えた。扉に向けて、思い切りよくその剣を振り下ろす。剣先が、扉に触れた瞬間に、稲妻の様な光がスパークした。息を呑んだ一同の前で、重たい音を伴って、扉がゆっくりと開かれていった。扉の内側は真っ暗で、中の様子は分からない。扉が開いても、中から誰かが出てくる様子はなかった。

「・・・ここにいろよ」

シリウスは、ミサキを下がらせると、中の気配を伺いながら、真っ暗な部屋の中に足を踏み入れた。が、人のいる気配はないな・・・と思った刹那、体に衝撃が来て、思い切り壁に体を叩きつけられた。瞬間、意識を持って行かれそうになる。だが、気絶寸前のところで入り口の方であが

った悲鳴が耳を突き、シリウスは辛うじて意識を保った。

「ミサキっ！」

ラシャの叫ぶ声がした。そちらに目をやったシリウスが見たのは、思いがけない光景だった。

子供が、床に膝を付いているミサキの首を背中から締め上げている。恐らく、剣を使った反動で、ミサキはその場にへたり込んでしまったのだろう。どうも、そこを襲われたらしかった。「動くな」

シリウスはそう恫喝した子供の身の丈を目測して、自分は、この子供に頭突きされたのだ、と思ひ至る。と同時に、何故ここに、こんな子供がいるのか・・・という疑問が湧き上る。

ここにいるのは、大地の騎士だったんじゃあ、ないのか？

「何をしているんだ、お前たちはっ」

呆然としていたシリウスは、回廊の向こうから姿を現わした人物を見て、眉をひそめた。二人の騎士が、回廊をこちらに歩いてくる。キラキラとした金色の髪を揺らしながら。

「・・・兄妹揃って、騎士なのかよ。ほんと、人手不足なんだな」

シャルロットの腰には、綺麗な薔薇の紋章が彫り込まれている剣が下がっていた。即ち、かのお方は、薔薇の騎士様というところか。

その場の状況を一目見て、何が起こったのか瞬時に察したシャルロットの行動は早かった。ミサキを人質に取られて、躊躇していたシリウスとラシャを尻目に、いきなりその子供に斬りかかったのだ。

「おいっ！」

シリウスの声に、シャルロットの怒号が返る。

「下がっているっ！」

子供はその剣先を逃れるように身軽に宙を飛ぶと、ミサキが落とした剣を掴み上げ、シャルロットと対峙した。子供とは思えない不敵な顔をして、目の前の騎士を見据えている。シャルロットは、迷うことなくその剣目掛けて、自らの剣を振り下ろす。シャルロットの剣が、鋭い音と共に弾かれた。その隙を突いて、子供が剣を振り回す。こいつはただの子供ではない。シリウスはすぐに悟る。その見立てが間違っていない証拠に、シャルロットが少しずつ後ろへ押されていく。

交わされる剣の音だけが、神殿の中に響き渡る。

何か背筋の寒くなるような、そんな音だ・・・シリウスがそんな事を思った時、子供の持つ剣が光を帯び始した。子供もそれに気づいたのか、その光を凝視するようにして立ちすくんだ。見れば、その顔は苦痛に耐えるように歪んでいる。

・・・何だ？・・・

剣の輝きはみるみるうちに増していき、その光は刃を伝いそのまま子供の腕を這い上がっていく。そしてあれよという間もなく、その小さな体は光に覆い尽くされ、飲みこまれた。光の中で子供は苦しそうに呻き、剣を床に突き立ててその身を支える。そして――

「な・・・」

シリウスは思わず驚愕の声を漏していた。彼の目の前で、子供の体が少しずつ大きくなり始めたのだ。

子供だったその体は、次第に少年の姿へと変化を遂げる。そしてそれは青年へ、更に大人へと

成長していく。

「・・・」

その妖しげな光の中で、大人になった体が今度は少しずつ年老いていく。

「シルヴィっ！！」

シャルロットが、肩で息をしながら叫んだ。こちらも目の前の出来事に魅入られていたらしいシルヴィが、兄の切迫した声に我に返り剣を振った。シルヴィの縛めの蔓がするすると伸びて、光の中の人物に幾重にも絡みつき、これを覆い尽くす。問題の人物が完全に蔓の中へ包み込まれてしまうと、その隙間から漏れ出していた光も次第に弱まって、やがて消えた。

それを確認したシャルロットは、今や蔓の塊と化したその物体を、おぼつかない足取りで引き摺って行き、元の部屋へと放り込んで扉を閉じた。そしてその扉にもたれ掛かり、天を仰いで息を吐くと、精根尽きた様にその場に座り込んだ。

「・・・ラリサ様の結界を、壊してしまうとはね。運命とは、かくも容赦のないものなのか・・・」

シャルロットは、疲れ切った顔で、側で苦しそうに咳き込んでいるミサキを見る。

「まさか、あの子供が・・・そうだって・・・いうのか」

シリウスの問いに、シャルロットは頷く。

「そう。あれが、大地の騎士キラストネス・フィリア。君たちの探していた人だよ。時に囚われた、哀れな囚人だ・・・」

「・・・あれが、父さん」

ミサキが苦しそうな息の中で、呆然と呟く。

「一体、どうして・・・」

ミサキのすぎる様な瞳に、シャルロットは真実を告げるべきか迷い、口を閉ざす。

「言えよ」

シリウスが、シャルロットに詰め寄る。

「本当の事を知らなければ、ミサキは前へ進めない。ランディスは、恐らく、全て承知の上で、ミサキをここに寄越したんだろう。あいつには、こうなる事が分かっている・・・」

シリウスは、怒りを押し殺す様に唇を噛み、いったん大きく息を吐いて気持ちを落ち着けてから続ける。

「・・・だから、それが、この帝国の魔道師長様のご意志ってことなんだろう？あんたが、皇帝騎士団の一員なら、その意思に従うべきなんじゃないのか？」

シリウスにそう言われて、シャルロットは視線を反らして俯いた。そして、しばらく逡巡したのちにようやく、呟く様に静かに話し始めた。

「・・・剣の紋章の剣は、使う者にその代価として、命を求めるという話は、知っているな？」

「・・・ああ」

「その命とは、人がこの世に存在する事を許された、時間のことなのだ・・・と、ラリサ様はそうおっしゃっていた」

「時間？」

「相手の魔力を吸い取るというこの剣の力は、使う者の持つ時間を力に変換して生まれるものだ」と

「・・・どうということだ？」

「つまり、剣の力を発動させた者は、一番近い未来の時間から、使った力と同等の時間を失うのだ」と

「・・・時間を失うって・・・失ったら、どうなるんだ？」

「そう・・・例えば、発動した力が、十年という時間に相当するものなら、そして十歳の子供がそれを使ったのだとすれば、その子供は、そこより十年後の世界まで飛ばされて二十歳になる・・・ということらしい」

「その十年分の記憶が、無くなるってことなのか？」

「いや・・・その十年という時間は、代価として使われてしまうから、そもそも存在しない時間になる。その十年間、その者は、この世界に存在しなかった、ということになる・・・そういう話だ」

「・・・でも、三年前にその剣を使った大地の騎士は、その時から、ここに幽閉されているんだろ？・・・てことは、彼は飛ばされなかったってことなのか？」

「ああ。ラリサ様が言うには、彼は、何か強い力でこの時間に繋ぎ止められていて、未来へ飛ばされずに済んだ様だと。だが、その代わりに、彼は過去を失った。見ての通り、彼はまだ子供だ。つまり、生まれてから、そこまでの記憶しか持っていないんだ」

「それって・・・」

「このランドメイアに来て、リファーリア様と出会い、リートが生まれた。その時間は、すでに彼の中には存在しない。だから、彼はもう、私たちの知っているキラ様ではないんだよ」

魔法で姿を変えられたというのでもなく。

記憶を封じられたというのでもなく・・・

今の状況が、何らかの力によって歪められたものならば、元に戻す方法は、どこかにないとも言えない。だが、時間そのものが、すでに失われてしまっているというのでは・・・どうすることも出来ないということだ。誰もが、暗澹たる気持ちになった。

「・・・その子供を、再びここに幽閉したということは・・・もしや、ラリサ様の結界とは、時の流れを止めるものだったのでしょうか？」

そう言ったファレンを、シャルロットは悲痛な面持ちで見た。

「・・・おっしゃる通りです。この部屋の中では、時が流れない。キラ様は、三年前のキラ様のまま・・・」

「それって、どういう事なんだ？」

ミサキが不安そうな顔で訊いた。そのミサキの問いに、シャルロットは何かを言いよどみ、辛そうな顔で視線を反らした。

「・・・彼はまだ、三年前の代価を払い終わってはいないんだ。あの時使った剣の魔力は、それ程に大きかった。ルトと、そして何より・・・闇の魔法書を使った君の魔力は絶大だった。恐らく

、全ての代価を払ったら、彼はこの世から消える。だから、ラリサ様は彼を時の流れない部屋に閉じ込めて、彼を救う方法を探しに行かれたんだ」

その言葉に、ミサキは呆然とした。

—— 自分は・・・その結界を・・・

—— 解いてしまったのか・・・

第7章 時の魔女の剣ともう一人の候補

時の魔女の剣 ―― その剣の話は、兄上から聞かされた。

魔法の力を吸い取るというその剣は、魔法を使う者にとっては、話に聞くだけでも実に厄介な代物だった。

「そこまでして、この私を滅ぼそうというのだから・・・時の魔女には、全く嫌われたものだよ」
少し困った様な顔をして、兄上はそう言った。

魔法を使う一族に生まれながら、僕は大した魔力を持っていなかった。ただ、ほんの少しの癒しの魔法が使えるだけ。他の兄弟の様に、もっと兄上のお役に立ちたい。そう思っているけど、自分には些細なことしか出来ない。もう、随分と前から、僕はそんな自分が歯がゆかった。

・・・末の皇子の豎琴を聞いている時にだけ、兄上は、本当に穏やかなで安らかな気持ちになれるのだから、それだけで、あなたがここにいる意味があるの・・・

姉上はそうおっしゃっていたけど、そう言われる度に、かえって自分の不甲斐なさを感じずにはいられない。それは自分でも、どうしようもなかった。

・・・もしも僕が、その剣をここにお持ちしたら、兄上に喜んでもらえるのでは、ないだろうか・・・

剣の話聞いた時、真っ先に、頭にそんな考えが閃いた。

「僕が、時の魔女の剣を持ってきます」

僕がそう言うと、兄上は少し驚いた顔をして、そして笑いながら答えた。

「そうか、お前が、私の役に立ってくれるか・・・でも、時の魔女は手強いぞ。何せ、全ての時を統べる魔女だ。星を操り、全てのものを見通す力を持つ。お前のことも、出会った途端に、お前が何処から来た者か、何をしに来たものか。それを即座に見抜くだろう。迂闊には、近づけまい・・・」

「ならば、星を封じます。記憶を封じてしまえば、星は本来の輝きを失い、僕がどこの誰なのか見抜く事は出来なくなるでしょう？」

「それでは、お前は、自分の使命も忘れてしまうのではないか？」

笑いながら指摘されて、自分の浅慮に顔が赤くなった。

「・・・急ぐ事はないよ。時間はたっぷりあるのだから。お前はいずれ、私の役に立ってくれる。お前は、その為にここにいるのだからね」

記憶は、そこで途切れている。

僕は、時の魔女の剣によって、記憶を奪われたのだと、魔道師ラリサが教えてくれた。

つい昨日まで、自分が、何十年もの月日を生きた大人だったと言われても、まるで他人の話を聞いている様だった。だって、今の僕は子供で、兄上たちと暮らした世界の記憶しか持っていないのだから。

でも、現実にも今、自分は時の魔女の剣を手にし、時の魔女の国にいる。自分の途切れた記憶の先に、確かに何らかの物語が存在したのだ。そう思うしかなかった。

——時の魔女の剣によって、いずれお前は全ての時間を奪われるだろう。

ラリサはそう言った。

「お前は、私が必ず助ける。この身に代えても・・・」

ラリサはそう言って、僕をこの部屋に、時の流れない結界の中に封じ込めて旅に出た。

この年老いた魔道師が、僕にとってどういう存在で、彼が僕のために何故そこまでの事をしてくれるのか、その理由は分からない。でも、その言葉は、自分がこの世界から消えてしまうのかもしれないという恐怖から、確かに僕を救い出してくれるものだった。

その閉ざされた部屋で、僕は繰り返し同じ事を考えていた。

大人になった僕は、やはり兄上の為に、時の魔女の剣を手に入れようこの国へやって来たのだろうか？・・・だとすると、結局、僕は兄上のお役に立つことは出来なかった。そういうことだろうか。そう思うと何だか悔しくて、何度も涙した。

そんな時、胸のペンダントに手をやると、不思議と気持ちが落ち着いた。

・・・これはお前が、多分一番大切に想っている人の、特別の思いが込められた玉石。きっと、お前を守り導いてくれるだろう・・・

ラリサは、そう教えてくれた。

陽に透ける木々の緑の様にキラキラと緑色に輝くその石は、自分が無くしてしまった時間の中に存在していた人から貰ったもの。大人の自分が、一番大切に想っていた人。それは、どんな人だったのだろうか。そんな事を考えながら眠りに落ちた夜には、必ず夢を見た。

美しい女性がこちらを見て微笑んでいる。いつも決まって同じ夢だった。女性の顔はぼやけていて、はっきりしない。ただ、いつも優しい声だけが耳に届く。

——お願い、リートを、守ってあげてね・・・

「リートって、誰？」

そう聞くと決まって、女性は寂しげに微笑んで、消えていく。

いつも、そこで目が覚めた。

そして、閉じられていた扉が開かれる日が来た。

扉の向こうに感じたのは、間違いなく、あの、時の魔女の剣。

その気配だった。

もしも、あの剣を取り戻す事が出来たなら、僕は自分の無くした物を取り戻す事が出来るかもしれない。あの剣を、兄上の元に届けさえすれば・・・

きっと、兄上が、僕を助けてくれるはずだ。

きっと・・・きっと・・・

キラが消えてしまうかもしれないという事実、ミサキは見るからに動揺していた。全く、この馬鹿は、それが自分の浅慮のせいだと、思い詰めるに決まっているのだ。そんな事を思いながら、シリウスはミサキに向かって言う。

「魔法の力が弱くなっているんだろ？なら、ここの封印だって、遅かれ早かれ解けていたはずだよな？そもそもお前をここに寄越して、大地の騎士に会えて言ったのは、誰だよ？ランディスなんだぜ。こうなる事を、予測していなかった筈ないだろう、あのペテン師が。奴が、お前を良い様に使って、ここの結界を解かせたに決まってるだろうが」

「・・・ランディスが・・・？」

例え人でなしと言われようとも、利用できるモノは全て利用して、目的は必ず成し遂げる。奴は、堂々と、そう宣言していたではないか。

「・・・だから、薔薇の騎士シャルロット・オージェ。あの大地の騎士を自由にしてやってくれ。それが、魔道師長様のご意志だ」

シリウスの言い分に、シャルロットが首を横に振った。

「そんな事、出来るはずないだろう。正式な命令書もなしで。彼が、何故、二十年近くも幽閉されていたと思うんだ」

「何故って・・・」

——彼の者は、滅びの扉を開く者。

シリウスの脳裏を、ファレンの言った予言の言葉が過ぎる。

「予言の事なら・・・」

「私は、予言ではなく、現実の話をしている」

シャルロットの言葉に、シリウスは眉をひそめた。

「彼は、ランドメリアを滅ぼす為に、この国へ送り込まれた。星見にその素性を気づかれない様に、意図的に記憶を封じてまでして・・・そういう存在なんだぞ」

「・・・この国を滅ぼす為に、送りこまれた？」

「世界のどこかに、このランドメリアを、消し去りたいと思っている者がいるのだと。ラリサ様は、そうおっしゃっていたよ」

このランドメリアを、滅ぼそうとしている者がいる？

「・・・何故」

「理由など知らない。ただ、キラ様がこの国へやって来たことで、滅びへの扉は間違いなく開かれたということだ」

今、この国が滅びようとしているのは、そのせいだと言うのか。

彼が、このランドメリアにやって来たことが、そもそもの始まりだと言うのか。

シリウスは、思わず身震いをした。見えない悪意に、背筋が寒くなった。自分たちが、誰かにとって、有無を言わせず滅ぼしたいと思われる存在であるという事実。それを認めたくはなかった。でもその悪意は、もうすでに、このランドメリアを滅ぼし始めている。

キラとリファリアが会って、リートが生まれた。

ダーク・ブランカは、それを運命だと言った。

つまり、それは偶然のことではなかったということだ。キラが滅びの扉を開くという役割を果たしたからこそ、リートが存在する。ランドメイアを滅ぼすという予言の子供として。このことをミサキはどう受け止めるのか・・・シリウスは、氣遣う様にミサキを見た。ミサキは、黙ったまま、俯いている。

真実を知っても尚、更に先へ進めというのは、シャルロットの言う様に、やはり酷な話に違いない。ランディスは、一体、何を考えているのか。一体、ミサキに何をさせようというのか・

「・・・話をさせて貰えませんか？」

長い沈黙の後で、ミサキがポツリと言った。

「・・・分かった。シルヴィ、彼の縛めを解いてやれ」

「はい・・・お兄さま」

シャルロットが扉の前から立ち退くと、ミサキはそっと扉を押した。開いた扉の隙間から差し込む僅かな光の中で、そこに横たわっていた者が顔を上げて、自分の傍らに膝を付いたミサキを怪訝そうに見たのが分かった。シリウスは剣を抜き、ミサキの背後から、その様子を見守った。

「・・・何で、お前がその剣を持っているんだよ」

ミサキが声を掛けるよりも先に、キラが口を開いた。

「何でって・・・」

問われて、ミサキは自分が腰に下げている剣に視線を落とす。

「・・・何で、ラリサじゃなくて、お前が扉を開けたんだよ」

「何でって・・・」

不意に、キラの瞳から、大粒の涙が零れ落ちた。

「僕を助けてくれる積もりもないくせに・・・」

自分を睨みつける様に見上げたキラに、ミサキは困惑した。

自分は、何のために此処に来たのだろう。朱里の記憶に導かれる様にして、ただ、前に進むしかないと思っていた。置き忘れた何かを見つける為に。償うべき罪を思い出す為に・・・ただ、それが運命なのだと、そう思っていたから。だけど・・・

ミサキがキラを抱き起こした。そして、その小さな体を、そっと抱き締める。

「心配しなくていい。君は、俺が守るから・・・」

キラが驚いた様に、瞳を見開いた。その瞳から、止め処なく涙が溢れ出して来る。そして、キラは声を上げて泣きじゃくった。この子供は、こんなにも不安だったのだ。それなのに、誰からも遠ざけられて、こんな結界の中に置き去りにされて、たった一人で不安や恐怖と戦っていたのだ。ミサキは、キラをしっかりと抱きしめた。

「もう、大丈夫だから・・・」

そう言ってから、ミサキは初めて気づいた。きっと誰もが、自分のその言葉を待っているの

だと。そして、今、自分がここにいるのは、大切な人たちを守る為なのだという事を。

キラを抱き上げて、外に出てきたミサキを、シャルロットは複雑な顔をして見ている。

「・・・今のお前に、その子を守る力があるのか？想いだけで、何もかもが動かせると思うのか？」

「そんなに簡単なことじゃないのは、分かってる。でも、これ以上、この子をここに閉じ込めておく事なんか出来ない。それに、ランディスなら、何か方法を知っているかも知れないし・・・」

「かも、ね。魔法もろくに使えない魔道師が、果たして、役に立つものか」

「魔法は、皇帝が戻れば戻るんだろう？だったら、話は簡単だ。俺が皇帝になればいいんじゃないか」

「リート・・・お前」

「それが、大切な人たちを守る事になるのなら、躊躇ったりしない。予言がどうであろうと、俺は、この国を滅ぼしたりしないから」

その真摯な瞳に、シャルロットは、もう何も言わなかった。

だが、どんなに強く思っている、その願いが叶えられるとは限らない。皮肉な事にミサキの大きな決意は、その翌日にはもう、風前の灯火の様に頼りないものになってしまった。

というのも、期を計ったように都から皇帝騎士団の騎士の召喚状が届けられ、それと共に、新皇帝の即位式を行うという知らせがもたらされたからだった。

「剣の紋章を持つ者がいるって言うのか？ミサキの他に・・・」

召喚状にどう対処すべきかを話しあう為に一同が集まっていた部屋には、シリウスの疑問に答えられる者はいなかった。しばし沈黙が流れる。ミサキが、その重い運命を背負うという一大決心をしたのに、今度は現実の方がミサキを遠ざけようとしているのか。複雑に絡み合う糸に手足を取られて、身動きが取れなくなっているような、そんな様が脳裏を過ってシリウスは頭を抱えた。

何かを考える様にしていたミサキが、口を開いた。

「・・・都へ行こう」

「でも、俺たちは、まずランディスを探さなくちゃならないんだろう？」

ミサキと並んで、ベットの端にちょこんと座っているキラに目をやって、シリウスが確認する様に言う。

キラは、その身の丈には大きすぎる剣を、その背に負っている。それは、神殿に置かれていた大地の騎士の剣だ。実は、神殿を出ようとしたキラに剣の方がくっついて来た。つまり、この剣はまだ、キラを大地の騎士だと、そう認めているのだ。

「その事なんだが・・・」

ラシャが口を開いた。

「あの時だって、ランディスは、実際に天空の神殿にいた訳じゃないだろう？俺たちに、当てがある訳でもない。なら、都の魔法の搭に聞いた方が、早いんじゃないか？」

テーブルの上の召喚状を手で弄びながら、カヤが付け加える。

「それに、ここにこうして、天空と雪、おまけに、大地の騎士の召喚状まで届いているって事は、向こうは私たちの動向を把握済みって事よね」

「成る程。次は、都に来たってことか」

シリウスは、少しうんざりした顔で、カヤの手の中にある召喚状を眺めて言った。

そんな訳で、一行は、ロゼリア領主兄妹と共に、馬車で都へ向かう事になった。何しろ大人数なので、一台の馬車では乗り切れず、過日のお茶会と同じ振り分けで、二台に分かれて馬車に乗った。

二台目の馬車ではカヤとシルヴィが並んで座り、カヤの前には当然のようにラシャが座った。となると、シリウスはシルヴィの前に座るという事になる。そう広くない馬車の中で、都までの長い道中、このお姫さまと顔をつき合わせて行かなくてはならない。

— 何となく憂鬱。

そんな気分が、つい、顔に出てしまったらしい。

「・・・私、緑の神殿でのことは、ちゃんとお詫びしましたわよね？それに、あれは、あなた方にも非のあることです。それを、その様に何時までも根に持たれたのでは、不愉快ですわ」

馬車が走り出して程なく、何の前触れも無く、シルヴィにいきなりそう言われて、シリウスは思い切り面食らった。

光族のお姫様であるシルヴィと、世間話をしたところで会話がかみ合うとは到底思えなかったし、口先だけの社交辞令を言える程、自分は器用な性格でもないと思っている。だから、シリウスは自然とシルヴィと顔を合わせるのを避けて、ずっと窓の外を見ていたのだ。

「・・・根に持ってって、何だよ、それ？」

あらぬ言いがかりを付けられて、シリウスは顔をしかめる。

「いくら光族がお嫌いでも、そういう態度は、男らしくないと申し上げたのですわ」

だから、一体自分が何をしたというのだ。いや・・・しなかったことなら思い当たるが・・・そもそも、そういうことが面倒くさくて関わり合いにならないようにしていたのに、何でこいつはわざわざ絡んでくるんだ。そんな思いが、気づけば言葉に刺を盛っていた。

「耳に心地いい社交辞令を申し上げて、お姫さまのご機嫌を取るのが、男らしいって事か？ふざけるなよ」

シリウスに面と向かって言い返されて、シルヴィは悔しそうに唇を噛んだ。と同時に、その緑色の瞳が涙で潤んで宝石の様な輝きを見せる。たちまちその場に気まずい空気が漂い始める。

「止めなさいよ」

カヤが一喝して、シリウスを睨みつけた。

・・・え？この状況で睨まれるのが俺の方って何なんだよ・・・

思いがけないところから加勢が入って、シリウスは困惑の色を隠せない。

「確かにあなた、端で見えても、彼女に対して態度悪いわよ。いくら光族が嫌いだって言ったって、あれじゃ、あんまり。シルヴィが可愛そう」

・・・光族が、嫌い・・・？って・・・

今まで、誰にも、一度だってそんな事を言った事はないのに。

「何で・・・俺が、光族嫌いって・・・」

「だって、お前、その顔にそう書いてあるぞ。あからさまに」

隣で、ラシャが呆れた様に言う声が聞こえた。

「・・・って・・・えっ・・・」

つまり、自分ではうまく隠していたつもりなのが、全方位にばれていたということなのか。それは気まずいどころの話ではない。

「・・・まあ、生まれの違いとか文化の違いとかで、相容れないことがあるのは、分かる。けどな、嫌う理由が光族だからってのは、どうかと思うぞ。この子がお前に、何が悪い事をしたって訳でもあるまいし」

「・・・それは、違う。俺が、光族を嫌いなんじゃなくて、光族の方が俺の事を嫌ってるんじゃない

いか。純粋な血を持っていないからって・・・」

シリウスの言葉に、ラシャとカヤは思わず顔を見合わせた。

二人とも、シリウスは海竜族だと思っていたのだ。だが、その言葉からすると、彼はどうやら光族と海竜族の混血という事になる。そしてその生い立ちのせいで、彼が遭遇したであろう不愉快な出来事を推察し、その事が彼の中で、何らかのトラウマになっているのだと思い当たる。

恐らく――かつて傷つけられた記憶によって、シリウスは光族というものに対して恐怖心を抱いているのだ。もう、傷つく事が嫌だから、光族に対しては距離を置き、壁を作っている。そんなところか。

・・・こりゃ、思ったよりデリケートな問題だったか・・・

ラシャは、内心ため息を付いた。手っ取り早く、シルヴィの方をなだめにかかる。

「・・・まあ、どうしても、そりが合わない・・・って事は、良くある事だし。な？」

光族のお姫さまが、怒りの矛先を収めてくれれば、取り合えずこの場は収まる。だが・・・

「・・・私は、一言だって、あなたを嫌いだななんて、言ってませんわ」

シルヴィが、真っ直ぐにシリウスを見据えて言った。

・・・やっぱり、そう来ちゃうかぁ・・・

ラシャとしては、この展開に苦笑するしかない。

光族は曲がった事が大嫌い。何事にも、きっちりと筋を通そうとする。しかもそれは、自分たちの物差しで計ったところの「正しいこと」であり、相手の事情を考慮したりはしないのだ。その辺は、異世界の人間であるラシャも、この三年の間しみじみ感じていたことではある。

光族と関わろうと思ったら、まず従属。それが嫌なら、徹底的に戦うしかない。

まあ、ラシャの場合、そのどちらも嫌で逃げてしまったのだから、シリウスに対してあまり大きなことは言えないのだが。シリウスはどう対処するのだろうか・・・ラシャは黙って、その成り行きを見守った。

「あなたが、私を嫌いだと言うのなら、それはそれで仕方ありません。ただ、お互いに分かり合うきっかけすらも与えて下さらないのは、残念に思いますけど」

シルヴィは答えを求める様に、真っ直ぐにシリウスの顔を見据えている。シリウスはといえば、完全にその瞳に圧倒されていて、顔を背けることも出来ずにいた。

「・・・」

——その瞳に、ただ、自分の狭量さを思い知らされた。

話す前から壁を作っていたのは、確かに自分の方だ。分かりあうことなんか出来ないと、端からそう思っていたから。そもそも、分かり合おうなんて事を考えもしなかった。

ミサキだって、ファレンだって、光族だ。彼らは普通の光族とは、少し違うけれど・・・それでも、仲間として、一緒に旅をしてきたじゃないか。なのに、なぜシルヴィとは関わり合いになりたくないと思うのか。その理由を探すうちに、ミサキが光族の姿を取り戻して行くことに、自分が抵抗を感じるのも同じなのではないかと気づく。

それは詰まるところ、シルヴィの様に見るからに光族という人間に、自分が劣等感を感じるからだ。でもそれは、嫌悪なのではなく、そう・・・畏れだ。彼らの自信に満ちた態度に、こんな風に自分の卑小さを思い知らされるから。

・・・だって、君は、こんなにも、眩しいんだ・・・

その輝きは、こんなにも見るものを圧倒する。そんな風を感じるのは、きっと自分が臆病だからに他ならない。自分に自信がないから。——でも、もう逃げるのは嫌だ。

シリウスは自分を見据える緑の瞳を、しっかりと見返した。

「・・・嫌いだなんて、言ってない」

シリウスがそう言うと、カヤが笑い出した。

「何だ何だ、照れてただけなのか」

「え？」

「どっちも嫌いじゃないってことは、つまりは両想いってことよね。な～んだ。気揉んで損した」

「いや、違っ。お前、どんだけ深読みなんだよっ。今のは、そういう事じゃなくて・・・だからっ」

・・・あう・・・ここで好きとは言ってないとかいうと、また話がややこしいことになるよな・・・

「つまりさ・・・」

そのシリウスの狼狽振りを見て、澄まし顔だったシルヴィが、ふっと笑みを洩した。

・・・何で、そこ、笑う？・・・

そして更に混乱するシリウスに、シルヴィがにこやかに手を差し伸べる。

「帝国を守る皇帝騎士団の『仲間』として、共に歩める事を嬉しく思いますわ。よろしく、天空の騎士」

「仲間・・・ああ、仲間、ね」

・・・色恋じゃなく・・・うん。訳が分からない・・・光族ってやつは、なんでこう人を弄ぶ？・・・

それでも、その手を取るのをためらうことは、もうしない。この期に及んで、逃げるわけにはいかないだろうが、と自分に言い聞かせつつ、シリウスは、そっとその手を握り返した。瞬間、そのふわりとした感触にシリウスはドキリとする。それは思っていたより、小さくて、柔らかくて、そして温かかった。

「・・・こちらこそ、よろしく・・・」

どうにか動揺を押し殺し、シリウスは顔を上げてシルヴィの顔を見る。と、その緑色の瞳がキラキラと輝いていた。

・・・ああ・・・きれいだな・・・

ふと、そんな事を思った。

途中で宿を取る事も無く、馬車の馬を次々に取り替える。そんな強行軍を推し進めて、一行がようやく都に着いたのは、それから三日後のことだった。

地に足が付いても、未だに馬車の揺れが続いているような気がする。シリウスが狭い空間に押し籠められてなまった体を伸びをしながらほぐしていると、ミサキがシャルロットに抱きかかえられる様にしながら、馬車を降りてきた。その様子に気づき、シリウスは慌ててそちらに駆け寄った。

「何て顔色だよ・・・大丈夫か？ミサキ」

「・・・ああ。濟まない。ちょっと、馬車の揺れに酔っただけだから・・・」

力なくそう言ったミサキの顔色は、蒼白だ。

「私は、宰相閣下に報告に行かなくてはならないから、リートを頼む。・・・それから、リートの事は、状況が分かるまで、伏せておいた方がいいだろう」

そう言い残し、シャルロットはシルヴィを伴って宮殿へ向かった。それを見送って、シリウスは歩くのも辛そうなミサキを背負うとラシャ達と共に、ファレンの案内で太陽の神殿に向かった。

太陽の神殿にやってきた一行を出迎えたのは、神官長のエシュラン・ターナーであった。

「これは・・・また。大勢で一体・・・」

エシュランが呆れたように呟く。

ロゼリアでの失敗を教訓に、いの一番に剣を示して、騎士団の人間であることを認めさせて、ホッとしたシリウスである。だが実は、今回はそんな事をしなくても、彼らが捕縛されたりはしないのだと、すぐに気づかされる事になった。

エシュランが、彼らの中の一人に目を止めるやいなや、驚いた様に大きな声を上げたのである。

「ファレンシア様っ！この大事な時期にどこへいらしていたのですか？あなたが、急に姿を消されたせいで、神殿は大騒ぎなんですよ。地図球は光を失ってしまうし、インディラ様はご病気に

なられてしまうし・・・」

エシュランの愚痴は、途切れる様子が無く延々と続いていく。堪り兼ねたファレンが、頭を振った。

「お願いだから、黙って、エシュー」

ファレンが溜め息交じりにそう言った時には、そこにいた皆の視線が、ファレンの上に注がれていた。

ファレンが光の巫女で、高貴な人物であるのは知っていたが、気さくな彼女の人柄のせいで、彼らには、今まで、どうもその実感がなかったのだ。

「エシュー、インディラが病気と言いましたね？容体は？悪いのですか？」

「さあ、詳しいことは・・・カイ魔道師補佐殿が、過労だというようなことをおっしゃっていましたが・・・」

「あなたの事だから、カイの話は半分も聞かなかったのでしょうか？あなたの個人的な感情はどうあれ、それが職務に支障を来すようでは困りますね。インディラは私がダーク・ブランカから預かった大事な娘なのですよ。彼女に、もしものことがあったら、どうするつもりです」

「はあ・・・申し訳ございません」

エシュランは畏まって頭を下げた。

「ラシャ、カイの所へ行って、様子を聞いてきて下さい」

「分かりました、直ちに」

「ミサキを休ませなくてはね。エシュー、私の部屋に薬師をよこしてくださいな。皆さんはこちらへ」

ファレンはそこに残ったシリウス達に、自分に付いてくるように促して歩き出した。

ファレンの私室は、本棚に机、それにベッドがあるだけの質素な造りだった。そのベッドに、シリウスは彼の背におぶさりながら眠ってしまったミサキを静かに下ろした。ファレンが心配そうにミサキの顔を覗き込んで、そっと薄いブランケットを掛けた。そしてファレンは、用を済ませて来ると言って、そのまま部屋を出て行った。

光の巫女である彼女には、この場所でやらなければならない事が色々あるのだろう。神官長の口振りでは、彼女はどうも無断で旅に出てしまったらしく、その間に、重大な問題が幾つも持ち上がってしまった様だった。

「・・・ミサキ、大丈夫なのか？こいつの具合が悪いのは、要するに、剣の魔力のせいなんだろう？」

シリウスが、傍らでミサキの顔を心配そうに覗き込んでいるキラを気にしながら、カヤに小声で聞く。

「・・・この剣の存在は、それ程に重いよ。このランドメイアに伝わる騎士の剣は、ダーク・ブランカ様の魔法の結晶なのだとも言われているわ。剣の力を、ラシャは神様の力と言っていたけど、そもそも、その力は魔法で生み出されているもの。魔道師の素養がある者が使えば、より強い力を引き出す事ができる。元が魔道師のリート様は、言わば剣との相性がいいの。剣の魔力を最大限に引き出せる代わりに・・・」

「消耗も激しいのか・・・」

「ええ。それに、記憶が戻り始めていることで、気持ちが不安定になっているのじゃないかしら。罪を償うって、そう決心をしていたって、いざ、その罪に向かい合うとなれば怖いのは当然なもの」

「・・・もし、ミサキの他にも皇帝候補がいるなら、俺は・・・」

「シリウス・・・気持ちは分かるけど、リートが皇帝になるという予言は・・・」

星見だけでなく、巫女姫までもが、リートが皇帝になるのだと予言している。その予言が、そう簡単に覆るものではないだろう。

「それじゃ、俺たちが貰ったのは、一体、誰の戴冠式の招待状なんだ？リートはここにいるんだぞ・・・」

「もう一人、いらっしゃるんですよ。宮殿の方にも、リート・ラランダ様が」

戸口で声がして、そこに、光族の少年が立っていた。

「お久しぶりです、氷の巫女さま」

少年がカヤに会釈をした。

「あら、ユリス？」

どうやら、カヤは、この少年を知っている様である。

「ノックをしてもお返事が頂けなかったので、開けさせていただきました。急な御用と承りましたので・・・」

少年が、今度はシリウスに向かってお辞儀をする。

「初めまして、僕は水の騎士ユリストネス・ラデリウスと申します。神官長様より、巫女姫様が薬師をお呼びと伺いましたので、参上いたしました」

「騎士が、薬師なのか？」

いぶかしげに尋ねたシリウスに、ユリスは笑って答えた。

「元々が、薬師なんです。皇立学問所では、医術を修めました。騎士団入りは本意ではなかったんですが、剣の意思ですからね。仕方ありません」

話しながらユリスは、ベッドに寝ているミサキの顔を覗き込んで、その腕を取り、脈を計っている。

「ねえ、ユリス。さっきの話なんだけど・・・宮殿にリート様が、いるの？」

カヤが尋ねる。

「ええ。でも、これは、まだ極秘扱いなんですけどね。たまたま居合わせたレオンが、フィリスの召喚魔法って、凄かったぜ～って、大興奮で、話に来たんで、騎士仲間には、バレちゃいましたけど」

「・・・フィリスの召喚魔法を使ったの？まさか、インディラ様が？」

「いえ・・・インディラ様ではなくて、宰相閣下なんですけど。インディラ様は、それにひどくご立腹だったという話です。以来、魔法の搭に引き籠られて、宰相閣下とは、面会なさらないのだとか」

「じゃあ、即位式の事は、宰相閣下の采配でなさっているという事？」

「ええ。インディラ様のご機嫌が直るのを、待っている暇はないと。そんな感じで・・・でも・・・」

ユリスがそこで言葉を切って、ミサキの顔をしみじみと見た。

「この方も、リート様なんですね。そっか、兄さんが氷の神殿で、リート様に会ったって言っていたのは、この方のことだったんですね」

「兄さん・・・？」

聞き返したシリウスを見て、ユリスが応える。

「ああ、僕は、氷の騎士クリストファー・ラデリウスの弟なんです」

「ああ・・・あの」

ということは、この少年は、あの時の、氷の神殿での事を、知っているのか。俺たちが、自分の兄に喧嘩を売った輩だと。そう考えると、シリウスとしては、少々気まずい。しかし、シリウスの心配をよそに、ユリスは、にこやかな顔をしてシリウスに手を差し出す。

「よろしく、天空の騎士・・・ええと、お名前を伺っても・・・？」

「あ・・・ああ、俺は、シリウイスト・リヴィウス。シリウスって呼んでくれ」

「よろしく、シリウス」

その手を取りながら、シリウスは、騎士である自分を、そして天空の騎士という称号の力を、改めて意識した。

ここでは、自分が海竜族であるという事など、問題にすらならない。そもそも、出自なんてものは、なんの意味も持たないのだ。騎士というだけで、こうして次々に仲間が手を差し伸べてくれる。何だか、それが嬉しかった。

どういう経緯にしる、自分を騎士にしてくれたランディスに、感謝すらしたい気分になって

くる。あの魔道師は、幸運の使者なのか・・不運の使者なのか・・ふと、そんな事を考えた。

「・・禁忌を犯してまで、フィリスの召喚魔法を使ったのなら、もう一人のリートは、封印の地から召喚されたってことになるわね」

封印の地——そこは、ラリサがリートを、その傷を癒すという目的で送った場所だ。だが、ミサキは、本物のリートはここにいる。本物がここにいる以上、封印の地から来たリートは、偽物だという事になる。

「一体、誰を召喚したんだ」

もし、剣の紋章を持つ皇帝候補が他にいるなら・・と、シリウスは、淡い期待を抱いていた。だが、ミサキの運命は、そう簡単に彼を解放してくれるものではないらしい。おまけに、事態は更にややこしくなっている。ここで、ミサキがリートだと名乗りを上げたら、どういう事になるのか。そう考えて、シリウスはため息をついた。

目の前に、光を失った地図球がある。ファレンはその漆黒の色を見据えて、意識を集中した。両の手を胸に当て、心の中で光の女神の名を呼ぶ。胸に当てた手のひらに熱を感じて、ファレンはそっとその手を開いた。ファレンの体のちょうど心臓のあたりから、今まで手が置かれていたその場所から、光の塊が現れ出てくる。胸の前に開いた両手の上にその光の珠を乗せて、ファレンはその手を地図球に向かってかざした。光の珠から零れ出る様に光が溢れ、黒く染まった地図球を包み込んでいく。だが、地図球が失った光を取り戻す事はなかった。

この地図球は、ランドメイアの未来の姿を映すものである。このまま光が戻らなければ、もう間もなく、ランドメイアは、闇に覆われる。この地図球の様に。

「ファリスの水晶球でも、もう、この闇を消す事は、出来ない様ですね」

背後から、掛けられた冷たい声に、ファレンは驚いて振り返った。

「エシュー・・・」

その表情が、皮肉の色を帯びているのを、ファレンは戸惑った顔で見た。

「現実に、闇はもうそこまで来ている。皇帝が崩御して、魔法の力も風前の灯火。光の巫女の体に宿る、女神ファリスの光の水晶球は、魔道師の魔法とは違う。皇帝の存在に左右されない、光の力。それを持ってしても、この闇は払えない・・・そう、大きすぎる闇の前では、光の力など、頼りなげに揺れる蠟燭の火に等しいのですよ・・・」

ファレンは、その瞳の中に宿る不穏な光に、恐怖を感じた。

いつも間近にいたのに、気づかなかった。いや、間近にいたからこそ、分からなかった。神殿から離れてみて、初めて気づいたのだ。前と同じはずのものが、違って見える事に。目の前の真実にファレンの口から戸惑いの混じった声が漏れる。

「あなたは、誰？」

実直で融通が利かず、至らない所があるとしても、その年には重い職務を懸命にこなす姿を、ファレンは好ましく思いながら、ずっと見てきた。それよりももっと以前に、神官見習いとして、この神殿にやってきた頃から、ずっと、そばで見ていたのに・・・

・・・離れてみて、初めて見えるものが、きっとあると思いますよ・・・

いつだったか、ランディスに言われた言葉が、頭に浮かんだ。

彼女の目の前で、エシュランが薄笑いを浮かべている。どうして気づかなかったのだろう。その笑顔が、前と違う事に。

・・・一体、いつから・・・いつの間に・・・

ファレンの瞳から、涙が零れた。

あのエシュランは、もういない。その事に、自分は気づきもしなかったのだ。突きつけられた真実に、ファレンは打ちのめされた。

エシュランの姿をした者が、光の水晶球を掴んだ。彼がその手に力を込めると、ファレンは息苦しさに襲われてよろめいた。その体を支える様に、その者の腕がファレンを抱き寄せる。そして、手に掴んだ水晶球をファレンの胸に押し当てて、魔道の呪文を添えながら、それを無理やり体の中に押し込んでいく。

「・・・やめ・・・て」

「あなたの力をお借りしますよ、巫女姫様。大いなる魔法の力を取り戻す為に」

ファレンの意識が遠のいていく。

「闇を制するには、同じ闇の力が必要なのですよ」

薄れる意識の中で聞こえて来た言葉に、ファレンはこの若者が誰なのかが、ようやく分かった。以前にも、これと同じ言葉を聞いたことがある。それは、魔道師ルトの言葉だ。

そう、この者はその意思を継ぐ者――

「・・シルフィウス」

ファレンに名を呼ばれて、若者が嘲笑するような声を漏した気がした。

そして、ファレンの意識は、底の見えない暗い水の中に沈んでいく様に、ゆっくりと闇の中へ落ちていった。

第8章 闇の魔道書と交差する時間

ラシャは魔道師長補佐であるカイを捜して、魔法の塔へ向かっていた。

何時の間にか天を覆い尽くしていた黒い重たい雲から、大粒の雨が落ち始めていた。何気なく空を見遣って、その禍々しさに背筋を冷たいものが走るのを感じる。何か良くない事が起きそうだ。そんな事を考える内に、あたりは風と雷を伴う激しい嵐となった。

そんな嵐の中、魔法の塔の入り口で、ラシャは思いがけない人物と出会った。

その塔へ入る入り口の階段に、少年が腰掛けていた。やって来た彼を見上げた、その顔を見て、ラシャは足を止めて立ちすくむ。

「ミサキ・・・お前、何時の間に・・・」

太陽の神殿で別れたばかりのミサキが、きらびやかな衣装に身を包み、そこにいた。

いや、よくよく見れば、こちらのミサキの方が若い様な感じはする。だが、他人と言うには、似すぎている。

「えーと・・・確か、ラシャストロフ・ディール。雪の騎士。都からの召喚を無視し続けて、各地を放浪している騎士、だろ？」

少年がにこやかに言った。ラシャは、ただそれに頷くばかりである。

「大当り。暗記ものは得意なんだ」

「お前、一体・・・」

「ああ、俺は、美崎和也。リート様のお代理様だ」

「ミサキって・・・え？どういう・・・だって、あれ・・・ミサキはさっき神殿に・・・」

ラシャの言葉に、和也の顔が輝く。

「カーシアのミサキが、都に来ているのか？」

「カーシアのミサキ？」

「そ。もう一人の俺。本物の、リート様。ラシャ、案内してくれ」

「俺は、魔道師長補佐様に用が・・・」

「駄目だよ。カイはこの中だけど、誰とも会わないって・・・皇帝陛下が崩御されて、カディアの結界が壊れ始めたらしくてさ。その修復に忙しいって、中に入れてもくれないんだ。俺なんか、朱里の居場所聞こうと思って、朝から待ってるのに、ずっと待ち惚けでさ」

和也が立ち上がって階段を数段飛び降り、ラシャの隣に着地した。

「行こう」

そう言って、そのまま歩き出した和也を、ラシャは慌てて追い掛けた。

窓の外で、物凄い音量の雷鳴が鳴り響いた。カヤが驚いて、思わず身をすくめる。その音に、ミサキが身じろぎをした。それに気づいて、シリウスが耳元で声を掛ける。

「おい、ミサキ」

呼ばれて、ミサキが目を開けた。そして、シリウスと、その傍らにいるキラに目を止めると、

安心した様に笑った。

「喉・・渴いた」

ミサキの掠れた声を聞きとめて、カヤが水を貰いに出て行った。再び鳴り響いた雷鳴に、ミサキが頭を巡らせて窓の外に目をやった。

「・・何か、すごい天気だな・・」

誰にともなく呟いたミサキに、思いがけず、キラが答えた。

「多分、この辺りの魔法のバランスが、おかしくなってるんだよ。その影響が、こういう形で現われる」

キラは、ロゼリアからこっち、ほとんど口を利いてくれなかった。無理もないことだが、いきなり現われたミサキ達のことを警戒するように、いつも少し距離をおいて眺めている。そんな感じだったのだ。

自分が倒れたことで、キラの警戒心が薄れたのかも知れない。そして、置かれていた距離が少し縮まった様な気がしてミサキは嬉しくなった。

そう言えばキラは、魔道師だと言っていた。魔法の話なら、もう少し話をしてくれるだろうか・・そんな期待をしながら、ミサキは注意深く会話を継いだ。

「魔法のバランスって・・どういうことだ？」

ランドメイアの人間なのに、そんな事も知らないのか、と、呆れた顔をしながら、キラは話を続けた。

「魔法には、光の属性と闇の属性の二つがある。創造と出現の魔法。それが、光の魔法。対する闇の魔法は、破壊と消滅の魔法。この二つは表裏を成すものだから、どちらかに力が偏ると、歪みが現われるんだ。この島では、闇の魔法を統べる時の魔女と、光の魔法を統べる皇帝が、ちょうど天秤の両側に乗かって、それで均衡が保たれていた。その皇帝がいなくなって、バランスが崩れたんだよ。恐らく、それを元に戻す為に、この島に掛けられている、時の魔女の、闇の魔法が、間もなく消滅する。この嵐は、その前触れだ」

「時の魔女の・・闇の魔法って？」

「時の魔女は、この島に、消滅の魔法を掛けていた」

「消滅の魔法？」

「結界、のようなものかな。お前は、海竜族なのか？」

キラがシリウスの顔を見て聞く。

「ああ・・」

「この島の外に出た事は？」

「ない・・けど」

「そうか・・なら、知らないのかな。この島は、外の世界からは、見えない島・・隠された島、地図にない島だ。その正確な位置を知るのは、ただ海竜族だけ。人々は、海竜族の船によってのみ、この島に辿り着く事ができる。ここはそういう魔法に守られた島なんだ」

「その結界が壊れたら・・どうなる？」

「結界の消滅は、この島の消滅と同じことだ」

キラの言葉に、ミサキが飛び起きた。その途端に、ミサキは頭痛と眩暈に襲われて、ベッドの上に苦しそうに身を屈める。シリウスが、慌ててミサキをベッドに押し倒した。

「何やってんだよ、お前は。まだ、寝てろって」

「だって、このままじゃ・・・俺が、何とかしなきゃ、この国は・・・」

苦しそうにしているミサキの額に、キラが手を当てた。

「じっとして・・・動かないで」

そこから、淡い青い光が漏れ出ている。頭を締め付けられる様な痛さが、少しずつ収まっていく様だ。次第に、ミサキの表情が穏やかになっていく。

・・・癒しの魔法か・・・そっか、リートの魔道師としての才能は、父親の血を継いだものなんだな・・・

シリウスがそんなことを考えていると、不意に、

「・・・お前がリートなのか？」

キラが呟く様に言った。その言葉に、ミサキが驚いてキラを見上げた。

この男のことを、こいつらはミサキと呼んでいる。だが、彼らの会話を聞いていると、どうも彼にはもう一つの名前がある。それが――

・・・お願い、リートを守ってあげてね・・・

その答えを示す様に、女の声がキラの脳裏に響いた。

「お前は、僕の、何なんだ？」

突然の問いかけに、ミサキは戸惑った顔をした。

今のキラには、リートに関する記憶がない。シャルルロットにそう言われてから、ミサキは、自分が彼の子供だという事実は胸の中に仕舞っておくしかないのだと、そう思っていた。よもや、キラの方から、そういう問いかけがあろうとは、思ってもみなかったのだ。

「キラ、俺は・・・」

言いかけたミサキを、キラが遮った。

「・・・たく、お前らの発音はなってない。前から言おうと思ってたけど、僕の名前は、キラじゃなくて、カ、ル、ラ。カルラ・アディラ・アルソーマだ」

「え？」

キラという名は、記憶をなくした彼に、リートの母、リファーリアが与えたものだ。

・・・そうか。子供の時の記憶があるのなら、本来の名前を思い出しているのも、道理か・・・
ミサキがそんな事を考えていると、横でシリウスが考え込んでいる。

「・・・おい、アディラって、どっかで・・・」

・・・アディラ？・・・って・・・ええ！？・・・

ミサキには、それは忘れようの無い名前だ。

・・・私の名前は、インディラ・アディラ・・・

「それって、インディラ様の・・・」

同じくその事に気づいたシリウスが、キラを問い詰める。

「何で同じ名前なんだよ、お前が」

同じ名前だと指摘されて、キラが不愉快そうな顔になる。

「インディラ・アディラ・フィラソーマは、僕の姉上だ」

「姉上！？・・・って、お姉さん？」

「そんな事は、どうだっていい。僕が知りたいのは、何で、僕が、お前を守らなきゃならないんだってこと・・・」

「どうでもいい訳ないだろ？」

ミサキがキラの手を掴んだ。キラは、この国を滅ぼしにきたと言われている人間だ。そのキラの姉弟だと言うのなら、インディラもまた・・・

「インディラって、朱里なんだぞ。朱里が・・・この国を滅ぼすっていうのか」

キラが掴まれていた手を、勢い良く振りほどく。

「何・・訳の分かんないこと、言ってんだよ、お前は。この国は、時の魔女が、インディラが作った国なんだろうが」

「ちょっと、待て」

二人の間に、シリウスが割って入る。

「インディラ様が、時の魔女？」

シリウスの問いに、キラが頷く。

「・・この国を作った？」

「ああ」

「もしや、時の魔女ってのは、ダーク・ブランカ様のことなのか？」

「ああ、ここじゃ、そんな通り名を使っているらしいな」

「てことは、インディラ様＝ダーク・ブランカ様って事に、なるんだけど？」

「違うのか？」

逆に聞き返されて、シリウスはまた考え込む。あの子が、大魔法使い。そんな事がありえるのか・・

「インディラの話は、もういいだろ。僕がお前を守らなきゃいけない理由は、何なんだ？」

そう言われて、ミサキが怪訝そうな顔をする。

「何で、君が、俺を守るって・・」

「だって、何回も同じ夢を見て、その夢の中で、女がそう言うんだ。リートを守ってあげてね、ってさ」

「・・その人の強い思いが、あなたに、そんな夢を見せるのかも知れないわね」

ちょうど、水差しを持って戻ってきたカヤが、戸口のところに立っていた。

カヤは水差しからコップに水を汲むと、ミサキに渡した。水差しの方はシリウスに押し付けると、椅子に座っているキラの前に跪き、彼が首から下げていたペンダントを手に取った。そして、キラの顔を見ながら、言い聞かせる様な口調で話す。

「これはね、瞳石という特別な石なの。人の思いが作り出す石。自分の大切な人を守る護符として、その思いを込めて作られるものなのよ」

そう言うと、カヤはキラの手を取ってそこに石を乗せ、その上に自分の手をそっと重ねた。二人の手の中で、綺麗な緑色の光が生まれる。そして・・

キラの脳裏に、ある情景が浮かびあがる。

ベットに横たわっている女性がいた。その女性は、こちらを見て、優しい笑みを見せる。

・・・この人は、夢の中の・・・

その女性が、キラの首にペンダントを掛けた。

「キラ、わたしは、あなたに出会えて、幸せでした。ねえ、泣かないで。あなたを悲しませる事になってしまうのは、とても辛いから・・ごめんなさい・・あなたをこんなに悲しませるなんて・・本当に、ごめんなさい。でもね、キラ、わたしの心はきっと、いつもあなたの側にいる

から・・・ねえ、キラ、リートを・・・お願い、リートを守ってあげてね・・・」

心に大きな悲しみが押し寄せてきて、キラの瞳から涙が零れ落ちた。

「・・・リファ」

何時の間にか、知らないはずの女性の名前を呟いていた。

「・・・そっか、これは、リファリア様の思いが込められた石なのね。あなたが未来に飛ばされるのを押し留めたのは、彼女の強い思いだったのかもしれないわ」

剣に奪われた時間の中に、自分の本当に大切なものがあつたのかも知れない・・・そう思うと、キラの心に言い様のない不安が広がる。

「僕が無くしてしまったものって、何？」

キラが、すがる様な瞳でカヤを見た。

「・・・リートは・・・」

「おい、カヤ」

カヤの言わんとしている事を察して、シリウスがたしなめる。

「忘れてしまったのだとしても、彼は知っているべきだわ。自分をこんなにも愛してくれた人がいたのだということ。そして自分が愛していたもののことをね」

カヤはキラの顔を正面から見て、そして言った。

「リートは、あなたとリファの子供なのよ」

告げられた真実に、キラは呆然としてミサキを見る。

「お前が、僕の子供・・・」

ミサキもまた、ただそれに頷く事しかできなかった。

自分がこの場所に残されていたのは、きっと、それがリファの願いだったから。リートの身を案じながら逝ったリファの、それが最後の願いだったから。そういうことなのか。

・・・でも、今の僕は・・・

キラが何かを決心した様に立ち上がって、首から下げていたペンダントを外すと、それをミサキの首に掛けた。

「これ、お前にやる」

「貰えないよ、こんな大切なもの・・・」

驚いてペンダントを外そうとするミサキの手を、キラが止めた。

「今の僕には、お前を守る力なんてないから・・・でも、それが、リファの願いなら・・・」

自分の胸で光る緑色の光に、ミサキは心が温かいもので満たされる様な、そんな気がした。それはきっと、人が人を思う気持ちの温もりなのだろう。

「きっと、リファがお前を、守ってくれる」

「ありがとう、キラ・・・」

そう言ったミサキに、キラがまた顔をしかめる。

「・・・だから、カルラだって、言っているだろう。物覚えの悪い奴だな」

そう返されて、ミサキは思わず苦笑した。

ラディウス二世が崩御して、太陽の神殿の地図球は、闇の色に包まれた。皇帝の力が無くなって、この世界から、急速に魔法の力が消え始めている。もう、一刻の猶予もないのだ。心の不安を煽る様な、豪雨の様を宰相ラーラが眺めていると、ドアにノックの音があった。

ドアを開けて入ってきた来訪者の、その出で立ちに、ラーラはわずかに眉をひそめた。

「随分と、物々しい出で立ちですな、ロゼリア公。シルヴィア姫様まで・・・何事かございましたか？」

ラーラの言い様に、今度はシャルロットの方が、眉をひそめた。

「私は、ご招待を頂いて、参上したのですが、宰相閣下」

シャルロットが懐から、召喚状を取り出して、ラーラの眼前に差し出した。

「新しい皇帝陛下の即位式をなさるのだと、そう聞き及んでおりますが。恐らく、皇帝騎士団の騎士は全て、数日中に、このカディスに招集されるはずですよ」

シャルロットの話聞いて、ラーラが苦笑した。

「それは、私ではありませんよ。恐らく、魔道師長様の仕業でしょう。あのお方も、全く、何を考えておられるのか」

「では、即位式の事は」

「準備させてはおりますが、まだ、正式には何も決まっていはいない状態です」

「もしかして、リートの消息がお分かりになったのでしょうか？」

その問いに、ラーラは少し間を置き、シャルロットの向けている鋭い視線から逃れる様に、さりげなく視線を外した。

「・・・リート殿下は、すでにお戻りになっていらっしゃる」

「閣下、ここに来る途中で、妙な噂を耳にしたのですが・・・」

「妙な噂？」

「リートが、禁忌の魔法によって、封印の地から召喚されたと」

「・・・ロゼリア公も、お人が悪い。全てご存知の上で、鎌を掛けるような、そのおっしゃり様は」

ラーラが薄笑いを浮かべた。

「いかにも、殿下は、封印の地より、このラーラが召喚したもの。しかし、全ては、このカリディアの為。そう、ご理解いただきたい」

その答えに、シャルロットは険しい顔をして、押し黙った。

聞けば、そのリートは、ラリサ様の封印が解けず、髪も瞳も黒いままであり、そのせいで、即位式が出来ないのだという。

大魔法使いダーク・ブランカの唯一の弟子である、ラリサ・フラーム。その魔道師の掛けた術は、恐ろしく強固で、それを解く事は容易ではないのだろう。今、このランドメアで、その術を解く事ができる人物がいるとすれば、それは即ち、ラリサの後継者と目されている魔道師長ランディスに他ならない。だが、その肝心の人物は姿をくらましたまま、いつ戻るのかも分からない状態だという。

元々、気ままな性格の魔道師長は、その肩書きを嫌い、まともに宮殿にいたためしががないのだ。彼の補佐役のカイが、生真面目な性格で、ランディスに振り回されながらも、その後始末に奔走し、今までどうにか辻褄を合わせていた。

だが、それも、皇帝陛下がいて初めて成り立つ話であって、この様な非常時には、到底対応できるものではない。それに、ラーラはカイの師である。その弟子であるカイでは、そもそも師である人の逸脱は止められない。

・・・しかし、この様な状況を放置なさるとは。ランディス様ともあろうお方が・・・

そう思ったところで、シャルロットは、はっとする。

・・・だから、呼ばれたのか。この私が。今、この時に、この場所に。とんだ貧乏くじだな・・・

「閣下。体裁を繕えばいいと言うものではありません。そんなことをしては、この国は本当に滅びてしまいますよ」

シャルロットの言葉に、ラーラは何か不穏なものを感じて、後ずさった。シャルロットはラーラを鋭い眼で捕えたまま、剣を抜いた。

「何の真似だ、ロゼリア公」

「・・・あなたは、呼び寄せてはならないものを、この国に呼んでしまった。禁忌を犯した、その罪は、償って頂かなくてはなりません」

「馬鹿な。今この私を捕えて、この国を誰が守るといふのだ」

「その為に、不本意ながら、私がここにいるのですよ。禁忌を犯した罪ならば、幽閉となりましょうが、今の状況で、これ以上の混乱は避けるべきでしょう。ここは、大人しく、ご病気の療養という名目で、職をお退き下さい」

「・・・私は、この帝国を守る為に・・・」

ラーラが消え入りそうな声で呟く。数歩歩いてよろめき、体から力が抜けた様に膝を折って、床に手を付いた。

「シルヴィ、閣下を月の神殿までお送りしろ」

「はい、お兄様」

シルヴィに伴われて、部屋を出ていくラーラを見送って、シャルロットは深いため息をついた。

「命令書とまでは言わないが、せめて、口頭でご命令をいただきたいものですよ、ランディス様」

ランディスの意図は、分からない。

宰相の仕事ぐらいは、取り合えず引き継ぐにしても・・・皇帝が不在では、動きようがない。ランディスが騎士を招集したというのなら、即位式を行う事自体に、問題はないはずだ。

・・・やはり、リートの事が最優先なのだろうな・・・

そこまで考えて、シャルロットは、すでにリートを皇帝にするという前提で物事を考え始めている自分に気づいた。

・・・これが予言の重さなのか・・・

運命を変える事など、出来はしないのか。皇帝となったリートは、この国を滅ぼしてしまうのか。それが必然だというのか。シャルロットは宰相の椅子に力なく腰を落とし、頭を抱え込んだ。

「巫女姫様って、美人だと思う？」

前を歩いていたレオンが、振り向きながら言った台詞に、ラスは顔をしかめた。

「馬鹿か、お前は」

巫女姫が太陽の神殿に戻ったという知らせを受けて、彼等、太陽の四騎士は、太陽の神殿にやって来た。過日、ランディスに命じられた、太陽の剣を作り出す為である。太陽の剣とは、太陽の四騎士の、剣の力を合わせて作り出される魔法の剣で、その生成には、巫女姫の力が必要なのだ。

「その性格、なんとかしなさいよ。恥ずかしいったら」

サラにまでそう言われて、レオンは口を尖らせて、弁解するように言った。

「だってさあ、ファリスの地上代行者だろ？神殿の奥深くにいて、人には姿を見せず。女神の御告げだけを聞いて、日々暮らしてるなんてさ、どんな人なのかって、思わなかった？」

光族のラスは、思わず顔をしかめた。異世界の人間であるレオンには、その存在の意味するところが、全く分かっていないのだ。

「恐れ多い事、言うもんじゃない。彼女は、光の女神ファリス様の、地上の化身とも言われるお方なんだぞ」

「・・・だって、人間には変わらないじゃんか」

「ファレンシア様は、特別なんだ」

「そうかなあ・・・」

「レオンに神様の話なんて、判りゃしないわよ。無神論者の極楽とんぼなんだもの」

サラが冷めた口調で言った。横で聞いていたクリスが、思わず吹き出したのを見て、レオンがムツとする。

「極楽とんぼって、どういう意味だよっ！」

「本当のことでしょう？」

サラの妙に冷静な口調が、レオンの感にさわったらしい。レオンが勢い込んで、剣の柄に手を掛ける。

「止めろ、二人ともっ！こんな所で・・・」

ラスが慌てて二人の間に入った。気の強いサラと、まだ子供っぽい所があり率直に思ったままを口にするレオンがぶつかるのは何時ものことだが、この非常時にまでそれをやられたのでは、ラスの方が参ってしまう。

「そうだぞ、ご両人、仲良きことは美しきかな。協力しあって平和な世界。OK？」

四人が声の主を見ると、少年はにっこりと笑った。

「リート・・・様？」

自分の名前を呼んだ少年を一瞥して、天井を仰ぐこと数秒・・・和也は、ポンと手を打って、レオンを指差した。

「レオンハルト・ハスヴェルっ！皇帝騎士団一の剣術使いで、風の騎士だ。名前と顔があんまりギャップがあったから、すぐに出てこなかったよ。で、そちらのお嬢さんが、炎の騎士サラ。君たちとは、一度会ってたね」

「お嬢・・・さん？」

サラが拍子抜けした顔をした。物心着いたときから、剣を持ち、女丈夫と言われてきた彼女である。お嬢さんなどと呼ばれたのは、恐らく生まれて初めてだった。

「それで、君が、リーダーで光の騎士、ラスフィール。それから、その盟友で、氷の騎士のクリストファー・ラデリウス。皇帝騎士団の太陽の四騎士が揃うと、壮観だね」

楽しそうにそう言った和也に、彼等は顔を見合わせる。和也の後ろに、ラシャの姿を認めて、ラスが不審の目を向ける。

「お前、今度は、何をたくらんでいるんだ？」

「・・・俺に聞くなよ。こっちが聞きたいぐらいだ」

「・・・フィリスの神殿のリート様より、こっちの方が、前のリート様に近いかな」

クリスが思案顔で呟く。

「俺は、美崎和也。本物のリート様って、カーシアのミサキの方だよ」

「カーシアのミサキというと・・・サラが会ったっていう奴？」

クリスが確認するように、サラに聞いた。

「それが、フィリスの神殿のリート様と同一人物かどうかは、知らないけど・・・彼と彼、兄弟ってぐらいには、似ているかしらね」

サラが和也を、しみじみと見ながら言った。その和也が、何かを見つけたように、視線を回廊の奥へ向けた。

「あれは・・・？」

神官長エシュランを従えて、一人の巫女がこちらに歩いてくる。その女性は、何とも神々しい感じのする女性である。

「あれが、巫女姫ファレンシア様？へえ・・・結構、美人じゃん」

「こら、レオン、黙りなさい」

サラが慌ててレオンの口を塞ぐ。

「・・・おい」

ラスが信じられないものを見た、という顔をして、クリスの方を見た。彼女は、氷の神殿で、リート様と一緒にいた女性ではないか。

「おやおや・・・ランディス様も人が悪いよね」

クリスが苦笑する。季節外れの巡礼者など、そもそも存在しなかったのだ。

そして、一同は跪き、頭を下げたままで、巫女姫を待った。ただ一人、和也だけが立ったまま、近付いてくるファレンをじっと見詰めていた。

「・・・リート・ラランダ・ラ・マリウス・・・ですね？」

和也の前に立ったファレンが、抑揚のない静かな声で言った。

「俺は・・・」

和也は慌てて否定しようとしたが、ファレンの生気のない人形のような顔に、思わず言葉を失った。ファレンが右手を和也の頭の上にかざす。すると、その掌に、光の水晶球が現れた。

「騎士の方々・・・顔を上げてください。カリディアの新しき皇帝となる、マリウス帝誕生の見届け役をお願いします」

顔を上げた五人は、目の前で行なわれている奇跡に息を飲んだ。ファレンの手から溢れ出る光が和也に振り注ぎ、その髪を黄金色に、そしてその瞳をエメラルドの緑に変えていく。

「魔法が解けていく・・・」

そしてそこには、光族の姿のリートがあった。

「う・・・そだろ」

大理石の柱に映った自分の姿を見つけて、和也は呆然としていた。柱の前で、恐る恐る髪を引っ張って、そこに映った金髪が、確かに自分の物であると確認すると、両手を柱についてうなだれた。

「・・・参ったな。生徒会長がこんなきらきらの頭で・・・目は緑か？うわ～、まじかよ。こんなじゃ、学校行けないじゃん」

「陛下、もはや一刻の猶予もございません。このカディアの結界が崩れ始めております。すぐに即位式のお支度を」

エシュランが、和也を急かすように言う。

「ま、待ってくれ。ちょっと、待て。俺は、お代理様なんだぞ、カーシアのミサキが本物なんじゃないのか？」

「何をおっしゃいます。ミサキという輩は陛下の御名を騙る偽物にございますぞ。即刻捕えて、処刑致さねばなりません」

「馬鹿を言うな。あっちが、本物なんだ。俺は和也だ。ラス、ここにミサキを連れてくるんだ」

名を呼ばれて、ラスは立ち上がったが、エシュランの鋭い視線を受けて、その場から動けない。

「お聞き下さい、陛下っ！」

「黙れっ！」

和也が怒鳴った。その剣幕に、エシュランは驚いて口をつぐんだ。

「ああ、もういい。俺が行く。本物を連れてくるから、お前たち、ここで待ってろ」

そう言って、和也は歩き出す。

「お待ちください」

エシュランが、思わず和也の手を掴んだ。その刹那、和也の腕から黒い光がほとばしり、エシュランの体を弾き飛ばした。何が起こったのか分からず、和也は、狐につままれた様な顔をしている。見えない力に弾かれて、よろめきながら、ようやく柱にすがる様にして立ったエシュランの体が、ふいに歪んだ様に見えて、一同の見ている前で変化した。

「・・・光の魔法が消滅したか・・・いや・・・これは、待ち焦がれた、闇の魔法の力か・・・」

不敵な笑みを浮かべて、そこに現われた人物に、太陽の四騎士が寸分を置かず、剣を抜いた。

「貴様、シルフィウス」

ラスが先頭を切って、シルフィウスに対峙する。

「下がれ、私の邪魔をするな。もう時間がないのだぞ。このままでは、このランドメイアの結界は消滅する」

「何を世迷言を・・・」

「剣を収めなさい、光の騎士」

ファレンが、シルフィウスを庇う様に両手を広げ、二人の間に立った。

「お退き下さい、巫女姫さま！」

ラスは、ファレンの瞳が尋常でない光を帯びている事に気づいた。

「シルフィウス・・・貴様、巫女姫様に、何をしたのだ」

しかし、怒気を含んだラスのその言葉など、シルフィウスは聞いていない。

シルフィウスが面白そうな顔をして、自分の背後の何ものかを凝視していた。それを不審に思っ
て振り返ったラスが、その視線の先に見たのは、思いがけない和也の姿だった。

和也は意識を失って、ちょうどそこに崩れ落ちたところだった。その体を、禍々しい黒い光が
包み込んでいく。巫女姫によって金色に変えられた髪も、元の漆黒の色に戻っていく。

「さあ、ファレンシア様・・・」

シルフィウスが、ファレンの耳元で、囁いた。ファレンの手に再び、光の水晶球が現れた。そ
してファレンは、真っ直ぐに和也に近づいていく。

・・・止めるべきなんじゃないのか・・・

心ではそう思うものの、ラスは体を動かすことが出来なかった。他の騎士たちも、魅入られた
様に、ファレンの行動をただ、目で追うばかりだ。ファレンが、気を失った和也の傍らに跪く。
そして、光の水晶球を和也の心臓の上に乗せ、それを和也の体に押し込んでいく。

「うわあああ・・・」

刹那、和也が苦痛に顔を歪め、ものすごい声を上げた。その声に弾かれる様に、ラスが叫んだ
。

「彼らを捕えろ」

ラスの声に、サラがファレンを羽交い絞めにした。その腕の中で、ファレンはすでに気を失っ
ていた。

残りの三人がシルフィウスを取り囲む。と、シルフィウスの姿が消えた。

次の瞬間には、彼は、和也の傍らに立っていた。苦しそうにもがいている和也を、冷めた目で
見下ろしている。

「・・・苦しいか。お前をその苦しみから救い出してくれる者は、この世にただ一人。お前がその
身に封じた、魔道書の真の主だけ。さあ、その名前を呼べ。呼べば、楽になるぞ・・・さあ・・・」

シルフィウスの言葉が、和也の身に降りかかるように舞い降りる。

・・・苦しくて・・・息が出来ない・・・俺、死んじゃうのか・・・こんなところで・・・いやだ、まだ・・・

・死にたくない・・・

「あ・・・かり・・・」

「成る程。それが、闇の魔道書を制する者の名か」

和也の口から吐息の様に漏れ出た名前に、シルフィウスは微笑した。

魔法の搭の中では、カイが魔道師達を総動員して、結界の修復に追われていた。結界は、直した側から、次々に崩れていく。その早さに、修復が追いつかない。そもそも、魔法の力が弱くなっているから、修復自体も完璧とは程遠いのだ。だから、直してもすぐに壊れる。これでは、キリがない。

・・・くそっ。時間の問題だぞ、これは・・・

カイは唇を噛んだ。

「カイ様！」

水晶球を見ていた魔道師が、大きな声を上げた。

「今度は、何だ？」

もう、大抵の事では驚かない。

「・・・ランディス様が」

その名前に、カイは転がる様にして、水晶に飛びついた。水晶の中に、懐かしささえ感じるランディスの顔が浮かび上がっていた。

「魔道師長様っ！」

カイの絶叫に近い声に、ランディスが顔をしかめた。

「その呼び方は、止めてくれと、いつも言っているだろうに」

「そんなこと言っている場合ですかっ！？この非常時に。今、どちらにいらっしゃるのですか？」

」

「内緒」

「ランディス様～」

カイの泣き出しそうな顔とは対照的に、ランディスは笑顔で言う。

「大丈夫だ、カイ。心は、いつも君のそばにいるから」

「・・・この状況で、そんな事言われても、笑えません」

「そんなに心が乱れていては、魔法など使えないだろう」

そう言われて、自分の余裕の無さに気づき、カイは、はっとさせられる。

「カイ」

ランディスの声が、不意に緊迫感を帯びた。カイは思わず背筋を伸ばす。

「ダーク・ブランカ様が、このランドメシアに張った結界が、間もなく消滅する」

「そんな・・・」

カイは絶句した。ランドメシアの結界が壊れれば、カディアの結界など、ひとたまりもない。

「はい、ここで、問題です。被害を最小限にとどめるには、どうすればいいでしょう？」

「・・・今残っている魔力で、カディア全体を守るのは、もう無理です・・・」

「だから？」

「本当に守らなければいけないものだけを、守るしかないという事でしょうか」

「今の自分の力がどれ程のものか、君なら、分かるよね？」

「はい」

「二つはダメだよ。守れるのは、本当に大切なもの。一つだけだ。じゃ、そういうことだから」
水晶の中の、ランディアスの姿が消えていく。

「ランディアス様っ！」

自分を呼ぶカイの顔を見て、ランディアスが苦笑する。

「・・・そんな捨られた子犬みたいな顔をするなって。魔道師長様には、魔道師長様のお仕事があるんだ。遊んでいる訳じゃないんだぞ。・・・君は、君が出来る事をすればいい」

そう言い残して、ランディアスの姿は消えた。

「私の出来ること・・・」

カイは気持ちを落ち着けて考える。

・・・守れるのは、多分、この魔法の搭だけ・・・いや、それすらも危ういのか・・・

本当に大切なものだけ。

自分が本当に守らなきゃいけないもの。

それは・・・

「魔道師たちを宮殿に集めるんだ。結界の修復は、もういい。それから、宰相閣下に伝令を。全ての神殿に緊急通信を送る。口伝鳥？この天気で飛べると思うのか？水晶球を使うんだ」

カイの指示で、魔道師たちが一斉に動き出した。

そんな緊迫した空気の中、朱里は部屋の隅で、ただ、カイの姿を追っていた。

誰かに側にいて欲しかった。魔法を失ったという喪失感、言いようのない心細さになって、朱里を押しつぶそうとしていた。でも、カイに声を掛けることは出来なかった。何もできない、傍観者でしかない今の自分は、カイの重荷にしかない。それが嫌と言うほど分かっていたからだ。

・・・本当に、私には、もう何も出来ないの？・・・

そう思った途端に、涙が溢れ出しそうになる。

・・・泣いてどうするのよ・・・

朱里は慌てて涙を堪えた。こんな時、ダーク・ブランカがいてくれたら・・・そう考えて、朱里はそれを打ち消すように首を振る。

・・・違う。朱里、あなたがダーク・ブランカの代理人なんでしょう？・・・何か出来るはずでしょう・・・何か・・・

朱里は目を閉じ、心を落ち着けて意識を集中する。少しでも魔力の欠片でも残っていれば・・・
すすがるような気持ちで思い続けた。

心の奥の、静寂の薄闇の中に、鏡のような水面の上に、小さな雫が、ささやくような音を立てた。

・・・あ・か・り・・・

誰かに名前を呼ばれた気がした。

・・・何処？・・・

朱里は更に意識を集める。声の主を捜すように、その薄闇の中を彷徨う。

「インディラ様？」

不意に声を掛けられて、我に返った。目を開けるとカイが目の前に立っていた。

自分を見上げた朱里の、その瞳の力強さに、カイは一瞬、圧倒された。

・・・この方は、一体・・・

「宮殿へお移り下さい」

「カディアスの結界は、もういいの？」

問われてカイが、苦渋に満ちた表情になる。

「もう、私の力では・・・」

・・・あ・か・り・・・

「インディラ様？」

朱里が、どこか遠くを見ている様な目をしているのに気づいて、カイは再び彼女を呼んだ。

「どうしました？」

「・・・名前を呼ばれた気が・・・したんだけど・・・」

そう呟いた朱里の姿が、突然、カイの目の前から消え失せた。

「インディラ様っ！」

その気配を追いかけようと、意識を集中したカイの脳裏をランディアスの声がよぎる。

・・・二つはダメだよ。守れるのは、本当に大切なもの。一つだけだ・・・

もう自分の力では、あの少女を守ることは出来ない。そう気づいて、カイは唇を噛み締めた。

「インディラ様・・・どうか、ご無事で」

今は、自分に出来る事をやるしかない。魔道師長補佐である自分がすべき事を。

「来たか」

その気配を感じて、シルフィウスが口元に笑みを浮かべた。現われた少女の姿を確認し、シルフィウスは、その少女と和也、そして自分を包むだけの小さな結界を張った。

一方、床に横たわっている和也を一瞥して、彼女・インディラはその傍らに立つ魔道師に、不敵な笑みを向けた。

「私を呼んだのは、お前か？」

そう言って向けられた瞳は、彼の知っているインディラのものではなかった。やや戸惑いを覚えながら、シルフィウスは言った。

「・・・お前には、ダーク・ブランカに与えられた使命があるはずだ」

「成る程。使命を果たせということか。光と闇は相反する力。この闇の力を導くのに、光の巫女の力を使ったか。さすがにルトの弟子というところだな、なかなか優秀だ。・・・お前に諸刃の剣を抜く役回りを押し付けるとは、ランディスの奴も底意地が悪い・・・」

インディラの最後の一言に、シルフィウスが眉をひそめる。

「・・・まさか踊らされた？この私が？・・・」

シルフィウスの心を読む様に、インディラが言う。

「魔道師長という肩書きは、伊達や酔狂で付くものではないからな」

インディラが片膝を付いて、和也の胸に手を当てた。

「ご苦労だったな。今、楽にしてやる」

インディラの手が、和也の体に入り込んでいく。和也が呻き声を上げて、体を仰け反らせる。程なくしてインディラは、和也の体から何かを引っ張り出した。

「お前が欲しかったのは、これだろう？」

インディラの手には、一冊の書物が握られていた。

「三年前、ラリサがその扱いに困って、この者の体に封印し、私の元に送って寄越した。これがその、闇の魔道書だ」

その魔道書の存在感に、シルフィウスは圧倒され、鼓動が高鳴っていくのを感じる。心を落ち着かせる為に、大きく息を吐いた。

「・・・お前には、闇の魔道書を制する力があるはずだ」

「ほう」

「それが、お前がここにいる理由ではないのか」

「確かに。その為に、私はここにいる」

インディラが、また不敵に笑った。しかし、この娘はインディラではない。その少女の中に、別の誰かがいる。シルフィウスは、そう確信した。この娘に憑依しているのか。それとも、誰かが姿を変えているのか。

「・・・お前は、誰だ？」

「何だ、知っていて、私を呼んだのではないのか？」

少女が意外そうな顔をする。

「それでは、この闇の魔道書を使うことは出来ぬが・・・どうやら、お前では、役不足か」

少女に見据えられて、ラスフィールは急に恐怖心を覚えた。

・・・何だ・・・この・・・威圧感は・・・

体が金縛りにあった様に動かない。

「気の毒だが、諸刃の剣を抜いた代償は、払ってもらうぞ」

少女が笑った。

戻って来たラシャが、気を失ったファレンを抱きかかえているのを見て驚いたミサキが、また勢い良く飛び起きた。

「おいっ、ミサキ」

思わずシリウスが顔をしかめる。

「もう大丈夫だって」

そう言うとミサキは、ベッドから下りた。そこにラシャがファレンを横たえた。

「一体、何があったんだ？」

ミサキに問われて、ラシャは事の顛末を話した。そして、インディラが突然姿を現わし、シルフィウスの結界に囚われたと聞くと、ミサキの顔色が変わった。部屋の隅に立てかけてあった剣を掴むと、そのまま部屋の外に出て行こうとする。それをシリウスが慌てて止めた。

「そんな体で、その剣を使ったら、またぶっ倒れちゃうぞ」

「そんな心配してる場合じゃないだろう！」

「太陽の四騎士がいるんだ。お前が行かなくて・・・」

「シルフィウスは、腕利きの魔道師だ。騎士じゃ相手にならない。それに、朱里が・・・朱里がっ・・・」

“朱里”のこととなると、何でこいつはこうも分別を失うのか。こうなってしまうと、誰にもミサキを止められない。

「分かったよ。俺も行くから」

シリウスがそう言うと、ミサキはただ頷いて、部屋を飛び出した。ラシャに、ファレンたちを頼むとだけ言い残し、シリウスは慌ててミサキを追いかけた。

二人が出て行った戸口を、カヤは呆気にとられてしばし見ていたが、そこから冷たい風が吹き込んで来たのに気づいて、扉を閉めに行った。ところが、カヤがまさに扉を閉じようとした、その腕の下を、キラがするりと潜り抜けて行った。

「え？」

カヤは一端閉じた扉を慌てて開く。回廊を走っていくキラの後ろ姿が見えた。

「ちょっと、待ちなさい」

咄嗟に追いかけようとしたカヤを、ラシャがその肩に手を掛けて止めた。

「俺が行く」

「いえ・・・あの子は、多分、自分のすべき事が分かっているんだわ」

「それは、巫女さんの予言？」

「さあ。そんな気がしたの。私達は、私たちのすべき事をしましょ。あなたは月の神殿へ行って、薬師を呼んできて」

「こんな時に、お使いかよ」

「あらっ。お使いがお嫌なら、看病の方でも構わないわよ？」

「・・・いや、お使いの方で」

ラシャはカヤに見送られながら、キラとは反対の方向へ歩き出した。

息を切らせて走ってきたミサキに気づいて、そこにいた太陽の四騎士は、お互いに顔を見合わせた。和也を見た後で、改めてミサキを見ると、やはり似ていると感じる。

「・・・あ・・・あかりは？」

上半身を屈め、膝に手を付いて、息も絶え絶えに、ようやく顔だけを上げて、そう言ったミサキに、ラスがすこし離れた場所を目で示した。

四角いガラスの箱のようなものの中に、誰かが横たわっており、その横にラスフィールと朱里が向かい合わせて佇んでいた。何か話をしている様だが、声は聞こえて来ない。

どうやら四騎士も、結界を張られてしまっただけは、手を出すことが出来ず、外で見ているしかなかった様だ。

ミサキは何の躊躇もなく、剣の紋章の剣を抜いた。と、その時、結界の中で黒い空気の渦が巻き起こり、その渦に弾き飛ばされる様に、ラスフィールの体が宙を舞った。その体は結界を突き破り、ミサキの足元にまで飛ばされて来た。見れば、結界はすでに跡形も無く消えていた。朱里が魔道書を手に、嘲笑するような笑みを浮かべて、すでに気絶しているラスフィールを見ていた。

「朱里！」

名前を呼ばれて、朱里がミサキの顔を見た。その瞳が、何かに驚いた様に、大きく見開いた。ミサキの腕が、その意思とは関係なく、ゆっくりと動き始める。

「え・・・？」

困惑するミサキを他所に、剣を持つ手が勝手に振り上げられる。そして、次の瞬間、剣は勢い良く振り下ろされた。大きな力の塊が、朱里に襲い掛かる。

「朱里！」

咄嗟に、朱里は防御の魔法を使っただけらしい。ミサキの放った力は、朱里の目前で四散して消滅した。

ミサキがそれを確認して、安堵する間もなく、再び剣が動き出す。今度は剣に引きずられる様にして、ミサキは朱里に切りかかる。朱里は、すんでの所で、これをかわした。だが、至近距離で、間髪を置かず剣を振り上げたミサキに、今度は反応出来ない。

「止まれえっ」

ミサキの悲痛な声が響いた。その声に、鋭い金属音が重なった。何か手ごたえがあった。剣と剣が交わって、互いの動きを殺していた。その交わった剣の向こうに、ミサキは自分の姿を見た。彼は、朱里をその背に庇い、上半身だけを起こして、辛うじてミサキの剣を止めていた。

「お前がカーシアのミサキか？」

そう言ったのは、自分と同じ顔をした少年だった。

・・・話には聞いていたが、いざ、目の当りすると、おかしい気分だな・・・こいつが本物の・・・

・リート様か・・・

和也がそんな事を考える間に、不自然な体勢で辛うじて受けた剣に、物凄い力が加えられる。「待てよ。そっちが本物だっていうのは、分かってるんだから・・・」

和也が言い終わらないうちに、ミサキの剣が和也の剣を弾き飛ばした。

「逃げろっ！」

ミサキに言われて、状況も分からないまま、和也は朱里の手を掴んで、後方に飛んだ。今まで居た場所には、ミサキの剣が刺さっている。

・・・こいつ、剣に振り回されてやがる・・・

ふと、後ろから、言いようのない不穏な気配を感じて、和也は肩越しに振り返った。後ろにいる朱里の目が、尋常でない光を帯びている。

「朱里？」

その手に握られている魔道書に気づいて、和也は、慄然とした。自分は、この魔道書が何なのかを知っている。これは、全てを破壊し消し去る、忌まわしき力。記憶の奥に封印された恐怖と絶望が沸きあがってくる。そんな気がした。

「朱里・・・それは・・・」

言いかけて和也は、朱里の目にミサキの姿が映ったのに気づいた。和也が振り向く間もなく、ミサキの剣が朱里に振り下ろされる。その瞬間、朱里の身を守る様に、その体を空気の塊が包み込んで、和也とそしてミサキをまとめて弾き飛ばした。

床に叩き付けられて、その痛みに気が遠くなりそうになりながらも、ミサキは、再び剣が動き出すのを感じる。

「止めろよ・・・どうして・・・朱里を・・・」

「ミサキ、剣を離せっ」

後ろから、シリウスがミサキを羽交い絞めにした。だが、それを振り解こうとする力の方が遥かに強い。シリウスを背中にくっつけたまま、ミサキは前進していく。この様子を見ていた四騎士が、ミサキの両手両足を押さえに掛かる。ミサキの動きは鈍くなったが、それでもまだ動きは止まらない。

「くそ、馬鹿力があ・・・」

シリウスがミサキの腰に手を回し、渾身の力を込めてこれを引いて、ようやくミサキの動きが止まる。だが、彼らは動きを止めただけで、それ以上のことは何も出来ない。ちょっとでも気を抜けば、ミサキはまた動き出す。膠着状態である。

「ミ・・・サキ。剣を離せっ！」

シリウスの切実な声に、しかし返って来たのは・・・

「できるなら・・・とっくに・・・やってるからっ」

・・・という何とも情けないミサキの声だった。

不意に、シリウスの肩に半端でない重みが掛かった。

「全く、何やってんだかっ」

頭の上で、キラの声でした。

「お前、勝手に人の肩に乗っかってんなよ」

「黙れ、役立たず」

そう言われてはシリウスには返す言葉がない。

キラが、ミサキの首に腕を回し、容赦なく締め上げた。ミサキが瞬間、意識を失う。カランという音と共に、剣の紋章の剣が床に転がった。キラはシリウスの肩から飛び降りると、その剣を拾い上げた。そしてすかさず、その剣を構える。

「成る程・・・この感覚には、覚えがあるぜ」

キラが不敵な笑みを浮かべた。そして、剣が欲している獲物を見定める。

「お前が欲しいのは、あの力か？」

剣を手にしたキラが、跳んだ。その剣先が朱里の身に迫る。朱里は剣を受ける様に、闇の魔道書をかざした。剣が魔道書に触れる。その刹那、剣先からまばゆい金色の光がほとばしった。だが、魔道書から生じた黒い光が、すかさずこれを弾き返す。身の軽いキラは、ミサキの様に床に叩き付けられることも無く、少し離れた場所に着地し、すでに次に仕掛ける間合いを計っている。そうしている間に、キラの体は、剣から溢れ出す光に包まれていく。ミサキの脳裏に、大地の神殿での出来事が浮かんだ。

「やめろ、キラ、お前はっ」

ミサキが叫ぶ。

「キラ・・・じゃなくて、カルラだってんだろ！・・・それにっ！」

光の中で、キラの体がどんどん大きくなり、大人の姿になっていく。

「子供を守るのは、親の役目だからな」

振り向いて笑ったのは、父親の顔をした大地の騎士だった。

「父さん・・・」

キラが踏み込んで、再び朱里に切りかかる。朱里を庇う様に盾になった魔道書から出る黒い光が、どんどん剣に吸い込まれていく。魔道書の力が少しずつ弱まっていくように見えた。ついに、朱里が膝を付いた。それを見定めたように、キラが剣に力を込め、更に押し込んでいく。その時、剣を握るキラの手を、意識を取り戻した和也が掴んだ。

「止める。朱里は、魔道書の力を使っていない。その剣と、この魔道書は同じ闇の力・・・同じ場所を使えば、また、あの時と同じことが・・・」

「手を離せ、巻き込まれるぞ」

だが、和也は頑として、その手を離さない。

「そうか、お前は・・・」

自分を見上げる和也の真剣な顔を見て、キラがふと笑顔を見せた。

「この剣は、そこに魔力がある限り、それを吸い尽くすまでは止まらない。あるいは、それを持つ者がいなくなるまではな」

キラが、和也の手を払い、勢い良く剣を床に突き立てた。そして、和也に語りかける様に言った。

「自分を見失うな・・・それがお前の運命なら、受け止める。大丈夫だ、お前は一人じゃないから・・・きっと、乗り越えられるさ、リート」

金色の光の中で、キラが笑みを浮かべていた。そしてその姿が薄れていく。

自分はこの人を知っている・・・不意にそんな思いに囚われた。そして・・・

今、鮮明に、脳裏に蘇る。記憶。それは、三年前の・・・罪の記憶。

・・・そうだ、この人は・・・闇の魔道書を暴走させた自分を、止めてくれた人・・・

「・・・父さん・・・？」

その姿が消える直前に、キラは笑って頷いたのが分かった。伸ばした手は、空を掴んだ。

「父さんっ！」

そう叫んだ和也の体も又、キラを包んでいた同じ金色の光に飲み込まれていく。和也はその意

味するところを悟った。これは、魔法の代価なのだ。自分もまた、今この時間に、この場所にいることを許されない存在となったということだ。キラと同じように、自分も消える。

・・・くそっ・・・こんな場所に、朱里ひとり残していける訳ないだろうがっ・・・

「朱里っ！」

和也がその名を叫んで、手を差し伸べた。

「一緒に、帰ろう・・・」

その言葉に引かれる様に、朱里が和也の方へ手を伸ばす。

刹那、二人の手が僅かに触れた。

だが、その二つの手が握り合わされる事はなかった。和也が朱里の手を掴む前に、朱里が手を引いてしまったのだ。

「・・・ごめんなさい」

つぶやいた朱里の瞳から、一滴の涙が零れ落ちた。

「・・・どう・・・して・・・」

瞬間、光は和也を包み込む様に大きく膨らむと、突然弾け跳ぶように四散し、跡形もなく消えた。

キラと和也の姿は、もう、そこにはなかった。ただ、剣の紋章の剣だけが、大理石の床に突き立てられて残っていた。朱里は、力尽きた様に、その場に倒れこんだ。

「朱里っ！」

駆け寄るミサキの目の前で、今度は赤い魔法陣が朱里の横たわる床に浮かび上がる。

・・・召喚魔法！？・・・

言いようのない焦燥感が、ミサキを襲う。

「朱里っ！」

ミサキが精一杯伸ばした手が届く前に、朱里の姿はその魔法陣と共に、忽然と消した。

「あか・・・り・・・？」

ミサキは、ただ呆然とそこに立ち尽くすばかりだ。何かに救いを求める様に、その視線が辺りを彷徨う。その視線が、側に突き刺さっている剣を捉えた。そして、ミサキは吸い寄せられる様に、その剣へ近づく。

「待て、ミサキ！」

シリウスが止める間もなく、ミサキの手は、剣の柄を握っていた。

ミサキは両手で柄を握ると、一心に床から剣を抜こうと試みる。しかし、すぐに、その剣に身を預けるようにして、柄を握ったまま、その場に座り込んでしまった。この様子を見て、シリウスが慌ててミサキに駆け寄る。

「剣を離せ、ミサキ。また剣に・・・」

「大丈夫だ・・・ここにはもう、魔道師はいないから・・・」

ふと、剣が刺さっている床の上に、小さな雫が落ちて弾けた。

「ミサキ・・・お前・・・」

「俺、本当に、何も出来なくて・・・情けないよな」

俯いて呟くミサキの、その宝石のような緑の瞳から、銀色の涙が幾つも落ちては床で弾けた。

「守るって言ったのに・・・キラも・・・朱里も・・・守れなくて・・・」

その涙の雫を受けて、剣が淡い金の色を帯びる。その輝きに染められる様に、ミサキの髪が、金色に変わっていった。

「こうなるって、知っていたのに・・・先に思い出せなくて・・・俺、前にもここにいたんだ・・・あいつは、四年前の俺だったんだよ。あいつはここから、四年後の東京に飛ばされて・・・それで・・・」

「あいつって・・・」

「・・・美崎和也。あいつは十七歳の俺だったんだ」

和也は、剣の代価として、四年という時間を失ったのだ。

その歳月は、空白だったのではなく、初めから存在しないもの。

—— 彼が失ったものだった。

第9章 結界の崩壊と契約の王が選択すべきもの

・・・リファéria、それは、そなたの罪ではない。誰かに罪があるというなら、それは、私の罪だ。もし、譲れないものの為に、戦うことが罪だというのなら・・・

リファériaの手を握ったその手は、思いの外冷たく、そして、少し震えていた。

身近に迫る死の影に、止めようもなく自分の中に湧きあがった不安や後悔を、誰かに分かって欲しい。そんな心の弱さから漏らした言葉が、これ程までに他人を動揺させようとは思わなかった。それも、ただの人ではない。相手は、大魔法使いダーク・ブランカだと言うのに。

「大魔法使い様が、軽々しくそのような事を申しては、いけませんわ。このランドメリアの全てのものを導くお立場にあるあなたが・・・」

未来を見通す力を持つということは、その分、余分に心配事を抱え込むことなのかも知れない。リファériaは、ふと、そんな事を思った。

「・・・魔道師は万能ではない・・・何も罪のないそなたの命さえ、救うこともままならない・・・私はこんなにも無力だ・・・」

魔法使いは、そう言って目を伏せた。彼女もきっと、自分と同じように心に罪の意識を抱え込んでいる。それを誰にも明かせないまま、一人で、苦しんでいるのだろう。そんな気がした。

・・・ここで、私があなたを責めずについてしまったら、あなたは自分を責め続けて、先へ進むことをためらってしまうのかもしれない・・・

「ねえ、ダーク・ブランカ。私は、確かに幸せだったのよ・・・私の運命が、大きな力によって捻じ曲げられたのだとしても、幸せだったの。恋をして、好きな人と結ばれたのだから」

「リファéria・・・」

「・・・それでも、あなたが、私に負い目を感じるというのなら、その罪に見合う償いをしてもらおうかしら・・・あなたに出来る方法で」

ダーク・ブランカが顔を上げる。

「・・・リートは、もうここにいるの」

リファériaが言おうとしている事を察して、ダーク・ブランカが、難しい顔をした。

「リートに、自分の運命を、選ばせてあげて」

リートは、カリディアを滅ぼすという予言を受けて生まれてきた皇子だ。滅亡の危機を回避する事を最優先に考えるなら、その命を絶つことが、最も有効な手段である。カリディアの皇位継承者の証である、剣の紋章を理由に、反対する意見もあったものの、実はこの時、リートの命は絶たれるべきであろうという方へ、宮廷の意見は傾いていた。

すでに、紋章の継承者が存在していたこと・・・後に、ラディウス二世となるこの皇子の存在が、その意見を支持する者達の大きな拠り所となっていたのである。

リファériaの言葉に、ダーク・ブランカは、口元に少し皮肉を帯びた笑みを浮かべた。

「分かった。それがおまえの願いなら、きっと、聞き入れよう・・・」

リファーマリアを、自分の運命に巻き込んでしまった事を悔やむ自分がある。だから、彼女の、命を掛けたその最後の願いは果たされる・・・いや、果たしてやらなければならないのだ。そう思う以上、自分はそれ以外の道を選ばない。多くの人の意思と、思いと、願い・・・それらが複雑に絡み合って、一つの運命は紡がれていくのだ。ただ、予言のままに。予言された運命を覆すのが難しい理由は、そこにある。

「ありがとう」

「礼など必要ない。・・・どちらにしろ、重い選択だ。押し付けられた運命より、自分で選び取った運命の方が、背負うには重いから・・・」

「そうね、それでも・・・あの子には、少しでも多くの可能性を・・・残しておいてあげたいの」

・・・リート、お前が選ぶのだ。お前の運命を・・・

大魔法使いダーク・ブランカの声が心に響いた。

目を開くと、辺りが緑色の光に包まれていた。それは、胸元のペンダントから発せられている光だった。

・・・今は、夢・・・？・・・

身を起こして、無意識に右手でペンダントを握る。自分は今、いつもと何ら変わり無い、自分の部屋のベッドの上にいる。自らに確認するように、辺りを見回す。ペンダントの光は徐々に薄れていき、部屋が薄闇に戻っていく。

不意に、窓の外で雷鳴が轟いた。今まで途切れていた音が、一気に押し寄せてきた。不快なまでに、窓に叩き付けられる雨音。

「・・・嵐？」

何だろう・・・何か違和感の様なものを感じた。

リートはベッドから降りて、手探りでランプに火を入れた。オレンジ色に照らし出された部屋を見渡すと、戸口のところにもたれ掛かって、眠り込んでいる少年がいた。

・・・こいつは、誰だ？・・・

その少年に、そっと近づく。そのいでたちを見て、騎士かと思う。彼は、一振りの剣を抱え込んだまま、穏やかな寝息を立てていた。その剣の柄に描かれている紋章に目を留めて、リートは眉をひそめた。

・・・双月星の剣・・・こいつは、天空の騎士なのか・・・？・・・

「おい、お前・・・」

リートが肩を揺らすと、その少年が目を覚ました。

「ん・・・？ああ、目が覚めたか、ミサキ・・・」

目を擦りながら、少年がリートの顔を見て、次の瞬間、その目を見開いたまま固まった。

「お前、その剣をどこで手に入れた？それは、シルフィウスの剣だろう？シルフィウスはどうし

たんだ？」

リートが矢継ぎ早にした質問の答えはなかった。その問いは、どうやら少年の耳には入っていないようだった。少年は、ただ呆然としたまま、リートの顔を凝視している。

・・・何だよ・・・こいつ。幽霊でも見たような顔して・・・

リートの心に、不安が沸き起こる。先ほどから感じている、違和感。ここは、自分の場所のはずなのに、拭いきれない居心地の悪さがある。それは、何故だ・・・

ようやく、掠れた様な声で、少年が言った。

「・・・お前、俺の名前、分かるか？」

そう問われて、リートは怪訝そうな顔をしたまま、首を横に振った。すると少年がいきなり、両手でリートの肩を掴んだ。その力の強さに、リートは思わず顔をしかめて、身じろぎをする。だが、少年は更に肩を掴む手に力を込めた。

「俺のことが、分からないのか？シリウスだぞ」

「シリウス・・・？知らない・・・いってっ、離せって・・・」

「お前、年は？年は幾つだ？」

「・・・十五」

リートがそう答えると、シリウスの顔に落胆の色が浮かんだ。そして気が抜けた様に、シリウスは手の力を抜いた。

「・・・まじかよ。七年分、持っていたのか」

「持って・・・いかれた？」

・・・持っていた・・・って・・・何を・・・

また、雷鳴が轟いた。その音に引き寄せられる様にリートは窓の外に目をやる。そして、先刻から感じていた違和感の正体に、ようやく気づいた。

「魔法の・・・気配がしない・・・おい、まさかラディウス様の身に、何かあったのか？」

「皇帝陛下は崩御されたらしいよ」

「なっ」

リートが絶句した。皇帝とは、昨夜会ったばかりだ。

普段どおりに、他愛もない会話をして別れ、リートがこの部屋に戻ってから、幾時間も過ぎてはいないはずだ。

それを、このシリウスという少年は、すでにこの世のものではないと言ったのだ。

「・・・何を馬鹿なことを・・・」

「この嵐は、皇帝が崩御したせいで、結界が崩れ始めてるせいだって聞いたぜ・・・」

ここは、今まで自分がいた場所ではない。リートは直感的にそう感じた。全身の血の気が引いて行く気がした。

「おい・・・今年は何年になる？」

自分の声が、少し震えているのを感じながら、リートはシリウスに尋ねた。

「海洋暦四百四十七年」

即答された答えに、愕然とした。自分の認識している年数と、三年の開きがあった。

「・・・僕は、何をしたんだ？」

動揺しているリートを横目に、シリウスがため息をついて、ベッドに腰を落とした。

「お前は、剣の紋章の剣を使った。それで過去の時間を失ったんだ。俺の知っているお前は、二十二歳だった」

告げられた真実に、リートは力なくその場に座り込んだ。

シリウスに伴われて、宰相の執務室に入ると、そこにはシャルロットがいた。本来、その部屋にいるはずの宰相メルクリウスの姿はなく、ロゼリアにいるはずの従兄弟がここにいる。だが、リートには、メルクリウスの所在を問う気力もなかった。

シャルロットは、いつもと変わらない、にこやかな笑顔でリートを迎えた。

「今、呼びにやろうと思っていた所だよ。ちょうど、お茶の支度が出来たところだ」

そう言いながら、シャルロットはリートを抱きすくめる。その大げさな抱擁だけは、自分の知っている従兄弟のものと変わりなく、リートは少し安堵した。だが・・・

「・・・シルヴィには、会わせられないなあ・・・自分が、お前より年上になってしまったなんて知ったら、きっと物凄く不機嫌になってしまうだろうからね・・・」

何気ない口調でそう言われて、リートは、自分が置かれている状況を、改めて思い知らされた。

十五歳の昨日から、三年先の未来へ飛ばされた。どうも、そういう単純な話ではないらしい。ともかく、この世界には、すでに皇帝が居らず、おまけに結界の崩壊が迫るといふ瀬戸際の状態らしい。

そして、その瀬戸際の「今」は、剣の紋章を持つ者として、ずっと恐れていた「いつか」。来なければいいと思っていた「いつか」に違いないのだ。

「・・・こんな時まで、お茶会とはね」

シリウスの皮肉をシャルロットは、笑って受け流す。

「思考を活性化させるには、適度に気を緩めてやらないとね。眉間にしわを寄せて考え込んでいても、いいアイデアは浮かんで来ない」

「なるほど・・・一理はあるけどな・・・俺には、まね出来ない芸当だ」

言いながらシリウスは苦笑した。いい加減に見えて、この男の言動が、核心を外すことはない。

切れかかっている綱の上を歩く綱渡りの最中に、これだけ落ち着いていられるというのも、並みの胆力ではない。

「リート、君に来てもらったのは、他でもない。魔道師ランディスの弟子である君の意見を、ぜひ、聞かせて欲しくてね」

「ランディスの弟子っ？こいつが？」

驚くシリウスに、シャルロットが首を傾げる。

「おや・・・？言っていなかったかな・・・リートは魔道師だったって」

「魔道師って話は、聞いた気がするけど・・・あいつの弟子ってのは・・・」

「まあ、師弟の契りを結んだ正式の弟子ではないのだけどね、ランディスは、あの事件の前まで、リートの教育係をしていたんだよ」

「まじかよ・・・」

「リートは、この帝国で五本の指に入る魔道師だった・・・だから、あのような悲劇が起こったとも言えるんだが」

三年前の反乱騒ぎの時に、リートが闇の魔道書の力を暴走させた。そもそも現在にまで尾を引いている混乱は、全て、その事に端を発しているのだ。

・・・そうか、闇の魔道書を、並の魔道師が扱える訳ないってことだよな・・・

リートの記憶から消し飛んでしまった、その三年前の忌わしい事件によって、リートは魔道師としての力を失ったのだ。

「ラディウス陛下が崩御なされたという話は、もう？」

シャルロットの問いに、リートは無言で頷いた。

「色々、問題が山積みでね、次期皇帝の即位の準備が滞っている」

「それで、結界が・・・」

「まあ、そういうことだ」

「十八歳の僕が、ここにいないから？」

リートの問いに、シャルロットはその胸元に目をやって、緑のペンダントの下に、剣の紋章を確認する。

「・・・う～ん。紋章は消えずにある訳だし、多分、年齢の事は、問題にはならないだろうと思う」

「ならば、すぐにでも、即位式の準備を・・・」

身を乗り出してそう言ったリートを、シャルルロットは真剣な眼差しで見据えた。

「お前に、その覚悟はあるのか？」

「覚悟なら、とうに・・・」

「この帝国最後の皇帝となる覚悟だぞ・・・この国を滅ぼす皇帝になるという覚悟・・・なんだぞ。それでも、いいのか、お前は・・・」

「そのことなら、もう、嫌と言うほど考え抜いた。考えても、考えても、答えは分からなかった」

リートが一旦言葉を切って、ティーカップに口を付けた。そして、再び口を開く。

「ある時、ランディス様に言われたんだ。答えは、未来にある。だから、ここで立ち止まったら、永遠に、その答えは分からないと。お前がそれを望むのなら、たった今、全てを終わらせても構わない。ただ、答えが知りたいのなら、立ち止まるなと」

「答えを知る・・・それだけの為に？」

「・・・そう。それだけだ」

自分が、この世に生まれてきた、その意味を知りたいと思った。

両親の顔も知らずに、呪われた運命の子供という、好奇の目に晒されながら、それでも生きてきたのは、ただ、その理由が知りたかったから。それが分からなければ、全てを終わらせる事も、先へ進むことも出来ない。いつしか、そんな風に思うようになっていた。だから、「いつか」が来た時には、何も考えずに先へ進もうと、決めていた。運命に流されるのではなく、運命を選ぶ為に。

「・・・そうか」

シャルロットはリートの思いを察して、頷いた。

「では、感傷的な話はもう終わりだ。魔道師のお前に来てもらったのは、他でもない。皇帝の即位に必要な、太陽の剣の生成方法を聞こうと思ってね」

「・・・まさか巫女姫様の身にも、何かあったのか？」

「巫女姫さまは、意識を失われたまま、目覚める気配はない。魔道師長様及び、神官長様は、現在行方不明で、連絡がつかず。魔道師長補佐殿は、騎士の間に結界崩壊の影響が及ばない様に、手を尽くされている・・・とまあ、そういう現状な訳なんだが」

シャルロットの報告に、リートは思わず苦笑する。

「・・・よくもまあ、そこまで悪い状況設定ができたものだな」

「私の苦勞を察してくれるかい？」

「お察ししますよ、閣下」

「閣下は止めてほしいな。この非常事態に代理を押し付けられただけなのだから・・・全く、ランディス様のご苦勞をお察しするよ」

「ランディス様？」

「ああ、ランディス様は、三年前から魔道師長をなさっている。まあ、嫌々ながらも、という感じだが・・・」

師として、いつも側に寄り添い、導いてくれた。それが、もう、自分だけの師ではないと知り、その事実、リートは寂しさを覚えた。この宮殿の中で、まともに会話を交わしてくれていたのは、ラディウスと、ランディスぐらいだった。その二人ともが、突然、自分の側からいなくなってしまった。リートにとって、その喪失感は計り知れない。

「で、問題の解決方法は見つかりそうかな？」

シャルロットに問われて、リートは、あわてて現実に意識を引き戻す。

「・・・巫女姫さまは、どのようなご病気なのですか？」

「病気・・・とは違う様だ。月の神殿からの報告では、力を使い尽くされて、お倒れになっただけらしい」

「力を・・・？」

シャルロットが、リートの顔を見据えて、淡々とした口調で告げた。

「リート。実は、お前の体に封印されていた、闇の魔道書の封印を解くのに、シルフィウスが、巫女姫様のお力を利用したのだ」

告げられた事実を、リートは、何の感情も挟まずに、ありのまま受け止めた。

何故、自分に闇の魔道書が封印されていたのか。何故、シルフィウスが闇の魔道書を手に入れようとしたのか・・・心に湧き上がる幾つもの疑問と動揺を押し殺して、リートは話を続けた。

「・・・それでは、光の水晶球は、今、どこに？」

リートの問いに、シャルロットは少し考える。

「・・・確か、シルフィウスが、闇の魔道書を導くのに、使ったという話だったな？シリウス」

その現場にいたシリウスに確認するように、聞く。

「ああ。和也の体に、光の水晶球を押し込んで・・・」

「和也って・・・？」

今度は、リートが聞いた。

「ああ・・・和也っていうのは・・・つまり、お前」

「僕？」

詳しい説明をしてもいいのか？と、シリウスがシャルロットの顔を見る。シャルロットが頷いたのを見て、シリウスが続けた。

「・・・三年前、お前は、魔道師ルトの反乱に加担し、闇の魔道書を使った。そして、魔道師ラリサに封印の地に送られた。お前は、三年をその封印の地で過ごしたんだ。その封印の地での、お前の名前が、美崎和也だ。皇帝が崩御されて、封印の地にいた和也を、宰相ラーラ・マルクスがフィリスの召喚魔法でここに呼んだ。実は、ラリサは和也の体に、闇の魔道書を封印していたらしくて、それを手に入れようとしたシルフィウスが、光の水晶球を使ったんだ。その後で和也は、お前が、剣の紋章の剣を使った時に、どっかに飛ばされちゃったんだけどな」

「・・・その和也が、僕だと・・・？」

「・・・ミサキが、そう言ってたんだ」

「ミサキ・・・？」

「二十二歳のお前。俺は、そう呼んでた。和也は四年先に飛ばされたけど、ダーク・ブランカの方で、ここに戻ってきたんだって」

「・・・その話が、本当なら、光の水晶球は、僕が持っているってことになる」

リートが導き出した答えに、暫時、三人は顔を見合わせた。

シャルロットが勢い良く立ち上がった。

「直ちに、皇帝の即位式を行う。シリウス、太陽の四騎士を、即刻、騎士の間に召集しろ」

シリウスが頷いて、部屋を走り出て行く。

「・・・大丈夫か？」

シャルロットが気遣う様に、リートに言葉を掛けた。

「・・・本当は、僕は、もっと重い荷物を背負っていたのだろう？記憶が無くなった分、僕は、少し楽をさせてもらっている。そんな気がする。僕が失った未来で、僕は何か、取り返しの付かない過ちを犯した。違うか？シャーリー」

「リート・・・」

「今のこの絶望的な状況は、恐らく僕の犯した、その過ちのせいなんだろう？きっと、全てを知

っていた「ミサキ」では、もう前に進むことは出来なかったかも知れない。でも僕にはまだ、足を踏み出す勇気が残っている・・・だから、大丈夫だよ」

「そうか・・・」

「行こう」

リートはただ、それだけと言って、立ち上がった。シャルルロットは、もう何も言わず、それに従った。

・・・答えは、未来にある。だから、ここで、立ち止まったら、永遠に、その答えは分からない・・・

それがどんな未来でも、ここで立ち止まる訳には行かない。

リートは自分に言い聞かせる様に、心で呟いた。

太陽の神殿へと至る回廊を歩きながらリートは、記憶の中を、良く分からない、不明瞭な残像が流れていくのを感じていた。回廊の至るところに、大小さまざまな傷跡が刻まれている。回廊を支える柱も幾本か崩れ落ちて、修復もされないまま放置されていた。そこに、わずかだが、闇の魔道書の気配を感じた。気配・・・という程のものではない。力の痕跡という類のものだ。シャルロットは、シルフィウスが、闇の魔道書を導こうとしたと言っていた。恐らくそれは、昨日、ここで・・・

・・・アカリ・・・

ふと、心にその名が浮かんだ。

自分が楽になる引き換えに、捨ててしまったもの。

それは、何だったのだろう・・・

・・・モシカシタラ・・・トテモ・・・ダイジナモノ・・・

「リート？」

リートが何か思案するように、足を止めたのに気づいて、シャルロットも足を止める。

「どうした？」

「・・・いや・・・何でもない」

リートが再び足を踏み出した時、不意に、ごおっという地鳴りが聞こえた。

次の瞬間、物凄い揺れが来た。リートは、立っている事が出来ずに、思わず床に這いつくばった。小さな礫が、ばらばらと頭の上に降って来る。みしみしという、柱が軋む嫌な音が耳に付く。

・・・地震！？・・・

顔を上げたリートの目の前で、回廊を支えていた、大きな柱が、爆ぜるようにして轟音を伴ってあっけなく折れた。

「崩れるぞ！早く、外へ出るんだ！リート・・・」

すぐ傍にいたはずのシャルロットの声が、やけに遠く聞こえた。差し伸べられた手を掴もうと、伸ばした手は、何も掴む事が出来なかった。崩れ落ちる瓦礫の向こうに、シャルロットの姿を見失った。もうもうと立ち込める砂塵に、息も出来ず、目を開ける事すら出来ない。

・・・これは、やばいかも・・・

そう思った所に、体に衝撃が来て、リートは意識を失った。

何もない空間に、女が二人、立っていた。

黒い艶やかな髪の子は、黒衣のドレスを纏い、輝く金色の髪の子は、光沢を帯びた白いドレスを纏っている。二人そろって、興味深げな顔をして、横たわっているリートの顔を覗き込んでいた。

・・・同じ顔が・・・二つ・・・双子・・・

そんな単語が頭の中に浮かぶ。いでたちも、醸し出す雰囲気も違う二人であるのに、その顔は、鏡に映したかの様に、同じ顔をしていた。

「あら・・・目を開けたわね」

「あら・・・本当。目を開けたわ」

同時に、二つの声が言った。どちらがどちらの言葉を言ったのか分からない。

「相変わらず、ひどい目に会っているのねえ」

黒い方の女がそう言って笑った。

「ねえ・・・本当に」

白い方の女もつられて笑う。

「ここの神域が、背負っている星に反発するのだから、仕方のないこととはいえ、お気の毒なことよねえ・・・」

「・・・失礼ですが、どちら様でしょう？」

横たわったままリートが問うと、女たちが顔を見合わせて、また笑った。

「そうね・・・あなたは記憶を削り取られてしまったから、以前に会った時の事は、覚えていないのね」

黒い女が少し残念そうな顔をして言った。

「前にも、会ってるんですか？僕・・・」

「ええ。でも、覚えていないのなら、自己紹介からしてあげるわ。私は、闇と夜の女神フィリス」

「私は、光と昼の女神ファリス」

「・・・女神さま・・・なんですか」

「ええそう。このランドメイアを守護する女神さまなんですの」

「その女神さまが、どうしてここに・・・」

二人はまた顔を見合わせた。

「実は、あなたは、今、死に掛けているところなのだけど・・・」

「・・・それは、困りましたね。僕には、やらなければならない、とても大切な使命が残っているのですが・・・」

「あら、意外と前向きだわ。良かった。説得する手間が掛からなくて」

「説得・・・？」

「昨日のあなたは、これ以上、辛い目に合わせるのも、忍びない感じだったから。このまま、静かに眠らせて欲しい・・・とか、言われたら、引き止めようがないなって、思っていたのだけれど」

・・・そんなに、酷い目に会わされたのか、僕って・・・

他人事のように、考える。女神の言葉は先に続く。

「そういうことなら、まだ、望みはありそうね。では、契約の証を継ぐ者よ・・・」

「契約の証って・・・？」

「その、胸に刻まれた、印。それは、光族の王と、我らが、遠い昔に交わした約束」

二人の女神が、リートに手を差し伸べた。

「何れかの、力を選びなさい・・・我がファリスの光の力か・・・」

「我がフィリスの闇の力」

「・・・もしかして、力を貸して下さるんですか？」

「このランドメイアを守護するのが、私たちの役目。ここに住むのは、あなたたち光族だけではないの。あなたたちの事情で、勝手にここを滅ぼされては困るのよ」

フィリスが少し不機嫌そうな顔で言った。

「遠い昔、あなたたち光族は、災厄と共に、この地にやってきた。反対するフィリスを説き伏せて、光族をこの地に受け入れたのは、この私、ファリス。それで、その扱いに、多少の差が出た事に、こちらの女神様は、ご不満なのよ」

「無駄な話はいいから・・・」

「はいはい。そういう訳で、代々の光族の支配者は、ファリスの力をご所望だった訳だけど・・・あなたは、どちらをご所望かしら？」

それを聞いて、リートが徐に、両手を差し出した。

「・・・僕の運命はとても重いんですよ」

そう言って、不適に笑う。

「女神さまの細腕一本じゃ、僕を引っ張り上げる事は出来ないと思いますよ」

「これはまた、随分と欲張りなこと・・・相反する力を同時に扱うには、それなりの覚悟がいるものだけど？」

フィリスが呆れ顔で言う。

「僕は、魔道師ですからね。光と闇は常に、同じ時、同じ場所に、同量ずつ存在するのが、この世の理なのだと、僕のお師匠さまに、嫌と言うほど叩き込まれているんですよ」

リートの言い様に、二人の女神が笑った。

「そう、私たちは、二人で、一人。同じものの表と裏。光の中に闇は見えなくても、その中に闇は存在する。闇は必ず、光と共に存在するもの。光を求めることは、闇を求める事。闇を恐れ、これを消し去る事は、光を消す事に等しい・・・」

ファリスの手が、リートの右手を、フィリスの手が、リートの左手を、それぞれ握って、その体を引っ張りあげる。

「あなたが魔道師だというのなら、このランドメイアに、闇の魔法が存在しなかった理由を、理解しているわね？」

「存在しなかったのではなく、それは目に見えるものではなかった、という事でしょう？」

・・・それが分かっているなら、もう何も言うことはない。契約に基づき、我らが力を用い、そなたの全身全霊をもって、この地に呼び寄せられし災厄を退けよ・・・

頬に当たる冷たい雫を避けようとして、無意識に頭を動かしたリートは、何か固いものに頭をしたたかぶつけて、意識を取り戻した。

「いてっ・・・どうなったんだ？」

起き上がろうとして初めて、身動きが取れない、ということに気付いた。どうやら、崩れた建物の瓦礫の中に、埋もれている様だった。

積み重なった瓦礫の隙間から、灰色の空が見えた。時折、その空に、稲光が走るのが見える。雷鳴は、思うよりも遠かった。嵐の気配は、もう感じられなかった。雨脚も大分弱まっている。空から落ちてくる雨音よりも、瓦礫の隙間のそこかしこで聞こえる、規則正しい雨垂れの音の方が、耳に付いた。

・・・そうか、結界が、崩れたんだ・・・

このランドメシアで、闇の魔法が禁忌とされ、それを使うことが許されなかった理由。それは、その結界の存在故だ。結界とは、ダーク・ブランカの強大な闇の魔法そのもの。だから、この地では、もう闇の魔法を使う余地がなかったのだ。それが消滅したということは、闇の魔法はもう禁忌ではないということだ。

「それを見越して・・・か」

闇の魔道書の開封が行われたと、考えるべきだろう。ランディス様ならば、そのぐらいのことはするだろう。

「・・・しかし、ここまで、派手にやりたい放題で、その後始末をするのは、誰だと思ってるんだか。おまけに、あれは確信犯なんだから、始末に負えないな・・・」

リートは苦笑して意識を集中する。光の水晶球の存在を、自らの中に確認する。そこに、意識を集めていく。そこから、まばゆい陽の光が溢れ出した。光は強さを増しながら、波紋の様に広がっていく。その光に触れたところから、体の上に積みあがっていた瓦礫が、失った形を取り戻しつつ、元の場所に収まっていく。そして神殿の回廊は、傷ひとつなく、もとの状態に戻っていた。

「ミサキ！」

埃だらけのシリウスが、スコップを片手に、そこに立っていた。どうやら、掘り出そうとしてくれていた様だ。

「無事で、良かった・・・」

シリウスがスコップを放り出して、リートを抱き寄せた。いきなりの事に、リートは狼狽する。

「ばっ・・・いきなり、何抱き付いてんだよ。離せたら・・・」

勢い良く体を押しつけられて、シリウスが顔をしかめる。

「・・・何か、かわいくない・・・十五歳の「僕」って」

「はあ？」

だったら、二十二歳のミサキとやらは、かわいかったとでも言うのか・・・てか、そんな事はどうでも良くて・・・

どうも、こいつと話していると、調子が狂う。どうして、こう、馴れ馴れしいのか。

リートは、頭を押さえてため息を付き、歩き出す。そこへ、シャルロットが回廊の向こうから、小走りにやってきた。

「リート、無事だったか・・・」

次の瞬間、また抱き付かれるのを予想して、リートは、さりげなく身をかわした。

「抱き付き禁止」

「そんな急に、距離を置かずともいいだろうに」

シャルロットが苦笑する。

「従兄弟といえども、ケジメは付けて頂かないと」

リートの物言いに、シャルロットは大仰に直立姿勢を取り、優雅に一礼した。

「では、そのお言葉のままに、マリウス陛下」

「陛下？」

シャルロットの言葉を、シリウスが確認するように聞き返すと、シャルロットが説明してくれた。

「皇帝の即位式とは、太陽の剣を使い、光の女神ファリスを呼び出す儀式のことだ。現れた女神がその者に力を与えて下されば、その者は、カリディアの新しい皇帝となる」

「お前、女神に会ったのか？」

シリウスの問いに、リートが歩きながら頷いた。

「ああ。非常時ゆえに、どうやら手間を省いて下さったらしい。だから、これからは、マリウス陛下と呼ぶ様に」

「・・・マリウス陛下・・・まあ、そういう事なら、そう呼ぶけどさ。でも、俺たち友達だよな？」

「・・・友達？」

リートが足を止めた。

「僕とお前が？・・・友達だった・・・のか？」

友達がいたのか・・・二十二歳のミサキには。自分には、友達なんていなかった。暗い運命を背負った皇子は、誰からも、遠目に眺めていられるだけの存在でしかなかった。従兄弟たちは、普通に接してくれていたけど、血のつながりで結ばれたその関係は、やはり友達とは違う。ずっと、友達が欲しかった。何の気負いもなく、何でも言い合える、そんな友達が。ずっと、そんな風に思っていた。思っていたのに。

・・・大事なものを・・・無くしたんだな・・・僕は・・・

「・・・お前に、記憶がないのは、分かるけど、俺は友達だって思ってるから、何かあったら、何でも言えよ、前みたいに」

「友達・・・」

不意に、涙が込み上げてきて、リートは慌てて涙を拭った。

「・・・ミサキで、いいから。お前だけ、特別だ」

そう言うと、シリウスが嬉しそうに笑った。

「よっしゃ～特別おっけ～」

この笑顔は、大事にしよう。ふと、そんな事を考えた。この先、皇帝として、自分がやらなければならない事を思えば、こんな風に笑うことなど、もう自分には出来ないだろうと思う。こいつが傍にいて、自分の代わりに、こうして笑っていてくれるのなら、少し心が救われる気がする。そんな事を考えながら、リートは、騎士の間に向かって再び歩き出した。

「シャーリー、結界崩壊の被害状況は？」

「カイが事前に、帝国全土に警告を伝令していたお陰で、建物の崩壊が多かった割には、死傷者はさほどなく・・・」

それでも、皆無ではないのだ。リートの心に、怒りの感情が湧き上がってくる。

「各地に、魔道師を派遣して、負傷者の救護に当たらせろ・・・それから・・・」

湧き上がる怒りを押さえきれずに、リートは壁に拳を叩き付けた。

「くそっ・・・」

「陛下？」

「どうして、こんな方法を使ったんだ。お前がっ・・・責任を取って、役を降ろさせようという積りじゃないだろうな。甘く見るなよ。辞めさせるものか・・・一人だけ、楽な思いなど、させないからなっ」

あっけに取られている、シャルロットとシリウスの横で、リートは指を組み合わせて、呪文を唱え始めた。そして、右の手を高く掲げて、叫ぶ。

「ファリスの召喚魔法。今すぐここに来い、ランディス！」

目の前の床に、金色の魔法陣が浮かび上がり、その上に空気の渦が巻き起こる。

「・・・今の僕に、拒否魔法など通じると思うのか？さっさと、姿を現せ！！」

果たして、空気の渦が一度天井近くまで立ち上ると、次の瞬間、魔法陣の上には、黒衣の魔道師の姿があった。

「ランディス！」

「魔道師長様・・・」

シリウスとシャルルロットに呼ばれて、ランディスは口元に僅かに笑みを浮かべ、リートの顔を一瞥すると、その眼前に跪いて頭を垂れた。

「・・・ご無沙汰しておりました、陛下」

「顔を上げろ、ランディス。僕の目を見ろ。そんな社交辞令より先に、何か言うべきことがあるだろう？」

そう言われて、ランディスがゆっくりと顔を上げ、リートを見据えた。その眼光の、思いがけない鋭さに、リートは一瞬息を飲んだ。

「では、僭越ながら、申し上げます。今の陛下は強大な力をお持ちです。光と闇。二人の女神から力を与えられた。それは大魔法使い様のお力にも匹敵する程の力なのだという自覚はお持ちですか？それを、その様に、感情のままにお使いになられるのは、感心いたしません・・・三年前の過ちを、また繰り返すおつもりですか」

静かな口調で言われたその言葉には、言いようのない怒りの感情が込められていた。

いつも、冗談めかして、人を煙に巻く。そんなランディスが、その感情を露にすることはほとんどない。・・・その、ランディスが怒っている。リートの昂っていた感情は一気に冷めていった。

。

「それに・・・」

ランディスが、勢いで、何かを言いかけて、感情的になっている自分を律するように唇を噛んだ。

「・・・それに・・・？何だ？言えよ。お前は、お前だけは、僕に隠し事はしないって、言っただろう」

ランディスが、気まずそうに、目を伏せた。

「それに・・・あの時よりは、少ない被害で、食い止めたつもりです」

「・・・そう・・・なのか」

三年前の過ち・・・という言葉が、改めてリートの心に重く響く。自分が認識している以上に、それは遥かに深刻な出来事なのだと、そう思った。自分に記憶がないのだとしても、それは、なかったことにはならない。何だか、息苦しい。心臓に鉛を埋め込まれているような、そんな息苦しさを感じた。

「・・・済まない・・・でも、結界のことは・・・どうして・・・壊さずとも、どうにか出来たはずだろう。お前なら・・・」

「そんなに買いかぶられては、困ります。これが、最も、犠牲を少なくする方法だと、私は、そう考えたのです。そもそも結界の存在は、陛下が得た力をお使いになるには、妨げになるもの。あなたが、運命を選ぶ、その妨げになるものは、全て排除する・・・それが、魔道師長としての務めなのだと、私はそう理解しております」

運命を選ぶ・・・それは、皇帝になることを選ぶ。そういう意味ではないのか。・・・自分が選べるべき運命は、まだあるというのか。心の動揺に反応する様に、視界が揺らいだ。意識が朦朧とし

始める。

「・・・ランディス。僕が・・・僕が選ばなくてはいけないものとは・・・何だ？」

自分の声が、やけに遠く聞こえた。

リートの様子に気付いたランディスが、すっと立ち上がって、倒れこんだリートを抱き止めた

。

「リート様・・・？」

「・・・大丈夫だ。力が・・・まだ、体に馴染んでいないだけだから・・・」

「欲張って、手の届かない高い枝から、大きな果実を取ろうとするから、木から落ちたりするのです」

ランディスの言葉に、昔の事が思い出されて、リートの顔に笑みが浮かぶ。

「あれは・・・努力なくして成果なし、って、師匠の教えを実践しただけでしょう？」

「自分に出来る事、出来ないことの見極めは、もう少し、慎重になさいとも、お教えしたはずですが・・・」

「出来るかなんて、分からなくても、やらなければならないことは、目の前にある。今更、逃げる訳にもいかないしな・・・」

「・・・地の果てまでも、お供しますよ」

「それは、心強いな」

リートは立ち上がった。

「それで？・・・僕は、何を選ぶんだ？」

「このランドメイアの運命を・・・」

「ランドメイアの・・・運命・・・？」

聞き返したリートに、ランディスは頷く。

「それが、あなたの運命なのですから・・・」

ランディスが、空を振り仰いだ。

「・・・リート様、ダーク・ブランカ様がお待ちです」

「え？」

「星見の塔へおいで下さい」

ランディスの視線を追ったリートの瞳に、空へ高くそびえる白亜の塔が映った。

第10章 大魔法使いの帰還、そして滅びへ

星見の塔へやって来たリート達四人を出迎えたのは、緋色のマントを纏った十数名の星見達だった。彼らは、無表情のまま、軽く会釈をすると、道を示す様に、左右に一列に並んで立った。その列の間を、リート達は神妙な面持ちで進む。

本来ならば、星見以外の立ち入りは禁じられている神聖な場所である。ひとたび星見となって、塔に入った者は、ここより外に出る事は許されず、一生をこの場所で過ごすのである。

魔法の塔とは、また趣が違う。そんな事を思いながら、リートは歩を進める。塔の中であるのに、そこは意外に明るかった。見上げれば、塔の中心部は吹き抜けになっており、そこから太陽光が差し込んできていた。天井を仰ぎながら歩いていたリートは、入り口を入れてすぐの大広間の頭上高くに、大きな球体が浮んでいるのに気が付いた。

・・・あれが、星見の天球儀か・・・

透明に透けて見える球面に、幾つかの光点が瞬いていた。それは、人の天命を示す星の瞬きであるという。ここでは、この世界の全ての人間の天命を読むことが出来る。そういう話だ。

だが、星見の天球儀は、すでにその球体の半分程が、黒い闇で覆われていた。暗黒の闇の中に、星は見えない。太陽の神殿の光の水晶球が、未来を示すものであるとすれば、星見の天球儀は、現在を示すものであると言われている。

・・・もう、こんなに、闇が間近に迫っている・・・

リートの中で、それは初めて、実感を伴った認識に変わった。

ランディスに誘われて、リート達は、塔の部屋の一つにやって来た。ランディスが扉を開き、その中に入る様にリートを促した。が、足を踏み出そうとして、リートは予期せぬものを目にし、思わずその場に立ち尽くしてしまった。

・・・何だ、これは・・・

その部屋の床一面に、魔法陣が描かれていた。その魔法陣は、血のような紅い色の魔法文字で埋め尽くされていた。これは、フィリスの召喚魔法が行われた痕跡だ。リートは一瞥でそう判断した。だが、通常のものよりも、複雑で遥かに大きな魔法陣だ。幾つもの凶形が幾重にも重なっている。そして、その中央の召喚円の中に、何かが無残に碎け散った残骸が小さな山を築いていた。リートは、その欠片の一つに目を止めて、それが人体の一部の形に似ている事に気づく。瞬間、背筋を冷たいものが走った。

「これは、お前の仕業か？ランディス・・・」

「ええ・・・術の途中で、急にあなたに呼ばれてしまったので。後片付けをする暇もなく・・・」

少し恨めしそうに、ランディスが言った。

「これは、フィリスの召喚魔法、だよな？」

「ええ、そうですよ」

「・・・一体、何を・・・していたんだ、お前は」

「釣りというのは、思索をもってこいでしてね」

「釣り？」

ランディアスの言葉に、リートが不可解だという顔をする。

「魔道師長ともなると、色々考えなくてはならない事が、山積みで・・釣るのが目的ではなかったんですが、糸を垂らしていたら、思いがけず大物が掛かってしまったので。これはもう、釣り上げてしまうしかないなと・・そんな次第でして」

「・・どうしてこう、魔道師の話ってのは、まどろっこしいかな。もっと、分かりやすく言えよ」

後ろで二人のやり取りを聞いていたシリウスが眉間に皺を寄せて、抗議する様に言った。その様子を見てランディアスが苦笑した。

「天空の騎士、シリウス。君のお陰で、この星見の塔が再始動したのは、一週間ほど前のことだが・・」

幽閉されていた星見を解放し、その力を総動員して、とにかくランディアスがまずやったことは、ダーク・ブランカの行方を探すことだった。

先の反乱の後、その後始末のごたごたの中で、魔道師長だったラーラが宰相となり、魔道師長の席が空いてしまった。そして、祖父ラリサの鶴の一声で、ランディアスは無理やりその席に座らされてしまったのだ。その直後、ラリサは旅に出てしまった。事情も何も言わずにだ。だから、ランディアスには、今、ランドメシアに起こっていることが、正確に把握できていないのだ。

「闇」の存在も、

「予言」の意味も、判然としない。

「滅び」の理由も、判らない。

ただ、そこに闇がある。

判っているのは、それだけだ。

その闇の存在故に、星見による予言も、すでにままならない。ダーク・ブランカが戻らなければ、もう動きようがないと言うのが、ランディアスの本音だった。

長きに渡り、代々の魔道師長が試みてもなお、ダーク・ブランカの所在は掴めなかった。その理由を、魔道師ルトは、ダーク・ブランカが、ここより別の場所・・つまり、封印の地にいるせいではないかと考えた。そして、禁忌の召喚魔法を使った。結果として、異世界から数多の騎士が召喚されるという事態を招いただけで、それは失敗に終わった。しかし、ルトがそこまでしたからには、それなりの根拠があったのだろうと、ランディアスはそう考えていた。

しかし、ルトの封印により、星見が使えない状態では、封印の地を探索すると言っても、せいぜい自らの影を送って探すぐらいが関の山で、やはり芳しい結果は得られなかった。新たな天空の騎士を任命し、星見復活の儀式を行わせて、ようやく本格的に、封印の地の探索が出来る状態になったのだ。

召喚を確実に行うには、星見の力を封印の地にまで広げなければならない。恐らく、ルトの失

敗は、完全な場所の特定が適わず、「大きな力」の存在する場所という曖昧な条件付けをしたが為に引き起こされたのだと、そう思われた。

だが、星見の力を総動員してもなお、探索は難航した。封印の地のどこを探しても、ダーク・ブランカの気配は見つからなかったのだ。

そんな時、彼の耳に入ってきたのが、インディラという名前が、時の魔女ダーク・ブランカの異名であるという話だった。

半年前、インディラは自らダーク・ブランカの代理人を名乗り、この宮廷に現れた。大魔法使いの代理人というからには、ダーク・ブランカと何らかの繋がりはあるのだろうと、そう考えてはいた。だが、二人が同一人物だとは、到底考えられなかった。インディラの魔力は、魔道師のレベルには、遠く及ばず、せいぜい、腕のいい占術師程度のものでしかなかったからだ。

星見復活の後に、念のため、彼らにインディラの星を読ませても見た。それはやはり、ダーク・ブランカのそれとは違っていた。

ここに来た時、インディラは、キラと同様に、意図的に記憶を消してはいた。それは何らかの理由により、星を偽る為なのかと、そう考えもした。だが、和也と出会って、記憶を取り戻しても、その星の輝きに変化はなかった。つまり、インディラ＝ダーク・ブランカであるという可能性はないということになる。

あれが、憑依魔法や変身魔法の類だというならば、星見がその実体を見抜くのは、造作も無い事であるし、いくら大魔法使いでも、魔道師長であるランディスの目まで誤魔化すことは出来はしない。

だが、それならば何故、インディラは、ダーク・ブランカの異名を、自分の名として名乗ったのか。

魔法使いの名前とは、時別なものだ。その魔力を解放する鍵の様な役割を果たすものなのだ。名を失えば、持っている魔力も失う。逆に、名を与えられるという事は、その名が持っている魔力も共に得る事になる。そういう代物だ。だから、弟子に自分の名を継がせる魔法使いも少なくない。

その理屈から考えれば、ダーク・ブランカの代理人の名前が、インディラだという事には、何か意味があるはずなのだ。

インディラがダーク・ブランカの異名を名乗ったということは、彼女が、ダーク・ブランカの魔力を継ぐものだという事になる。だが、インディラにはたいした魔力がなかった。それはどういうことなのか。

そこで、引っかけたのが、封印の地から召喚された「美崎和也」が、インディラの事を「天王寺朱里」と呼んでいたという事実だ。そして、和也によって、朱里という名を与えられたインディラは、魔力を失った。

もしも、ダーク・ブランカが、何らかの事情によって、その名を失い、封印の地で新たに朱里という名を与えられていたのだとしたら、ダーク・ブランカは、すでにその魔力を失っているということになる。大魔法使いの気配を捕らえられなかったのは、そのせいなのではないか・

その謎を解く鍵を持っているのは、恐らく、封印の地にいるはずの朱里という少女。ならば、

それを召喚する。

「そうして召喚を試みた訳だが・・・召喚されてきたのは、それだった」

ランディスが魔法陣の中央の瓦礫を指し示した。

「これが、朱里・・・？」

「・・・の、抜け殻・・・というべきでしょうか」

「抜け殻？」

「そう。中身は・・・」

ランディスが右手を掲げた。瓦礫の中から、赤みを帯びた光の球が現れた。その光が変じて、中から少女が姿を現した。その姿は、インディラのものである。だがその瞳は閉じられたまま、少女は意識を失ったままだ。

「恐らく、インディラ様とは、封印の地の人間である朱里の魂を、魔道師の傀儡に封じたことで生まれた。そういう存在」

「それはつまり、本来、魔力を持つ能力を持たない人間に、魔力を与えるために、魔法使いの名を付けた傀儡に魂を封じたと・・・そういう事か？」

それならば、大魔法使いの異名を与えられてもなお、あの程度の魔法しか使えなかったのも、納得がいく。

「あれが傀儡ならば、それを作った魔道師がいるはずだな？・・・一体、誰が・・・よもや、ダーク・ブランカ様ではあるまい？」

「それは、分かりません」

異世界の少女が、偽りの名を纏い、この世界に現れたのは、何故だ。リートは、少女の儂げな姿を見ながら考える。

「・・・朱里・・・は、何故、そうまでして、このランドメイアに来なければならなかったんだろう・・・」

「それは、やはり文字通り、彼女がダーク・ブランカ様の代理人であるからだろう」

「・・・ダーク・ブランカ様が・・・そう、望んだからだと？」

「ああそうだ」

実は、ランディスは、闇の魔道書が開封された時、一瞬だけ、ダーク・ブランカの気配を感じていた。その時、彼の中にあつた全ての疑問が氷解した。

「ダーク・ブランカ様は、恐らく、その少女の中に、封印されている。いや・・・封印というのは、正確ではないのかもしれないな」

「どういうことだ？」

「ダーク・ブランカ様は、封印の地へ転生されたのだと・・・」

・・・転生？・・・

その言葉の意味が、リートには一瞬分からなかった。

「・・・って、まさか・・・一度死んで、生まれ変わったって・・・そういうことか？」

「そう。だから、天王寺朱里は、ダーク・ブランカ様であって、ダーク・ブランカ様ではない。多分、朱里の中に、前世の記憶としてのみ存在している」

大魔法使いは、すでに死んでいる。その事実には、リートは少なからず衝撃を受けた。

「・・・じゃあ、ダーク・ブランカ様はもう、この世界には、存在しないってことなのか」

「結論を急ぎすぎですよ。まだ、話の続きがございます」

リートの狼狽ぶりに、ランディスが顔をしかめる。

「あ・・・ああ。続けてくれ」

「では。その記憶故に、彼女はこのランドメリアにやってきた・・・そう考えると、そこにダーク・ブランカ様の意思が介在しているとも言える」

「意思・・・そうか、その意思が存在するのなら、ダーク・ブランカ様のご帰還の可能性は残されている・・・ということだな？」

「全て昔のままに、とはいかないでしょうが、希望はあります・・・実は、復活の儀式の準備も、すでに進めております」

「おお、そうか。流石に、魔道師長は仕事が早いな」

取って付けて様な褒め句に、ランディスは苦笑した。

「私とて、遊んでいるばかりでは、ないのですよ。ただ・・・」

「ただ？」

「今の状態で、復活の儀式を行った場合、この朱里という存在は、消滅することになるでしょう」

「それはどういう・・・」

消滅という言葉が、何故かりートの胸を突いた。

「現在の存在である朱里と、その前世・つまり過去の存在であるダーク・ブランカ様が、同じ時間に共に存在することは、ありえません。ここにダーク・ブランカ様を召喚すれば、入れ替わりに、朱里という存在は消えるということです。・・それでも、構わないのですか？」

ランディスが確認するように、リートを見据える。

「・・？どうして、僕に聞くんだ？」

「だって、お前・・」

横からシリウスが口を挟んだ。

「お前は、朱里を探して、ここに戻ってきたんだぞ」

「僕が、この娘を？」

「記憶を無くしていたのに、朱里の事だけは、覚えていたんだ」

そう言われて、リートは落ち着かない気分になった。シリウスが友達だったという事。今の自分はそれすらも、忘れてしまっていたのだ。

・・・この娘だって、大切な存在なのではないのか・・・

この娘が消えてしまうのだと言われた時に感じた、言い様のない喪失感。それは、この娘が、自分にとって大切な存在だったからではないのか。

・・・無くしたら・・多分・・自分は後悔する・・そんな気がした。

「彼女を助ける方法はないのか？」

「・・一つだけありますが・・しかし、それは・・」

ランディスの表情が、少し険しくなる。

「何だよ？」

「ダーク・ブランカ様の復活と同時に、朱里を元の体に送り返してやる事ができれば、消滅することは避けられます。しかし、朱里を送り返すには、今現在、封印の地に、確かに彼女が存在しているという証が必要です。今現在、彼女がいる場所。それが特定出来なければ、送り返すことは出来ません」

ランディスが朱里を召喚しようとして、召喚されたのは、その魂だけだった。しかもそれは、封印の地から召喚されたのではなく、ランドメシアにいたインディラの中から召喚されたに過ぎない。現在、朱里の体が、どこに存在するのか・・封印の地に確実に存在するかどうかは、分からないのだ。彼女がそこに存在するという確証。それを得るには・・

「・・記憶か。僕の・・和也の記憶・・」

そこになら、きっと天王寺朱里という少女は存在する。美崎和也なら、知っているはずだ。彼女がどこにいるのかを。

・・・僕が、記憶を取り戻さなければ、朱里は消えてしまう・・・

「・・記憶を戻す方法はないのか？」

そう呟いたリートに、シリウスが複雑な顔をする。

「だってリート、お前の記憶は・・」

思い出しても、辛いだけの記憶。きっと心がその辛さに耐えられなかったから、リートは記憶を失くしたのだ。それなのに、その記憶を、再び取り戻したいと、そう言うのか。

「・・・記憶は消えても、大切な事はちゃんと残ってる。心が覚えているんだ・・・だから・・・朱里の為に、僕は記憶を取り戻さなくちゃならない」

「でも、消えてしまった時間を元に戻すことなんて・・・時の魔女ぐらいにしかできないんだろうに」

シリウスが、到底不可能な話だという顔をする。

「ランディス。お前は、朱里を助ける方法があると言った。それは、お前が、僕の記憶を取り戻す方法を知っているってことなんだろう？」

リートの真摯な瞳が、ランディスを見据える。

「・・・陛下にそこまでのお覚悟がある、というのなら。封印の地の、「時の魔女」にお会い下さい」

「封印の地に・・・時の魔女がいるのか？ダーク・ブランカ様の他にも？」

ランディスの顔に、魔道師特有の、思わせぶりの笑みが浮かぶ。

「この世界は、陛下が思っているよりも、遥かに広いのですよ」

再び、封印の地へ。そう思うと、リートの心は、訳の分からない高揚感に包まれた。

「お待ち下さい、魔道師長殿。この緊急時に、陛下を封印の地に送るなど・・・その娘のことなど、ランドメイアの滅亡を回避するという大事の前では、些細な事ではありませんか」

側で話を聞いていた宰相シャルロットが、異論を唱えた。

「我々には、その様な回り道をしている暇など、無いはずですよ」

「うん。君の気持ちは分からなくも無い」

「・・・私個人の、感情の話をしているのではありません」

シャルロットをなだめる様に、ランディスがその肩に手を置いた。

「大丈夫。大魔法使い復活の儀式にしたって、準備に今しばらく時がある。それにね・・・これは回り道なんかではないんだよ、シャルロット。この先の事を思えば、陛下には心の支えとなるものが必要なんだ」

「心の支え・・・ですか？」

「そう。「それ」の為に、ここで諦める訳にはいかない、と。火事場の馬鹿力の原動力になる何かがある」

「それが、あの娘だと？」

「だって、ミサキがそうだったろう？」

ただ、朱里に会いたい。それだけの思いで、ミサキはこのランドメイアにやって来たのだ。全ての記憶を失っていたにも関わらず。

リートはもう、たくさんのものを失ってきた。望まぬ運命と引き換えに。だからもうこれ以上、大切なものを何一つ失って欲しくない。ランディスは、そう思うのだ。

ランディスに示された場所に立って、リートは目を閉じた。部屋に数多ある魔法陣のうちの一つ。その上である。ランディスは、封印の地のダーク・ブランカを探して、これだけの「穴」を穿ったのだ。たった一人で、この星見の塔に籠り、ただひたすらに、魔法陣を描き続け、幾度

も幾度も、あらゆる召喚を試みたに違いない。

・・・僕が、もう少ししっかりしていれば・・・

自分の弱さが、歯がゆかった。魔法で記憶を奪われたのは、心の痛みには耐え切れずに、心のどこかで自分がその記憶を捨ててしまいたいと、そう思っていたからだ。その弱さゆえに、自分は記憶を失った。

「・・・済まない、ランディス・・・僕は・・・」

言いかけたリートの肩に、師の両手がそっと乗せられた。そこから、優しい温もりが伝わってくる。

「・・・どうか、ご無事で。お帰り、お待ちしております」

「ランディス・・・」

そう。こうやって、いつも見守ってくれた。それが何より、心強かった。ランディスの思いに報いる為にも、自分は全てを取り戻して、ここに戻って来るのだ。そう、心に誓った。

「行ってらっしゃい」

耳元で聞こえたランディスの声を最後に、リートの意識は遠のいていった。

霞がかった空から降り注ぐ陽の光は、ふんわりとした心地よい暖かさで、彼の体を包み込んでいた。その淡い色の青空を縁取る様に、金雀枝（エニシダ）の花が吹き零れんばかりに咲き誇っている。ほんのりと漂ってくる、その花の甘い香りが何となく眠りを誘う。

「・・・春って、何でこんなに眠いんだろう」

意味も無く、そんな言葉が口を付いて出た。

「何やってんの？そんな所に寝転がって・・・」

突然、頭上から声を掛けられた。

頭を巡らせてそちらを見ると、ブリキのジョウロを手にした女性が立っていた。

その女性と目が合った瞬間・・・

「・・・あら。また王子様を拾っちゃったわ」

と、彼女はそう言って笑った。

・・・アラ マタ オウジサマヲ ヒロッチャッタワ・・・

その言葉が、何かの呪文の様に、脳裏を駆け巡った。

・・・同じ事を、以前にも・・・

確かに言われた事がある。

リートは勢いよく起き上がった。

「・・・僕、前にも、あなたに会った事、ありますよね？」

リートの言葉に、やれやれという風に女性が肩をすくめた。

「な～に、寝ぼけた事言ってんの。どうも帰りが遅いと思ったら、随分と遠回りしてきたのね。

軌道がめちゃくちゃだわ」

「・・・軌道？」

「し～か～も、折角、三年間、手塩にかけていい男に育て上げたってのに、ま～た、お子様に戻ってるし、全く、あんたって子はっ」

「はい？」

「義理とはいえ親の顔を見忘れるたあ、いい度胸だ」

次の瞬間、ジョウロが飛んできた。避ける間もなく、それはリートの頭を直撃した。

「いっ・・・て・・・な～にすんだよ、時雨っ！」

「これが、ほんとのショック療法」

「はあ？」

「戻ったろ、キ、オ、ク」

「・・・お前・・・時織時雨・・・」

「おお、上出来。で、王子様、あなたのお名前は？」

「リート・ラランダ・ラ・マリウス・デ・カディス」

「舌噛みそうな名前だな。成る程、今度は名前は覚えてますと」

「・・・時雨、お前が時の魔女なのか？僕は、時の魔女に会わなきゃならないんだ」

「・・・全く、何やってんだか。こんなに、ボロボロにされて・・・」

不意に時雨が膝を付いて、リートを抱き寄せた。

「時雨？」

「お母様とお呼び・・・」

「・・・母さん、ただいま」

三年前。ラリサによって、封印の地に送られたリートは、ここで時雨に拾われた。

ここ・・・時織家の庭の片隅で。

それから、三年という月日を時雨の息子、美崎和也として過ごした。ラーラによって、ランドメシアに召喚される、その日まで。

ちなみに、美崎というのは、時雨のペンネームだ。時雨は「美崎すみれ」という、くすぐったい様な、こっぴどかしい名義で少女漫画を描いている。でもって、和也という名前は、美崎すみれが、当時連載していた恋愛漫画の超イケ面キャラの名前、だ。常にキラキラを背負って出てくるそのキャラを初めて見た時、リートは思いっきり脱力した。そのお陰で、学校では、女子からさんざん冷やかされた。ちょっとした、苦い思い出である。

リートがリビングのソファに腰を下ろすと、時雨が紅茶を入れて持ってきた。脇に蜂蜜の入った小さなピッチャーが添えてある。和也はいつも、そうして紅茶を飲んでいた。

「で、どこまで思い出した？」

「・・・ランドメシアに召喚されて、朱里ちゃんに再会して・・・その辺り・・・」

「成る程。つまりそれは、今現在、すでに存在した時間の分だけってことだね」

「存在した分の時間？」

「過去と現在。あんたは、十日前、学校に行ったっきり、帰って来なかった。で、今日・・・さっき、ここに姿を現した。恐らく、その召喚されたっていうのが、その十日前だ。だが、あんたにはその先の、まだ存在していないはずの、未来の分の時間もあった。その分の時間は、まだ戻ってないんだわ」

「未来の時間・・・？」

「今から四年後に、あんたはまたここに飛ばされて来る。全ての記憶を失ってね。そして、唯一覚えていた朱里という名前を頼りに、ダーク・ブランカを名乗る占い師に頼んで、ランドメシアに送り返してもらう・・・」

「何で時雨は、未来の事を・・・やっぱり、お前が、時の魔女なのか？」

「残念でした。私は魔法使いではないけど、まあ、それっぽい言い方をすれば、差し詰め「空間の魔女」ってことかしら」

「空間の魔女・・・」

「ランドメイアから飛ばされてくる人たちは、みんなこの場所に落ちこちてくる・・・って言えば、何となく分かってもらえる？」

「・・・まあ、何となく。それなら何で、時雨には未来の事が分かるんだ？」

「そりゃあ、あんたの探している「時の魔女」ってのは、多分、あたしの妹の事だからね。ああ、ほら、噂をすれば、お出ませだわ」

「え？妹って・・・」

時雨が親指を立てて、虚空を示す動作をした。瞬間、空間が歪んだ様に見えて、若い女が姿を現した。

「あんたって子は、もう～」

第一声でそう言うと、女はつかつかとリートの側に寄り、両手に拳を作ると、すかさずリートのこめかみの辺りを挟んで、グリグリとひねり回した。

「いたた・・・何すんだよ」

「何すんだ、は、こっちの台詞よお」

「あたしの息子なんだから、大事に扱ってよね」

時雨が冗談半分に口を挟む。

「あなたが過保護だから、こんなすつとこどっこいな子になんのよ」

「・・・随分な言われようね」

時雨が苦笑する。女が両手をテーブルに叩きつけた。

「これで、どれだけの超過勤務？おまけに何で給料減額！？訳わかんないわよっ」

「そりゃあ、最初の時に、あなたがこの子を飛ばし損ねせいなんだから、仕方ないんじゃないの」

「う・・・」

時雨の言葉に、女が絶句した。

「改めまして、あたしは時織布結姫。時間管理局の二十一世紀支局の局員」

「時間管理局？」

リートが怪訝そうな顔をする。

「この地球圏の時間が正常に流れているかどうか、常に監視しているところよ」

「それで、あなたが時の魔女？」

「まあ、ファンタジー風に言えば、そういう言い方もありかしら。あなたの所では、勝手に時間を行き来している人がいる様だけど、ここでは、そういうのはなし。イレギュラーが発生したら、即座に修正を行う。それが、私たちのお仕事。そっちの世界からの、空間の移動だけなら、その時雨ちゃんがやってる組織の方で、ある程度許可されてる。でもね、ここで時間まで飛び越えるというのは、絶対禁止事項！」

「でも、修正で生じたバグの責任は取って頂かないと」

時雨が言うと、布結姫は不機嫌そうな顔になった。

「言われなくても、分かってます」

四年後の世界で、ミサキをランドメシアに送り返したのは、布結姫だ。飛ばされてきた、元の時間へ、元の場所へ、きっちり座標を指定してやったのに、ミサキは、そもそもの時間よりも過去へ送られてしまった。戻したはずの年も、元に戻らず。そのせいで、同じ時空に、同じ人物が二人存在するなどという、「あってはならない事態」が起こってしまったのだ。

「・・・全く、ランドメシアってのは、厄介なところだわ。空間に余計な細工がしてあるから、そんなありえない事が簡単に起こるのよ。それなのに、それが全部、あたしの責任？全く、ふざけんじゃないわよ」

「・・・相当、上司に絞られたのねえ、可愛そうに・・・いっそ、そんな仕事止めちゃって、あたしの所にいらっしゃいよ。人手足りないのよね」

「漫画家のアシスタント？冗談でしょ？あんなの人間のやる仕事じゃな～い！」

「あはは・・・随分な言われ様・・・」

「あの～、それで、僕の記憶なんですけど・・・」

「え～え、ええ。記憶は戻して上げるわ。仕方ないわよね。そうしないと、あなたの時間が一本に繋がらないんだから」

「はあ・・・すみません」

何だか良く分からないが、記憶は戻して貰える様だ。

「でもね」

布結姫がリートの鼻先に、人差し指を突きつける。

「ただで、って訳には、行かないわよ。交換条件があるわ」

「はい？」

「天王寺朱里、あの子を、さっさとこっちに送り返して来なさい！」

「え？朱里ちゃん？それって・・・」

「ちょっと、布結姫、それは越権行為でしょう。この子には、関係ない話じゃないの」

横から時雨が口を挟む。

「時雨ちゃんとの事情は、知らない。極秘だっていう例のファイルの中身にも興味はないわ。でもね、天王寺家から、こっちにクレームが来てるのよ。早く元に戻せてね」

「あらやだ。天王寺さんそこには、ちゃんと、娘さんはしばらくお預かりしますってお伝えしてあるのにねえ。それに、うちと布結姫ちゃんとは、職分が違うって、ご存知なのに、どうしてそちらに苦情が行くのかしら」

「時雨ちゃんのところが、うちの支局の一つだと思ってるのじゃないのかしら？姉妹で似たような仕事してて、こうして、伝達機能もあるんだから」

「失礼しちゃう。どっちの規模が大きいと、思ってるんだか・・・て、ことは何？これって、布結姫の点数稼ぎ？天王寺はおたくの大スポンサーだものねえ。娘を連れ戻せば、今までの失点が帳消しになるって話なんでしょう？嫌だわ～なりふり構わないのねえ・・・」

「あのね、娘が、半年も意識不明で入院してるご家族の心痛とかって、考えた事無い人には、そういう事、言われたくないわね」

「仕方がないじゃないの・・・色々事情があるんだもの」

「ちょっと、待てよ。朱里ちゃんがどうとあって、それ、どういう話だよ」

「天王寺朱里をそっちの世界に飛ばしたのは、この人。それが、時雨ちゃんの「裏家業」なのよ」

「どうして、時雨が、朱里を・・・」

「どうしても、帰らなきゃいけない・・・あたしのせいで、傷ついているその人を、放って置くことは出来ないから・・・って、そう言ったのよ。半年前、学校であなたに会った後に、ここに来てね」

「あの日、僕に会った後で・・・ここに・・・」

・・・自分が、ダーク・フランカの生まれ変わりだって・・・気づいたんだ・・・僕に出会ったせいで・・・

「僕のせい・・・」

「・・・誰のせいというのは、どうかと思うわよ。強いて言えば、そういう運命だったというだけ」

「運命って言ったって・・・」

「そもそも、三年前、あんたがここに飛ばされてきたのは、朱里ちゃんに出会う為なんだもの。この世界のどこかにいる大魔法使いを探す為に、あなたはここに送られて来た。魔道師ラリサ・フレームの手によってね」

「でも、僕はそんな事、何も覚えていなかった」

「でも、魔道書を持っていたんでしょ？それは、大魔法使いの魔力で作られたものだから、いずれ大魔法使いのもとに辿り着くし、その魔道書に接触すれば、眠っている大魔法使いも覚醒するだろう・・・って話だったわよ」

「それで、闇の魔道書が、僕の中に・・・」

「あなたが朱里ちゃんに出会って、朱里ちゃんの中の大魔法使いが覚醒して、朱里ちゃんはランドメリアへ行った。それは、あなたを救う為よ、和也」

「僕を・・・」

「だから、特別に許可したのよ。体ごと丸々は無理だけど、心だけなら飛ばしてあげるわよって」

「私情入りまくりよね。職権乱用もいいところ」

布結姫がクスリと笑う。

「裁量と言って欲しいわね」

すかさず、時雨が切り返す。

「親バカ・・・」

「おだまりなさい」

「じゃあっ」

二人の掛け合いを遮って、リートが身を乗り出す。

「体はこっちにあるんだ・・・」

「意識不明で入院中だけどね」

「・・・良かった。そうか・・・ここにいたんだ・・・」

リートがほっとした様に、ソファーに身を預けた。

「朱里ちゃんは、必ず、送り返すから。約束する」

「OK。なら、取引成立ね。それで？あなた、今、ほんとは幾つなの？」

布結姫が確認する様に聞く。記憶と同時に、本来の年に戻してくれる様だ。

「じゅうは・・・」

「二十二っ！」

すかさず時雨が割り込んだ。布結姫の氷の様な視線が向けられる。

「・・・だって、二十二の方が、かっこよかったから・・・」

「誰が、おのれの好みの話をしている。こんなの育てられて、あんた、よくまともに育ったわよ」

「はあ・・・」

そこまで言われては笑うしかないリートである。

「和也」

時雨が、不意に真面目な声で、リートを呼んだ。

「あんたには、やらなくちゃならない事があるんだと思うけど、もしそれが、全て終わったら、ここに帰っていらっしゃい」

・・・帰って・・・くる？・・・

思いがけない言葉に、リートは時雨の顔をまじまじと見た。

「だって、ここはもう、あなたの家なんだから」

「家・・・」

それは、何だかくすぐったいような、でも温かい響きだった。

家。

帰って来る場所。

こんな風に、他愛もない会話を交わして、笑ってられる場所。

心がこんなに穏やかでいられる場所。自分にもそんな場所があったのだ。

「うん、きっと。帰ってくるよ、母さん」

ただ、そんな言葉が、自然に口をついて出ていた。

何時になるかは分からないけど。

いつかきっと・・・

太陽の神殿。騎士の間。そこには、皇帝騎士団のメンバーが一堂に会していた。数名の欠員はあるものの、騎士団全員が揃う様は、やはり壮観だ。

そんな事を思いながら、天空の騎士シリウスは、かつて見た情景の中に、そして夢見た情景の中に、自分がいるのだという事を改めて思う。それは、とても嬉しい事のはずなのに、素直に喜べない自分がいる。その視線は、広間の騎士たちの間をさ迷い、やがて、少し離れた所にある皇帝の椅子に辿り着いた。そこには、ミサキが・・・いや、リートが座っていた。

そこに座っているのは、十八歳のリートである。リートは、全ての記憶を取り戻して、帰ってきた。勿論、シリウスのことも、一緒に旅をした事も、彼は思い出していた。でも、シリウスの中では、彼は二十二歳の青年で、自分より年上のくせに、どこか危なっかしくて、つつい面倒を見ずにはいられない。そういう存在だった。だが、全ての記憶を取り戻したリートは、当たり前のことだが、もうミサキではなかった。

カリディア史上、最強の魔力を持つ皇帝。そして、その側には、天才魔道師ランディス・フレームが魔道師長として、若く聡明なロゼリアの領主、シャルルロット・オージェが宰相として控えている。そして、皇帝を守るために存在する、皇帝騎士団のそうそうたる顔ぶれを見る。もう自分なんかが側にいなくても、リートが困る事はない。

リートが封印の地から戻って来た時に、その姿の変わり様に、実はシリウスは困惑していた。彼が十五歳になってしまった時よりも、その困惑は大きかった。そんなシリウスの心中を知る由も無く、全てを取り戻したリートは、その友と再会の抱擁を交わしながら、こう言ったのだ。

「今まで、心配かけて済まなかったな。もう、大丈夫だから」・・・と。

——もう、大丈夫。

その言葉を聞いた時、自分が担っていた役目はもう必要なくなったのだと、そんな風を感じた。もう、自分なんかが、守ってやらなくても、彼は一人で歩いて行ける。今までと変わり無く、きっと二人は友達だけど、何だか前よりも立っている位置が遠い。そんな気がした。それが何となく、寂しかった。

リートが立ち上がった。それを合図に、太陽の四騎士が、広間の中央に描かれている、魔法陣に歩み寄った。その魔法陣の中央に、紅い光を発している水晶が置かれている。それは、ランディスが、朱里の魂を封じ込めた水晶である。

この騎士の間の魔法陣は、太陽の神殿が造られた当時から、その大理石の床に、すでに彫り込まれていたものである。それがただの装飾ではないのだと知っていた者は、そう多くはない。

代々の皇帝が即位式を行ってきたこの場所は、カリディアで最も神聖な場所とされ、神官たちの手によって守られてきた。カディアの結界の崩壊の折に、カイが唯一つ、守るべきものとしてこの場所を選んだのには、理由があった。その理由を、たった今から、この場にいる全ての人間

が知る事になる。

四人の騎士が剣を抜き、魔法陣の中に描かれている自分の紋章の前に立った。そして、四人同時にその上に、剣を突き立てた。本来なら剣など刺さる筈の無い、硬い大理石の床である。だが、床に突きたてられた剣は、淡い光を帯びると、その刃の半分ほどまでが床に吸い込まれる様に、ゆっくりと沈んでいった。

太陽の四騎士が下がると、今度は月の三騎士が魔法陣に歩み寄って、同じように剣を床に突き立てた。そして順繰りに、十三本の剣が床に突き立てられた。

最後にランディスが、この場にはいない騎士の剣を二本刺し、後ろに下がる。それで、天地海十五の全ての騎士の剣が、そこに揃った。

それを見届けて、リートがその腰に下げていた剣の紋章の剣を抜いた。剣を手にしたリートは、一瞬の内に、騎士の剣に囲まれた魔法陣の中に姿を現した。

そして剣を逆手に持ち直すと、床の水晶目掛けて、それを振り下ろした。剣の切っ先が水晶に触れると、そこから真紅の光が溢れだし、剣にまとわる様に人形を成していく。そこに現れた少女の姿を、リートは眩しそうに見つめていた。

少女がその瞳を開く。

・・・マッテルカラ・・・キット・・・マッテルカラ・・・

懐かしい声が聞こえた。

「・・・朱里」

眩いたリートの瞳から、涙がこぼれた。

・・・会いに来て・・・約束よ・・・

朱里が微笑んだ。リートは、その光を思わず抱きしめた。一瞬、その温もりを感じた気がした。次の瞬間、光は弾け飛び、四散して消えた。リートの手の中には、白く輝く小さな光の球が残っていた。それを剣の柄の上に乗せて、リートは魔法陣の外に下がった。

一同が見守る中で、白い光は剣の柄から滴る様に落ち、ゆっくりとその刃に交わっていく。やがて、その光を全て吸い取った刃が、強烈な光を放った。それに呼応するように、十五の騎士の剣から色とりどりの光が溢れだした。

それは、光の柱となって上方に延びていき、大きく弧を描くと、一斉に剣の紋章に降り注ぐ。すると、光が乱反射するその中に、くっきりと一人の人物の影が浮び上がった。

白いドレスを身に纏った、大魔法使い。

伝説のその人が、穏やかな笑みを浮かべてそこに立っていた。

「・・・ダーク・ブランカ様・・・」

その存在感の大きさに、リートは思わずその場に跪いた。その場にいた全ての人間が、それに倣った。

「お帰りなさいませ」

自分の足元で大仰に畏まる人々の中で、ただ一人顔を上げてそう言ったランディアスの顔を見て、ダーク・ブランカは、わざとらしく顔をしかめて見せる。

「何だか、神様にでもなった様な気分だわねえ・・・」

「それほどまでに、我々は、あなたのお帰りを心待ちにしていたのですよ」

ダーク・ブランカの形のいい眉が、少しばかり上がる。

「最初に、言っておく。私は、神様じゃあ、ないんだからね」

「承知しております」

「どんなに逆立ちしても、出来ない事もある」

「それも、承知しております」

「・・・まあ、いい。とりあえずは、まだ滅んでいない様だし・・・しかし、随分と時間が掛かったんだな・・・ラリサの後継者にしては、手際が悪すぎる」

「勘弁して下さいよ。祖父とは違うんですから。事情もろくに知らされずに、厄介ごとを引き継いただけでも、有難いと思っていただきたいですよ」

「そういう時の為に、予言書を残して行ってやったんだろうに」

「・・・予言書？知りませんよ、そんなもの」

「代々の魔道師長に引き継がれておらぬのか」

「・・・私は、引き継いでおりませんっ」

「ん～じゃ、やっぱり、封印の地で見掛けた予言書は本物だったのか・・・どこかの馬鹿が、向こうに飛ばしてしまったんだな・・・全く、何をやっているのやら・・・」

ダーク・ブランカが何やらぶつぶつと独り言を言っている。

「ダーク・ブランカ様？」

「いや、前言撤回。独力で、ここまでやったのだとすれば、相当なものだ。良くやったな」

「・・・何か、薄気味悪いですね」

ランディアスの台詞にダーク・ブランカが苦笑する。

「お前も、たいがい性格がひねくれているのだな。祖父殿にそっくりだ。褒められたら、素直に喜べ」

「・・・はあ。ありがとうございます」

「さてと」

ダーク・ブランカが目を細めてリートを見る。

「リート・ラランダ」

「はい」

名を呼ばれて、リートは弾かれたように顔を上げた。

「・・・大きくなったな」

言いながら、ダーク・ブランカはリートの前に片膝を突き、その胸のペンダントを手を取った。そこから様々な事が、ダーク・ブランカの中に流れ込んで来る。大魔法使いは、その中に、リートがこの十八年間歩んできた道を、垣間見た。

「・・・遅くなって済まなかったな、リート。間に合って、良かった」

「ダーク・ブランカ様・・・あの、朱里は・・・」

「こんな時でも、他人の心配か。優しいのだな、お前は。心配ない、あの子はちゃんと、自分の世界に帰ったよ」

「そうですか・・・」

「さて、私が戻ったからには、もう大丈夫、と言いたいところだが・・・今の私に出来るのは、お前に道を示してやる事だけだ」

「はい」

「このランドメイアの命運は、皇帝となったお前に委ねられている。いいか、良く聞くのだ」

「はい」

「お前の持っている選択肢は二つ。自らこの国を滅ぼすか、闇によって滅ぼされるのを待つか・どちらでも、好きな方を選んで構わない」

「・・・って・・・どっちにしても、滅ぶんですか？この国は。そんなの、選べる訳ないじゃないですかっ」

「それが、お前の背負った宿命なのだ」

そう言ってダーク・ブランカは、リートに厳しい目を向けた。

大陸の中央、険しい山々の連なる峰の狭間に、ノアフアラオという魔法使いの一族がいる・ダーク・ブランカは、そう言って、長い物語を語り始めた。

かつて、大陸で光族の国を滅ぼし、中原で栄華を誇ったグラスファラオンという国があった。その国の王は、絶え間ない戦によって領土を広げ続けていた。それを脅威に感じた西方の諸国は手を結び、これを滅ぼした。この戦いの折、影で西方諸国をまとめあげたのが、ダーク・ブランカだった。

しかし、西方諸国の連合軍は、戦利を巡る行き違いから、隙を生じ、その王の一族を捕らえることは出来なかった。彼らは国を捨て、人の手の及ばない秘境へと逃げ延びた。その一族がノアフアラオである。彼らは、闇の魔法を使う魔法使いの一族だった。その魔法使いたちが、ランドメイアを滅ぼそうとしている。それが、このランドメイアを覆い尽くそうとしている闇の正体であると。

「・・・国を滅ぼされた恨みなのですか？あなたが、それに加担したからと・・・？」

「・・・まあ、それもある。しかし、実はもっと根深い話でな。ノアファラオの長、ヴィシスは、私の兄なのだ」

「兄・・・」

「私たちは、生まれながらに大いなる力を持っていた。それによって、人々から恐れられ迫害されて、この世界から爪弾きにされた。兄は、その力で、この世の全てを支配してしまえば、自分たちの居場所を創る事ができると考えた。でも、私はそうは思わなかった。力で全てを支配しても、人の心までは支配出来ない。そんな事をして私たちが、恐れられ忌み嫌われる存在である事に変わりはないと、そう思ったのだ。もしも、この世界の人間がみんな、私たちと同じ力を持つようになれば、私たちは特別な存在ではなくなる。恐れられる事も、嫌われる事も、なくなる。そんな世界を創造できたらと・・・私はそう思った。お姉さまには、夢物語と笑われたけれど・・・」

「それで、この国を、ランドメイアを創ったんですか・・・」

「そう。魔法が特別なものではない国を。兄が滅ぼした光族の生き残りの人々と一緒に・・・でもそれは、兄にとっては、裏切り以外の何ものでもなかった。自分たちだけが持つ特別な力を、他の者たちに分け与えるなど、兄には考えられない事だったろうからな。でも、私だって兄のしている事は許せなかった。戦を繰り返し、殺戮を繰り返し、数多の命を奪い去る。自分たちよりも力の無い者を踏みつけにして、恐怖で支配する。・・・そんなやり方を、認める事などできなかった・・・だから、戦うしかない、そう思った」

そうしてダーク・ブランカは、長い時を戦い続けて来た。しかし、時を経るうちに、お互いの存亡を掛けた戦いは、やがて、兄妹二人だけの問題ではなくなって行く。そこに巻き込まれていく多くの人々の存在にダーク・ブランカは心を痛めることになった。

引き下がる訳にはいかない。負ければ、このランドメイアの全てが滅ぼされる。多くの人々の命が奪われる。しかし、自分が兄に逆らったことで、その運命を歪められていく者たちがいる。それは、彼女にとって重たすぎる現実だった。

そして、彼女の弟であるカルラもまた、そんな一人だった。カルラは、ヴィシスによって、裏切り者の姉を憎むようになっていた。そして、自ら望んで、ヴィシスに魔法で星の刻印を刻ませた。それは、滅びの刻印。その存在自体が滅びを引き寄せる、呪われた刻印だ。そして彼は記憶を封じ、ランドメシアへやって来た。

その星の存在自体が、ささやかな毒となり、ランドメシアはゆっくりと滅びへの道筋を辿る。そのまま放っておけば何もしなくても、ランドメシアは滅びる。

もしダーク・ブランカがその刻印の存在に気づき、これを消そうとしてカルラの記憶を戻せば、その時点で、その星は、ランドメシアの場所を示す標になるというものでもあった。場所が分かれば、滅びを待つまでもなく攻め滅ぼす。それはどちらでも構わない。

ヴィシスにとっては、所詮戯れ言に過ぎないのだ。人の心を弄んで、その運命を弄ぶ。それすらも、長い時を生きる彼にとっては、ほんの座興でしかない。

実はカルラには、本人も知らない内に、もう一つの魔法が掛けられていた。それは目を覚ました時に、初めに目を合わせた少女と、恋に落ちるという魔法。そして、ヴィシスは星の軌道を読み、皇帝となる者を生む定めを持つ皇女リファリアと巡りあう様に、あの日、あの場所を選んでカルラを送り込んだのだ。

ヴィシスが仕組んだ様に、二人は恋に落ちた。

そして、その魔法には、更に悪趣味な仕掛けが施されていた。もしも、二人の間に子供が生まれるならば、その子供は、カルラの星の刻印を継ぐ。そういう仕掛けである。

カルラが目的半ばで命を落としても、あるいは真実を知り、運命から逃れるために自ら死を選んでも、代わってその子供がランドメシアの場所を教える標となり、滅びへの道筋を辿る毒となる。しかも、それが皇帝となる者ならば、これ程の余興はない。国を滅ぼす定めを負った皇帝という存在は、ランドメシアを翻弄し、疲弊させるだろう・・・

・・・ただ、静かに滅ぶのを待つだけでは、面白くないではないか。あの、時の魔女の国だ。逃げ道の無い様に追い詰めて、極上の滅びを、与えてやろう・・・

カルラが星の刻印を受ける前に、ヴィシスから言われたその言葉の本当の意味を悟ったのは、リファを失った後の事だった。

ダーク・ブランカに都に呼ばれ、自分がランドメシアにとって、どういう存在なのかを教えられた。リファの死も、リートの負った運命も、全て、自分の招いた事だということ。滅びの刻印を消す為に、封じてある記憶を取り戻した時、カルラは、自分がしようとしていた事・・・そして、人の運命をも弄ぶヴィシスの恐ろしさに気づいたのだ。

極上の滅び・・・という、その言葉の恐ろしい意味に。

自分の子であるリートが、自分の母の国であるカリディアを滅ぼす。兄ヴィシスの望んだことは、そういう事だったのだ。

そして、全てをダーク・ブランカに告白して、カルラは自らが標となるのを避ける為に、魔法

の塔に幽閉される道を選んだ。

「お前が、カルラから受け継いだ星は、そういう星だ。この島の結界がすでに存在しない今、その星は、彼方より闇を呼び寄せる、標となる」

「俺の存在そのものが、闇を呼び寄せる・・・」

悪意に満ちた闇を。

光をすべて覆い尽くし、すべてを消し去る闇を。

それが、この国を滅ぼすという、自分の宿命。

リートは、黙ったまま、考え込んだ。

人の運命までもを操る術を持つ者と、戦うのか。神にも等しい者と、戦って、勝てる見込みなどあるのか。戦って多くの命を犠牲にして、残るものなどあるのか。

広間が静寂に包まれた。誰もが、固唾を飲んで、リートの言葉を待っている。

その静寂が、不意に破られた。

息を切らせた使者が、転げる様にして広間に入って来たのだ。

「・・・っ・・・申し上げます・・・海竜族の商船隊が、アランシア近海で、消息を絶ったと、たった今、カーシアから知らせが・・・」

その知らせを聞いて、シリウスの脳裏に父親の顔が浮んだ。この時期にアランシア近海にいる隊・・・

「・・・まさか、親父の商船か・・・」

その微かな呟きを、リートは聞いていた。

・・・もう、一刻の猶予もならない・・・この身に負う星に掛けて、皆を守る・・・

その為の方法ならば、もう示されている。リートがダーク・ブランカの手を取って、立ち上がった。

闇を消すには、光を消すこと。

それが答えだ。

「この私が、光と昼の女神ファリス、闇と夜の女神フィリスの力をもって、このランドメイアを滅ぼす」

それが、予言に示された運命なのだから。

第11章 闇との邂逅

身じろぎと共に、鎖の擦れる不快な音が耳を突いた。四肢を拘束されていた。次第に五感が戻ってくる。次に、黴臭い匂いが鼻を突いた。湿って重たい空気が両の肩から伸び掛かってくる。そんな感覚に囚われる。ああ、ここは地下牢か・・・と思う。自分は、罪人として囚われたのだ。開いた瞳の先には、ただ闇が広がっていた。胸の辺りに、痛みにも似た疼きを感じる。そこに闇の気配を感じる。

・・・気の毒だが、諸刃の剣を抜いた代償は、払ってもらおうぞ・・・

そういうことか。シルフィウスは闇の中で笑った。

闇の魔道書は、今、自分の中に封じられている。

その強大すぎる力ゆえに、闇の魔道書には、それを封じる「箱」の存在が不可欠である。かつて、師である魔道師ルトから、そう聞かされたことがあった。「箱」がなければ、それはたちどころにして、この世界の全てを消し去る。その力を制御する役目を果たすのが、「箱」という存在なのだ、と。そして「箱」の役目を果たす者は、それなりの力を持つ魔道師でなければならない。さもなければ、その者は、その力に飲み込まれ、「箱」を失った闇の魔道書は暴走する。それゆえ、三年前、ダーク・ブランカが施した封印を開けて、魔道書を持ち出す際に、彼らはリートにその役を負わせるべく白羽の矢を立てた。

その頃、ランドメシアでは、弱まり始めた魔法の力に、皇帝ラディウス二世の能力に疑問を抱く声が出始めていた。リートは、魔道師であるが故に、誰よりも敏感にその魔力の衰退を感じ、危機感を持っていた。そこに、彼らの付け入る隙があったのだ。帝国を滅ぼす定めの子とというレッテルを貼られていたリートにとって、自分が帝国の危機を救う存在になれるかもしれないという誘惑は、抗いがたいものだったのだろう。更に言えば、ラディウス二世を敬愛していたリートには、窮地に立たされている皇帝を救いたいという思いもあったのだろう。

闇の魔道書を使えば、弱まった魔法が元に戻るというルトの甘言にやすやすと乗ってしまったのは、彼が純粋な子供だったからだ。しかし、誤算だったのは、リートほどの魔道師であっても、その力を制御し切れなかったということだった。

結果、リートは魔道書の暴走を許し、帝都の半分が一瞬にして消滅するという惨事に至った。魔道書は、ラリサによってリートという「箱」の中に再び封印され、封印の地へ送られた。

それを取り戻す為に、シルフィウスは、混乱の中で消息を絶っていた神官長エシュランに成り変わり、策を弄し、三年の時を待った。

そして今、闇の魔道書は、自分の中にある・・・

彼方から、規則正しい足音が、次第にその大きさを増しながら近づいてくる。その気配に、シルフィウスは息を殺した。誰かがやってくる。音が止んで、鍵穴を擦る様な音がしたと思った

刹那、眩しい光が彼の目を射抜いた。

「シルフィウス・・・」

魔道師長ランディアスの声が彼の名を呼んだ。

「・・・お前には、申し訳ない事をしたと思っている。闇の魔道書を持ったままでは、陛下は剣の紋章を継ぐことが出来なかった。だから、陛下に代わって、魔道書の「箱」となる者が必要だったのだ。今のランドメイアには、お前の他に、「箱」の役をやれるものがいなかった。・・・陛下の「盾」となる誓いを立てている私では、箱の役目を負うことは出来ないから」

「・・・いつから、気づいていた？」

「・・・最初から・・・と言ったら、気を悪くするだろうか・・・」

シルフィウスは、軽く笑う。

「成る程。魔道師長は、伊達じゃない、か。泳がされていたのは、癩だが・・・私を箱に選んでくれて、感謝はしているよ」

シルフィウスがランディアスに挑戦的な瞳を向ける。それを見て、ランディアスがため息を付いた。

「思い違いをするな、シルフィウス。私は、お前に釘を刺しに来たのだ。いかなる事が起ころうとも、その力を使ってはならない。全てが終わるまで、ここにいて欲しいと。・・・頼むから・・・ここに居てくれ・・・シルフィウス」

ランディアスの懇願するさまに、シルフィウスは困惑する。

「・・・どんなに鎖で繋ぎ止めても、どんなに嚴重に鍵を掛けても、どんなに強力な魔法で結界を作っても・・・闇の魔道書の前には無力だ。お前の意思一つで、その力を解放することができる。そして、その力を使えば、お前も共に消滅するだろう」

「だから・・・？」

シルフィウスが皮肉を込めた笑みを浮かべる。

「わが師ルトは、闇を制するには、この闇の力が必要だと言った。なのに、お前たちは、この力を使わずに仕舞っておくというのか？ふざけるな！もうこんなに、闇の気配が迫っているというのに、この期に及んで、お前たちは・・・」

「モニカ・エレクトラを覚えているか？」

ランディアスが不意に、一つの名前を口にした。

「約束したんだ。お前に合わせてやると・・・」

「それが、今、何の関係がある・・・」

「彼女は、心を病んでいる。彼女の心を救える者がいるとすれば、それは、お前しかいない」

「そんなことは、私には関係のない話だろう」

シルフィウスが不快そうに言う。その答えに、ランディアスの表情が変わった。

「たった一人の少女の事も救えないで、国を救うだと？笑わせるなっ！」

この若い魔道師長が怒鳴るのを、初めて見た。ふと、そんな事を思う。その真摯で鋭い眼に、正直、圧倒された。

「・・・陛下は、ご自分の運命を、全て背負うお覚悟をされた。重たい運命だ。その陛下に、同じ

魔道師として尊敬し憧れの存在であったお前の、その命の重さまでも背負わせる気か？」

「・・・黙って、見ていると・・・？」

「ああ、そうだ。・・・そうすれば、全ての罪は、不問に付してやる。お前の師の名誉も回復してやろう」

・・・ただ、何もせずにいると・・・

ランディスは、もう一度念を押して、牢の外へ出て行った。いざと言うときには、役に立たない鍵を、丁寧に掛ける音がする。そこから動くな、と。その音は、そう言っていた。

ランディスの足音が遠ざかってしまうと、シルフィウスは、再び静寂と闇に包まれた。その静寂の中で、胸の疼きが次第に強くなっていく。

・・・闇が来る・・・

その気配を感じる。ただここで、息を殺して、全てが終わるのを、待っていればいいのか・・・

「・・・モニカ・エレクトラ・・・」

その名前を呟くと、少し控えめな少女の顔を思い出した。

「・・・そう言えば、泣いてばかりいたな・・・あの子は・・・」

それでも、剣を持つ騎士だ。あの細い腕で、戦うのだろう。

命令されれば、逃げもせずに、戦うのだろう。

泣きながらでも・・・戦うのだろう・・・

傷だらけになっても怯まずに・・・最期まで・・・

不意に、心臓が締め付けられる様な痛みを覚えた。その痛みを退ける様に、闇の中にチャリンという金属音が響いた。その音と共に、彼を拘束していたものは、跡形もなく消え去っていた。

国を救うとか、そんなに大層なものじゃない。これは、魔道師の性（さが）だ。心の中で呟いて、シルフィウスは、力を使おうとしている自分へのいい訳を考えている自分を笑った。

・・・お前なら、分かってくれるはずだよな、リート・・・

魔法学校で、力を競い合ったお前なら。この魔道書を手にしたことのあるお前なら。おまえだって、きっと感じたはずだ。大きな力が湧き上がってくる感覚に、心が躍るのを。その力が甘く囁き掛ける。

外へ・・・と。だから、そう。外へ。飛び出すのだ。

・・・キット スゴク キモチイイカラ・・・

そう思った刹那、彼は海を望む絶壁の上に立っていた。空は、真っ黒い雲に覆い尽くされていた。

——彼方から、闇が近づいていた。

闇を消すには、光を消すこと。

本当にそんな事が、出来るのか。

この俺に・・・

剣を握る手に、無意識に力がこもる。その力に応じる様に声が聞こえた。

・・・心を静めろ、リート・・・大丈夫だ。お前は一人じゃない。お前には私が付いている・・・

「ダーク・ブランカ様・・・」

リートがその名を呼ぶと、剣が光を発し、そこから大魔法使いの姿が現れた。その半透明な姿をリートは見据える。

・・・全て昔のままに、とはいかないでしょうが・・・

ランディスは、この事を知っていたのか・・・いや、知っていたのだろうか。きっと。ダーク・ブランカが、すでにその実体を持たないという事を。

今や、その魂のみが、この剣の紋章の剣に宿っている。大魔法使いダーク・ブランカは、太陽の神殿の騎士の間という、強力な魔法結界の中でのみ、実体化出来るというばかりの、儚い存在だった。

・・・今の私に出来るのは、お前に道を示してやることだけだ・・・

本当に、それだけなのだ。それでも、誰かが・・・いや、自分がそれをやらなければならない。運命の分岐点を幾つも通り抜けて辿り着いた最終ステージ。そこにはもう、逃げ道など、残っていないのだから。

「私には、見ていることしか出来ない。だが、お前が背負う罪は、共に負ってやるから・・・」

「・・・ありがとうございます」

ダーク・ブランカが僅かに顔をしかめた。

「礼など言われる立場ではない。そんなことをされては、私は、お前に土下座でもしなくては成らなくなるではないか」

「大魔法使い様に、そんな滅相もない」

「私を恨んでくれて構わないのだぞ。・・・むしろそうしてくれた方が、気が楽だ」

「自分を愛してくれる者を、恨む者などいはしませんよ。俺は、今ここに、あなたと共にあることが、何だか嬉しいんです」

「・・・そうか」

ダーク・ブランカが、複雑な顔をして笑った。そこへ伝令が、ランディスからの伝言を伝えにやって来た。被害を最小限にする為に命じていた、民の避難が完了したと、伝令は告げた。これで、全ての用意が整った。

「行きます」

リートが剣を手に立ち上がった。目をやった窓の外には、不気味な暗雲が立ちこめていた。

遠く大海に、小さな緑の島影が見えた。

「あれが、ランドメイアか」

小さいものだと思う。消し去るのに、さほど手間が掛かるとは思えない。だが、あれが、兄にとっては、喉に刺さった小骨なのだというのだから、それは取り除いてやらなければならない。

「そうしないと、兄者のご機嫌が直らないんだ」

空の上から島を見据えて、シャルベージャは、そう呟いた。

「だから、消えてしまえ」

何気ない仕草で、右手をかざす。そこからほとぼしった黒い光が、真っ直ぐに島へ向かって伸びていく。

兄が本気になれば、たったこれだけのことで済む話なのに、今までどうしてそうしなかったのか、シャルベージャにはそれが分からない。

黒い光が島に到達する。そして全てが終わった。

そう思った。が・・・意に反して、そこにはまだ島が存在している。

「・・・おもしれえ。俺の力を弾き返しやがったのか。どういう仕掛けだよ」

少しは楽しめそうだ。シャルベージャが空中で呪文を唱えると、彼の足元に魔法陣が浮かび、その体を彼方の島へ運んでいった。

見上げた空は、禍々しい黒い色に塗り込められていた。あの闇が消えて、再び、きれいな青空が見える時など来るのだろうか。モニカは、ふと、そんな事を思った。

剣を手にしてここに立っている自分も、この街も、何もかも、消えてしまえば、全ての苦しみから解放される。恐怖も、痛みも、全て消えてくれる。何もなくなるってことは、そういうことだ。そういう事を望む自分は、やはり心を病んでいるのだろうか・・・

「大丈夫か？お嬢」

ぼんやりしていたモニカを気遣う様に、リフィが声を掛けた。

「・・・怖かったら、その辺に隠れてていいぞ。神殿の警備って言ったって、こんなとこまで敵が来る訳はないんだし」

「そう・・・かな・・・」

モニカの気持ちを盛り上げようと、必要以上に明るく言ったリフィをモニカは訝しげに見た。

「だって、もしこんなとこまで敵が来たら、もうチェックメイトってことだろう」

そんなものかと思う。そうすれば、自分は楽になれるのか。もう、自分に守るものなど、何もない。そんな気がした。闇に染まる空を見上げる。

「大丈夫か？ぼおとして・・・」

「大丈夫だ。ただ、私たちは、何を守っているのかなって・・・そんな事を考えてた」

「皇帝騎士団の騎士としてって意味なら、そりゃ、皇帝陛下だろうよ」

模範的な答えだと思ったら、何だか可笑しかった。この男は、普段はおちゃらけているくせに、そういう所は、変に道理に適ったことを言う。要するに、大人なのだ。そう思うと、何だか反

論したい気分になった。

「なら、この国を滅ぼすという皇帝を守る私たちは、この国の人たちに、謝らなくてはならないってことかしらね」

「・・・陛下のご決断が不満か？」

「いっそ、きれいさっぱり全てなくなってしまうえば、面倒くさくないなって・・・」

言った途端、手加減なしの平手打ちが飛んできた。左の頬に熱さを感じる。

「・・・わ、悪い・・・その・・・」

反射的に手が出てしまった様で、殴られたモニカよりも、殴ったリフィの方が、見るからに動揺していた。

「・・・でも・・・人の命の話を、そんな風にするもんじゃない・・・して欲しくない、お嬢には・・・」

「こんな私の事なんか、ほっぽって置けばいいのに・・・なんで、そんなにムキになって・・・馬鹿みたい・・・」

「馬鹿みたいか・・・」

リフィがふっと笑った。

「何だかなあ・・・こんな風に他愛もない話をしたり、一緒に剣の稽古をしたり、任務で旅したり・・・そんな事が楽しくてさ」

「楽しい？」

「だってさ、ここに来なかったら、俺なんか、お嬢と口を利くことすら、出来なかったんだろうなって、思う訳」

「・・・どうして？」

「だって、お前は、お嬢だから、さ・・・俺らなんかとは、住む世界が違う」

ここに来なければ、会うこともなかった。こんな風に話す事もなかった。

・・・そんな事、考えたこともなかった・・・

胸の奥が、チクリと痛んだ。ここに来なければ、自分はその人に出会うこともなかった。

・・・恋をすることも・・・なかった。自分をその人と出会わせてくれたこの世界が、跡形もなく消えてしまったら、自分は悲しいと思うのかもしれない。ここには、三年分の思い出が残っている。守るべきものがあるとすれば・・・そういうことなのか。ふと、思う。それは自分が存在した証を、守るということなのかも知れない。

そして、この国に住む人々全てが、そこに生きた分だけ、同じ様に思い出を持っている。もしかしたら皇帝は、それを守ろうとしているのか。

「痛むか？」

リフィの手が、モニカの頬に触れた。冷たい手だ。火照った頬の熱を吸い取っていくその冷たさが、心地良かった。

「・・・口ぐらい利いてあげるわよ」

「え？」

「私を何様だと思っているのよ・・・」

「いや・・・だから、お嬢様」

馬鹿正直にそう答えたリフィに、モニカの口元が綻ぶ。

・・・笑った顔を・・・初めて見たかも・・・かわいいじゃねえか・・・この笑顔を守る為なら、何だって出来そうな気がしてきたぜ。それが、どんな場面だってな・・・

リフィの手が、モニカの腰に回る。そしてリフィは、その体をくいと引き寄せた。

「リフィ？」

「振り向くな」

リフィが言った途端、背後で破壊音と同時に兵士たちの悲鳴が響き渡った。一瞬の後の静寂。リフィの手がモニカの頬を離れて、腰の剣を抜いた気配がした。そして、大きな力がぶつかる感触。モニカを抱き寄せたまま、リフィは何か突き飛ばされる様に、弾かれて、背後の壁に勢い良く背中を打ちつけて、短い呻き声を上げた。

「なに？」

肩越しに振り向いたモニカの視界に、薄笑いを浮かべた男の姿が入った。

「成る程、その剣の魔力が、俺様の力を弾き返すか？面白い。インディラは昔っから、そういう細かい細工が好きだったっけな。お前たちが、魔法の剣を持つ騎士って訳か？」

「・・・雨の騎士、リフィスレント・リセントス」

「ほう。俺は、ノアフアラオの魔法使い、シャルベージャ。この島を消しに来た男だ」

「・・・」

「さてと・・・そのおもちゃ、どのくらい持ち堪えられるか、試してみるか？」

シャルベージャが呪文を唱え始め、右手を上げる。それを見て、リフィはモニカを勢い良く突き飛ばした。体勢を崩したモニカが身を翻した所で、眼に入ったのは、男と対峙しているリフィの姿だった。男の手からほとぼしる黒い光が、リフィの剣に絡みついている。微かな音を立て、リフィの剣に、小さなヒビが現れる。

・・・このままじゃ、リフィが・・・

考える間もなく、モニカは剣を抜き、その男に向かう。男の鋭い眼がモニカを捕らえた。

「お前の方が、先に消えたいのか？」

「モニカ！」

男の声と、リフィの声が、混ざり合う。

黒い闇が目の前に迫ってくる。

かつてシルフィウスに教えられた通りに、体が、自然と剣を構える。

次の瞬間に、衝撃が来た。押さえ込めない程じゃない。そう思った。だが、それを横にかわそ

うとして、それが適わない事に気づく。身動きが取れなかった。剣に絡みついた黒い光が、剣を蝕んでいく。剣にヒビが入ったと思った刹那、パリンと小さな音を立ててそれは砕け散った。身を守る術を失ったモニカを、闇が容赦なく押し包んだ。

息が出来ない。だが、苦痛はなかった。ただ、これで、全て終わりなんだと、そう思ったら、何故か、涙が一粒、こぼれ落ちた。

・・・そうか、やっぱり、何もなくなってしまうってことは、悲しいことなんだ・・・ここまで来ないと気づかないなんて・・・ね・・・ばかみたい・・・

「ほんと、芸が細かいわ。おもしれえ。お前、一族のもんでもないのに、闇の魔法を使うんだ」

シャルベージャの声が聞こえた。その声に驚いて、モニカは目を開いた。

「・・・生きてる・・・」

呆けた様に呟いたモニカの目の前に、懐かしい背中があった。

「・・・シルフィウス様・・・」

「下がっている」

シルフィウスの声があった。その声を聞いた途端、モニカの瞳から涙が溢れだす。その場に立ち尽くしたまま動けないモニカを、リフィが引きずるようにして連れて行った。

シャルベージャが両手で、シルフィウスに力の塊を投げつける。それは、シルフィウスの体にぶつかると、その中に吸い込まれる様にして消えた。シャルベージャが面白そうに笑う。

「で？お前は、そうやってこの俺の力をずっと吸い取り続ける気か？闇の魔法で？死ぬぞ、お前。そんな使い方をしたら、自分が消滅するって、インディラに聞いてないのか？」

「そんな事、お前に言われるまでもない」

「ふうん。知っててやってんだ。お前、俺に似てるな。楽しいんだろ、力を使うことが」

「俺は、お前とは違う」

シルフィウスが不敵な笑みを浮かべた。両手を前方に差し出した。その手の先に、黒い魔法陣が現れる。その魔法陣に、シルフィウスの体からあふれ出る禍々しい気が集約されていく。

「大事なものをを守る為に、戦うんだ」

その言葉と共に、魔法陣から、強力な波動が放たれた。

「消え失せろっ！」

「なっ・・・」

短く驚愕の声を上げて、シャルベージャはその波動に飲み込まれていく。そこから逃れる様に、人の形をした黒い光が、その波動の中で、蠢いている。シルフィウスは、僅かに眉をひそめて、更に闇の魔力を解放する。

・・・このまま、力を解放したら、シルフィウス様は・・・

モニカの心に不安がよぎる。

「リフィ、止めて、シルフィウス様は・・・」

言いかけたモニカの目の前で、シルフィウスの姿が少しずつ薄れていく。その意味を、モニカは悟った。

「・・・もう、止めて・・・」

涙で、その姿が良く見えない。シルフィウスの体から、黒い光が天に向かって放たれる。天を覆う雲を切り裂く様に、光は空を四方に走った。その裂け目から、陽の光が漏れ出して来る。天を仰いで、シルフィウスは笑っていた。

「・・・ほら、こんなに簡単に、闇が消えていく・・・私たちのしたことは、間違っていなかったんですよ・・・ルト先生・・・」

「シルフィウス様っ！」

モニカの叫び声に反応して、シルフィウスがモニカに笑顔を向けた。

「・・・ほら、ご覧、モニカ、お日さまが出てきた・・・お日さまの光って・・・こんなに暖かかったんだな・・・気持ちいいね・・・」

モニカの目の前で、陽の光に溶け込む様に、その姿は消えた。

「・・・いや・・・シル・・・フィウス・・・シルフィウスさまぁ！」

その幻影を追って、モニカがふらふらと歩き出す。

「モニカ！」

リフィが、慌ててモニカの腕を掴んで引き戻そうとする。と、その時、地響きを伴って、二人の足元が崩れた。

大地が大きく裂けていく。その裂け目に、モニカとリフィは吸い込まれる様に落ちていく。

「目を開けろ、お嬢っ！！」

モニカはすでに気を失っていた。リフィはその手を、精一杯モニカの方へ伸ばす。

・・・イザという時には、俺が、守ってやっから・・・

「・・・男に二言はないからな、お嬢」

モニカの落ちていく先に、魔法陣が現れたのが見えた。リフィはモニカの腕を掴んで、その体を抱き寄せる。そして、二人の体は光に包まれた。

その大きな力は、とても魅力的で、それを手にする者の心を惑わす。そして、消滅の魔法は、操者の消滅をもって完結する。それが、触れてはならない禁忌の理由。闇の魔道書を開いてはならない理由なのだ。

「・・・集中しろ、リート」

一つの魂がこの世界から消滅した気配を感じて、リートの心が揺れている。

目標であり、良きライバルであり、そして兄のように慕った存在だった。

・・・また一つ、彼は大切なものを失った。だが・・・

「お前の肩に、一体、どれだけの人の命が掛かっていると思っているんだ！」

ランディスの怒号に、リートが姿勢を正した。その指の先に浮ぶ地図球が、金色に輝いている。リートはそこに途切れかけた意識を戻し、更に力を注ぎ込んでいく。やがて、乾いた音と共に、地図球に亀裂が走った。

・・・力を加減しろよ、リート・・・砕いてしまったら・・・取り返しが付かない・・・

ランディスが見守る側で、リートは輝く光の球を、瞬きもせずに見据えている。地図球の亀裂は真っ直ぐ縦に延びていく。その線は、球をぐるりと回った後、起点に集約した。同じように、今度は横に線が延び、程なく、地図球は四つに分割された。割れた隙間から、地図球の中心核とでもいうべき光の塊が僅かに見えた。リートはそれを取り出そうとしている。だが、その亀裂から、新たに細かい亀裂が生まれ、その端が、ぱらぱらと零れ落ちた。

・・・これ以上は・・・無理か・・・

ランディスが思った時、リートの指が僅かに動いた。次の瞬間、地図球が派手な音を立てて、四つに分解した。細かく砕けた欠片は、床に落下して音も無く消えていく。リートが、唇を噛んで、何かをすくい上げる様に、手のひらを返した。

「・・・光と昼の女神、ファリスの名の元に、ここに新たなる大地を創生する。闇に属する、全てのもの・・・闇と夜の女神フィリスの名において、陽の光の元より、消え失せよ・・・」

地図球の中から現れた光の塊は、頭上高く上って行き、虚空に消えた。砕けた地図球の四つの欠片は、それぞれに光り輝き、新たな四つの球体に変化していった。その光を眩しそうに見ながら、リートは力尽きた様に、その場に座り込んだ。ランディスは片膝を付いて、その肩を抱き寄せる。

「・・・これが、お前に出来る最善のことだった」

「・・・はい」

「だから、自分を、責めてはならない・・・」

「はい・・・」

答えて、リートは俯いた。その瞳から、涙が零れ落ちた。

ただ予言のままに、時が過ぎていっただけ。悲しくは無い。自分にそう言い聞かせる。それなのに・・・

悲しい訳ではないのに、涙が止まらないのは、何故だろう・・・

「・・・火の星が消えた」

火の星は、弟、シャルベージャの星だ。弟を失った喪失感が、彼女の体に広がっていく。その言いようのない不快感に、シータは、両の手で自分自身を抱くようにして、思わずうずくまった。遠くで、派手に物が壊れる音がした。ああ、彼も、この喪失感を感じているのだ。そう思った。破壊音は絶えることなく続く。シータはため息を付いて、立ち上がった。

その部屋の中は、まるで嵐でも通り過ぎた様な有様だった。そこは、兄、ヴィシスの部屋だ。破れた布が密林の蔓のように垂れ下がり、調度品が、ばらばらに砕かれて、そこかしこに瓦礫となつてうず高く積み上がっていた。

「ヴィシス・・・？」

その惨状の中に、兄の姿を探す。そして、ベッドの側に、子供のように膝を抱えて、小さくうずくまって硬直しているヴィシスを見つけた。シータは何も言わずに、ヴィシスを抱き寄せる。全てを拒絶する様な、強い気を少しずつ解きほぐしていく。解れた所から、気を鎮める波動を送り込んでいく。程なくして、ヴィシスの体が、痙攣する様に、僅かに動いた。

「ヴィシス？」

「・・・大丈夫だ・・・」

吐息の様な小さな声が聞こえた。こんな時に、泣く事ができれば、こんなに苦しまずにすむのに。シータは兄の髪をそっと撫でてやった。

ヴィシスには、感情の欠落がある。悲しみというものを感ずることができない。だから、泣くことも出来ないのだ。

ヴィシスとシータが幼かったころ、父が国を追われた。二人は、父と共に、世界中を放浪した。忌避と蔑みと暴力に晒されながら、ただ、自分たちの居場所を求めてさまざまに迷っていた・・・その迫害の理由が、自分たちの持つ力にあるのだと知った時、ヴィシスは悲しみの感情を捨てた。悲しいのだという事を、認めてしまったら、自分たちは、この世界に存在することが出来ない。それに気づいてしまったから・・・

だが、ヴィシスが捨てた悲しみは、表面に現れて来ないだけで、彼の中に少しずつ堆積し、その心を蝕んでいる。それを彼は気づいていない。

「・・・標の星も消えたな。結局、インディラは、自分でランドメイアを消し去ったという訳だ」

ヴィシスの口から笑いが漏れる。

「所詮、その程度のおもちゃだったってことだな」

「・・・それで、気がすみしましたか？」

「あいつが私の前に来て、土下座をして許しを乞う・・・というなら、許してやらない事もない」

「大人げのない・・・」

ヴィシスから身を離すと、シータはため息を付いて立ち上がった。

兄弟の中で唯一、自分と同じ、星の魔法属性を持つインディラの存在を、そもそもヴィシスは疎ましく思っていた。

似ているが故に、嫌悪する。

似ているが故に、些細な相違が許せない。

それなのに正面きって兄に喧嘩を売ったのだ、あの小さな妹は。

所詮、一つところに共にいられる存在ではなかったのだろう。近づき過ぎると、反発しあう。そういう宿命なのだから。

・・・それでも・・・

彼女が消えても、彼は、同じように喪失感に苛まれるのだ。似ているが故に、それを失った時の苦しみは、他の者の比ではないのだということを、彼はまだ気づいていない・・・

遙か遠くまで広がる海原を渡る風は、何も変わらない。その風に乗れ、海鳥が波間を掠めるように飛んでいる。陽の光が反射して、キラキラと輝く海面。それは、穏やかすぎるほど、静かな情景だった。

海原の先に、島影が見える。視線を更に左に振ると、また別の島影が、陽炎に揺れていた。そして、右側に見える岬の影にも、別の島がある。

「・・・あれが、カーシア。こっちが、ウインザーテラス・・・向こうが、フリーゼウアルト・・・か。見事に、ばらばらになったもんだな・・・」

リートが呟いて後ろを振り返る。丘を下った先に、大きな湖があった。そこは、数日前まで、カリディアの都、カディスと呼ばれていた場所だ。そこを歩き交った人々の喧騒が、一瞬、リートの眼に浮かぶ。リートは軽く頭を振り、その幻を振り払った。その湖に再び背を向け、丘の反対側の斜面を海に向かって下っていく。

どんなに理由を付けても、平和に暮らしていた人々の生活を壊してしまった事に、変わりはないから。理由など、問われるべくもない。それは、確かに、罪には違いないのだから。だから、償わなくてはならないのだ。

「・・・一人で、行くつもりか・・・」

腰に下げた剣から、ダーク・ブランカの声が聞こえた。リートが剣を抜くと、そこに大魔法使いの姿が浮かんだ。

「お前一人が、責めを負うべきものではないだろう・・・」

「皇帝だったのだぞ、俺は」

「だから、何だ？」

「皇帝として、国を滅ぼしてしまったんだ。その責めは、負わなくてはならないんだ。そうしなければ、俺はもう、前には進めない。どうすれば許されるのか・・・どうすれば自分を許せるのか、分からないんだ。お前の示す道が正しいのかどうかなんて、問題じゃない。ただ、何かをせすにはいられない・・・この身を焼き尽くす様な、罪悪感から逃れる為に。ただ、贖罪の為に・・・」

そこで言葉を切り、リートは皮肉を帯びた笑みを浮かべる。

「いや、違うな・・・俺は、ただ、自分が楽になりたいだけなんだ・・・あさましいな・・・俺は」

「そこまで、自分を追い込む事もなからう。お前の罪の事を言えば、私など、償い切れぬ程だ。ランドメイアはもう魔法の国ではない。そして私がここを去れば、ヴィシスとて、この島を消そうとはすまい」

「それでも、あなたは、彼の者と決着をつけようとしておられる」

「それは、私自身の問題だ。お前には、もう関係のないことだ」

「関係ない？親の仇、なのですよ、ヴィシスは。私にとって・・・それだけでも、十分な理由になる」

出来れば、関わらせるべきではないのだろう。我が一族の、罪深き因縁に。でも、それでは、この子の心は逃げ場を失う。

「・・・いいだろう。お前の命、この私が預かるう」

そう言うと、魔法使いが剣に吸い込まれる様にして消えた。剣を鞘に収め、リートは再び歩き

出す。

遙か遠くの海岸線に目をやる。碧い海が、陽の光を反射して、キラキラと輝いていた。その浜辺に、リートは見覚えのある人影を二つ見つけた。

リートの姿を認めると、シリウスとランディスが連れ立って丘を上って来る。シリウスに引きとめに掛かれると、少々厄介だなと思った。だが、近づいてくる彼らの姿を見て、リートは眉をひそめた。彼らは、旅装姿だった。

「・・・どこに、行くんだ？」

思わずシリウスに問うと、

「バカか、お前は」

という、シンプルな答えが帰ってきた。

「それは、俺の台詞だろうが」

「え？」

「お前、どっかに行くつもりなんだろ？」

「それは・・・」

「まあ、そんなのはどこでもいい。ただし、俺たちも、一緒に行くからな」

「ばっ、馬鹿を言うな」

きっと戻って来られない旅だ。同行などさせられる訳がない。

「馬鹿はどっちだ。ランドメイアをぶっ壊すのに、魔力を使い果たして、もう魔法が使えない上に、剣の腕もへなちょこ。どこに行くつもりか知らないけどなっ、そんなんで、目的地まで辿り着けると思ってるのか？この世間知らずが」

「なっ・・・」

人は得てして、凶星を刺されると、言葉が出なくなるものだ。そんなリートの様子に、シリウスは満足げに微笑んで駄目押しをする。

「当然、優秀な用心棒が必要だろう。な？」

「いやっ・・・でも」

言われてみれば、確かにそうだ。だが・・・

「お前はともかく、ランディスは・・・」

「島が分解した時に起きた津波で、海竜族の船は皆、流されるか、壊れるかしているのですよ。今、港に行っても、動ける船など一隻もないでしょう。・・・リート様、よもや、海を泳いでいくお積りじゃないでしょうね」

「それはっ・・・でも・・・」

正直そこまでは、考えていなかった。

・・・というか・・・何も考えてなかったかも、俺・・・

リートは自分の考えのなさに、打ちのめされた。反論する気力など、いとも簡単に吹き飛んだ。

「私が同行すれば、魔法の力で、ひとつ飛び、ですよ」

「それは、助かるけど・・・お前が居ないで、双子の塔の指揮は誰が取るんだ。この混乱の最中に

、責任者が不在では・・・」

「それは、ご心配なく。私には、安心して留守を任せられる、優秀な補佐官が付いておりますから」

リートは脳裏に、魔道師長補佐の人の良さそうな顔が浮かぶ。

「・・・カイ殿には、足を向けて寝られないな」

かつてカディスに存在した二つの塔、星見の塔と魔法の塔は、今は、特別な魔法の結界の中に存在する。通常の間には、その所在すら分からない、そういう場所だという。魔道師たちは、そこを「双子の塔」と名づけた。今はまだ、密やかに魔法を守る場所ではないが、やがては、新たな魔法の国を作るための、礎となるものである。そのささやかな夢を守るために、ダーク・ブランカは、ヴィシスと決着を付けに行くと言ったのだ。

「それに・・・」

ランディスが言う。

「お約束いたしましたでしょう。地の果てまでも、お供いたしますと。陛下と同じように、私も罪を抱えているのですから。・・・何でも、一人で背負うものではありませんよ」

「ランディス・・・」

「そもそも、あなたの未熟な力で、背負い切れる様なものではないのですよ。身の程をわきまえないさい」

・・・慰められているのか、説教されているのか分からなくなってきたな・・・

リートは苦笑する。自分は、一人ではないのだと言う事が、これ程心強く思ったことはない。それが許されるのだと言うのなら・・・

「では、共に贖罪の旅を・・・」

差し出したリートの手をランディスが握った。その上にシリウスが手を乗せた。その瞬間から、この旅は、ただ終焉へ向かう旅ではなくなった。

これは、再生の為の旅なのだ。リートはそう思った。

人里離れた森の中に、その庵はあった。大陸の中央にそびえる山脈のその裾野に近い森である。山から吹き降りてくる冷気を帯びた風が、旅人のマントを揺らした。その庵の戸口に、一人の老人が立っていた。訪問者の来訪を心得ていた様に、老人は戸口の前に立ち、彼らを待っていた。

庵の中では、暖炉に火が入れられており、その温もりは、寒さに緊張していた体を、優しく包み込んだ。部屋の壁一面に、魔道書が詰まった書棚があり、部屋のそこここにも、魔道書の山が出来ていた。そこは、魔道師の庵だった。あたりを見回してリートは、その部屋の片隅に、傀儡の型が置かれているのに気づく。

「・・朱里も、ここに来たんですね？」

リートが尋ねると、老人が頷いた。

「あなたは、一体・・」

ダーク・ブランカに導かれて、彼らはここへやってきた。だが、この場所に近づくと従って、ダーク・ブランカはその姿を見せなくなり、今は沈黙したままだ。

「わしの名は、リュージュ・ソーマ・・」

「ソーマって・・ダーク・ブランカの・・いえ、インディラの・・」

「そう。わしは、彼のものに、忌わしき血を分け与えた者だ」

そう言ってリュージュは、今度はランディスの前に立った。そして、その顔を見入る様に凝視する。

「・・そなたは、ラリサの血を継ぐ者じゃな？」

ランディスは神妙な面持ちで頷く。すると老人は、淡々とした口調でランディスに告げた。

「わしは、そなたの祖父を、手に掛けた・・」

そう言って、老人は頭を下げた。

「いかなる報いも受ける積りでおる。この身をそなたに預けよう・・」

ランディスは、表情を凍りつかせたまま、リュージュの顔を見据えていた。リートとシリウスは、お互いに顔を見合わせるばかりだ。ややあって、ようやくランディスが口を開いた。

「・・祖父が、もうこの世にいない事は・・知っていました」

ラリサは、キラの「盾」となる誓いを立てていたのだ。三年前、キラに剣の紋章の剣を渡した時に。その剣を使う報いをキラ様一人には負わせはしない・・自分も共に負うのだと。そう言って。

そして、あの事件の後で、ラリサはこう言った。

ランドメイアが唯一つ、滅びから逃れる方法があるのだとすれば、それは、リート様の手によって、カリディアを滅ぼしていただく他にない。だから、その時が来るまで、リート様の身は何としてもお守りしなければならない。キラ様が消滅すれば、呪われた星の標はリート様が継ぐ事になる。そして、遠からず、ラディウス二世が崩御すれば、全てを消し去る闇が、ランドメイアにやって来るだろう。リート様の傷が癒えるまで、キラ様には、何としても生き延びて頂かなくてはならない。だから、この身に代えても、キラ様をお守りするのだ。それが、自分を拾い育ててくれたダーク・ブランカ様への恩返しなのだから・・と。そしてラリサはランドメイアを後に

した。

こんな状況でなければ、自分は魔道師長の位など、とっくに放り出していた事だろう。誰が何と言ったって、それは自分の性に合わないものなのだから。だが、ランディスがそれをしなかったのは、祖父の覚悟を感じた取ったからだ。祖父が、何かをしようとしているのを、感じた取ったからだった。

「三年前、ラリサはここへやって来た。キラの持つ標を消す方法を求めて・・・だが、ひとたび星に刻まれた標は、それを刻んだ者にしか消すことが出来ない。だから、剣の紋章の剣の代価として、消え掛かっているその命を繋ぐために、ラリサは、自分の命を使ったのだ・・・封印の地から、大魔法使いが戻るまでの時を手にする為に・・・」

「そうでしたか・・・」

「わしには、ラリサを止める事ができなかった・・・本当に済まなかった・・・」

リュージュが再び頭を垂れた。

「それが、祖父の望みだったのでしょう。あなたを責める積りはありません・・・」

ランディスは、静かな声で言った。ランドメリアは、祖父の心の拠り所だったのだ。多分、祖父はダーク・ブランカを愛していたのだらうと思う。時には、師として。時には母の様に。そして、一人の女としても、また・・・

だから、彼女が大切にしているものを、守り通すことこそが、彼の人生の全てだったのだらうと思う。キラを、そしてリートを自分の運命に巻き込んでしまった事を、ダーク・ブランカは悔いていた。もしも、ダーク・ブランカが戻った時に、リートの存在が失われていたら、彼女はその後ずっと、苦しみを抱えて行かなければならない。

そんな事が起こらないように・・・その心が悲しみで傷つかないように・・・彼は守りぬいたのだ。

その思いの全てを掛けて・・・

「祖父は、その思いを、全うしたのですから・・・本望だったのでしょう」

二人の魔道師のやり取りを横で聞いていたリートは、不意に、心が深い悲しみに覆われていくのを感じた。腰の剣にそっと触れる。

・・・それでお前を失っては、私の心は救われられないではないか・・・

ダーク・ブランカの悲しみを帯びた声が、聞こえた気がした。

幾百年前の事になるのか・・・

リージュは、遠い記憶を呼び起こすように、ゆっくりと語り始めた。

かつて自分が、封印の地にいたこと。そこで、他の者にはない力を持っていたが為に、異端者として命を奪われ掛けたこと。

「そこでもう、わしの命は尽きたのだと思った。だが、気が付くと、わしはこの世界にいた」

その時に、そこで一人の不思議な女と出会った。出会ったと言っても、夢うつつのうちだったから、現実の者だったのかは分からない。その女は、こう言った。

・・・ここが、本来、お前が生まれ出るはずだった世界だ。お前を元の世界に戻してやろう。だが、他の世界で時を過ごしたお前は、決してこの世界の者と結ばれてはならない。ただ一つ、それだけを誓え。そうすれば、お前は、この地で安らかに生き、そして死んでゆけるだろう・・・

そうして、リージュは、この世界で、自分と同じ力を持つ者たち、シャディアの民に巡り合った。だが、そこで出会ったシャディアの巫女と恋に落ち、やがて結ばれた。女と交わした約束の事は、忘れていた。子供が生まれ、その子供が、強い魔力を持っている事を知り、初めて女の言葉を思い出した。それは、この世界に存在してはいけないものなのだ。直感的にそう思った。

「・・・飛ばし屋の契約だな」

ランディスが呟いた。

「飛ばし屋？」

シリウスが繰り返す。

「フィリスの召喚魔法・・・それと同じ事を生業にしている者が、封印の地にはいるんだ・・・多分、封印の地だけでなく、他の世界にも」

「他の世界って・・・」

「まあ、世界は広かってことだな」

飛ばし屋。その言葉を聞いて、リートの中で別の言葉が浮んだ。空間の魔女。

・・・もしかして、時雨の裏家業って・・・そういう・・・

「・・・恐らく、わしは、その契約を守らなかった・・・という事になるのだろうか」

老人が遠い目をして言った。この世界に魔法をもたらしたことによって、彼はまた居場所を失った。魔法の力を恐れた人々によって、彼らは国を追われた。そして、その力を隠し続け、逃げ続けた。

だが、リージュの子供たちは、成長すると、逃げ続けることを拒み、戦うことを選んだ。そして、自分たちを迫害したものに復讐し、その国を攻め滅ぼした。多くの血が流され、彼らは世界から、恐れ、憎悪される存在となった。

十六年前、インディラはリートの為に、ノアファラオへ赴き、ヴィシスと対面した。自分と兄

の確執から、キラやリートを解放して欲しいと、そう願ったのだ。だが・・

王手の掛かっている勝負で、駒を動かす手を止める馬鹿がどこにいるのか・・と。それが、ヴィシスの答えだった。

その場で、すざまじい闘いになり、インディラは、命からがら、そこから逃げ出すしかなかった。だが、ヴィシスの命を受けたシャルベージャに追われ、瀕死の重傷を負ってしまった。その彼女の前に、飛ばし屋が現れた。その飛ばし屋は、言った。別の世界でなら、生き直す機会を与えてやろうと。

「なぜ、そこに飛ばし屋が？」

リートが疑問を口にする。この様に、人の運命に干渉する飛ばし屋とは、一体、何なのか。「・・分からぬ。ただ、別の世界・・封印の地に転生したインディラが、半年前、ここに朱里という少女の姿で現れた時、もしかしたら、彼らは、ランドメイアという存在を、守ろうとしているのかも知れないと、そんな風を感じたのだが・・」

「時」が来た時、一度だけ、ランドメイアへ戻ることに。

それが、インディラの契約だった。

その話を聞き、魂だけの存在だった朱里に、記憶と引き換えに傀儡の体を与え、インディラという名前を与えたのは、リュージュだった。

多分、それが、彼らの、そしてインディラの願いだと思ったから・・そしてそれが、自分出来る、ささやかな償いだと思ったからだ。

リュージュの長い話が終わった。ランドメイアの消滅を回避する為に、ダーク・ブランカは戻って来た。その契約によれば、戻る事が出来るのは、一度だけだという事になる。それは、つまり・・

リートは考え込んだ。ランドメイアを・・魔法の国を守る為には、ヴィシスとの決着を付けなくてはならない。ダーク・ブランカはそう言った。彼女は、初めから、刺し違えるつもりで、戻って来たのだ。リートをを守る為に。

・・・俺は、あなたの足かせになる為に、生まれてきたんじゃない・・・

リートは、唇を噛む。

・・・誰かの犠牲の上に救われたって・・あなただって、それを分かっているはずでしょう。もうこれ以上、何かを失うのは、ご免ですから・・・

リートは、剣に語りかける様に、それを強く握った。

「リュージュ・・」

ランディスが老人を呼んだ。その声に、リートは我に返る。

「あなたは、その身をこの私に預けると言って下さった。ならば、あなたの力を、この私に貸して頂けないでしょうか？」

「何が望みじゃ？」

「我々を、ノアフアラオの城へ、送って頂きたいのです」

「・・・」

リュージュが絶句した。ヴィシスの元へ行って、戻って来られはしない。

「・・・この私に、また、心に重荷を負えと・・・？」

ランディスが苦笑する。

「それは、我々が、死ぬという前提で、お話をさせているので？」

「・・・」

「私は、自分の寿命は、長いつもりでいるんですがね・・・魔道師殿、全ては星の導きのまま、なのですよ」

「・・・全ては、星の導きのまま・・・そうか、そなたたちは、星の魔法使いインディラの弟子なのだな・・・」

リュージュは、何かを納得した様に頷くと、壁に立て掛けられていた杖をランディスに差し出した。杖の先端には、水晶の珠が埋め込まれている。その珠の中に、一つの星が輝いていた。

「城の場所ならば、この杖が知っておる」

「有難く、頂戴いたします」

「やりはせぬぞ。貸すだけじゃ。必ず返しに来い」

「・・・承知いたしました」

「そなたたちに、星の加護があらんことを」

「ありがとうございます」

ランディスがうやうやしく頭を下げた。

雪混じりの風が吹きすさび、森の木々の間を抜けて、悲鳴の様な音を立てていく。空に広がる灰色の雲は、次第にその厚みを増していく。辺りには、吹雪の気配が迫っていた。

森を進んで行くと、木立が途切れて、広場の様になっている場所に出た。そこに立って空を見上げると、頭上にきれいな円形をした空が見えた。その空から、ちらちらと白い雪が舞い始める。

「この辺でいいか・・・」

ランディスが足を止めた。自然の中には、魔力を増幅してくれる場所がある。魔道師たちは、それを精霊域と呼んでいる。それは、精霊たちが、神と交信する為に作る、穢れのない清浄な場所だと言われている。ランディスは、どうやらそれを探していた様だ。

ランディスがリュージュから借りた杖を、高く掲げると、杖の水晶の中で、星が輝きを増した。そこから、一条の光が天に向かって伸びる、その光は、上空の雲を吹き飛ばし、彼方の星へ向かって伸び、やがて見えなくなった。程なくして、今度は天から光の筋が下りてくる。天から舞い降りたその光は、空中に魔法陣を描いていく。リートもシリウスも、魅入られた様に、頭上の様子を見上げるばかりだ。

「つかまれ」

ランディスが二人に声を掛けた。二人は魔道師の両腕に、手を掛ける。次の瞬間、浮遊感を感じた。そして、彼らは水晶の宮殿に立っていた。

その宮殿は、壁も床も水晶で出来ていた。リートは、そこに自分たちの影が映りこむのを、居心地が悪そうに見ていた。あらゆる方向から、姿が捉えられ、水晶にその影が捕えられていく。自分の全てがそこに映し出され、何もかもが見透かされている様な感じがする。その心の内までも、丸裸にされた様な居心地の悪さを感じていた。

どこからか光が差し込むのか、水晶は時折キラキラと美しく眩しい光を放つ。だが、その場を包み込む空気は、侵入者を拒む様に、冷たく鋭いものだった。

気が付くと、美しい女がそこに立っていた。その面差しが、ダーク・ブランカに似ている気がした。

「・・・あの・・・」

言葉を発したリートを、女の瞳が見据えた。

「・・・カルラの子よ・・・」

女が言った。

「何故、ここへ来たのです。何故・・・インディラを連れて来たのです」

女の瞳に飲み込まれそうな気がする。リートは思わず、腰の剣に手を触れた。

「・・・それが、ダーク・ブランカ様の願いだから・・・だから、俺は・・・」

女が悲しそうな顔をした。

『シータ、戯言はもういい』

男の声が水晶の広間にこだました。

『謝罪など、期待してはおらぬ。そいつは、決着を付けに来たのだろう』

男の声が、様々な方向から聞こえる。殺気ともいうべき気を纏わり付かせて、その声はリートをなぶる様に響く。

『兄として、お前の最後の望みを、叶えてやろう』

・・・兄。この声がヴィシス・・・

『この世に残るお前の痕跡を、ひとつ残らず、きれいに消し去ってやるぞ、我が愛しき妹、インディラ・・・』

シータの隣に、ヴィシスが姿を現した。

反射的に、リートは剣を抜き放った。ヴィシスの鋭い眼が、リートを射抜める。ただ、それだけの事で、剣を構えたリートの体に、強い衝撃が来た。後ろに押されるリートを、シリウスが咄嗟に支えた。その間にも、ヴィシスの魔法の波動が迫る。ランディスが前に出て、リュージュの杖をかざし、魔法で盾を作った。直撃は免れたが、盾は砕かれ、その余波で、三人揃って吹き飛ばされる。ヴィシスの攻撃は、容赦なく、絶え間なく続く。ランディスがすかさず盾を作って防いだが、あのランディスが、魔法の盾を支えることだけしか出来ない。

・・・リート、剣に意識を集中しろ・・・

ダーク・ブランカの声が聞こえた。リートは剣に集中する。その刃が、光を帯びて、白く輝く。ランディスが、力になぎ倒される様にして、横に弾き飛ばされた。リートは立ち上がって剣を構え直し、ヴィシスに対峙した。今まで感じた事のない、押しつぶされそうな大きな力の気配に、心に恐怖が湧き上る。剣を握る手の感覚すら、分からない。怖い。どうしようもないほど怖い。ただ、対峙しているだけで、こんなにも圧倒される。

・・・こんなの、勝てる訳がない・・・

心が悲鳴をあげた。

・・・しっかりしろ、リート！・・・

ダーク・ブランカの声も遠くに聞こえる。

・・・殺される・・・

それが、リートの中で、目の前の敵に対する恐怖から、死という未知のものに対する恐怖に変わった時、その恐怖は、物凄い勢いで、その心を引き裂きに掛かった。あらゆる恐怖の感情が、リートの心を傷つけ縛り上げていく。

・・・怖い・・・逃げなきゃ・・・早く・・・逃げなきゃ・・・殺される・・・

不意に、剣を握る手に、誰かの手が重ねられたのを感じた。耳元で声がする。

「朱里ちゃんと、約束したんだろ？きっと、会いに行くって」

シリウスの声があった。

・・・朱里・・・

その名前は、恐怖で縛り上げられた心を、優しく解きほぐしていく。リートは意識をして、呼

吸を数度繰り返す。背中に、シリウスの気配を感じた。

「こんなところで、終わる訳にはいかないだろうが・・・しっかりしろよっ！」

リートは頷いた。

・・・大丈夫、俺は、一人じゃないから・・・

大きく息を吸う。その瞳がしっかりとヴィシスの姿を捉えた。リートの強い意思を表す様に、剣の輝きが増していく。その様子を見て、ヴィシスが僅かに笑った。何だ？と思う間もなく、衝撃が来た。手に痺れが走る。手の中の剣が、物凄い勢いで、ヴィシスの魔力を吸い取っている。だが、その魔力は途切れる気配もない。

・・・こいつは、底なしか？・・・

手の中で、ピシッと、嫌な音がした。あれよ、という間に、剣にひびが走った。

「・・・え」

その事に動揺して、集中力が途切れた途端に、リートとシリウスは弾き飛ばされて、共に床に叩き付けられた。ヴィシスの耳障りな高笑いが、水晶にこだまする。

「これが、お前と私の、力の差、なのだ。インディラ」

長い放浪の末、絶望の果てに、自分たちは、どこにも逃げなくてもいい場所を手に入れた。苦しい戦いを勝ち抜いて、ようやく手に入れたのだ。グラスファラオンという国を。

「お前は、誰からも害される事の無い、その安住の地で、王族として生まれ、守られながら大事に育てられた。それが、そのまま、お前の弱さなのだよ。それが、お前と私の、力の差なのだ」

ヴィシスがあざ笑う様に言う。

「お前は、本当の絶望がどんなものか知らない。だから、お前は私には勝てない。それに、すでに、実体を失った身ではな。話にもならぬ」

獲物を捕らえた狩人の非情な視線が、リートを捉える。リートは、よろめきながら立ち上がり、辛うじて剣を構える。ヴィシスの圧倒的な力が、再びリートに押し掛かってくる。構えた剣が吸い取る魔力は、もはやほんの僅かでしかない。その力に、リートの体が押される。リートは、思わず目を閉じる。その圧迫感が、ふと緩んだ。

目を開けると、目の前にダーク・ブランカの姿があった。両手を広げ、リートを守るように立ちはだかるその姿が、次第に消えていく。

「・・・ダーク・ブランカ・・・さま・・・」

その有様に、ヴィシスの高笑いが響く。剣に大きな亀裂が走った。光が砕ける様に弾ける。その刹那、ダーク・ブランカの姿が消し飛んだ。そして、乾いた音と共に、剣は粉々に砕け落ちた。ヴィシスの魔力が、一気にリートの身に襲い掛かる。その衝撃に、リートは弾き飛ばされ、壁に叩き付けられて、気を失った。

意識を失ったリートの胸で、ペンダントが緑の光を放った。リートを守る様に、その緑の光が彼の体を包み込む。ヴィシスが、リートを守ろうとするその存在を、面白そうに見やる。ヴィシスは她的手から、細い矢の様なものを取り出すと、その小さな標的に目掛けて、投げる。僅かな風を伴って、その矢は、リエットの胸の上のペンダントに突き刺さり、いとも容易く、これを砕いた。楽しくて堪らないという風に、ヴィシスの口から笑いが漏れる。

シータは、その玉石の砕け散る音を聞いた。小さな悲鳴の様な音。それは、誰かの思いが砕かれた音だ。そう思った。そこに小さな空気の渦が巻き起こり、砕けた欠片を巻き込んで、空へ運び上げて行く。

・・・風が・・・思いを拾い集めていく・・・

キラキラと緑の光が、空へ上って行く。カルラの属性は風だった。心を癒す風を使う魔法使いだ。ふと思った。シータは、そこに、カルラの思いを感じ取った。本当に、このまま全てを消し去ってしまってもいいのか。そう、問われた気がした。シャルベージャを失った時の苦しみが、シータの脳裏を過ぎる。

ヴィシスは、父、リュージュから、大いなる魔法の力を与えられた。その強大な力を、ヴィシスは妹であるシータと分かち合った。ただ一人で背負うには、その力はあまりにも大きすぎるものだったからだ。

水の属性を持つ彼女は、治癒と再生の魔法を引き受けた。そして、兄弟が増える度に、ヴィシスはその力を分け与えた。そのことによって、彼は、自身の負う重荷を軽くすることが出来たのだ。火の属性を持っていたシャルベージャには、消滅と破壊の魔法を。風の属性であったカルラは、さほどの魔力を持たなかったが、風を操る力と癒しの力を与えた。

だが、自分と同じ星の属性を持ち、その能力も高かったインディラの存在は、ヴィシスの負担を大きく軽減すると同時に、その強い魔力ゆえに、疎ましいものともなっていた。

カルラの力を継いだ子であるリートを・・・そしてインディラの存在を消すということは、ヴィシスが再び大きな負担を抱え込むという事だ。そんな苦しみをヴィシスに与えたくはない。シャルベージャを失った時の錯乱を見れば分かる。長い時を生きてきて、自分たちは、以前よりも確実に衰えたのだ。もう、かつての様に、大きな力をその身に宿すことは出来ない。ヴィシスの体は、そして心は、もう、その重みには耐えられない・・・

シータは、リートに止めを刺そうとしているヴィシスを、背後から抱き止めた。

「・・・シータ、何をするのだ。離せ」

「もう・・・あなたが傷つき苦しむのを見るのは嫌です」

「何を言っている。これで全てが終わるのだぞ。この私の心を悩ませるものは全て・・・この世界から消えて無くなるのだぞ」

「あなたは、何も、分かっていない。自分がこんなに傷だらけになっているのに。ここで彼らを

消しても、あなたに残るのは、苦しみだけ。どうか、もう拳をお収め下さい」

「ふざけるな。これは我らの存在を、この世界に認めさせる為の戦いなのだぞ。その為に、我々は、血塗られた道を歩いて来たのだろう」

「そうね。でも、もう、全てを終わりにしましょう・・・私たちは、少し長く生きすぎたのかもしれない・・・インディラ・・・剣を再生しなさい」

シータがそう言うと、空中に現れた水の珠が、気を失っているリートと、刃を失った剣を包み込みんだ。その水の中に、小さな星の光が現れた。その光は、長く伸びて、剣の刃に変化していく。そしてその光の中で、リートが目を開けた。

「さあ、リート」

シータが、促す様にリートを呼んだ。リートが立ち上がった。

「離せ、シータっ！」

ヴィシスが、その束縛から逃れようと身をよじる。だが、シータは、ヴィシスの背に、しっかりとしがみついたまま、離れない。リートが剣を構えた。そしてその剣を、ヴィシスに向ける。すべての魔法を吸い込む剣。その姿をヴィシスが驚愕の眼で見据える。

「・・・止めろ、リート！」

ヴィシスの叫び声が、光の中に飲み込まれた。

・・・ダイジョウブダヨ ヴィシス ワタシガ イッシヨニイルカラ モウ コワクナイヨ・・・

幼い日、初めて言葉を発した妹は、彼にそう言った。

・・・言われなくても分かっているさ。僕たちは、生まれたときから、いつも一緒だったからね・・・

光は大きく膨らむと、全てを飲み込んで、消えた。

そこにはもう、リュージュの子供たちの姿はなかった。

その場から、魔法使いの気配が完全に消えた。その場は静寂に包まれた。

「・・・終わった・・・のか」

シリウスが、そこに立ち尽くしているリートに、確認するように言う。

「・・・どう・・・だろう・・・」

リートが手にしている剣を、見ながら呟く。リートの手の中の剣の光は、とどまるどころか、その強さを不気味に増していく。そして・・・

大きな地響きを伴って、水晶の宮殿が崩れ始めた。

「・・・何か、今、すごい嫌な考えが浮んじゃったんだけど・・・」

シリウスが早口で言う。

「魔法使いの城とかっていうのは、魔法の力で作られていたりするのか？」

「中々、勘がいい。ここは、ランドメイアの双子の塔と同じ存在だ。今、我々が居るのは、魔法使いが、魔法で作った空間の中だ」

「その魔法の空間で、魔力を吸い尽くしたら、どういう事になる？」

「全て、無に帰す」

ランディスの台詞に、シリウスの顔から血の気が引く。

「・・・リートっ！早くその剣を何とかしろっ！」

「そんな事言われても、そもそも最初から制御できるものなら、暴走なんかしないからっ！」

そう答えたリートの足元で、徐に床が崩れた。三人は瓦礫と共に下へ下へと落下していく。

「どこまで落ちるんだ～っ！」

これだけ落ちるって事は、相当な高度からの落下ということだ。地面に激突したら、怪我どころじゃ済まない。

「何とかしろよ、魔道師～っ！」

シリウスが叫ぶ。

「この状況で魔法を使ったって、剣に魔力を吸い取られるだけだろう」

ランディスが、妙に冷静に受け答える。そうこうするうちに、その場のありとあらゆるものが、剣に吸い込まれていく。やがてその空間の中に、彼らだけが取り残されて、剣の光が収束した。何もない無の空間。時間すらも流れていない場所。その空間の中を、三人はただ落ちていく。

・・・光が収まった？・・・助かるのか俺たち・・・

シリウスがふと見ると、リートの姿が薄くなっていた。

「リート！」

呼ばれて、はっとした様に、リートがシリウスを見た。リートの眼には、シリウスの姿が消え掛かって見える。リートはシリウスに向かって、精一杯、手を伸ばす。その手を捕まえようと、シリウスもまた、精一杯に手を伸ばした。

「シリウス！」

だが、シリウスの元に届いたのは、その声だけだった。シリウスの手は、ただ虚空を掴んだだけだった。リートの姿は、もうどこにも無かった。

「リートっ！」

そう叫んだ自分の声を最後に、シリウスの意識は、そこで途切れた。

蒼穹を、鳥が翼を広げ滑空している。何度もきれいな円を描く様にしながら、次第に天の高みに上っていく。上手いもんだな・・・と思いながら、シリウスは、ぼんやりとその優雅な滑空を眺めていた。

ちょうど太陽を遮っていた小さな雲が流れて、眩しい陽光が、シリウスの顔に差しかかった。思わず手を動かして、日差しを遮った。手を動かしたはずみに、音を立てて、石の塊がいくつか、転がり落ちて行った。その音に、ふと我に返る。

・・・俺は、ここで、何をしているんだっけ？・・・

空が見えるってことは、地面に横たわっているってことだ。そのままの姿勢で頭を巡らし、辺りの様子を伺う。何もない荒地に、一面、何かが崩れ落ちた様な瓦礫の山だけがあった。

その山の上に、自分は横たわっている。恐る恐る、身を起こした。頭の奥に、鈍い痛みが残っている。体のあちこちにも、少なからず痛みを感じる。用心深く手足を動かしてみる。取り合えず、動かすのに支障はない様だ。

少し離れた場所に、黒衣の魔道師が佇んでいた。シリウスの視線に気づいた様に、彼が振り向いてこちらを見た。

「・・・ランディス・・・」

その名を呟いて初めて、自分たちが、長い長い戦いの結末を見届けたのだという事に気がついた。

「・・・傷、痛むか？・・・治癒魔法は専門外だから、完治とはいかないが、とりあえず、動ける様にはしておいた積りなんだが・・・」

「・・・ああ。体の方は問題ない・・・」

風が頬を掠めて、静かに吹き抜けて言った。

「リート・・・は・・・？」

「あれだけの魔力の代価だ。安くはないだろう・・・」

ランディスが抑揚のない声で言った。

「そうか・・・飛ばされたのか・・・」

分かってはいた。だが、認めたくはなかった。シリウスは視線を逸らし、俯いた。

あの剣を使うその結果を、知っていたのに・・・自分は、何も出来なかった。唇をかみ締める。自分の無力が悔しかった。

・・・あいつは、いつもこんな思いを、ずっと抱えていたのか・・・

大切なものを失うことの喪失感が、こんなに苦しいなんて・・・これまでにリートが失ってきたものの大きさを、そして、その心の傷の深さを改めて思い、シリウスは、深くため息をついた。

「・・・ノアファラオの者たちは、チョウメイシュなんだですよ」

何の脈絡もなく、ランディスがそう言った。

・・・チョウメイシュ・・・??・・・

その聞きなれない言葉を、シリウスは頭の中の辞書に探す。ショウメイシュって・・・長命種・・・？それって・・・

「長生きってことか？」

「ええ。平均で三百歳ぐらいは生きるんだそうです」

「三百・・・そんなに生きてたら、やることなくなっちゃいそうだな・・・」

「リート様も、半分はその血統なのですから、きっと長生きだろうと思います」

「長生き・・・そうか、それだけ生きられるんなら、代価を払っても、お釣りが来るかも知れない・・・か？」

「かも知れませんね」

ランディスが笑った。そうか、死んだと決まった訳じゃないんだ。

「今度は、どこまで飛ばされたのかなあ・・・あいつ」

「さあ・・・でも、いつかまた、ひょっこり戻って来る様な気がしますよ」

そう答えたランディスの顔を、シリウスは胡散臭そうに見る。

「そんな都合のいい話があるかよ・・・」

「この世界には、あなたがまだ知らない事が、沢山あるのですよ」

自分だけは、何でもお見通しって感じだ。やはり、こいつはいけ好かない。

「・・・これだから、魔道師って奴は・・・」

「シリウス」

「あ？」

「私の弟子になりませんか？」

「・・・はあ？何だよ唐突に。この俺に魔道師になれって？冗談だろ・・・」

「向いてますよ、きっと。思い込みの激しいのは、魔道師には不可欠な才なのですから」

「止めてくれよ。俺は、魔道師嫌いの海竜族だぜ」

「・・・私だって、海竜族ですよ」

「え・・・？」

そう言われて見れば、彼もまた、自分と同じ黒髪と、海竜族独特のアイスブルーの瞳の持ち主だった。

「剣の腕も立って、魔道も使いこなす・・・カッコいいと思いませんか？」

「いくら人手不足って言ったって、そんな勧誘の仕方があるかよ」

シリウスが苦笑する。こいつ、もしかしたら、案外不器用なのかも知れない。

「それに、もしあなたが、双子の塔の魔道師長になれるほどの魔法使いになれば、あなたがリートを迎えに行く事だって、出来るかもしれませんよ」

・・・リートを迎えに行く・・・この俺が・・・いつか・・・

「・・・だから、そんな都合のいい話、あるかよ」

もし、そんな可能性があるのなら・・・

大切な友の声を、もう一度聞けるのなら・・・

魔道師の甘言に乗ってみるのも、悪くはない、か。ふと、そんな事を思った。

終章 時の果ての旅人

荒涼とした大地が広がっていた。

木一つ無い。見渡す限り、ただ白い砂が彼方まで続いている。

そこに影を落とすものは、リートの他に何もなかった。

見上げた空の青は、残酷なまでの静寂と共にあった。

時の果てとは、こういうものか。そんな事を思う。

ヴィシスの魔力を奪い取った代わりに、未来へ飛ばされたのだとすれば、自分はどのぐらい先の時間に飛ばされたのか・・・その魔力はどれほどのものだったのか。

何もかもが、砂に帰ってしまうほどの時間の重み・・・想像すら付かなかった。

リートは自分の手のひらを見る。次に、それを裏に返して、手の甲を確かめた。皺一つない、若者の手だ。飛び越えた時間の分だけ年を取る、という話だったが、特に体に変化はない様だった。飛んだ時間の分、本当に年を取ったのだとすれば、そもそも自分はもう、この世の人間ではないと思う。

この場所が、かつて自分がいた時間から続いているのかさえ分からない。どこかへ向かって歩き出そうという意思すら、もう起こらない。わずかな生命の営みの気配さえ残っていないこの世界で、孤独と絶望に捕らえられ、リートは行くべき道を見失った。

ただ呆然と、そこに佇んでいたリートは、腰に下げた剣が、不意に光を帯びたのに気がついた。剣の紋章の剣は、まだそこに・・・彼と共にあった。剣を抜いてみる。すると剣は、太陽の光を反射して、強い輝きを発した。

「・・・ダーク・ブランカさま・・・？」

すがる様にその名を呼んでみたが、そこから返事は返って来なかった。自分の声が、頼りなげに四散して、砂に吸い込まれていく。孤独感が、止めようもなく心を覆い尽くしていく。

・・・たった一人なんだ・・・こんな場所に・・・

寒気を感じた。照りつける砂漠の太陽はこんなに容赦ない日差しを浴びせているのに、寒さを感じる。何だか気分が悪い。そう思ったら、もう、なし崩し的に、体の力が抜けていく。無意識に膝を突き、砂に刺した剣で辛うじて体を支える。

・・・死ぬのか・・・こんな所で・・・たった一人で・・・

霞む視界の中、剣がまた光を発した。その光に呼び戻される様に、リートは失いかけた意識を繋ぎ止めた。すがる様な気持ちで、剣を見る。と、剣の中に人の影の様なものが見えた気がした。思わず目を凝らす。

・・・何だこれは・・・

剣を凝視していたリートの目の前に、突然、人の影が現れた。

「え・・・？」

リートが驚いて振り返ると、そこに愛想のいい顔をした青年が立っていた。

「・・・どこから・・・」

今まで何もなかったはずの景色の中に、人が立っている。こんな視界のいい場所で、近づいてくる気配すらも感じさせずに、唐突に彼はそこに現れたのだ。

・・・幽霊じゃ・・・ないよな。影があるんだし・・・

この際、幽霊でも構わない。圧倒的な孤独感の前に打ちのめされていたリートにとっては、例えそれが魔物であっても、歓迎すべき相手だった。

「成る程、これですか。レトロな航時機ってのは・・・」

リートの存在を気にする風もなく、青年は四つん這いになって、砂に刺さったままの剣を、色々な角度から眺めまわして、独り言を言う。

「これが芸術品・・・なんですかねえ。コレクターさんの価値観は分からないなあ」

「あの・・・」

「でも、これを回収して売り払えば、出張費出したって、お釣りが来るんだよな・・・くそ〜薫の奴。宇宙船出したって、余裕で黒字なんじゃないか。タダ働きさせやがって〜」

「あのっ！」

「あん？」

「あんた、誰？」

「ああ。俺は、神島真之介。時間管理局の会長さんのお友達。ちょっと手違いで、奴に借りをつくっちゃってね。それを返す為に、君を追いかけて来た」

「追いかけて来た？俺を？どうして？」

「君と契約を結んでこいってさ」

「契約？・・・それって、飛ばし屋の契約？」

「いや。飛ばし屋じゃなくて、時間管理局の方」

「時間管理局と契約って、どういう・・・」

”君を、君の望む場所に連れて行く代わりに、君は、君の持っている能力をこちらに渡す”

「・・・そういう契約だ」

「俺の持っている能力って・・・？」

「人類の永遠の夢。未だその神秘の謎は解明されずってね」

「何ですそれ・・・？」

「不老不死・・・という能力」

「俺が？不老不死？そんな馬鹿な・・・」

思わず失笑したリートは、しかし、真之介の次の言葉に言葉を失った。

「君は、ここに来て、もう、四、五回は死んでるんだぞ。まあ、自覚はないのかもしれないが・
・この大気には、有毒なガスが含まれていてね。到底、人間がいられる様な場所じゃないんだ
」

「・・だって、あなたは」

「俺は、こう・・周りにバリアみたいな張ってんの」

真之介が両手を大きく振り回して言う。

「そういう能力を持ってるからさ」

「・・年を取らないって・・俺はここまで大きくなってんだぞ。そんなの可笑しいじゃないか」

「君は、相馬龍樹（そうまたつき）の子孫なんだろう？」

「相馬龍樹？」

「ああ、こっちじゃ、リュージュ・ソウマ？彼の血統の人間は、ある程度の年齢になった時に、
自分の年齢を自由に変える力を使える様になる。つまり、子供にも老人にも変幻自在。それを、
時間管理局の奴らは不老不死だとみなしている」

そもそも地球にいたリュージュの、その潜在能力に目を付けて、この星に連れてきたのは、銀
河系空間管理局の人間だった。それは、特殊な能力を持つが故に、迫害されている人間を保護す
るという名目だったが、彼がこの星に送られた本当の理由は、データ解析の結果、彼の力が、
この星の光族と掛け合わされることで、増幅されると分かったからだ。

「・・それはつまり」

「まあ、ぶっちゃけて言えば、人体実験？」

真之介の言葉に、リートが眉をひそめる。

「リュージュの元々の能力は、人より年を取るスピードが遅い事と、簡単な予知能力。だが、光
族と交わって生まれた子供たちは、その力が増幅されて、かなり強い超能力を持った様だな。
リュージュ自身も、この環境に馴染んでいくうちに、更に眠っていた能力の開花もあったりと。
まあ、奴らが思っていた以上の成果があったらしい」

「・・じゃあ、リュージュが契約を破ったって話は・・」

「ほら、一応、建前はさ、立てとかないとならないだろ？奴らにも、違法だっていう認識はあっ
たんだろうし。後で問題になった時の、逃げ道にさ。だって普通、年頃の若い男がさ、若い女と
出会ってさ、どうにかなっちゃう確率の方が、高いんじゃないの？」

「・・全て計算づく・・なのか・・」

何だか、吐き気がした。そこまでして、彼らはその力が欲しかったのか。人の運命を狂わせ
ても、自ら戒めた法を犯してまでも、手を出さずにいられなかったのか。この力・・不老不死と
いう力に。

「・・それで、今度はあんた達が、俺と契約したいって？」

そして今度は、時間管理局と銀河系空間管理局の間で、この力を奪い合ってるのか。

「・・それって、俺をこんな時の果てまで追い詰めて、あんた達がそうする様に仕組んだってこ
とだよな」

「仕組んだ？」

真之介が苦笑した。

「あいつらに、そこまでの甲斐性があれば、空間管理局に横取りされる前に、地球圏にいたリージュをちゃんと初めに保護してたんだろけどな。今回は、山の上から、雪玉転がしたら、雪崩になっちゃったって感じだったぜ」

時間管理局が、リージュの保護をし損ねたという事は、些細なことだったが、そのせいで、この星では膨大な命が失われた。神の力を手に入れようとして、神の真似事をしたツケは、想像を絶するほど大きかったのだ。

この事柄に関して、空間管理局では、上の方の人間が総入れ替えになったというから、彼らも少しは懲りたのだろう。多分、そのごたごたのお陰で、時間管理局は、こうして、彼らよりも先にリートに接触することができたのだ。

「あんたさあ、何か他人事みたいに言ってるけど、あんたもその甲斐性なしの、お仲間なんじゃないの？」

「仲間？ご冗談を。初めに言っただろ？俺は、ただ単に会長のダチだってだけで。時間管理局とは無関係」

「だったら、どうして・・・」

「俺が界渡りだからさ」

「界渡り？」

「簡単に言えば、君を君の望む場所に連れていける能力ってところかな。時間管理局の会長がさ、時織薫って奴なんだけど、ほんとケチな奴でさ。地球からこの星まで宇宙船出すと、時間もお金も掛かるから、お前、ちょっと行って来てってさ。友達だと思って、うかつに借りなんか作るもんじゃないよな。全く」

「・・・もし、俺が、力を渡さないって言ったら？」

リートがそう言うと、真之助は真面目な顔をしてリートを見据える。

「君は、そんな力を持っていて、幸せなのか？」

「・・・」

「力を持つって事は、重い事だぞ」

「・・・あなたも・・・？」

「まあ、俺は、ちょっと普通の人間とは、違うからな」

「・・・ちょっと？」

「そこを、突っ込まれるとなあ・・・君に比べれば、ちょっとってところだろう。それでも、時々、こんな風に便利に使われて、癪な事は多い」

真之介が自嘲めいた笑みを見せる。

「薫は、ケチな奴だけど、筋の通らない事はしない。君の力も、使わずに封印するはずだよ。俺が保証する。それとも、君、このまま力を持ち続けて、宇宙の果てまで追っかけられる方が、いいか？銀河系空間管理局は、甘くないぞ」

真之介の言葉に、リートは考え込む。彼が最初から、自分を利用するつもりでここに来たの

なら、こんな暴露話はしないだろう。だが、彼を信用してもいいのか。リートには判断がつかない・・・

・・・お前は、どうしたい？お前がどうしたいのか、言えよ・・・

懐かしい声が、聞こえた気がした。

「・・・シリウス」

俺は、自分のしたいようにしていいのか？

全ての重荷を捨てて、自由になってもいいのか・・・？

様々な思いが絡みもつれ合っていく。

本当の願いを叫ぶ自分がある。

それを望んではいけないという自分がある。

思考は果てしなく混迷していく。

「君の望みを聞こう」

そんなリートの迷いを断ち切る様に、真之介のはっきりとした声が、そう言った。

「・・・！！」

考えるよりも先に、口を突いて、言葉が飛び出していた。涙が頬を伝い落ちる。言葉にして、初めて自覚した。それが、自分の願いだったのだと。

「いいだろう。契約成立だ」

視界が暗転した。体が浮き上がった感覚があった。

・・・君は、十分に頑張った。だからもう、君は、自分を許してやっていい・・・

最後に真之介の声がそう言った。心を縛り付けていたものから、解き放たれた気がした。

・・・モウ・・・イインダ・・・

その傷は消えることはないけれど、その痛みを忘れることはないけれど・・・それでも・・・俺は生きていける。この世界にあるのは、絶望だけではないと、知っているから・・・みんなに教えてもらったから・・・

ほんの一瞬だった。

気が付いたときには、自分のベットで目を覚ましていた。泣いている自分に、驚いて慌てて涙を拭う。長い夢から覚めた様な気分だった。カーテンの隙間から、陽の光が差し込んで来る。朝だった。いつもしていた様に、起き上がって、まず窓を開けて深呼吸する。心地のいい甘い花の香りがした。庭のエニシダの花が、朝日に照らし出されて、金色に輝いていた。

街の雑踏をひとしきり歩き回ってきた。それでようやく納得した。ここに戻って来てからの違和感を。はっきりと自覚した。

・・・ここは、やっぱり、俺の場所じゃない・・・

金髪の少年は、肩に乗せている袋を担ぎ直すと、踵を返して、目的の場所に向かって歩き出した。

電車を乗り継いで、駅を下りて、閑静な住宅街を脇目も振らずに歩いていく。歩くうちに、気持ち之急いで、その足は次第に速くなり、仕舞いには掛け出していた。目的の家に付いて、呼び鈴を鳴らした時には、もう息が切れていた。その女主人が、玄関から顔を出した途端に、彼は叫んでいた。

「・・・頼むから・・・俺を・・・ランドメイアに・・・送り返して・・・くれよ」

突然の訪問者・・・レオンハルト・ハスヴェルに、時織時雨は、呆れた顔をしていた。

「全く、どこを全力疾走してきたんだか」

「時雨さんっ！」

「・・・ええと・・・送り返すのは、構わないけど。ここ、近いうちに撤収するから、今度は、もう戻って来れないわよ？」

「俺、こっちじゃ、親も知り合いもないしさ・・・何ていうか、あっちの方が馴染むっていうかさ。仲間もいるし・・・」

「・・・彼女もいるし？」

時雨の突っ込みに、レオンが少したじろぐ。

「あら、ビンゴ？若いって、いいわね～」

「とにかく、帰りたいんだ！」

帰るというレオンの言葉に、時雨は微笑する。彼にとっては、むこうの世界が自分のいるべき場所・・・「家」なのだ。

「いいわ。そこまで言うなら、送ってあげる」

「・・・あ、でも、代価とかそういうの、俺、何も持ってないんだけど・・・」

「構わないわよ。和也を助けてくれたお礼と、それから、向こうについたら、ちょっと後始末の手伝いをしてくれれば・・・」

「後始末・・・？」

「あなたをアランシア、という所に飛ばすから。そこであなたを出迎える人の、お手伝いをしてあげて頂戴」

「・・・アランシアかあ・・・ランドメイアからは、ちょっと遠いけど、ま、いっか」

リートによろしく言っというて、と、それだけ言い残して、レオンは向こうの世界に戻って行った。またいつでも会える。そんな調子で・・・時雨は思わず口元を綻ばせる。

世界なんて、案外単純なものなのだ。難しく考えれば、難しく考えただけ、複雑になっていく。レオンのように、何事も単純に考える人間には、難しい事など何もないのだ。

光の柱に来客がある。そう連絡が来たのは、何年ぶりだろう。アランシアのアステリオン王は、そんな事を思いながら、神殿に続く長い回廊を歩いていく。異世界から、時折、人が飛ばされてくる。彼は、そういう人々を、この場所で受け入れる役割を担っていた。

光の柱で彼を待っていたのは、金髪の少年だった。

「お前、名は？」

「俺は、レオンハルト・ハズヴェルっ！仕事って、何だよ？早く言ってくれ。早いとこ片付けて、ランドメイアに帰りたいんだからっ」

アステリオンの顔を見るなり、相手が自分と同じ年の頃の少年だと見ると、レオンは一気にまくし立てた。

「ランドメイア？」

アステリオンが怪訝そうな顔を見ると、レオンが袋の中からひと振りの剣を取り出して、彼に見せた。

「俺は、太陽の四騎士の一人、風の騎士レオンだ」

「・・・お前、カリディアの皇帝騎士団など、もう存在しないのだと、知らずに戻って来たのか？」

「え・・・？」

「カリディア帝国はすでに滅んでいる。カリディアの皇帝も、それを守る皇帝騎士団も、もういない」

「・・・だって、ランドメイアは・・・」

「成る程、仕事か。そういう事か・・・付いて来い、レオン」

アステリオンは何か思いついた様に呟くと、レオンに背を向けて歩いていく。レオンは慌てて袋を抱えると、アステリオンを追いかけた。

アステリオンはレオンを従えたまま、どンドンと歩いていく。長い回廊を抜けて、広い建物を抜けて、広大な庭園を抜けて、堅固な城門を抜けて・・・

城門を抜けた時に、レオンは散々歩かされて、今自分が出てきた場所を振り返る。そこは、壮麗な宮殿だった。更に、自分の前を歩くこの少年を見て、行き過ぎる人々が皆、例外なく畏まって平伏するのを目にして、ようやく思い当たる。

「もしかして、お前、アランシアの少年王・・・？」

「お？名前言ってなかったっけ・・・そうだよ、俺がここの王様。アステリオン・ラスターク・アディラ・アルソーマ・デ・アランシス」

「・・・何だよ、その名前～長くて覚えらんない」

レオンの言い様に、アステリオンが苦笑する。

「アステリオンで構わないよ」

「実在の人間だとは思わなかった・・・じゃあ、お前っ、思いっ切り、年、誤魔化してるだろ？」

「どうだったかな・・・？」

アステリオンが惚けた顔をする。

「お前ほんとは、すっごい、おじいなんだろ？」

「おじい・・・その言い方は、傷つくなあ・・・」

言いながら、アステリオンは思わず吹き出した。

一国の王を前にして・・・しかも自分は、「伝説」とまで言われるぐらいの有名人だということに・・・なのに、この口の利き方はどうだ？この少年の思考回路は、かなり単純明快に出来ている。だからこそ、その「願い」は純粋で強い思いなのだろう。

「・・・上等だ」

これで、自分の抱えている厄介事が一つ片付く。

二人は丘を下り、港にやってきた。そこには、海竜族の大きな商船が係留されていた。その船の上から、思いがけずレオンの名を呼んだ者がいた。

「おい、シリウスか？」

レオンが嬉しそうに大きく手を振る。

「何で、お前、こんなところにいるんだよ？」

「何でって、これ、俺んちの船だし・・・そんなことより、お前こそ、封印の地に戻ったんじゃないのか？」

「こっちの方がいいから、送り返してもらったんだ」

レオンがそう言うと、シリウスが怪訝そうな顔をする。

「送り返してもらった・・・？」

シリウスが何かを問う様に、アステリオンに視線を向ける。

「彼は、お前たちをランドメイアへ連れて行くという役目を託されて、ここに送られてきたんだ」

アステリオンがそう言った。

「それが、俺の仕事？」

レオンが問う。

「そう。我々には、カリディア消滅の余波で、分解したランドメイアへ行く術がなかった。海竜族の羅針盤もその魔力を失って、そもそも海図にないランドメイアの場所が、分からなくなってしまったんだ。魔道師ランディスが言うには、そこに戻りたいという純粋で強い思いの持ち主ならば、海竜族の羅針盤を動かす事が出来るかも知れないと。だが、ここにいる全員、試みても出来なかった」

「俺なら、出来るって？」

「だから、お前は、ここに送り返されてきたのだろう」

それを聞いて、レオンが満面の笑みを浮かべる。

「そういうことなら・・・おい、お前らっ！さっさと支度しろ！出港準備だ！」

甲板に向かってレオンが叫んだ。一瞬の間。船の上から、大歓声が上がった。そして人々が慌しく動き始める。

「さあ、帰るぞお！ミリアリアが待ってる～♪」

そう言って、レオンは意気揚々と船に乗り込んで来る。

・・・成る程。ミリアリア・マリオン・・・幸運の女神様か・・・

シリウスは腑に落ちた、という風に笑う。

三年前の事件の時に、シルフィウスの配下だったレオンを翻意させ、太陽の四騎士の味方に引き入れた伝説の少女。それが、ミリアリア・マリオンだ。シルフィウスに囚われた兄、ラスフィールを救いたいという一心の彼女の行動は、結果、反乱の収束に繋がったのだという。そして、それ以来、レオンは彼女と良い仲なんだとか・・・そんな噂話を聞いたことがある。

「良い旅を」

アステリオンが声を掛けると、振り返ってレオンは親指立て、白い歯を見せて笑った。

木々の緑。花壇に咲き誇る花々。庭の噴水。自分がいなかった三年という月日の後でも、その手入れの行き届いた景色は、何も変わっていなかった。それなのに、時折、以前とは何となく違って見えるのは、何故だろう。吹き上げた噴水の水しぶきが、陽の光を孕んでキラキラと輝く。その輝きの中に、いつも不意に現れる幻影。

・・・ほら、ご覧、モニカ・・・お日さまの光って、こんなに暖かかったんだな・・・

景色が滲んだ。涙が溢れだしてくるのを、モニカはただそのまま受け入れた。

シルフィウスは、モニカたちの正当性を示す為に、彼女の目の前で、闇の魔道書を解放してみせたのだ。お前たちは、何も間違ったことはしていない。だから、胸を張っていていいのだと。きっとその命を賭して、教えてくれたのだと。リフィはそう言った。それが真実かどうかは分からない。だが、その理不尽な死の理由に、モニカはそれで折り合いを付けた。生きろと。真っ直ぐに前だけを見て生きろと。そう言われた気がした。

それが、シルフィウスの言葉なのか、リフィの言葉なのか、良く分からない。ただ、裏切られたと思い、傷ついていた心が、それで少し癒された気がした。

横から、四角く折られたハンカチが差し出された。それが誰なのかは、顔を見なくても分かる。だって、いつだって、心が折れそうになる時には、彼はこんな風に、側にいてくれるから。モニカは受け取ったハンカチで、涙を拭った。

「ごめんね、いつまでも、こんなんで・・・」

「いいさ。いつまでだって、泣きたいだけ泣けばいいよ。お嬢には、その権利がある。それだけ、哀しい想いをしたんだからな・・・」

リフィの優しい声があった。

「・・・ありがとう。・・・まだ、時間はかかるけど、きっと、立ち直るから・・・」

・・・だって、あたしは、一人じゃないから・・・

「急がなくていいぞ。お嬢の面倒を見るっていう、名目があれば、俺はずっとここにいられる。何たって、豪華な三食、昼寝にデザート付きだからな」

それを聞いて、モニカは思わず笑った。

「・・・よしよし。ようやく笑顔が出てきたな」

リフィが満面の笑みを見せる。その開けっぴろげな笑顔につられて、モニカもまた笑う。

「そんなの、無かったって、ずっとうちにいて構わないのよ」

この笑顔は、心臓に悪い。条件反射の様に、鼓動が倍速になる。おまけに、顔まで熱くなる。始末負えない。

・・・全く、子供じゃないんだからよお・・・

少年の様に赤面した顔を気づかれない様に、何となく空を仰ぐリフィである。

ラフィッツの月の西。イーストオブサンドエンド。

「一の月が、斜行でしょ？え・・・二と四の月が、五時間後から、合ですって・・・？何よこれ、計算式、間違ってるんじゃないの？ねえ、ラシャ！」

「お前の使ってる、係数表が違うんだよ、ボケ」

「・・・何ですって？・・・あ、ほんとだ・・・にしても～もう少し、言い様ってあるでしょうに」

「計算終わったら、管制塔に定時報告入れとけよ」

部屋を出て行こうとするラシャの袖を、カヤが掴む。

「ちょっと、手伝ってくれないの？」

「俺の仕事は終わったんだ」

「も～意地悪」

こっちに帰ってきてからのラシャは、本当にそっけない。向こうにいた時、はぐれてしまったカヤを、ラシャが任務を放り出してまで、帝国じゅう探し回ってくれていたのだと、ランディスに聞いたのは、ランドメリアが崩壊する直前の事だった。

島が分解した時、リートは魔法に関わる全ての消去を行っていたのだ。ランドメリアを魔法の島から、ただの島にする為に。だから多分、自分たち、異世界から召喚されて来ていた者たち・魔法に関わっていた者たちは、皆、元の場所に送り返されたのだろうと思う。

まあ、無事に帰って来られたのだから、その方法については、今更何も言う事はない。そんなことよりも、今のカヤにはもっと重大な問題がある。

カヤが「そのこと」を知ったことを知って以来、ラシャは、本当にそっけないのだ。おまけに、一緒に神隠しに遭って、一緒に戻って来た彼らを、周囲はいつも、ワンセットで扱う。それが、彼的には、煩わしいのだろうと思う。

・・・それでも・・・何となく分かっちゃうのよね。巫女なんかやってたせいかしらね・・・

すぐ側にいる。手を伸ばせば届く所に。彼の心は。

・・・でもね、今は無理やり引き寄せたりはしない・・・

彼は、きっと迎えに来てくれるのだから。待つのは、別になんでもない。それが、恋の醍醐味ってやつだ。王子様が迎えに来てくれるのを待つ・・・なんて経験が出来るお姫様の役は、そうそうやれるものではないのだから。堪能しよう、と思う。

「・・・とりあえず、今日のランチの為に。さあ、やるわよ～」

最近見つけたおしゃれな店で、ラシャとランチ。今日は朝から、それを楽しみにして来たのだ。

「・・・諦める訳には、いっかないでしょう～♪」

カヤは、カーソルを物凄い勢いで弾いていく。未来に続く、幸せな時間に思いを馳せながら・

「結局、薫は、姉さんに甘いのよね」

布結姫の愚痴を、時雨はただ笑って聞き流す。

相馬龍樹の能力を引き出す為に、銀河系空間管理局がして来た事。その事実を和也に話す様に言ったのは、時雨だった。その全ての苦しみの根源が、自分たちにあるのだという事。時雨自身が、直接手を下した訳ではないが、そういう事が行われているという事実は知っていたのだから、自分に罪がないとは言わない。

三年前、傷だらけの和也がここに飛ばされて来た時、時雨が本部に連絡も入れず、こっそり彼を保護したのは、多分、その罪の意識からだった。

だが、そういう事を全て知ってもなお、和也はここに戻りたいと願ってくれた。ここを自分の家だと思ってくれた。・・・だから、その思いに応えたいと思う。もう、何があっても、和也は自分が守る。そう心に誓ったのだ。

「そういう布結姫ちゃんだって、イケメンだからって、あの子の父親を助手に引き抜いたんじゃないの。それは、ルール違反じゃないのかしら？」

時雨の思わぬ反撃に、布結姫は言葉を詰まらせる。

未来に飛ばされたカルラを回収してきたのは、布結姫だった。地球圏外から、回収してきた訳だから、空間管理局がその事実を知れば、確実にクレームが来る。

「・・・あれは、たまたま、宇宙船の試験飛行中に、デブリを拾っただけ。なのよ」

「はいはい」

「だって、時間を行き来しても、体に変調が出ない人材ってのは、貴重なのよ」

「はいはい。実の妹のしでかした事を、通報なんかしないから、安心なさい」

何だか、背筋を悪寒が走った。こんな風に優しいお姉さまってというのは・・・布結姫の脳裏を嫌な予感が過ぎる。そして、案の定・・・

「貸しにしておいてあげるわよ」

時雨がにっこり笑いながら言った。布結姫は頭を抱えて、うめき声を上げる。

・・・ちっ、油断した。時々、そのぽよよんな風貌に騙されて、忘れちゃうのよね・・・

時織家で、一番怖いのは、長女時雨、なのだ、と。

病室の窓から見える空に、雲雀（ひばり）の独特のさえずりがこだまする。そのさえずりを追うと、その小さな体は空に吸い込まれる様に、あっという間にその高みに消えて行く。風が無機質な白いカーテンを揺らし、新緑の匂いが、朱里の頬を撫でた。朱里は、体を起こすと、何となくベッドサイドに置いてあった分厚い本を手を取った。

目を覚ました時、その本はそこにあった。誰かの差し入れかしら、と思いながら、退屈しのぎに何気なくページをめくってみると、その本は、悲しい結末のファンタジーだった。読み終わって見て、

・・・悲しいお話は、あまり好きじゃないなあ・・・

と、単純にそう思った。

改めて手に取って、先刻は気づかなかったタイトルに目を止める。「カリディスの予言書」と書かれていた。予言書というからには・・・未来の事が記されているのだろうか・・・

そこで、ふと思う。

・・・過去の事ならともかく、未来の事なんだったら、いくらでも変えられる・・・っていうか、変えたって構わないでしょ・・・

朱里は、軽い気持ちで、傍らに置いてあったペンを取った。

「・・・やっぱり、王子様とお姫様はハッピーエンドじゃないとね」

呟きながら、予言書にペンを走らせて、その末尾に文章を付け加える。

”・・・離れ離れになっていた二人は、再会して、幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし”

「・・・っと」

満足げな笑みを浮かべた所で人の気配がして、朱里は顔を上げた。

そこに和也が立っていた。彼は彼女の顔を眩しそうに見て、そこに佇んでいた。

「お帰りなさい」

朱里の声があった。

和也はその声の余韻を、じっとかみ締める。

その短い言葉が、こんなに嬉しいと思う。胸がいっぱいだ。

「・・・ただいま」

和也がそう言うと、朱里が飛び切りの笑顔を見せた。

そのきらきらとした瞳には、今度は間違いなく自分が映っている。

ただ、この瞬間の為に。自分はここまで来たのだ。そして思う・・・

・・・長かった旅が、ようやく終わったのだ、と。

【 剣の紋章 完 】